



U Y U N I

Uyuni 2024.02

クライアント設定ガイド

2024年02月16日



# 目次

クライアント設定ガイドの概要	1
1. サポートされているクライアントと機能	2
1.1. サポートされているクライアントシステム	2
1.2. サポートされているツールパッケージ	3
1.3. サポートされているSUSEおよびopenSUSEクライアントの機能	3
1.4. サポートされているSLE Microクライアント機能	6
1.5. openSUSE Leap Micro Client Features	8
1.6. サポートされているAlibaba Cloud Linuxの機能	10
1.7. サポートされているAlmaLinuxの機能	11
1.8. サポートされているAmazon Linuxの機能	13
1.9. サポートされているCentOSの機能	15
1.10. サポートされているDebianの機能	17
1.11. Supported openEuler Features	20
1.12. サポートされているOracleの機能	21
1.13. Supported Raspberry Pi OS Features	24
1.14. サポートされているRed Hat Enterprise Linuxの機能	25
1.15. サポートされているRocky Linuxの機能	28
1.16. サポートされているUbuntuの機能	30
2. 設定の基本	33
2.1. ソフトウェアチャンネル	33
2.1.1. SUSE Package Hubで提供されるパッケージ	34
2.1.2. AppStreamで提供されるパッケージ	34
2.1.3. EPELで提供されるパッケージ	34
2.1.4. SUSE Linux EnterpriseクライアントのUnified Installer更新チャンネル	35
2.1.5. ソフトウェアリポジトリ	35
2.1.6. ソフトウェア製品	36
2.2. ブートストラップリポジトリ	37
2.2.1. ブートストラップリポジトリの作成準備	37
2.2.2. 自動モードのオプション	37
2.2.3. ブートストラップリポジトリの手動生成	38
2.2.4. ブートストラップとカスタムチャンネル	40
2.3. アクティベーションキー	40
2.3.1. 再アクティベーションキー	42
2.3.2. アクティベーションキーのベストプラクティス	42
2.4. GPGキー	44
2.4.1. クライアントでGPGキーを信頼する	44
3. Client Contact Methods	47
3.1. Default contact method for Salt clients	47
3.1.1. オンボードの詳細	48
3.2. SSH Push contact method	48
3.2.1. Available parameters	50
3.2.2. アクションの実行	51
3.2.3. Future features	51
3.3. SSH Push (with tunnel) contact method	52
3.4. Salt Bundle	54
3.4.1. Salt Bundleの概要	54
3.4.2. Salt Bundleを使用してクライアントをMinionとして登録する	54
3.4.3. SSH Push with the Salt Bundle	56
3.4.4. pipを使用したPythonパッケージによるSalt Bundleの拡張	56
4. クライアントの登録	58
4.1. クライアント登録メソッド	58
4.1.1. Web UIでクライアントを登録する	58

4.1.2. ブートストラップスクリプトを使用してクライアントを登録する .....	60
4.1.3. Register on the Command Line .....	64
4.2. SUSEクライアントの登録.....	67
4.2.1. SUSE Linux Enterpriseクライアントの登録 .....	67
4.2.2. SLE Microクライアントの登録 .....	71
4.3. openSUSEクライアントの登録.....	75
4.3.1. openSUSE Leapクライアントの登録 .....	76
4.3.2. Registering openSUSE Leap Micro Clients .....	78
4.4. Alibaba Cloud Linuxクライアントの登録 .....	80
4.4.1. Alibaba Cloud Linuxクライアントの登録.....	80
4.5. AlmaLinuxクライアントの登録.....	82
4.5.1. AlmaLinuxクライアントの登録 .....	82
4.6. Amazon Linuxクライアントの登録 .....	85
4.6.1. Amazon Linuxクライアントの登録 .....	85
4.7. CentOSクライアントの登録.....	88
4.7.1. CentOSクライアントの登録 .....	88
4.8. Debianクライアントの登録 .....	92
4.8.1. Debianクライアントの登録 .....	93
4.9. OpenEuler Client Registration .....	96
4.9.1. Registering openEuler Clients .....	96
4.10. Oracleクライアントの登録 .....	100
4.10.1. Oracle Linuxクライアントの登録 .....	100
4.11. Raspberry Pi OS Client Registration .....	103
4.11.1. Registering Raspberry Pi OS Clients .....	103
4.12. Red Hatクライアントの登録 .....	107
4.12.1. CDNでRed Hat Enterprise Linuxクライアントを登録する .....	107
4.12.2. Registering Red Hat Enterprise Linux clients with RHUI .....	116
4.13. Rocky Linuxクライアントの登録 .....	121
4.13.1. Rocky Linuxクライアントの登録 .....	122
4.14. Ubuntuクライアントの登録 .....	124
4.14.1. Ubuntu 20.04および22.04 クライアントの登録 .....	125
4.15. クライアントをプロキシに登録する .....	128
4.15.1. プロキシ間でのクライアントの移動 .....	128
4.15.2. プロキシからサーバへのクライアントの移動 .....	129
4.15.3. Web UIを使用してクライアントをプロキシに登録する .....	129
4.15.4. Registering with a Bootstrap Script .....	131
4.16. パブリッククラウドでのクライアントの登録 .....	131
4.16.1. 製品の追加とリポジトリの同期 .....	132
4.16.2. オンデマンドイメージの準備 .....	132
4.16.3. クライアントの登録 .....	133
4.16.4. アクティベーションキー .....	133
4.16.5. Terraformによって作成されたクライアントの自動登録 .....	134
<b>5. クライアントのアップグレード</b>	<b>136</b>
5.1. Client - Major version upgrade .....	136
5.1.1. Prepare to migrate .....	136
5.1.2. 自動インストールプロファイルの作成 .....	138
5.1.3. 移行 .....	139
5.2. コンテンツライフサイクルマネージャを使用したアップグレード .....	139
5.2.1. アップグレードの準備 .....	140
5.2.2. アップグレード .....	141
5.3. 製品移行 .....	142
5.3.1. 単一システムの移行 .....	142
5.3.2. 製品の大量移行 .....	143
5.4. Uyuniクライアントのアップグレード .....	147
5.4.1. アップグレードの準備 .....	147
5.4.2. アップグレード .....	147

<b>6. クライアントの削除</b>	<b>149</b>
6.1. Web UIでクライアントを削除する .....	149
6.2. コマンドラインでSaltクライアントを削除する(APIコールを使用) .....	149
6.3. コマンドラインからのクライアントの削除 .....	150
6.3.1. Saltクライアント .....	150
<b>7. クライアントの操作</b>	<b>152</b>
7.1. パッケージ管理 .....	152
7.1.1. パッケージの検証 .....	152
7.1.2. パッケージの比較 .....	152
7.2. パッチ管理 .....	153
7.2.1. パッチの作成 .....	153
7.2.2. クライアントへのパッチの適用 .....	155
7.3. システムのロック .....	156
7.3.1. Saltクライアントのシステムのロック .....	156
7.3.2. パッケージのロック .....	156
7.4. 設定管理 .....	158
7.4.1. 設定チャンネルの作成 .....	158
7.4.2. 設定ファイル、ディレクトリ、またはシンボリックリンクの追加 .....	159
7.4.3. クライアントを設定チャンネルにサブスクライブする .....	160
7.4.4. 設定ファイルの比較 .....	160
7.4.5. SaltクライアントでのJinjaテンプレート .....	161
7.5. 電源管理 .....	161
7.5.1. Power Management and Cobbler .....	162
7.6. カスタムシステム情報 .....	162
7.7. システムセットマネージャ .....	163
7.7.1. SSMでベースチャンネルを変更する .....	164
7.8. システムグループ .....	165
7.8.1. グループの作成 .....	165
7.8.2. グループにクライアントを追加する .....	165
7.8.3. グループの操作 .....	166
7.9. システムの種類 .....	167
<b>8. オペレーティングシステムのインストール</b>	<b>168</b>
8.1. 登録済みシステムを再インストールする .....	169
8.2. ネットワークを通じてインストールする(PXEブート) .....	170
8.2.1. DHCPサーバを準備する .....	172
8.2.2. プロキシを使用してTFTPツリーを同期する .....	173
8.2.3. 異なるアーキテクチャ用のGRUB EFIバイナリ名 .....	174
8.3. CD-ROMまたはUSBメモリを使用してインストールする .....	174
8.3.1. Build an ISO Image With Cobbler .....	174
8.3.2. KIWIでSUSE ISOイメージを構築する .....	175
8.3.3. Build a Red Hat ISO Image With Cobbler .....	175
8.4. 自動インストールのディストリビューション .....	175
8.4.1. ISOイメージに基づくディストリビューション .....	176
8.4.2. RPMパッケージに基づくディストリビューション .....	176
8.4.3. 自動インストールのディストリビューションを宣言する .....	177
8.5. 自動インストールプロファイル .....	178
8.5.1. プロファイルを宣言する .....	178
8.5.2. AutoYaSTプロファイル .....	179
8.5.3. Kickstart profiles .....	180
8.5.4. Templates syntax .....	181
8.6. 無人プロビジョニング .....	183
8.6.1. ベアメタルプロビジョニング .....	183
8.6.2. システムレコードを手動で作成する .....	184
8.7. 独自のGPGキーを使用する .....	185
8.7.1. PXEブート用の独自のGPGキー .....	185

8.7.2. CD-ROM内の独自のGPGキー .....	186
<b>9. 仮想化</b>	<b>187</b>
9.1. Manage Virtualized Hosts .....	187
9.2. 仮想ゲストの作成 .....	187
9.3. XenおよびKVMを使用した仮想化 .....	188
9.3.1. ホストの設定 .....	189
9.3.2. VMゲストの自動インストール .....	190
9.3.3. VMゲストの管理 .....	194
<b>10. 仮想ホストマネージャ</b>	<b>195</b>
10.1. VHMおよびAmazon Web Services .....	195
10.1.1. Amazon EC2 VHMの作成 .....	195
10.1.2. 仮想ホストマネージャのAWS許可 .....	196
10.2. VHMとAzure .....	197
10.2.1. 前提条件 .....	197
10.2.2. Azure VHMの作成 .....	197
10.2.3. パーミッションの割り当て .....	198
10.2.4. Azure UUID .....	199
10.3. VHMおよびGoogle Compute Engine .....	199
10.3.1. 前提条件 .....	199
10.3.2. GCE VHMの作成 .....	199
10.3.3. パーミッションの割り当て .....	200
10.3.4. GCE UUID .....	201
10.4. VHMとKubernetes .....	201
10.4.1. Kubernetes VHMの作成 .....	201
10.4.2. イメージランタイムデータの取得 .....	202
10.4.3. パーミッションと証明書 .....	204
10.5. Nutanixによる仮想化 .....	205
10.5.1. VHMの設定 .....	205
10.6. VMWareによる仮想化 .....	206
10.6.1. VHMの設定 .....	206
10.6.2. VMWareでのSSLエラーのトラブルシューティング .....	207
10.7. その他のサードパーティプロバイダを使用した仮想化 .....	208
<b>11. GNU Free Documentation License</b>	<b>211</b>

# クライアント設定ガイドの概要

更新: 2024-02-16

クライアントの登録は、Uyuniインストール後の最初の手順であり、Uyuniで費やす時間のほとんどは、これらのクライアントを管理する時間です。

Uyuni is compatible with SUSE Linux Enterprise or another Linux operating system and with a range of hardware options.

サポートされているクライアントおよび機能の一覧については、[Client-configuration](#) → [Supported-features](#)を参照してください。

このガイドでは、異なるクライアントを登録して設定する方法に関して手動の方法と自動の方法の両方について説明します。

# Chapter 1. サポートされているクライアントと機能

Uyuni is compatible with a range of client technologies. You can install Salt clients running SUSE Linux Enterprise or another Linux operating system, with a range of hardware options.

このセクションには、サポートされているクライアントシステムのまとめが含まれています。それぞれのクライアントで使用できる機能の詳細な一覧については、次のページを参照してください。

## 1.1. サポートされているクライアントシステム

Supported operating systems for Salt clients are listed in this table.

この表のアイコンの意味は次のとおりです。

- ✓ このオペレーティングシステムを実行しているクライアントはSUSEでサポートされています。
- ✗ このオペレーティングシステムを実行しているクライアントはSUSEではサポートされていません。
- ? クライアントは検討中であり、後日使用できる場合と、使用できない場合があります。



クライアントオペレーティングシステムのバージョンおよびSPレベルは、Uyuniでサポートされる全般的なサポート(通常またはLTSS)の条件を基準にする必要があります。サポートされている製品バージョンの詳細については、<https://www.suse.com/lifecycle>を参照してください。



クライアントで実行されているオペレーティングシステムは、オペレーティングシステムを提供している組織によってサポートされています。

表 1. サポートされているクライアントシステム

Operating System	Architecture	Salt Clients
SUSE Linux Enterprise 15, 12	x86-64, ppc64le, IBM Z, aarch64	✓
SUSE Linux Enterprise Server for SAP 15, 12	x86-64, ppc64le	✓
SLE Micro	x86-64, aarch64, s390x	✓
openSUSE Leap 15	x86-64, aarch64	✓
openSUSE Leap Micro	x86-64, aarch64	✓
Alibaba Cloud Linux 2	x86-64, aarch64	✓
AlmaLinux 9, 8	x86-64, aarch64	✓
Amazon Linux 2	x86-64, aarch64	✓
Amazon Linux 2023	x86-64, aarch64	✓
CentOS 7	x86-64, ppc64le, aarch64	✓
Debian 12, 11, 10	x86-64	✓

Operating System	Architecture	Salt Clients
openEuler 22.03	x86-64, aarch64	✓
Oracle Linux 9, 8, 7	x86-64, aarch64	✓
Raspberry Pi OS 12	arm64, armhf	✓
Red Hat Enterprise Linux 9, 8, 7	x86-64	✓
Rocky Linux 9, 8	x86-64, aarch64	✓
Ubuntu 22.04, 20.04	amd64	✓



DebianとUbuntuは、x86-64アーキテクチャをamd64としてリストします。

配布がサポート終了になると、サポートが廃止されたと見なされる3か月の猶予期間に入ります。その期間が過ぎると、製品はサポート対象外と見なされます。サポートは、努力ベースでのみ提供される場合があります。

サポート終了日の詳細については、<https://endoflife.software/operating-systems>を参照してください。

## 1.2. サポートされているツールパッケージ

spacewalk-utilsパッケージおよびspacewalk-utils-extrasパッケージは、追加のサービスおよび機能を提供できます。

表 2. Spacewalkのユーティリティ

ツール名	説明	サポートの有無
spacewalk-common-channels	SUSE Customer Center で提供されないチャンネルを追加します	✓
spacewalk-hostname-rename	Uyuniサーバのホスト名を変更します	✓
spacewalk-clone-by-date	特定の日までにチャンネルを複製します	✓
spacewalk-sync-setup	ISSマスターおよびスレーブの組織マッピングを設定します	✓
spacewalk-manage-channel-lifecycle	チャンネルのライフサイクルを管理します	✓

## 1.3. サポートされているSUSEおよびopenSUSEクライアントの機能

この表には、SUSEおよびopenSUSEクライアントのさまざまな機能の使用可否がリストされています。この表では、SLES、SLED、SUSE Linux Enterprise Server for SAP、SUSE Linux Enterprise Server for HPCなど、SUSE Linux Enterpriseオペレーティングシステムのすべての亞種について記載しています。



クライアントで実行しているオペレーティングシステムは、オペレーティングシステムを提供している組織によってサポートされています。SUSE Linux EnterpriseはSUSEでサポートされています。openSUSEはSUSEコミュニティでサポートされています。

この表のアイコンの意味は次のとおりです。

- ✓: the feature is available
- ✗: 機能は使用できません
- ?: 機能は検討中であり、後日使用できる場合と、使用できない場合があります

表 3. SUSEおよびopenSUSEオペレーティングシステムでサポートされている機能

Feature	SUSE Linux Enterprise 12	SUSE Linux Enterprise 15	openSUSE 15
Client	✓	✓	✓
System packages	SUSE	SUSE	openSUSE Community
Registration	✓	✓	✓
Install packages	✓	✓	✓
Apply patches	✓	✓	✓
Remote commands	✓	✓	✓
System package states	✓	✓	✓
System custom states	✓	✓	✓
Group custom states	✓	✓	✓
Organization custom states	✓	✓	✓
System set manager (SSM)	✓	✓	✓
Product migration	✓	✓	✓
Basic Virtual Guest Management *	✓	✓	✓
Advanced Virtual Guest Management *	✓	✓	✓
Virtual Guest Installation (AutoYaST), as Host OS	✗	✗	✗
Virtual Guest Installation (image template), as Host OS	✓	✓	✓
Virtual Guest Management	✓	✓	✓

Feature	SUSE Linux Enterprise 12	SUSE Linux Enterprise 15	openSUSE 15
System deployment (PXE/AutoYaST)	✓	✓	✓
System redeployment (AutoYaST)	✓	✓	✓
Contact methods	✗	✗	✓ ZeroMQ, Salt-SSH
Works with Uyuni Proxy	✓	✓	✓
Salt	Action chains	✓	✓
✓	Staging (pre-download of packages)	✓	✓
✓	Duplicate package reporting	✓	✓
✓	CVE auditing	✓	✓
✓	SCAP auditing	✓	✓
✓	Package verification	✗	✗
✗	Package locking	✓	✓
✓	System locking	✗	✗
✗	Maintenance Windows	✓	✓
✓	System snapshot	✗	✗
✗	Configuration file management	✓	✓
✓	Package profiles	✓ Profiles supported, Sync not supported	✓ Profiles supported, Sync not supported
✓ Profiles supported, Sync not supported	Power management	✓	✓
✓	Monitoring server	✓	✓
✓	Monitored clients	✓	✓
✓	Docker buildhost	✓	✓
?	Build Docker image with OS	✓	✓
✓	Kiwi buildhost	✓	?
?	Build Kiwi image with OS	✓	?
✗	Recurring Actions	✓	✓
✓	AppStreams	N/A	N/A
N/A	Yomi	✗	✓

\*仮想ゲスト管理:

この表では、仮想ゲスト管理は基本と高度に分割されています。

基本的な仮想ゲスト管理には、VMのリスト化、低速更新、VMのライフサイクルアクション(起動、停止、再開、一時停止)、およびVM vCPUとメモリの変更が含まれています。

高度な仮想ゲスト管理には、基本的な仮想ゲスト管理のすべての機能に加えて、高速更新、VMライフサイクルアクション(削除、リセット、電源オフ)、VMディスクの変更、ネットワークグラフィカル表示の変更、およびグラフィカル表示の設定が含まれています。

## 1.4. サポートされているSLE Microクライアント機能



クライアントで実行しているオペレーティングシステムは、オペレーティングシステムを提供している組織によってサポートされています。SLE Micro はSUSEでサポートされています。

この表のアイコンの意味は次のとおりです。

- ✓: the feature is available
- ✗: 機能は使用できません
- ?: 機能は検討中であり、後日使用できる場合と、使用できない場合があります

表 4. SLE Microオペレーティングシステムでサポートされている機能

Feature	SLE Micro
Client	✓
Operating system packages	✓
Registration	✓
Install packages	✓
Apply patches (requires CVE ID)	✓
Remote commands	✓
System package states	✓
System custom states	✓
Group custom states	✓
Organization custom states	✓
System set manager (SSM)	✓
Product migration	✓
Basic Virtual Guest Management *	✓
Advanced Virtual Guest Management *	✓
Virtual Guest Installation (Kickstart), as Host OS	✓

Feature	SLE Micro
Virtual Guest Installation (image template), as Host OS	✓
System deployment (PXE/Kickstart)	✓
System redeployment (Kickstart)	✓
Contact methods	✓ ZeroMQ
Works with Uyuni Proxy	✓
Action chains	✓
Staging (pre-download of packages)	?
Duplicate package reporting	✓
CVE auditing (requires CVE ID)	✓
SCAP auditing	?
Package verification	?
Package locking	✓
System locking	?
Maintenance Windows	?
System snapshot	✗
Configuration file management	✓
Snapshots and profiles	✓ Profiles supported, Sync not supported
Power management	✓
Monitoring server	✗
Monitored clients **	✓
Docker buildhost	✗
Build Docker image with OS	✗
Kiwi buildhost	✗
Build Kiwi image with OS	✓
Recurring Actions	✓
AppStreams	N/A
Yomi	?

#### \*仮想ゲスト管理:

この表では、仮想ゲスト管理は基本と高度に分割されています。

基本的な仮想ゲスト管理には、VMのリスト化、低速更新、VMのライフサイクルアクション(起動、停止、再開、一時停止)、およびVM vCPUとメモリの変更が含まれています。

高度な仮想ゲスト管理には、基本的な仮想ゲスト管理のすべての機能に加えて、高速更新、VMライフサイクルアクション(削除、リセット、電源オフ)、VMディスクの変更、ネットワークグラフィカル表示の変更、およびグラフィカル表示の設定が含まれています。

**\*\*** On SLE Micro, only the Node exporter and the Blackbox exporter are available.

## 1.5. openSUSE Leap Micro Client Features



openSUSE Leap Micro is supported by the SUSE community.

この表のアイコンの意味は次のとおりです。

- ✓ the feature is available
- ✘: 機能は使用できません
- ?: 機能は検討中であり、後日使用できる場合と、使用できない場合があります

表 5. Supported Features on openSUSE Leap Micro Operating Systems

Feature	openSUSE Leap Micro
Client	✓
Operating system packages	✓
Registration	✓
Install packages	✓
Apply patches (requires CVE ID)	✓
Remote commands	✓
System package states	✓
System custom states	✓
Group custom states	✓
Organization custom states	✓
System set manager (SSM)	✓
Product migration	✓
Basic Virtual Guest Management *	✓
Advanced Virtual Guest Management *	✓
Virtual Guest Installation (Kickstart), as Host OS	✓
Virtual Guest Installation (image template), as Host OS	✓
System deployment (PXE/Kickstart)	✓
System redeployment (Kickstart)	✓
Contact methods	✓ ZeroMQ

Feature	openSUSE Leap Micro
Works with Uyuni Proxy	✓
Action chains	✓
Staging (pre-download of packages)	?
Duplicate package reporting	✓
CVE auditing (requires CVE ID)	✓
SCAP auditing	?
Package verification	?
Package locking	✓
System locking	?
Maintenance Windows	?
System snapshot	✗
Configuration file management	✓
Snapshots and profiles	✓ Profiles supported, Sync not supported
Power management	✓
Monitoring server	✗
Monitored clients	✓
Docker buildhost	✗
Build Docker image with OS	✗
Kiwi buildhost	✗
Build Kiwi image with OS	✓
Recurring Actions	✓
AppStreams	N/A
Yomi	?

#### \*仮想ゲスト管理:

この表では、仮想ゲスト管理は基本と高度に分割されています。

基本的な仮想ゲスト管理には、VMのリスト化、低速更新、VMのライフサイクルアクション(起動、停止、再開、一時停止)、およびVM vCPUとメモリの変更が含まれています。

高度な仮想ゲスト管理には、基本的な仮想ゲスト管理のすべての機能に加えて、高速更新、VMライフサイクルアクション(削除、リセット、電源オフ)、VMディスクの変更、ネットワークグラフィカル表示の変更、およびグラフィカル表示の設定が含まれています。

## 1.6. サポートされているAlibaba Cloud Linuxの機能

この表には、Alibaba Cloud Linuxクライアントのさまざまな機能の使用可否がリストされています。



クライアントで実行しているオペレーティングシステムは、オペレーティングシステムを提供している組織によってサポートされています。 Alibaba Cloud Linux はAlibaba Cloudでサポートされています。

この表のアイコンの意味は次のとおりです。

- ✓: the feature is available
- ✗: 機能は使用できません
- ?: 機能は検討中であり、後日使用できる場合と、使用できない場合があります

表 6. Alibaba Cloud Linuxオペレーティングシステムでサポートされている機能

Feature	Alibaba Cloud Linux 2
Client	✓
Operating system packages	✓
Registration	✓
Install packages	✓
Apply patches (requires CVE ID)	✓
Remote commands	✓
System package states	✓
System custom states	✓
Group custom states	✓
Organization custom states	✓
System set manager (SSM)	✓
Product migration	N/A
Basic Virtual Guest Management *	?
Advanced Virtual Guest Management *	?
Virtual Guest Installation (Kickstart), as Host OS	✗
Virtual Guest Installation (image template), as Host OS	?
System deployment (PXE/Kickstart)	?
System redeployment (Kickstart)	?
Contact methods	✓ ZeroMQ, Salt-SSH
Works with Uyuni Proxy	✓

Feature	Alibaba Cloud Linux 2
Action chains	✓
Staging (pre-download of packages)	✓
Duplicate package reporting	✓
CVE auditing (requires CVE ID)	✓
SCAP auditing	✓
Package verification	✗
Package locking	✗
System locking	✗
Maintenance Windows	✓
System snapshot	✗
Configuration file management	✓
Snapshots and profiles	✓ Profiles supported, Sync not supported
Power management	?
Monitoring server	✗
Monitored clients	✓
Docker buildhost	✓
Build Docker image with OS	✓
Kiwi buildhost	✓
Build Kiwi image with OS	✓
Recurring Actions	✓
AppStreams	N/A
Yomi	N/A

#### \*仮想ゲスト管理:

この表では、仮想ゲスト管理は基本と高度に分割されています。

基本的な仮想ゲスト管理には、VMのリスト化、低速更新、VMのライフサイクルアクション(起動、停止、再開、一時停止)、およびVM vCPUとメモリの変更が含まれています。

高度な仮想ゲスト管理には、基本的な仮想ゲスト管理のすべての機能に加えて、高速更新、VMライフサイクルアクション(削除、リセット、電源オフ)、VMディスクの変更、ネットワークグラフィカル表示の変更、およびグラフィカル表示の設定が含まれています。

## 1.7. サポートされているAlmaLinuxの機能

この表には、AlmaLinuxクライアントのさまざまな機能の使用可否がリストされています。



クライアントで実行しているオペレーティングシステムは、オペレーティングシステムを提供している組織によってサポートされています。 AlmaLinuxはAlmaLinuxコミュニティでサポートされています。

この表のアイコンの意味は次のとおりです。

- ✓ the feature is available
- ✗: 機能は使用できません
- ?: 機能は検討中であり、後日使用できる場合と、使用できない場合があります

表 7. AlmaLinuxオペレーティングシステムでサポートされている機能

Feature	AlmaLinux 9	AlmaLinux 8
Client	✓ (plain AlmaLinux)	✓ (plain AlmaLinux)
System packages	AlmaLinux Community	AlmaLinux Community
Registration	✓	✓
Install packages	✓	✓
Apply patches	✓	✓
Remote commands	✓	✓
System package states	✓	✓
System custom states	✓	✓
Group custom states	✓	✓
Organization custom states	✓	✓
System set manager (SSM)	✓	✓
Product migration	N/A	N/A
Basic Virtual Guest Management *	✓	✓
Advanced Virtual Guest Management *	✓	✓
Virtual Guest Installation (Kickstart), as Host OS	✗	✗
Virtual Guest Installation (image template), as Host OS	✓	✓
System deployment (PXE/Kickstart)	✓	✓
System redeployment (Kickstart)	✓	✓
Contact methods	✓ ZeroMQ, Salt-SSH	✓ ZeroMQ, Salt-SSH
Works with Uyuni Proxy	✓	✓
Action chains	✓	✓

Feature	AlmaLinux 9	AlmaLinux 8
Staging (pre-download of packages)	✓	✓
Duplicate package reporting	✓	✓
CVE auditing	✓	✓
SCAP auditing	✓	✓
Package verification	✗	✗
Package locking	✗	✗
System locking	✗	✗
Maintenance Windows	✓	✓
System snapshot	✗	✗
Configuration file management	✓	✓
Snapshots and profiles	✓ Profiles supported, Sync not supported	✓ Profiles supported, Sync not supported
Power management	✓	✓
Monitoring server	✗	✗
Monitored clients	✓	✓
Docker buildhost	✗	✗
Build Docker image with OS	✗	✗
Kiwi buildhost	✗	✗
Build Kiwi image with OS	✗	✗
Recurring Actions	✓	✓
AppStreams	✓	✓
Yomi	N/A	N/A

#### \*仮想ゲスト管理:

この表では、仮想ゲスト管理は基本と高度に分割されています。

基本的な仮想ゲスト管理には、VMのリスト化、低速更新、VMのライフサイクルアクション(起動、停止、再開、一時停止)、およびVM vCPUとメモリの変更が含まれています。

高度な仮想ゲスト管理には、基本的な仮想ゲスト管理のすべての機能に加えて、高速更新、VMライフサイクルアクション(削除、リセット、電源オフ)、VMディスクの変更、ネットワークグラフィカル表示の変更、およびグラフィカル表示の設定が含まれています。

## 1.8. サポートされているAmazon Linuxの機能

この表には、Amazon Linuxクライアントのさまざまな機能の使用可否がリストされています。



クライアントで実行しているオペレーティングシステムは、オペレーティングシステムを提供している組織によってサポートされています。 Amazon Linux はAmazonでサポートされています。

この表のアイコンの意味は次のとおりです。

- ✓ the feature is available
- ✗: 機能は使用できません
- ?: 機能は検討中であり、後日使用できる場合と、使用できない場合があります

表 8. Amazon Linuxオペレーティングシステムでサポートされている機能

Feature	Amazon Linux 2	Amazon Linux 2023
Client	✓	✓
Operating system packages	✓	✓
Registration	✓	✓
Install packages	✓	✓
Apply patches (requires CVE ID)	✓	✓
Remote commands	✓	✓
System package states	✓	✓
System custom states	✓	✓
Group custom states	✓	✓
Organization custom states	✓	✓
System set manager (SSM)	✓	✓
Product migration	N/A	N/A
Basic Virtual Guest Management *	?	?
Advanced Virtual Guest Management *	?	?
Virtual Guest Installation (Kickstart), as Host OS	✗	✗
Virtual Guest Installation (image template), as Host OS	?	?
System deployment (PXE/Kickstart)	?	?
System redeployment (Kickstart)	?	?
Contact methods	✓ ZeroMQ, Salt-SSH	✓ ZeroMQ, Salt-SSH
Works with Uyuni Proxy	✓	✓
Action chains	✓	✓

Feature	Amazon Linux 2	Amazon Linux 2023
Staging (pre-download of packages)	✓	✓
Duplicate package reporting	✓	✓
CVE auditing (requires CVE ID)	✓	✓
SCAP auditing	✓	✓
Package verification	✗	✗
Package locking	✗	✗
System locking	✗	✗
Maintenance Windows	✓	✓
System snapshot	✗	✗
Configuration file management	✓	✓
Snapshots and profiles	✓ Profiles supported, Sync not supported	✓ Profiles supported, Sync not supported
Power management	?	?
Monitoring server	✗	✗
Monitored clients	✓	✓
Docker buildhost	✓	✓
Build Docker image with OS	✓	✓
Kiwi buildhost	✓	✓
Build Kiwi image with OS	✓	✓
Recurring Actions	✓	✓
AppStreams	N/A	N/A
Yomi	N/A	N/A

#### \*仮想ゲスト管理:

この表では、仮想ゲスト管理は基本と高度に分割されています。

基本的な仮想ゲスト管理には、VMのリスト化、低速更新、VMのライフサイクルアクション(起動、停止、再開、一時停止)、およびVM vCPUとメモリの変更が含まれています。

高度な仮想ゲスト管理には、基本的な仮想ゲスト管理のすべての機能に加えて、高速更新、VMライフサイクルアクション(削除、リセット、電源オフ)、VMディスクの変更、ネットワークグラフィカル表示の変更、およびグラフィカル表示の設定が含まれています。

## 1.9. サポートされているCentOSの機能

この表には、CentOSクライアントのさまざまな機能の使用可否がリストされています。



クライアントで実行しているオペレーティングシステムは、オペレーティングシステムを提供している組織によってサポートされています。 CentOSはCentOSコミュニティでサポートされています。

この表のアイコンの意味は次のとおりです。

- ✓ the feature is available
- ✗: 機能は使用できません
- ?: 機能は検討中であり、後日使用できる場合と、使用できない場合があります

表 9. CentOSオペレーティングシステムでサポートされている機能

Feature	CentOS 7
Client	✓ (plain CentOS)
System packages	CentOS Community
Registration	✓
Install packages	✓
Apply patches (requires CVE ID)	✓ (third-party service required for errata)
Remote commands	✓
System package states	✓
System custom states	✓
Group custom states	✓
Organization custom states	✓
System set manager (SSM)	✓
Product migration	N/A
Basic Virtual Guest Management *	✓
Advanced Virtual Guest Management *	✓
Virtual Guest Installation (Kickstart), as Host OS	✗
Virtual Guest Installation (image template), as Host OS	✓
System deployment (PXE/Kickstart)	✓
System redeployment (Kickstart)	✓
Contact methods	✓ ZeroMQ, Salt-SSH
Works with Uyuni Proxy	✓
Action chains	✓
Staging (pre-download of packages)	✓
Duplicate package reporting	✓

Feature	CentOS 7
CVE auditing (requires CVE ID)	✓
SCAP auditing	✓
Package verification	✗
Package locking	✓
System locking	✗
Maintenance Windows	✓
System snapshot	✗
Configuration file management	✓
Snapshots and profiles	✓ Profiles supported, Sync not supported
Power management	✓
Monitoring server	✗
Monitored clients	✓
Docker buildhost	✗
Build Docker image with OS	✗
Kiwi buildhost	✗
Build Kiwi image with OS	✗
Recurring Actions	✓
AppStreams	N/A
Yomi	N/A

#### \*仮想ゲスト管理:

この表では、仮想ゲスト管理は基本と高度に分割されています。

基本的な仮想ゲスト管理には、VMのリスト化、低速更新、VMのライフサイクルアクション(起動、停止、再開、一時停止)、およびVM vCPUとメモリの変更が含まれています。

高度な仮想ゲスト管理には、基本的な仮想ゲスト管理のすべての機能に加えて、高速更新、VMライフサイクルアクション(削除、リセット、電源オフ)、VMディスクの変更、ネットワークグラフィカル表示の変更、およびグラフィカル表示の設定が含まれています。

## 1.10. サポートされているDebianの機能

この表には、Debianクライアントのさまざまな機能の使用可否がリストされています。



クライアントで実行しているオペレーティングシステムは、オペレーティングシステムを提供している組織によってサポートされています。 DebianはDebianコミュニティでサポートされています。

この表のアイコンの意味は次のとおりです。

- ✓: the feature is available
- ✗: 機能は使用できません
- ?: 機能は検討中であり、後日使用できる場合と、使用できない場合があります

表 10. Debianオペレーティングシステムでサポートされている機能

Feature	Debian 10	Debian 11	Debian 12
Client	✓	✓	✓
System packages	Debian Community	Debian Community	Debian Community
Registration	✓	✓	✓
Install packages	✓	✓	✓
Apply patches	?	?	?
Remote commands	✓	✓	✓
System package states	✓	✓	✓
System custom states	✓	✓	✓
Group custom states	✓	✓	✓
Organization custom states	✓	✓	✓
System set manager (SSM)	✓	✓	✓
Product migration	N/A	N/A	N/A
Basic Virtual Guest Management *	✓	✓	✓
Advanced Virtual Guest Management *	✓	✓	✓
Virtual Guest Installation (Kickstart), as Host OS	✓	✓	✓
Virtual Guest Installation (image template), as Host OS	✓	✓	✓
System deployment (PXE/Kickstart)	✓	✓	✓
System redeployment (Kickstart)	✗	✗	✗
Contact methods	✓ ZeroMQ, Salt-SSH	✓ ZeroMQ, Salt-SSH	✓ ZeroMQ, Salt-SSH
Works with Uyuni Proxy	✓	✓	✓
Action chains	✓	✓	✓

Feature	Debian 10	Debian 11	Debian 12
Staging (pre-download of packages)	✓	✓	✓
Duplicate package reporting	✓	✓	✓
CVE auditing	?	?	?
SCAP auditing	?	?	?
Package verification	✗	✗	✗
Package locking	✓	✓	✓
System locking	✗	✗	✗
Maintenance Windows	✓	✓	✓
System snapshot	✗	✗	✗
Configuration file management	✓	✓	✓
Package profiles	✓ Profiles supported, Sync not supported	✓ Profiles supported, Sync not supported	✓ Profiles supported, Sync not supported
Power management	✓	✓	✓
Monitoring server	✗	✗	✗
Monitoring clients	✓	✓	✓
Docker buildhost	?	?	?
Build Docker image with OS	Salt	Salt	Salt
Kiwi buildhost	✗	✗	✗
Build Kiwi image with OS	✗	✗	✗
Recurring Actions	✓	✓	✓
AppStreams	N/A	N/A	N/A
Yomi	N/A	N/A	N/A

#### \*仮想ゲスト管理:

この表では、仮想ゲスト管理は基本と高度に分割されています。

基本的な仮想ゲスト管理には、VMのリスト化、低速更新、VMのライフサイクルアクション(起動、停止、再開、一時停止)、およびVM vCPUとメモリの変更が含まれています。

高度な仮想ゲスト管理には、基本的な仮想ゲスト管理のすべての機能に加えて、高速更新、VMライフサイクルアクション(削除、リセット、電源オフ)、VMディスクの変更、ネットワークグラフィカル表示の変更、およびグラフィカル表示の設定が含まれています。

## 1.11. Supported openEuler Features

This table lists the availability of various features on openEuler clients.



The operating system you run on a client is supported by the organization that supplies the operating system. openEuler is supported by the openEuler community.

この表のアイコンの意味は次のとおりです。

- ✓: the feature is available on both Salt
- ✗: 機能は使用できません
- ?: 機能は検討中であり、後日使用できる場合と、使用できない場合があります

表 11. Supported Features on openEuler Operating Systems

Feature	openEuler 22.03
Client	✓ (plain openEuler)
System packages	openEuler Community
Registration	✓
Install packages	✓
Apply patches	✓
Remote commands	✓
System package states	✓
System custom states	✓
Group custom states	✓
Organization custom states	✓
System set manager (SSM)	✓
Product migration	N/A
Basic Virtual Guest Management *	✓
Advanced Virtual Guest Management *	✓
Virtual Guest Installation (Kickstart), as Host OS	✗
Virtual Guest Installation (image template), as Host OS	✓
System deployment (PXE/Kickstart)	✓
System redeployment (Kickstart)	✓
Contact methods	✓ ZeroMQ, Salt-SSH
Works with Uyuni Proxy	✓
Action chains	✓

Feature	openEuler 22.03
Staging (pre-download of packages)	✓
Duplicate package reporting	✓
CVE auditing	✓
SCAP auditing	✓
Package verification	✗
Package locking	✗
System locking	✗
Maintenance Windows	✓
System snapshot	✗
Configuration file management	✓
Snapshots and profiles	✓ Profiles supported, Sync not supported
Power management	✓
Monitoring	✓
Docker buildhost	✗
Build Docker image with OS	✗
Kiwi buildhost	✗
Build Kiwi image with OS	✗
Recurring Actions	✓
Yomi	N/A

#### \*仮想ゲスト管理:

この表では、仮想ゲスト管理は基本と高度に分割されています。

基本的な仮想ゲスト管理には、VMのリスト化、低速更新、VMのライフサイクルアクション(起動、停止、再開、一時停止)、およびVM vCPUとメモリの変更が含まれています。

高度な仮想ゲスト管理には、基本的な仮想ゲスト管理のすべての機能に加えて、高速更新、VMライフサイクルアクション(削除、リセット、電源オフ)、VMディスクの変更、ネットワークグラフィカル表示の変更、およびグラフィカル表示の設定が含まれています。

## 1.12. サポートされているOracleの機能

この表には、Oracle Linuxクライアントのさまざまな機能の使用可否がリストされています。



クライアントで実行しているオペレーティングシステムは、オペレーティングシステムを提供している組織によってサポートされています。 Oracle LinuxはOracleでサポートされています。

この表のアイコンの意味は次のとおりです。

- ✓: the feature is available
- ✗: 機能は使用できません
- ?: 機能は検討中であり、後日使用できる場合と、使用できない場合があります

表 12. Oracle Linuxオペレーティングシステムでサポートされている機能

Feature	Oracle Linux 7	Oracle Linux 8	Oracle Linux 9
Client	✓	✓	✓
Operating system packages	✓	✓	✓
Registration	✓	✓	✓
Install packages	✓	✓	✓
Apply patches (requires CVE ID)	✓	✓	✓
Remote commands	✓	✓	✓
System package states	✓	✓	✓
System custom states	✓	✓	✓
Group custom states	✓	✓	✓
Organization custom states	✓	✓	✓
System set manager (SSM)	✓	✓	✓
Product migration	N/A	N/A	N/A
Basic Virtual Guest Management *	✓	✓	✓
Advanced Virtual Guest Management *	✓	✓	✓
Virtual Guest Installation (Kickstart), as Host OS	✗	✓	✓
Virtual Guest Installation (image template), as Host OS	✓	✓	✓
System deployment (PXE/Kickstart)	✓	✓	✓
System redeployment (Kickstart)	✓	✓	✓
Contact methods	✓ ZeroMQ, Salt-SSH	✓ ZeroMQ, Salt-SSH	✓ ZeroMQ, Salt-SSH
Works with Uyuni Proxy	✓	✓	✓

Feature	Oracle Linux 7	Oracle Linux 8	Oracle Linux 9
Action chains	✓	✓	✓
Staging (pre-download of packages)	✓	✓	✓
Duplicate package reporting	✓	✓	✓
CVE auditing (requires CVE ID)	✓	✓	✓
SCAP auditing	✓	✓	✓
Package verification	✗	✗	✗
Package locking	✓	?	?
System locking	✗	✗	✗
Maintenance Windows	✓	✓	✓
System snapshot	✗	✗	✗
Configuration file management	✓	✓	✓}
Snapshots and profiles	✓ Profiles supported, Sync not supported	✓ Profiles supported, Sync not supported	✓ Profiles supported, Sync not supported
Power management	✓	✓	✓
Monitoring server	✗	✗	✗
Monitored clients	✓	✓	✓
Docker buildhost	✗	✗	✗
Build Docker image with OS	✗	✗	✗
Kiwi buildhost	✗	✗	✗
Build Kiwi image with OS	✗	✗	✗
Recurring Actions	✓	✓	✓
AppStreams	N/A	✓	✓
Yomi	N/A	N/A	N/A

#### \*仮想ゲスト管理:

この表では、仮想ゲスト管理は基本と高度に分割されています。

基本的な仮想ゲスト管理には、VMのリスト化、低速更新、VMのライフサイクルアクション(起動、停止、再開、一時停止)、およびVM vCPUとメモリの変更が含まれています。

高度な仮想ゲスト管理には、基本的な仮想ゲスト管理のすべての機能に加えて、高速更新、VMライフサイクルアクション(削除、リセット、電源オフ)、VMディスクの変更、ネットワークグラフィカル表示の変更、およびグラフィカル表示の設定が含まれています。

## 1.13. Supported Raspberry Pi OS Features

This table lists the availability of various features on Raspberry Pi OS clients.



The operating system you run on a client is supported by the organization that supplies the operating system. Raspberry Pi OS is supported by the Raspberry Pi OS community.

この表のアイコンの意味は次のとおりです。

- ✓ the feature is available
- ✗: 機能は使用できません
- ?: 機能は検討中であり、後日使用できる場合と、使用できない場合があります

表 13. Supported Features on Raspberry Pi OS Operating Systems

Feature	Raspberry Pi OS 12
Client	✓
System packages	Raspberry Pi OS Community
Registration	✓
Install packages	✓
Apply patches	?
Remote commands	✓
System package states	✓
System custom states	✓
Group custom states	✓
Organization custom states	✓
System set manager (SSM)	✓
Product migration	N/A
Basic Virtual Guest Management *	✓
Advanced Virtual Guest Management *	✓
Virtual Guest Installation (Kickstart), as Host OS	✗
Virtual Guest Installation (image template), as Host OS	✓
System deployment (PXE/Kickstart)	✗
System redeployment (Kickstart)	✗
Contact methods	✓ ZeroMQ, Salt-SSH
Works with Uyuni Proxy	✓
Action chains	✓

Feature	Raspberry Pi OS 12
Staging (pre-download of packages)	✓
Duplicate package reporting	✓
CVE auditing	?
SCAP auditing	?
Package verification	✗
Package locking	✓
System locking	✗
Maintenance Windows	✓
System snapshot	✗
Configuration file management	✓
Package profiles	✓ Profiles supported, Sync not supported
Power management	✓
Monitoring server	✗
Monitoring clients	✓
Docker buildhost	?
Build Docker image with OS	✓
Kiwi buildhost	✗
Build Kiwi image with OS	✗
Recurring Actions	✓
AppStreams	N/A
Yomi	N/A

#### \*仮想ゲスト管理:

この表では、仮想ゲスト管理は基本と高度に分割されています。

基本的な仮想ゲスト管理には、VMのリスト化、低速更新、VMのライフサイクルアクション(起動、停止、再開、一時停止)、およびVM vCPUとメモリの変更が含まれています。

高度な仮想ゲスト管理には、基本的な仮想ゲスト管理のすべての機能に加えて、高速更新、VMライフサイクルアクション(削除、リセット、電源オフ)、VMディスクの変更、ネットワークグラフィカル表示の変更、およびグラフィカル表示の設定が含まれています。

## 1.14. サポートされているRed Hat Enterprise Linuxの機能

This table lists the availability of various features on native Red Hat Enterprise Linux clients.



クライアントで実行しているオペレーティングシステムは、オペレーティングシステムを提供している組織によってサポートされています。Red Hat Enterprise LinuxはRed Hatでサポートされています。

この表のアイコンの意味は次のとおりです。

- ✓ the feature is available
- ✗: 機能は使用できません
- ?: 機能は検討中であり、後日使用できる場合と、使用できない場合があります

表 14. Red Hat Enterprise Linuxオペレーティングシステムでサポートされている機能

Feature	RHEL 7	RHEL 8	RHEL 9
Client	✓	✓	✓
System packages	Red Hat	Red Hat	Red Hat
Registration	✓	✓	✓
Install packages	✓	✓	✓
Apply patches	✓	✓	✓
Remote commands	✓	✓	✓
System package states	✓	✓	✓
System custom states	✓	✓	✓
Group custom states	✓	✓	✓
Organization custom states	✓	✓	✓
System set manager (SSM)	✓	✓	✓
Product migration	N/A	N/A	N/A
Basic Virtual Guest Management *	✓	✓	✓
Advanced Virtual Guest Management *	✓	✓	✓
Virtual Guest Installation (Kickstart), as Host OS	✗	✗	✗
Virtual Guest Installation (image template), as Host OS	✓	✓	✓
System deployment (PXE/Kickstart)	✓	✓	✓
System redeployment (Kickstart)	✓	✓	✓

Feature	RHEL 7	RHEL 8	RHEL 9
Contact methods	✓ ZeroMQ, Salt-SSH	✓ ZeroMQ, Salt-SSH	✓ ZeroMQ, Salt-SSH
Works with Uyuni Proxy	✓	✓	✓
Action chains	✓	✓	✓
Staging (pre-download of packages)	✓	✓	✓
Duplicate package reporting	✓	✓	✓
CVE auditing	✓	✓	✓
SCAP auditing	✓	✓	✓
Package verification	✗	✗	✗
Package locking	✓	?	?
System locking	✗	✗	✗
Maintenance Windows	✓	✓	✓
System snapshot	✗	✗	✗
Configuration file management	✓	✓	✓
Snapshots and profiles	✓ Profiles supported, Sync not supported	✓ Profiles supported, Sync not supported	✓ Profiles supported, Sync not supported
Power management	✓	✓	✓
Monitoring server	✗	✗	✗
Monitored clients	✓	✓	✓
Docker buildhost	✓	✓	✓
Build Docker image with OS	?	?	?
Kiwi buildhost	✗	✗	✗
Build Kiwi image with OS	✗	✗	✗
Recurring Actions	✓	✓	✓
AppStreams	N/A	✓	✓
Yomi	N/A	N/A	N/A

#### \*仮想ゲスト管理:

この表では、仮想ゲスト管理は基本と高度に分割されています。

基本的な仮想ゲスト管理には、VMのリスト化、低速更新、VMのライフサイクルアクション(起動、停止、再開、一時停止)、およびVM vCPUとメモリの変更が含まれています。

高度な仮想ゲスト管理には、基本的な仮想ゲスト管理のすべての機能に加えて、高速更新、VMライフサイク

ルアクション(削除、リセット、電源オフ)、VMディスクの変更、ネットワークグラフィカル表示の変更、およびグラフィカル表示の設定が含まれています。

## 1.15. サポートされているRocky Linuxの機能

この表には、Rocky Linuxクライアントのさまざまな機能の使用可否がリストされています。



クライアントで実行しているオペレーティングシステムは、オペレーティングシステムを提供している組織によってサポートされています。Rocky LinuxはRocky Linuxコミュニティでサポートされています。

この表のアイコンの意味は次のとおりです。

- ✓: the feature is available
- ✗: 機能は使用できません
- ?: 機能は検討中であり、後日使用できる場合と、使用できない場合があります

表 15. Rocky Linuxオペレーティングシステムでサポートされている機能

Feature	Rocky Linux 8	Rocky Linux 9
Client	✓ (plain Rocky Linux)	{check (plain Rocky Linux)
System packages	Rocky Linux Community	Rocky Linux Community
Registration	✓	✓
Install packages	✓	✓
Apply patches	✓	✓
Remote commands	✓	✓
System package states	✓	✓
System custom states	✓	✓
Group custom states	✓	✓
Organization custom states	✓	✓
System set manager (SSM)	✓	✓
Product migration	N/A	N/A
Basic Virtual Guest Management *	✓	✓
Advanced Virtual Guest Management *	✓	✓
Virtual Guest Installation (Kickstart), as Host OS	✗	✗
Virtual Guest Installation (image template), as Host OS	✓	✓

Feature	Rocky Linux 8	Rocky Linux 9
System deployment (PXE/Kickstart)	✓	✓
System redeployment (Kickstart)	✓	✓
Contact methods	✓ ZeroMQ, Salt-SSH	✓ ZeroMQ, Salt-SSH
Works with Uyuni Proxy	✓	✓
Action chains	✓	✓
Staging (pre-download of packages)	✓	✓
Duplicate package reporting	✓	✓
CVE auditing	✓	✓
SCAP auditing	✓	✓
Package verification	✗	✗
Package locking	?	?
System locking	✗	✗
Maintenance Windows	✓	✓
System snapshot	✗	✗
Configuration file management	✓	✓
Snapshots and profiles	✓ Profiles supported, Sync not supported	✓ Profiles supported, Sync not supported
Power management	✓	✓
Monitoring server	✗	✗
Monitored clients	✓	✓
Docker buildhost	✗	✗
Build Docker image with OS	✗	✗
Kiwi buildhost	✗	✗
Build Kiwi image with OS	✗	✗
Recurring Actions	✓	✓
AppStreams	✓	✓
Yomi	N/A	N/A

#### \*仮想ゲスト管理:

この表では、仮想ゲスト管理は基本と高度に分割されています。

基本的な仮想ゲスト管理には、VMのリスト化、低速更新、VMのライフサイクルアクション(起動、停止、再開、一時停止)、およびVM vCPUとメモリの変更が含まれています。

高度な仮想ゲスト管理には、基本的な仮想ゲスト管理のすべての機能に加えて、高速更新、VMライフサイクルアクション(削除、リセット、電源オフ)、VMディスクの変更、ネットワークグラフィカル表示の変更、およびグラフィカル表示の設定が含まれています。

## 1.16. サポートされているUbuntuの機能

この表には、Ubuntuクライアントのさまざまな機能の使用可否がリストされています。



クライアントで実行しているオペレーティングシステムは、オペレーティングシステムを提供している組織によってサポートされています。 UbuntuはCanonicalでサポートされています。

この表のアイコンの意味は次のとおりです。

- ✓: the feature is available
- ✗: 機能は使用できません
- ?: 機能は検討中であり、後日使用できる場合と、使用できない場合があります

表 16. Ubuntuオペレーティングシステムでサポートされている機能

Feature	Ubuntu 20.04	Ubuntu 22.04
Client	✓	✓
System packages	Canonical	Canonical
Registration	✓	✓
Install packages	✓	✓
Apply patches	✓	✓
Remote commands	✓	✓
System package states	✓	✓
System custom states	✓	✓
Group custom states	✓	✓
Organization custom states	✓	✓
System set manager (SSM)	✓	✓
Product migration	N/A	N/A
Basic Virtual Guest Management *	✓	✓
Advanced Virtual Guest Management *	✓	✓
Virtual Guest Installation (Kickstart), as Host OS	✗	✗

Feature	Ubuntu 20.04	Ubuntu 22.04
Virtual Guest Installation (image template), as Host OS	✓	✓
System deployment (PXE/Kickstart)	✗	✗
System redeployment (Kickstart)	✗	✗
Contact methods	✓ ZeroMQ, Salt-SSH	✓ ZeroMQ, Salt-SSH
Works with Uyuni Proxy	✓	✓
Action chains	✓	✓
Staging (pre-download of packages)	✓	✓
Duplicate package reporting	✓	✓
CVE auditing	?	?
SCAP auditing	?	?
Package verification	✗	✗
Package locking	✓	✓
System locking	✗	✗
System snapshot	✗	✗
Configuration file management	✓	✓
Package profiles	✓ Profiles supported, Sync not supported	✓ Profiles supported, Sync not supported
Power management	✓	✓
Monitoring	✓	✓
Docker buildhost	?	?
Build Docker image with OS	✓	✓
Kiwi buildhost	✗	✗
Build Kiwi image with OS	✗	✗
Recurring Actions	✓	✓
AppStreams	N/A	N/A
Yomi	N/A	N/A

#### \*仮想ゲスト管理:

この表では、仮想ゲスト管理は基本と高度に分割されています。

基本的な仮想ゲスト管理には、VMのリスト化、低速更新、VMのライフサイクルアクション(起動、停止、再開、一時停止)、およびVM vCPUとメモリの変更が含まれています。

高度な仮想ゲスト管理には、基本的な仮想ゲスト管理のすべての機能に加えて、高速更新、VMライフサイクルアクション(削除、リセット、電源オフ)、VMディスクの変更、ネットワークグラフィカル表示の変更、およびグラフィカル表示の設定が含まれています。

## Chapter 2. 設定の基本

広範な操作を利用できるようにするためにクライアント登録のための環境を準備するには、Uyuniで複数の手順を実行する必要があります。

このセクションには、Uyuniを正しくインストールおよびセットアップした後の 環境操作をサポートするために必要な初期設定手順のまとめが記載されています。

- Uyuniのインストールの詳細については、[Installation-and-upgrade › Install-uyuni](#)を参照してください。
- Uyuniのセットアップの詳細については、[Installation-and-upgrade › Uyuni-server-setup](#)を参照してください。

### 2.1. ソフトウェアチャンネル

チャンネルは、ソフトウェアパッケージをグループ化する方法です。 ソフトウェアパッケージはリポジトリによって提供され、リポジトリはチャンネルに関連付けられています。 クライアントをソフトウェアチャンネルにサブスクライブすると、クライアントは、これに関連付けられたソフトウェアをインストールし、更新できます。

Uyuniでは、チャンネルはベースチャンネルと子チャンネルに分割されます。 この方法でチャンネルを編成すると、互換性のあるパッケージのみが各システムにインストールされるようになります。 クライアントは、1つのベースチャンネルのみをサブスクライブして、登録中にクライアントのオペレーティングシステムおよびアーキテクチャに基づいて割り当てる必要があります。 ベンダによって提供される有料チャンネルでは、関連づけされたサブスクリプションを持っている必要があります。

ベースチャンネルは、特定のオペレーティングシステムの種類、バージョン、およびアーキテクチャのため構築されたパッケージから構成されています。 たとえば、SUSE Linux Enterprise Server 15 x86-64のベースチャンネルには、そのオペレーティングシステムおよびアーキテクチャと互換性のあるソフトウェアのみが含まれています。

子チャンネルはベースチャンネルに関連付けられていて、ベースチャンネルと互換性のあるパッケージのみを提供します。 システムは、ベースチャンネルの複数の子チャンネルにサブスクライブできます。 システムがベースチャンネルに割り当てられている場合、そのシステムは関連する子チャンネルをインストールできます。 たとえば、システムがSUSE Linux Enterprise Server 15 x86\_64 ベースチャンネルに割り当てられている場合、互換性のあるベースチャンネルまたは関連する子チャンネルのいずれかから利用できるパッケージのみインストールまたは更新できます。

UyuniのWeb UIで、[ソフトウェア › チャンネル一覧](#)、すべてに移動して、利用できるチャンネルをブラウズできます。 [ソフトウェア › 管理](#)、チャンネルに移動して、チャンネルを変更又は新しいチャンネルを作成できます。

カスタムチャンネルなどチャンネルを使用する方法の詳細については、[Administration › Channel-management](#)を参照してください。

## 2.1.1. SUSE Package Hubで提供されるパッケージ

SUSE Package HubはSUSE Linux Enterprise製品の拡張機能で、openSUSEコミュニティで提供する追加オープンソースソフトウェアを提供しています。



SUSE Package Hubのパッケージは、openSUSEコミュニティによって提供されます。パッケージはSUSEではサポートされていません。

クライアントでSUSE Linux Enterpriseオペレーティングシステムを使用している場合、SUSE Package Hub拡張機能を有効にして、これらの追加パッケージにアクセスできます。アクセスすると、クライアントのサブスクリプション先にできるSUSE Package Hubチャンネルが提供されます。

SUSE Package Hubは多数のパッケージを提供しており、大量のディスク容量を使用してパッケージの同期に長時間かかる場合があります。提供するパッケージが必要でない場合、SUSE Package Hubを有効にしないでください。

サポートされていないパッケージを誤ってインストールまたは更新しないためには、最初にすべてのSUSE Package Hubパッケージを拒否するコンテンツライフサイクル管理戦略の実装をお勧めします。その後、必要なパッケージを明示的に有効にできます。  
コンテンツライフサイクル管理の詳細については、Administration > Content-lifecycleを参照してください。

## 2.1.2. AppStreamで提供されるパッケージ

Red Hatベースのクライアントの場合、AppStreamから追加パッケージを利用できます。ほとんどの場合、AppStreamパッケージでは、必要なソフトウェアをすべて持っていることを確認する必要があります。

UyuniのWeb UIでAppStreamパッケージを管理している場合、パッケージの更新に関して相反する推奨事項が表示される場合があります。これは、Uyuniでモジュールのメタデータを正しく解釈できないことが原因です。コンテンツライフサイクル管理(CLM)のAppStreamフィルタを使用して、AppStreamリポジトリを非モジュール型リポジトリに変換して、一部の更新操作で使用できます。CLM AppStreamフィルタの詳細については、Administration > Content-lifecycle-examplesを参照してください。

## 2.1.3. EPELで提供されるパッケージ

Red Hatベースのクライアントの場合、EPEL(エンタープライズ版Linux用の追加パッケージ)から追加パッケージを利用できます。EPELはオプションのパッケージリポジトリで、追加ソフトウェアが提供されます。



EPELのパッケージは、Fedoraコミュニティによって提供されます。このパッケージはSUSEではサポートされていません。

クライアントでRed Hatオペレーティングシステムを使用している場合、EPEL拡張機能を有効にして、これらの追加パッケージにアクセスできます。アクセスすると、クライアントのサブスクリプション先にできるEPELチャンネルが提供されます。

EPELは多数のパッケージを提供しており、大量のディスク容量を使用してパッケージの同期に長時間かかる場合があります。提供するパッケージが必要でない場合、EPELリポジトリを有効にしないでください。

サポートされていないパッケージを誤ってインストールまたは更新しないためには、最初にすべてのEPELパッケージを拒否するコンテンツライフサイクル管理(CLM)戦略の実装をお勧めします。その後、必要なパッケージを明示的に有効にできます。コンテンツライフサイクル管理の詳細については、Administration > Content-lifecycleを参照してください。

## 2.1.4. SUSE Linux EnterpriseクライアントのUnified Installer更新チャンネル

このチャンネルは、オペレーティングシステムをインストールする前に、Unified Installerが最新であることを確認するためにUnified Installerで使用されます。すべてのSUSE Linux Enterprise製品は、インストール中にインストーラ更新チャンネルにアクセスできる必要があります。

SUSE Linux Enterprise Serverクライアントでは、更新を含む製品を追加するときにデフォルトでインストーラ更新チャンネルが同期します。また、これらの製品チャンネルで自動インストールディストリビューションを作成するときに有効になります。

SUSE Linux Enterprise for SAPなどその他すべてのSUSE Linux Enterpriseの亜種では、インストーラ更新チャンネルを手動で追加する必要があります。そのためには、適切なSUSE Linux Enterprise Serverインストーラ更新チャンネルをこれらのSUSE Linux Enterprise亜種のベースチャンネルの下に複製します。チャンネルを複製した後にこれらのSUSE Linux Enterprise亜種の自動インストールディストリビューションを作成するとき、そのインストーラ更新チャンネルが自動的に使用されます。

## 2.1.5. ソフトウェアリポジトリ

リポジトリはソフトウェアパッケージを収集するために使用されます。ソフトウェアリポジトリにアクセスできる場合、リポジトリが提供するソフトウェアをインストールできます。1つ以上のリポジトリをUyuniのソフトウェアチャンネルに関連付け、クライアントをそのチャンネルに割り当て、クライアントのパッケージにインストールして更新する必要があります。

Uyuniのほとんどのデフォルトチャンネルは、正しいリポジトリに関連付けられています。カスタムチャンネルを作成している場合、アクセスできるリポジトリまたは自分で作成したリポジトリを関連付ける必要があります。

カスタムリポジトリおよびチャンネルの詳細については、Administration > Custom-channelsを参照してください。

### 2.1.5.1. ローカルリポジトリの場所

You can configure local repositories on clients, to provide packages that are not supplied by Uyuni channels.



ほとんどの場合、クライアントシステムはローカルリポジトリを必要としません。ローカルリポジトリを使用すると、クライアントで使用できるパッケージがどれかという問題が発生する可能性があります。この問題が発生すると、予期しないパッケージがインストールされる場合があります。

ローカルリポジトリは、オンボーディング中に無効になります。

Local repositories will be disabled each time a channel state is executed. For example, when applying the highstate or performing a package action.

If local repositories should stay enabled after onboarding, the following pillar must be set for the affected client:

/srv/pillar/top.slsファイルを編集します。

```
base:
  'minionid':
    - localrepos
```

/srv/pillar/localrepos.slsファイルを編集します。

```
mgr_disable_local_repos: False
```

クライアントがオンボードを完了した後、ローカルリポジトリを次の場所に追加できます。

表 17. ローカルリポジトリの場所

Client Operating System	Local Repository Directory
SUSE Linux Enterprise Server	/etc/zypp/repos.d
openSUSE	/etc/zypp/repos.d
Red Hat Enterprise Linux and similar derivatives	/etc/yum.repos.d/
Ubuntu	/etc/apt/sources.list.d/
Debian	/etc/apt/sources.list.d/

## 2.1.6. ソフトウェア製品

Uyuniでは、製品でソフトウェアを使用できます。 SUSEサブスクリプションでは、さまざまな製品にアクセスできます。 製品には、UyuniのWeb UIで管理、セットアップウィザード、製品に移動してブラウズし、選択できます。

製品には、任意の数のソフトウェアチャンネルが含まれています。  アイコンをクリックし、製品に含まれているチャンネルを表示します。 製品を追加して正常に同期すると、製品で提供しているチャンネルにアクセスできるようになります。 Uyuniサーバとクライアントで製品のパッケージを使用できます。

プロシージャ: ソフトウェアチャンネルの追加

1. UyuniのWeb UIで、管理、セットアップウィザード、製品に移動します。
2. 検索バーを使用してクライアントのオペレーティングシステムおよびアーキテクチャに適切な製品を探し、適切な製品にチェックを付けます。 こうすることによって、すべての必須チャンネルに自動的にチェックが付きます。 また、include recommendedトグルがオンになっている場合、すべての

推奨チャンネルにもチェックが付きます。矢印をクリックして関連製品の一覧を表示し、必要な追加製品にチェックが付いていることを確認します。

3. [製品の追加] をクリックし、製品の同期が完了するまで待機します。

詳細については、[Installation-and-upgrade > Setup-wizard](#)を参照してください。

## 2.2. ブートストラップリポジトリ

A bootstrap repository contains required packages for registering clients during bootstrapping. When products are synchronized, bootstrap repositories are automatically created and regenerated on the Uyuni Server.

### 2.2.1. ブートストラップリポジトリの作成準備

同期する製品を選択するとき、ブートストラップリポジトリは、必須のチャンネルすべてが完全にミラーリングされるとすぐに自動的に作成されます。

プロシージャ: Web UIから同期の進捗状況を確認する

1. UyuniのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。
2. [リポジトリ] タブに移動し、[同期] をクリックし、[同期実行] をクリックします。

プロシージャ: コマンドプロンプトから同期の進捗状況を確認する

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、tailコマンドを使用して同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

2. それぞれの子チャンネルは、同期の進捗中にそれぞれのログを生成します。同期が完了したことを確認するには、ベースチャンネルと子チャンネルのログファイルをすべて確認する必要があります。

### 2.2.2. 自動モードのオプション

ブートストラップリポジトリの自動作成動作を変更できます。このセクションでは、さまざまな設定を説明します。

フラッシュモード::

#### フラッシュモード

デフォルトでは、既存のリポジトリは、最新パッケージでのみ更新されます。代わりに、必ず空のリポジトリで始まるように設定できます。この動作を有効にするには、/etc/rhn/rhn.confで次の値を追加または編集します。

```
server.susemanager.bootstrap_repo_flush = 1
```

自動モード::

#### 自動モード

デフォルトでは、ブートストラップリポジトリの自動再生成は有効になっています。無効にするには、`/etc/rhn/rhn.conf`で次の値を追加または編集します。

```
server.susemanager.auto_generate_bootstrap_repo = 0
```

### 2.2.2.1. ブートストラップデータファイルの設定

このツールは、各ディストリビューションに必要なパッケージに関する情報を含むデータファイルを使用します。データファイルは`/usr/share/susemanager/mgr_bootstrap_data.py`に保存されています。SUSEはこのファイルを定期的に更新します。このファイルを変更する場合、直接編集しないでください。代わりに、同じディレクトリにコピーを作成し、コピーを編集します。

```
cd /usr/share/susemanager/
cp mgr_bootstrap_data.py my_data.py
```

変更したら、Uyuniを設定して新しいファイルを使用します。`/etc/rhn/rhn.conf`でこの値を追加または編集します。

```
server.susemanager.bootstrap_repo_datamodule = my_data
```



次の更新時、SUSEの新しいデータによって、新しいデータファイルではなく元のデータファイルが上書きされます。SUSEによって行われた変更を使用して新しいファイルを最新に保つ必要があります。

### 2.2.3. ブートストラップリポジトリの手動生成

デフォルトでは、ブートストラップリポジトリは毎日再生成されます。コマンドプロンプトからブートストラップリポジトリを手動で作成できます。

プロシージャ: SUSE Linux Enterpriseのブートストラップリポジトリの生成

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、次のコマンド用のブートストラップリポジトリを作成するために使用できるディストリビューションをリストします。

```
mgr-create-bootstrap-repo -l
```

2. 製品ラベルとして適切なリポジトリ名を使用して、ブートストラップリポジトリを作成します。

```
mgr-create-bootstrap-repo -c SLE-version-x86_64
```

3. Alternatively, use the number shown next to the distribution name in the list of available distributions.

クライアントリポジトリは /srv/www/htdocs/pub/repositories/ にあります。

複数の製品(SLESとSLES for SAPなど)をミラーリング済みの場合、またはカスタムチャンネルを使用している場合、ブートストラップリポジトリを作成するときに使用する親チャンネルを指定する必要が生じる場合があります。これは、あらゆる状況で必須ではありません。たとえば、SLES 15の一部のバージョンには共通のコードベースがあるため、親チャンネルを指定する必要はありません。このプロセッセージャは、ご使用の環境で必要な場合のみ使用します。

オプションのプロセッセージャ: ブートストラップリポジトリの親チャンネルの指定

1. 利用できる親チャンネルを確認します。

```
mgr-create-bootstrap-repo -c SLE-15-x86_64
Multiple options for parent channel
found. (親チャンネルの複数にオプションが表示されます。) Please use option
--with-parent-channel <label> and choose one of: (オプション --with-
-parent-channel <label>を使用し、次のいずれかを選択してください。)
- sle-product-sles15-pool-x86_64
- sle-product-sles_sap15-pool-x86_64
- sle-product-sled15-pool-x86_64
```

2. 適切な親チャンネルを指定します。

```
mgr-create-bootstrap-repo -c SLE-15-x86_64 --with-parent-channel
sle-product-sled15-pool-x86_64
```

### 2.2.3.1. 複数アーキテクチャを含むリポジトリ

複数の異なるアーキテクチャを含むブートストラップリポジトリを作成している場合、すべてのアーキテクチャが正しく更新されることに注意を払う必要があります。たとえば、SLEのx86-64アーキテクチャおよびIBM Zアーキテクチャは、同じブートストラップリポジトリ URL (/srv/www/htdocs/pub/repositories/sle/15/2/bootstrap/) を使用します。

-----オプションを有効にすると、複数のアーキテクチャのブートストラップリポジトリを生成しようととしても、生成されるアーキテクチャは1つのみです。この動作を回避するには、追加のアーキテクチャを作成するとき、コマンドプロンプトで --no-flush オプションを使用します。次に例を示します。

```
mgr-create-bootstrap-repo -c SLE-15-SP2-x86_64
mgr-create-bootstrap-repo --no-flush -c SLE-15-SP2-s390x
```

## 2.2.4. ブートストラップとカスタムチャンネル

カスタムチャンネルを使用している場合、`mgr-create-bootstrap-repo`コマンドを使用して`--with-custom-channels`オプションを使用できます。この場合、使用する親チャンネルも指定する必要があります。

カスタムチャンネルを使用すると、ブートストラップリポジトリの自動作成が失敗する場合があります。この場合、リポジトリを手動で作成する必要があります。

カスタムチャンネルの詳細については、[Administration > Custom-channels](#)を参照してください。

## 2.3. アクティベーションキー

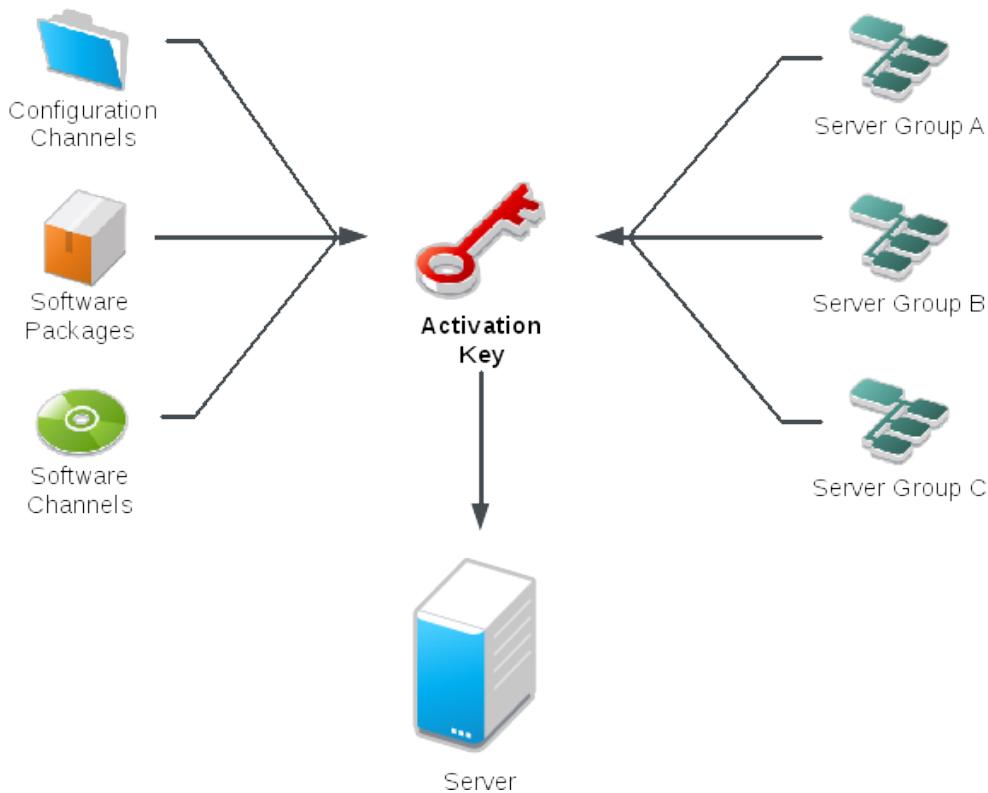
Activation keys are used to ensure that your clients have the correct software entitlements, are connecting to the appropriate channels, and are subscribed to the relevant groups. Each activation key is bound to an organization, which you can set when you create the key.

Uyuniでは、アクティベーションキーは、ラベルの付いた一連の設定です。アクティベーションキーに関連付けられている設定は、すべて適用できます。そのためには、キーのラベルをパラメータにしてブートストラップスクリプトに追加します。アクティベーションキーラベルをブートストラップスクリプトと組み合わせて使用することをお勧めします。ブートストラップスクリプトが実行されると、そのラベルに関連付けられているすべての設定が、スクリプトを実行しているシステムに適用されます。

アクティベーションキーは以下を指定できます。

- ・ チャンネルの割り当て
- ・ システムの種類またはアドオンのエンタイトルメント
- ・ 接続メソッド
- ・ 設定ファイル
- ・ インストールするパッケージ
- ・ システムグループの割り当て

アクティベーションキーは、クライアント登録時に使用され、再使用されることはありません。アクティベーションキーで指定する内容に関係なく、クライアントは登録後、任意の方法で変更できます。アクティベーションキーとクライアントの関連付けは、履歴を残すためだけに記録されます。



#### プロセッジヤ: アクティベーションキーの作成

1. UyuniのWeb UIで、管理者としてシステム、アクティベーションキーに移動します。
2. [キーの作成] ボタンをクリックします。
3. [-----] ページの [----] フィールドにアクティベーションキーの説明を入力します。
4. In the Key field, enter a name for the activation key. For example, SLES15-SP5 for SUSE Linux Enterprise Server 15 SP5.

SUSE製品の [----] フィールドではカンマまたは二重引用符を使用しないでください。ただし、Red Hat製品ではカンマを使用する必要があります。



- 他のすべての文字を使用できますが、<>(){}(スペースを含む)は自動的に削除されます。
- フィールドが空のままの場合、ランダムな文字列が生成されます。

5. In the Base Channels drop-down box, select the appropriate base software channel, and allow the relevant child channels to populate. For more information, see [reference:admin/setup-wizard.pdf](#) and **Administration > Custom-channels**.
6. 必要な子チャンネルを選択します(必須のSUSE Managerツールや更新チャンネルなど)。
7. いざれかのオプションを有効にする必要がある場合は、[-----] チェックボックスにチェックを付けます。
8. [-----] は [-----] のままにすることをお勧めします。

9. [-----] 設定には、チェックを入れないようにすることをお勧めします。
10. **[アクティベーションキーの作成]** をクリックしてアクティベーションキーを作成します。
11. [-----] チェックボックスをチェックし、このキーの設定管理を有効にし、**[アクティベーションキーの更新]** をクリックしてこの変更を保存します。



[-----] チェックボックスは、アクティベーションキーを作成するまで表示されません。 設定管理を有効にする必要がある場合、前に戻ってボックスにチェックを付けます。

### 2.3.1. 再アクティベーションキー

クライアントを再登録してすべてのUyuni設定を再取得するために、再アクティベーションキーを1回だけ使用できます。 再アクティベーションキーはクライアント固有で、システムID、履歴、グループ、およびチャンネルが含まれています。

再アクティベーションキーを作成するには、[-----] に移動し、再アクティベーションキーを作成するクライアントをクリックし再詳細タブに移動します。**[新しいキーの生成]** をクリックして再アクティベーションキーを作成します。 後で使用できるようにキーの詳細を書き留めます。 特定のシステムIDに関連付けられていない通常のアクティベーションキーと異なり、ここで作成されるキーは、**システム・アクティベーションキー**ページに表示されません。

After you have created a reactivation key, you can use it as the `management_key` grain in `/etc/salt/minion.d/susemanager.conf`. For example:

```
grains:
  susemanager:
    management_key: "re-1-daf44db90c0853edbb5db03f2b37986e"
```

Restart the `venv-salt-minion` or `salt-minion` process to apply the reactivation key.

ブートストラップスクリプトで再アクティベーションキーを使用できます。 ブートストラップスクリプトの詳細については、**Client-configuration > Registration-bootstrap**を参照してください。



既存のUyuniプロファイルでクライアントを自動インストールすると、そのプロファイルは、再アクティベーションキーを使用して、システムを再登録し、その設定を復元します。 プロファイルベースの自動インストール実行中は、このキーを再生成、削除、または使用しないでください。 このような操作を実行すると、自動インストールは失敗します。

### 2.3.2. アクティベーションキーのベストプラクティス

デフォルトの親チャンネル

SUSE-----の親チャンネルを使用しないでください。 この設定では、Uyuniは、インストールされるオペレーティングシステムに最適な親チャンネルを強制的に選択します。 その場合、予期し

ない動作が発生する可能性があります。代わりに、それぞれのディストリビューションおよびアーキテクチャに固有のアクティベーションキーを作成することをお勧めします。

#### アクティベーションキーによるブートストラップ

ブートストラップスクリプトを使用している場合、各スクリプトにアクティベーションキーを作成することを検討してください。作成によって、チャンネルの割り当て、パッケージのインストール、システムグループメンバーシップ、および設定チャンネルの割り当ての整合性を取ることができます。登録後にシステムで手動操作する必要も減ります。

#### LTSSクライアントのブートストラップ

LTSSサブスクリプションでクライアントをブーストラッピングする場合は、アクティベーションキーの作成中にLTSSチャンネルを含めます。

#### 帯域幅の要件

アクティベーションキーを使用すると、登録時にソフトウェアが自動ダウンロードされることがあります。この動作は、帯域幅に制約がある環境では望ましくない場合があります。

次のオプションによって帯域幅使用条件が作成されます。

- SUSE Product Poolチャンネルを割り当てるとき、対応する製品ディスクリプタパッケージが自動インストールされます。
- [――――――――――] セクションのパッケージがインストールされます。
- [――――] セクションのSaltの状態によっては、その内容に応じてダウンロードがトリガされる場合があります。

#### キーラベルの命名

読んで理解しやすい名前をアクティベーションキーに入力しないと、システムが数値の文字列を自動生成するため、キーの管理が困難になる場合があります。

キーを追跡できるようにアクティベーションキーの命名規則を検討してください。組織のインフラストラクチャに関係がある名前を付けておくと、複雑な操作の実行も簡単になります。

キーラベルを作成する場合、次のヒントを考慮してください。

- OSの名前(必須): キーには、設定を指定するOS名を必ず含める必要があります。
- アーキテクチャ名(推奨): 会社で稼働しているアーキテクチャ(たとえば、x86\_64)が複数ある場合、アーキテクチャの種類をラベルに含めることをお勧めします。
- サーバの種類の名前: このサーバの使用目的。
- 場所名: サーバの配置場所(部屋、ビル、部署)。
- 日付: 保守期間(四半期など)。
- カスタム名: 組織のニーズに合う命名規則。

アクティベーションキーラベルの名前の例:

```
sles15-sp4-web_server-room_129-x86_64
```

```
sles15-sp4-test_packages-blg_502-room_21-ppc64le
```

#### 含めるチャンネル

アクティベーションキーを作成するときは、このキーに関連付けられているソフトウェアチャンネルも考慮する必要があります。キーには、特定のベースチャンネルを割り当てる必要があります。デフォルトのベースチャンネルの使用はお勧めしません。 詳細については、[Client-configuration > Registration-overview](#)でインストールしているクライアントオペレーティングシステムを参照してください。

## 2.4. GPGキー

クライアントではGPGキーを使用して、ソフトウェアパッケージをインストールする前にパッケージ認証の確認が行われます。信頼されているソフトウェアのみクライアントにインストールできます。

ほとんどの場合、クライアントにソフトウェアをインストールできるようにGPG設定を調整する必要はありません。

RPMパッケージに直接署名することはできますが、Debianベースのシステムではメタデータにのみ署名し、チェックサムのチェーンを使用してパッケージを保護します。 RPMベースのほとんどのシステムでは、署名されたパッケージに加え、署名されたメタデータも使用します。

### 2.4.1. クライアントでGPGキーを信頼する

オペレーティング システムは、独自のGPGキーを直接信頼するか、少なくとも最小限のシステムでインストールされて出荷されます。 ただし、別のGPGキーで署名されたサードパーティのパッケージは手動で処理する必要があります。 クライアントは、GPGキーを信頼していなくても正常にブートストラップできます。 ただし、キーが信頼されるまで、新しいクライアントツールパッケージをインストールしたり、更新したりできません。

Clients now use GPG key information entered for a software channel to manage the trusted keys. When a software channel with GPG key information is assigned to a client, the key is trusted when the channel is refreshed or the first package is installed from this channel.

ソフトウェアチャンネルページのGPGキーのURLには、「空白」で区切られた複数のキーのURLを含めることができます。 ファイルURLの場合は、ソフトウェアチャンネルを使用する前に、GPGキーファイルをクライアントに配備する必要があります。

The GPG keys for the Client Tools Channels of Red Hat based clients are deployed on the client into `/etc/pki/rpm-gpg/` and can be referenced with file URLs.

Only in case a software channel is assigned to the client they will be imported and trusted by the system.



Debianベースのシステムはメタデータのみに署名するため、单一チャンネルに追加のキーを指定する必要はありません。 **Administration** > **Repo-metadata** の「独自のGPGキーを使用する」で説明されているように、ユーザが独自のGPGキーを設定してメタデータに署名すると、そのキーの配備と信頼が自動的に実行されます。

### 2.4.1.1. ユーザ定義のGPGキー

Users can define custom GPG keys to be deployed to a client.

いくつかのpillarデータを提供し、SaltファイルシステムにGPGキーファイルを提供することで、自動的にクライアントに配備されます。

これらのキーは、RPMベースのオペレーティングシステムでは`/etc/pki/rpm-gpg/`に、Debianシステムでは`/usr/share/keyrings/`に配備されます。

キーを配備するクライアントのpillarキー`custom_gpgkeys`を定義し、キーファイルの名前を一覧にします。

```
cat /srv/pillar/mypillar.sls
custom_gpgkeys:
  - my_first_gpg.key
  - my_second_gpgkey.gpg
```

さらに、Saltファイルシステムでは、`gpg`という名前のディレクトリを作成し、`custom_gpgkeys` pillarデータで指定された名前のGPGキーファイルを保存します。

```
ls -la /srv/salt/gpg/
/srv/salt/gpg/my_first_gpg.key
/srv/salt/gpg/my_second_gpgkey.gpg
```

The keys are deployed to the client at `/etc/pki/rpm-gpg/my_first_gpg.key` and `/etc/pki/rpm-gpg/my_second_gpgkey.gpg`.

最後のステップでは、ソフトウェアチャンネルのGPGキーのURLフィールドにURLを追加します。 **ソフトウェア** > **管理** > **チャンネル**に移動し、変更するチャンネルを選択します。 [GPGキー--URL] に値`file:///etc/pki/rpm-gpg/my_first_gpg.key`を追加します。

### 2.4.1.2. ブートストラップスクリプトのGPGキー

プロシージャ: ブートストラップスクリプトを使用してクライアントでGPGキーを信頼する

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、`/srv/www/htdocs/pub/`ディレクトリの内容を確認します。 このディレクトリには、使用できるすべての公開鍵が含まれています。 登録クライアントに割り当てるチャンネルに適用するキーをメモします。

- 関連するブートストラップスクリプトを開き、`ORG_GPG_KEY=`パラメータを見つけて、必要なキーを追加します。次に例を示します。

```
uyuni-gpg-pubkey-0d20833e.key
```

以前保存したキーを削除する必要はありません。



クライアントのセキュリティにとってGPGキーを信頼することは重要です。必要かつ信頼できるキーを決定するのは管理者のタスクです。GPGキーが信頼されていない場合、ソフトウェアチャネルをクライアントに割り当てることはできません。

# Chapter 3. Client Contact Methods

There are three contact methods how the Uyuni Server can communicate with clients. They are based on Salt protocols.

Which Salt contact method you use depends on the type of client, and your network architecture:

## Default (Salt)

is the default choice and is recommended unless there are specific needs. For more information, see [Client-configuration > Contact-methods-salt](#).

## SSH Push

is useful only if network restrictions make it impossible for clients to establish contact to the server. It is supported with the Salt Bundle only. This contact method has serious limitations. For more information, see [Client-configuration > Contact-methods-saltssh](#).

## SSH Push (with tunnel)

is the same as SSH Push, but with using a secured communication tunnel. For more information, see [Client-configuration > Contact-methods-saltssh-tunnel](#).

Implementation of Salt communication software options:

### Salt Bundle

is a single binary package containing Salt Minion, Python 3, required Python modules, and libraries. Thus the Salt contact method is independent from software installed on the client. Using the Salt Bundle is the default. It is the only supported implementation for the SSH Push or SSH Push (with tunnel) contact method. For more information, see [Client-configuration > Contact-methods-saltbundle](#).

### Salt Minion

is Salt software installed on the client system.



The so-called traditional contact protocol is no longer supported with Uyuni 5.0 and later. Before upgrading from Uyuni 4 to 5, any existing traditional clients including the traditional proxies must be migrated to Salt or replaced with Salt proxies.

## 3.1. Default contact method for Salt clients

The default contact method using the Salt protocol is recommended unless there are specific needs. For more information about Salt in general, see [Specialized-guides > Salt](#).

Software updates are generally pushed from the server to the client. Connections are initiated from the client. This means you must open ports on the server, not on clients. The Salt clients are also known as Salt minions. Uyuni Server installs a daemon on every client.

If you need to use Salt clients in a disconnected setup you can configure SSH Push as a contact method.

With this contact method, clients can be located in a firewall-protected zone called a DMZ. For more information about SSH Push, see [Client-configuration > Contact-methods-saltssh](#).

### 3.1.1. オンボードの詳細

Salt has its own database to keep the keys for the minions. This needs to be kept in sync with the Uyuni database. As soon as the key is accepted in Salt, the onboarding process in Uyuni starts.

The onboarding process will look for existing systems in the Uyuni database by searching for the `minion_id` and the `machine_id`. Depending on the outcome, the following scenarios are possible:

- If nothing is found, the new system gets created.
- In case an entry with the `minion_id` or the `machine_id` is found, that system will be migrated to match the new system.
- In case there is a match for both entries, and they are not the same system, the onboarding will be aborted with an error.
- In this case the administrator needs to resolve the conflict by removing at least one of the systems.

## 3.2. SSH Push contact method

SSH Push (`ssh-push`) is used in environments where Salt clients cannot reach the Uyuni Server directly. In this environment, clients are located in a firewall-protected zone called a DMZ. No system within the DMZ is authorized to open a connection to the internal network where the Uyuni Server is located.

SSH Push is also to use if installing a daemon agent on clients is not possible.



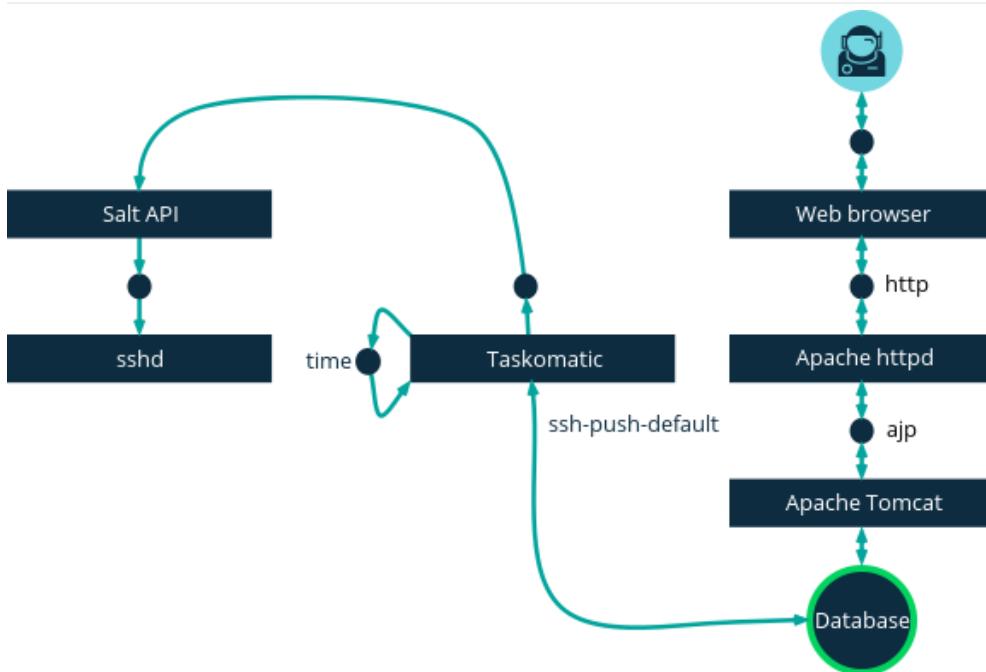
The SSH Push method has serious limitations. It does not scale well, and consumes more Server resources and network bandwidth than the plain Salt method (default). The Push SSH method is not at all supported with large setups (1000 clients and more).

The server uses the SSH Push to contact the clients at regular intervals, checking in and performing scheduled actions and events.



Re-installing systems using the provisioning model is not currently supported on clients managed with SSH Push.

This image demonstrates the SSH Push process path. All items left of the `Taskomatic` block represent processes running on the Uyuni client.



To use SSH Push, you must have the SSH daemon running on the client, and reachable by the `salt-api` daemon running on the Uyuni Server. Additionally, the required Python version will be deployed with the Salt Bundle on the client system.

Before beginning with the following registering procedure, define an activation key with the SSH Push contact method configured. This method expects that there is a direct connection with HTTPS to the Server.

You need to use the Web UI or API to register these clients with the Uyuni Server. See the following procedure or example.

Procedure: Registering clients with SSH Push

1. UyuniのWeb UIで、**システム**、**ブートストラップ**に移動し、該当するフィールドに入力します。
2. Select an activation key with the SSH Push contact method configured. For more information about activation keys, see **Client-configuration** > **Activation-keys**.
3. [Manage System Completely via SSH] (SSHでシステムを完全に管理する) チェックボックスにチェックを付けます。
4. **【ブートストラップ】**をクリックして、登録を開始します。
5. **システム**、**概要**に移動して、システムが正しく登録されたことを確認します。

例: SSHでのプッシュへのAPIアクセス

APIを使用して、使用する接続メソッドを管理できます。このPythonコードの例では、接続メソッドが`ssh-push`に設定されます。

有効な値は次のとおりです。

- default (pull)

- ssh-push
- ssh-push-tunnel

```
client = xmlrpclib.Server(SUMA_HOST + "/rpc/api", verbose=0)
key = client.auth.login(SUMA_LOGIN, SUMA_PASSWORD)
client.system.setDetails(key, 1000012345, {'contact_method' : 'ssh-
push'})
```

### 3.2.1. Available parameters

When you are configuring SSH Push, you can modify parameters that are used when a system is registered, including the host, activation key, and password. The password is used only for bootstrapping, it is not saved anywhere. All future SSH sessions are authorized via a key/certificate pair. These parameters are configured in **Systems > Bootstrapping**.

You can also configure persistent parameters that are used system-wide, including the sudo user to access the system as an unprivileged user instead of as root.

Procedure: Configuring unprivileged SSH access

1. 最新のspacewalk-taskomaticパッケージおよびspacewalk-certs-toolsパッケージがUyuniサーバにインストールされていることを確認してください。
2. それぞれのクライアントシステムで、適切な非特権ユーザを作成します。
3. On each client system, edit the sudoers file:

```
sudo visudo
```

4. この行をsudoersファイルの末尾に追加してsudoアクセス権をユーザに付与します。 Web UIでクライアントをブートストラップしているユーザの名前で<user>を置き換えます。

```
<user>  ALL=NOPASSWD: /usr/bin/python3, /var/tmp/venv-salt-
minion/bin/python
```



このプロシージャによりrootアクセス権が付与されます。クライアントの登録に必要なパスワードは不要です。 クライアントは正常にインストールされると、root特権で実行されるため、アクセス権は不要です。 クライアントを正しくインストールした後、sudoersファイルからこの行を削除することをお勧めします。

5. Uyuniサーバの/etc/rhn/rhn.conf設定ファイルで、次の行を追加または修正して、非特権ユーザ名を含めます。

```
ssh_push_sudo_user = <user>
```

After changing this configuration parameter you must restart services such as `salt-secrets-config.service`, `tomcat.service`, and `taskomatic.service`. To cover all needed services, it is the best to restart `spacewalk-service` as root:

```
spacewalk-service restart
```

### 3.2.2. アクションの実行

The SSH Push feature uses taskomatic to execute scheduled actions using `salt-ssh`. The taskomatic job periodically checks for scheduled actions and executes them. The SSH Push feature executes a complete `salt-ssh` call based on the scheduled action.

デフォルトでは、20個のSalt SSHアクションを同時に実行できます。 同時実行できるアクションの個数を増やすことができます。そのためには、次の行を設定ファイルに追加し、`parallel_threads`の値を調整します。 問題の発生を回避するために、同時実行アクション数を低い値に保つことをお勧めします。

```
taskomatic.sshminion_action_executor.parallel_threads = <number>
org.quartz.threadPool.threadCount = <value of parallel_threads + 20>
```

1つのクライアントで同時実行できるアクションの個数とtaskomaticで使用されるワーカスレッドの合計数が調整されます。 複数のクライアントでアクションを実行する必要がある場合、アクションは常に各クライアントで順次実行されます。

クライアントがプロキシ経由で接続されている場合、プロキシのMaxSessions設定を調整する必要があります。 この場合、平行接続数を総クライアント数の3倍に設定します。

### 3.2.3. Future features

There are some features that are not yet supported on SSH Push. These features do not work on Salt SSH clients:

- OpenSCAPの監査
- ビーコン。次の結果になります。
  - zypperを使用してシステムのパッケージをインストールしても、パッケージ更新が呼び出されません。
  - 仮想ホストシステムがSalt SSHベースの場合、仮想ホスト関数(たとえば、ゲストへのホスト)が動作しません。

For more information about Salt SSH, see **Specialized-guides** › **Salt** and <https://docs.saltstack.com/en/latest/topics/ssh/>.

### 3.3. SSH Push (with tunnel) contact method

SSH Push (with tunnel) (`ssh-push-tunnel`) is used in environments where clients cannot reach the Uyuni Server directly. In this environment, clients are located in a firewall-protected zone called a DMZ. No system within the DMZ is authorized to open a connection to the internal network, including the Uyuni Server.

This SSH method creates an encrypted tunnel from the Uyuni Server on the internal network to the clients located on the DMZ. After all actions and events are executed, the tunnel is closed.

サーバは、SSHを使用して、定期的にクライアントに接続し、チェックインし、スケジュールされたアクションおよびイベントを実行します。



Re-installing systems using the provisioning model is not currently supported on clients managed with SSH Push.



The tunnel is used to provide the access to the server through the encrypted tunnel. The repositories assigned to the SSH Push client (with tunnel) are provided through this tunnel only, thus it is not possible to use package manager tools directly from the client system because the repositories are available only while the tunnel is up. In other words, access is only possible if the session is initiated by the server. All package managing operations on the client can be performed from the server side only.

For tunneling connections via SSH, a port number is required for tunneling via HTTPS. The port number used by default is 1233. To overwrite it, you can add a custom port numbers greater than 1024 to `/etc/rhn/rhn.conf`:

```
ssh_push_port_https = high_port
```

After changing this configuration parameter you must restart services such as `salt-secrets-config.service`, `tomcat.service`, and `taskomatic.service`. To cover all needed services, it is the best to restart `spacewalk-service` as root:

```
spacewalk-service restart
```

セキュリティ上の理由から、SSHでsudoを使用して、rootとしてではなく非特権ユーザとしてシステムにアクセスする必要があります。

プロシージャ: 非特権SSHアクセスの設定

1. それぞれのクライアントシステムで、適切な非特権ユーザを作成します。
2. On each client system, edit the `sudoers` file:

```
sudo visudo
```

3. この行を sudoers ファイルの末尾に追加して sudo アクセス権をユーザに付与します。 Web UIでクライアントをブートストラップしているユーザの名前で <user> を置き換えます。

```
<user>  ALL=NOPASSWD: /usr/bin/python3, /var/tmp/venv-salt-minion/bin/python
```



このプロシージャにより root アクセス権が付与されます。クライアントの登録に必要なパスワードは不要です。 クライアントは正常にインストールされると、root特権で実行されるため、アクセス権は不要です。 クライアントを正しくインストールした後、sudoers ファイルからこの行を削除することをお勧めします。

4. Uyuniサーバの /etc/rhn/rhn.conf 設定ファイルで、次の行を追加または修正して、非特権ユーザ名を含めます。

```
ssh_push_sudo_user = <user>
```

After changing this configuration parameter you must restart services such as salt-secrets-config.service, tomcat.service, and taskomatic.service. To cover all needed services, it is the best to restart spacewalk-service as root:

```
spacewalk-service restart
```

You need to use the Web UI or API to register these clients with the Uyuni Server.

Before you begin, you need to ensure that you have specified which ports to use for SSH tunneling. If you have registered clients before changing the port numbers, they need to be registered again with a reactivation key.

- For more information about bootstrapping, see [Client-configuration > Registration-bootstrap](#).
- For more information about bootstrapping, see [client-configuration:activation-keys.pdf](#).

Example: API access to SSH Push (with tunnel)

You can use the API to manage which contact method to use. This example Python code sets the contact method to ssh-push-tunnel.

有効な値は次のとおりです。

- default (pull)

- ssh-push
- ssh-push-tunnel

```
client = xmlrpclib.Server(SUMA_HOST + "/rpc/api", verbose=0)
key = client.auth.login(SUMA_LOGIN, SUMA_PASSWORD)
client.system.setDetails(key, 1000012345, {'contact_method' : 'ssh-push-tunnel'})
```

## 3.4. Salt Bundle

### 3.4.1. Salt Bundleの概要

The Salt Bundle is a single binary package containing Salt Minion, Python 3, required Python modules, and libraries.

The Salt Bundle is shipped with Python 3 and all the requirements for Salt to run. Thus Salt Bundle does not use the Python version install on the client as system software. The Salt Bundle can be installed on clients that do not meet the requirements for a given Salt version.

It is also possible to use the Salt Bundle on systems that run a Salt Minion connected to a Salt Master other than the Uyuni Salt Master.

### 3.4.2. Salt Bundleを使用してクライアントをMinionとして登録する

The registration method with the Salt Bundle is the recommended registration method. This section explains the advantages and limitations of the current implementation. The Salt Bundle is provided as the `venv-salt-minion` that consists of Salt, Python 3, and the Python modules Salt depends on. Bootstrapping with Web UI is using Salt Bundle as well, so bootstrapping with Web UI is not Python dependant. Using the Salt Bundle, it is no longer needed that the client provides any Python interpreter or modules.

新しいクライアントをブートストラップする場合、Salt Bundleを使用した登録がデフォルトの方法です。既存のクライアントをSalt Bundleの方式に切り替えることができます。切り替える場合、`salt-minion`パッケージおよびその依存関係はインストールされたままになります。

#### 3.4.2.1. Using the Salt Bundle with the Salt Minion

The Salt Bundle can be used with the Salt Minion managed by the Salt Master other than Uyuni Server at the same time. If the Salt Bundle is installed on a client Uyuni Server will manage the configuration files of the Salt Bundle, the configuration files of `salt-minion` will not be managed in this case. For more information, see [Salt Bundle configuration](#).



- To bootstrap a client with the Salt Minion managed by the Salt Master other than Uyuni Server it is recommended to use `mgr-bootstrap --force-bundle` when generating the bootstrap script, or to set `FORCE_VENV_SALT_MINION` to 1 in the bootstrap script.
- Web UI `mgr_force_venv_salt_minion`をtrueに設定してブートストラップする場合、pillarをグローバルに指定できます。 詳細については、[Specialized-guides](#)の[Salt](#)を参照してください。

### 3.4.2.2. Switching from Salt Minion to Salt Bundle

The Salt state `util.mgr_switch_to_venv_minion` is available to switch from `salt-minion` to `venv-salt-minion`. It is recommended to switch to `venv-salt-minion` in two steps to avoid trouble with shifting processes:

プロシージャ:`util.mgr_switch_to_venv_minion`を使用して状態を`venv-salt-minion`に切り替える

- まず、pillarを指定せずに`util.mgr_switch_to_venv_minion`を適用します。`venv-salt-minion`に切り替わり、設定ファイルなどがコピーされます。元の`salt-minion`の設定およびそのパッケージはクリーンアップされません。

```
salt <minion_id> state.apply util.mgr_switch_to_venv_minion
```

`util.mgr_switch_to_venv_minion`を適用し、`mgr_purge_non_venv_salt`をTrueに設定して`salt-minion`を削除し、`mgr_purge_non_venv_salt_files`をTrueに設定して`salt-minion`に関するすべてのファイルを削除します。この2番目の手順によって、最初の手順が処理されたことが保証され、古い設定ファイルおよび古くなった`salt-minion`パッケージが削除されます。

```
salt <minion_id> state.apply util.mgr_switch_to_venv_minion
pillar='{"mgr_purge_non_venv_salt_files": True,
 "mgr_purge_non_venv_salt": True}'
```



切り替えの最初の手順をスキップして2番目の手順を実行すると、クライアント側でコマンドを実行するために使用される`salt-minion`を停止する必要があるため、状態適用プロセスは失敗する可能性があります。

他方、Salt Bundleのインストールを回避して代わりに`salt-minion`の使用を続けることも可能です。この場合、次のいずれかのオプションを指定します。

- `--no-bundle`オプションを指定して`mgr-bootstrap`を実行します。
- 生成されたブートストラップスクリプトで`AVOID_VENV_SALT_MINION`を1に設定します。
- ブートストラップ状態の場合、`mgr_avoid_venv_salt_minion` pillarをTrueに設定します。

### 3.4.3. SSH Push with the Salt Bundle

The Salt Bundle is also used when performing SSH Push actions to clients.

A shell script deploys the Salt Bundle onto the target system without installing venv-salt-minion before any Salt command is executed. Because the Salt Bundle contains the whole Salt code base, no salt-thin is deployed. SSH Push (including bootstrapping using the Web UI) uses the Python 3 interpreter within the bundle. The target system does not need to have any other Python interpreter installed.

The Python 3 deployed with the Bundle is used to handle SSH Push session on the client, so SSH Push (including bootstrapping with Web UI) is not dependant on Python installed on the system.

Using salt-thin can be enabled as a fallback method, but it requires Python 3 to be installed on the client. This method is not recommended nor supported and exists for development purposes only. Set web.ssh\_use\_salt\_thin to true in the /etc/rhn/rhn.conf configuration file.

- The bootstrap repository must be created before bootstrapping the client with Web UI. SSH Push is using the Salt Bundle taken from the bootstrap repository based on the detected target operating system. For more information, see [client-configuration:bootstrap-repository.pdf](#).
- SSH Push is using /var/tmp to deploy Salt Bundle to and execute Salt commands on the client with the bundled Python. Therefore you must not mount /var/tmp with the noexec option. It is not possible to bootstrap the clients, which have /var/tmp mounted with noexec option, with the Web UI because the bootstrap process is using SSH Push to reach a client.

### 3.4.4. pipを使用したPythonパッケージによるSalt Bundleの拡張

The Salt Bundle includes pip to make it possible to extend the functionality of the bundled Salt Minion with extra Python packages.

デフォルトで、salt <minion\_id> pip.install <package-name>は、<package\_name>で指定されたPythonパッケージを/var/lib/venv-salt-minion/localにインストールします。

必要に応じて、venv-salt-minion.serviceの環境変数VENV\_PIP\_TARGETを設定することで、パス/var/lib/venv-salt-minion/localを上書きできます。サービスにはsystemdのドロップイン設定ファイルを使用することをお勧めします。設定ファイル/etc/systemd/system/venv-salt-minion.service.d/10-pip-destination.confで実行できます。

```
[Service]
Environment=VENV_PIP_TARGET=/new/path/local/venv-salt-minion/pip
```



The Python packages installed through `pip` are not changing on updating the Salt Bundle. To ensure that such packages are available and functional after an update, it is recommended to install them with a Salt state that is applied after Salt Bundle updates.

# Chapter 4. クライアントの登録

クライアントをUyuniサーバに登録する方法は複数あります。このセクションでは、使用できるさまざまなメソッドについて説明します。クライアントで実行するオペレーティングシステム固有の情報も含まれています。

始める前に次の項目を確認してください。

- クライアントで登録前にUyuniサーバと日時が正しく同期されている。
- アクティベーションキーを作成済みである。アクティベーションキーの作成の詳細については、[Client-configuration > Activation-keys](#)を参照してください。



Uyuniサーバをこのサーバ自身に登録しないでください。Uyuniサーバは個別に管理するか、別のUyuniサーバを使用して管理する必要があります。複数のサーバを使用する方法の詳細については、[Specialized-guides > Large-deployments](#)を参照してください。

## 4.1. クライアント登録メソッド

クライアントをUyuniサーバに登録する方法は複数あります。

- For only a few clients, we recommend that you register clients using the Uyuni Web UI. 詳細については、[Client-configuration > Registration-webui](#)を参照してください。
- If you want more control over the process, or have to register many clients, we recommend that you create a bootstrap script. 詳細については、[Client-configuration > Registration-bootstrap](#)を参照してください。
- For even more control over the process, executing a single command on the command line can be useful. 詳細については、[Client-configuration > Registration-cli](#)を参照してください。

クライアントは、登録する前にUyuniサーバと日時が正しく同期されている必要があります。

まず、アクティベーションキーを作成してから、ブートストラップスクリプトまたはコマンドラインメソッドを使用する必要があります。アクティベーションキーの作成の詳細については、[Client-configuration > Activation-keys](#)を参照してください。



Uyuniサーバをこのサーバ自身に登録しないでください。Uyuniサーバは個別に管理するか、別のUyuniサーバを使用して管理する必要があります。複数のサーバを使用する方法の詳細については、[Specialized-guides > Large-deployments](#)を参照してください。

### 4.1.1. Web UIでクライアントを登録する

Bootstrapping clients with the Web UI is using [Specialized-guides > Salt](#) to execute the bootstrap process on the client. Salt SSH uses the Salt Bundle and its included Python interpreter. Therefore, no other Python interpreter needs to be installed on the client.



Salt Bundleはブートストラップリポジトリに付属しているため、クライアントでブートストラッププロセスを開始する前にリポジトリを作成する必要があります。 シエルスクリプトは、クライアントのオペレーティングシステムを検出し、適切なブートストラップリポジトリからSalt Bundleを配備し、ブートストラップスクリプトと同じロジックを使用します。 詳細については、[ブートストラップリポジトリの作成準備](#)を参照してください。



Uyuniサーバをこのサーバ自体に登録しないでください。 Uyuniサーバは個別に管理するか、別のUyuniサーバを使用して管理する必要があります。 複数のサーバを使用する方法の詳細については、[Specialized-guides › Large-deployments](#)を参照してください。

プロシージャ: Web UIでクライアントを登録する

1. UyuniのWeb UIで、**システム › ブートストラップ**に移動します。
2. [完全修飾ドメイン名(FQDN)] フィールドに、ブートストラップするクライアントの完全修飾ドメイン名(FQDN)を入力します。
3. [SSHポート番号] フィールドに、クライアントを接続してブートストラップするために使用するSSHポート番号を入力します。 デフォルトでは、SSHポートは22です。
4. [ユーザ名] フィールドに、クライアントにログインするユーザ名を入力します。 デフォルトでは、ユーザ名はrootです。
5. SSHでクライアントをブートストラップするには、[チェック] フィールドで、[SSH秘密鍵] フィールドにチェックを付け、クライアントへのログインに使用するSSH秘密鍵をアップロードします。 SSH秘密鍵でパスフレーズが必要な場合、[SSHパスフレーズ] フィールドに入力します。 パスフレーズがない場合には空白のままにします。
6. パスワードでクライアントをブートストラップするには、[チェック] フィールドで、[SSHパスワード] フィールドにチェックを付け、クライアントへのログインに使用するパスワードを入力します。
7. [アクティベーションキー] フィールドで、クライアントのブートストラップに使用するソフトウェアチャンネルに関連付けられているアクティベーションキーを選択します。 詳細については、[Client-configuration › Activation-keys](#)を参照してください。
8. オプション: [プロキシ] フィールドで、クライアントの登録先にするプロキシを選択します。
9. デフォルトでは、[Disable SSH Strict Key Host Checking] (SSH厳格キーホストの確認を無効にする) チェックボックスにチェックが付いています。 このチェックボックスにチェックが付いていると、ブートストラッププロセスは、手動認証なしでSSHホストキーを自動的に受け入れます。
10. オプション: [Manage System Completely via SSH] (SSHでシステムを完全に管理する) チェックボックスにチェックを付けます。 このオプションにチェックを付けると、サーバへの接続にSSHを使用するようにクライアントは設定され、その他の接続方法は設定されません。
11. [ブートストラップ] をクリックして、登録を開始します。

ブートストラッププロセスが完了したら、クライアントは [システム › システム一覧] にリストされます。



SSH秘密鍵は、ブートストラッププロセス中のみ保存されます。 秘密鍵は、ブートストラップが完了するとすぐにUyuniサーバから削除されます。



Uyuniを使用してクライアントに新しいパッケージまたは更新がインストールされると、エンドユーザライセンスアグリーメント(EULA)が自動的に受け入れられます。 パッケージのEULAを確認するには、Web UIでパッケージ詳細ページを開きます。

#### 4.1.1.1. ローカルで割り当てられたリポジトリの取り扱い

Uyuniがサービスを提供しないクライアントにリポジトリを直接割り当てるとは、一般的なユースケースではありません。 問題の原因になる可能性があります。 したがって、Saltを介してブートストラップすることで、ブートストラッププロセスの開始時にすべてのローカルリポジトリを無効にします。

その後、Highstateやパッケージのインストールを実行するなど、チャンネルの状態を使用するたびに、ローカルに割り当てられたすべてのリポジトリが再び無効になります。

クライアントで使用されるすべてのソフトウェアパッケージは、Uyuniがサービスを提供するチャンネルから取得される必要があります。 カスタムチャンネルの作成の詳細については、[Administration > Custom-channels](#)のマニュアルを参照してください。

#### 4.1.2. ブートストラップスクリプトを使用してクライアントを登録する

Registering clients with a bootstrap script gives you control over parameters, and can help if you have to register a large number of clients at once.

To register clients using a bootstrap script, we recommend you create a template bootstrap script to begin, which can then be copied and modified. The bootstrap script you create is executed on the client when it is registered, and ensures all the necessary packages are deployed to the client. Some parameters in the bootstrap script ensure the client system can be assigned to its base channel, using activation key and GPG key.

リポジトリ情報を注意深く確認して、ベースチャンネルリポジトリと一致していることを確認することが重要です。 リポジトリ情報が正確に一致しないと、ブートストラップスクリプトは正しいパッケージをダウンロードできません。



All clients need a bootstrap repository. It is automatically created and regenerated on the Uyuni Server when products are synchronized. A bootstrap repository includes packages for installing Salt on clients, and for registering clients.

For more information about creating a bootstrap repository, see [Client-configuration > Bootstrap-repository](#).



GPGキーおよびUyuniクライアントツール

Uyuniクライアントツールで使用されるGPGキーは、デフォルトでは信頼されません。 ブートストラップスクリプトを作成するとき、`ORG_GPG_KEY`パラメータを使用して公開鍵の指紋を含むファイルへのパスを追加します。



デフォルトではopenSUSE Leap 15およびSLE 15はPython 3を使用します。 Python 2に基づくブートストラップスクリプトは、openSUSE Leap 15システムおよびSLE 15システム用に再作成する必要があります。 Python 2を使用してopenSUSE Leap 15システムまたはSLE 15システムを登録する場合、ブートストラップスクリプトは失敗します。

#### 4.1.2.1. `mgr-bootstrap`でのブートストラップスクリプトの作成

`mgr-bootstrap`コマンドは、カスタムブートストラップスクリプトを生成します。 ブートストラップスクリプトは、Uyuniクライアントシステムによって初期登録と設定を簡素化するために使用されます。

The arguments `--activation-keys` and `--script`, are the only mandatory arguments. On the Uyuni Server, as root at the command line execute it with the mandatory arguments. Replace `<ACTIVATION_KEY>` and `<EDITED_NAME>` with your values:

```
mgr-bootstrap --activation-keys=<ACTIVATION_KEY> --script=bootstrap
-<EDITED_NAME>.sh
```

The `mgr-bootstrap` command offers several other options, including the ability to set a specific hostname, set specific GPG keys, and set the registration method (salt-minion or salt-bundle).

詳細については、`mgr-bootstrap`のマニュアルページを参照するか、`mgr-bootstrap --help`を実行してください。

#### 4.1.2.2. Web UIでのブートストラップスクリプトの作成

UyuniのWeb UIを使用して、編集できるブートストラップスクリプトを作成できます。

プロセッジヤ: ブートストラップスクリプトの作成

1. UyuniのWeb UIで、**管理** › **マネージャ設定** › **ブートストラップスクリプト**に移動します。
2. 必須フィールドには、前のインストール手順から取り出した値が事前に入力されています。 各設定の詳細については、**Reference** › **Admin**を参照してください。
3. **[[更新]]**をクリックしてスクリプトを作成します。
4. ブートストラップスクリプトが生成され、サーバの`/srv/www/htdocs/pub/bootstrap`ディレクトリに保存されます。 または、HTTPS経由でブートストラップスクリプトにアクセスできます。`<example.com>`をUyuniサーバのホスト名に置き換えます。

```
https://<example.com>/pub/bootstrap/bootstrap.sh
```



ブートストラップスクリプトのSSLを無効にしないでください。 Web UIで [Enable SSL] (SSLの有効化) がチェックされていること、または設定 USING\_SSL=1 がブートストラップスクリプトに存在していることを確認してください。 SSLを無効にすると、登録プロセスでカスタムSSL証明書が必要です。

For more information about custom certificates, see [Administration > Ssl-certs](#).

#### 4.1.2.3. ブートストラップスクリプトの編集

作成したブートストラップスクリプトのテンプレートをコピーして変更し、カスタマイズできます。 Uyuni で使用するためにブートストラップスクリプトを編集するときの最小要件は、アクティベーションキーを含めることです。 ほとんどのパッケージはGPGで署名されているため、信頼できるGPGキーをシステムで用意してインストールすることも必要です。

このプロシージャでは、アクティベーションキーの正確な名前を知っている必要があります。 [ホーム > 概要](#) に移動し、 [...] ボックスで、 [...] をクリックします。 チャンネル用に作成したすべてのキーがこのページに一覧表示されます。 ブートストラップスクリプトで使用するキーのフルネームを、キーフィールドに表示されているように正確に入力する必要があります。 アクティベーションキーの詳細については、 [Client-configuration > Activation-keys](#) を参照してください。

プロシージャ: ブートストラップスクリプトの変更

1. Uyuniサーバのコマンドラインでrootとして、ブートストラップディレクトリを次のように変更します。

```
cd /srv/www/htdocs/pub/bootstrap/
```

2. 各クライアントで使用するブートストラップスクリプトのテンプレートのコピーを2つ作成し、名前を変更します。

```
cp bootstrap.sh bootstrap-sles12.sh
cp bootstrap.sh bootstrap-sles15.sh
```

3. 変更するためにbootstrap-sles15.shを開きます。 次のテキストが表示されるまで下方にスクロールします。 ファイルに「exit 1」がある場合、その行の先頭にハッシュまたはポンド記号(#)を入力してコメントアウトします。 これによって、スクリプトがアクティブになります。 ACTIVATION\_KEYS=フィールドにこのスクリプトのキーの名前を入力します。

```

echo "Enable this script: comment (with #'s) this block (or, at
least just"
echo "the exit below)"
echo
#exit 1

# can be edited, but probably correct (unless created during initial
install):
# NOTE: ACTIVATION_KEYS *must* be used to bootstrap a client
machine.
ACTIVATION_KEYS=1-sles15
ORG_GPG_KEY=

```

- 完了したら、ファイルを保存し、2つ目のブートストラップスクリプトでこの手順を繰り返します。



By default, bootstrap script will try to install venv-salt-minion if it is available in the bootstrap repository and salt-minion if there is no Salt bundle in the bootstrap repository. It is possible to avoid installing Salt bundle and keep using salt-minion if you need it for some reason.

詳細については、[Client-configuration > Contact-methods-saltbundle](#)を参照してください。

#### 4.1.2.4. クライアントの接続

スクリプトの作成を完了したら、このスクリプトを使用してクライアントを登録できます。

プロシージャ: ブートストラップスクリプトの実行

- Uyuniでrootとしてログインします。 コマンドプロンプトでブートストラップディレクトリに変更します。

```
cd /srv/www/htdocs/pub/bootstrap/
```

- 次のコマンドを実行して、クライアントでブートストラップスクリプトを実行します。  
EXAMPLE.COMをクライアントのホスト名に置き換えます。

```
cat bootstrap-sles15.sh | ssh root@EXAMPLE.COM /bin/bash
```

- または、クライアントで次のコマンドを実行します。

```
curl -Sks https://server_hostname/pub/bootstrap/bootstrap-sles15.sh
| /bin/bash
```



- 問題を回避するには、ブートストラップスクリプトが `bash`を使用して実行されていることを確認してください。

このスクリプトは、前に作成したリポジトリディレクトリにある必要な依存関係をダウンロードします。

4. スクリプトの実行が完了すると、クライアントが正しく登録されたかどうかを確認できます。そのためには、UyuniのWeb UIを開き、**システム** > **概要**に移動して、新しいクライアントがリストされていることを確認します。
5. スクリプトを使用してSaltクライアントを登録する場合は、UyuniのWeb UIを開いて、**Salt** > **Keys**に移動し、クライアントキーを受け入れます。



- Uyuniを使用してクライアントに新しいパッケージまたは更新がインストールされると、エンドユーザライセンスアグリーメント(EULA)が自動的に受け入れられます。 パッケージのEULAを確認するには、Web UIでパッケージ詳細ページを開きます。

## 4.1.3. Register on the Command Line

### 4.1.3.1. Manual client registration

ほとんどの場合、Saltクライアントは、デフォルトのブートストラップメソッドで正確に登録されます。 ただし、Saltを使用してクライアントをUyuniサーバに手動で登録できます。そのためには、クライアントでSalt Minionファイルを編集し、サーバの完全修飾ドメイン名(FQDN)を指定します。 このメソッドは、サーバで受信するポート4505および4506を使用します。 このメソッドではUyuniサーバの設定は不要です。ただし、上記のポートを開いている必要があります。

このプロシージャでは、登録する前に`venv-salt-minion` (Salt bundle)または`salt-minion`パッケージをSaltクライアントにインストール済みである必要があります。 両方ともさまざまな場所で設定ファイルを使用しますが、ファイル名は同じままです。`systemd`サービスファイル名は異なります。



- この方法でブートストラップを実行できるのは、クライアントツールチャンネルまたは公式のSUSEディストリビューションの一部として`salt-minion`を使用する場合のみです。

### 4.1.3.2. Salt Bundle configuration

#### Salt Bundle (`venv-salt-minion`)

- `/etc/venv-salt-minion/`
- `/etc/venv-salt-minion/minion`

- /etc/venv-salt-minion/minion.d/NAME.conf
- systemdサービスファイル: venv-salt-minion.service

Salt bundleの詳細については、**Client-configuration** › **Contact-methods-saltbundle**を参照してください。

プロシージャ: Salt Bundle設定ファイルでクライアントを登録する

1. Saltクライアントでminion設定ファイルを開きます。 設定ファイルは次の場所にあります。

```
/etc/venv-salt-minion/minion
```

または

```
/etc/venv-salt-minion/minion.d/NAME.conf
```

2. ファイルで、UyuniサーバまたはプロキシのFQDNと、アクティベーションキー(存在する場合)を追加または編集します。以下にリストされている他の設定パラメータも追加します。

```
マスタ: SERVER.EXAMPLE.COM

grains:
  susemanager:
    activation_key: "<Activation_Key_Name>"

server_id_use_crc: adler32
enable_legacy_startup_events: False
enable_fqdns_grains: False
```

3. venv-salt-minionサービスを再起動します。

```
systemctl restart venv-salt-minion
```

4. Uyuniサーバで、新しいクライアントキーを受け入れます。<client>をクライアントの名前に置き換えます。

```
salt-key -a '<client>'
```

#### 4.1.3.3. Client configuration

**Client (salt-minion)**

- /etc/salt/
- /etc/salt/minion
- /etc/salt/minion.d/NAME.conf
- systemdサービスファイル: salt-minion.service

プロシージャ: Salt Minion設定ファイルでクライアントを登録する

1. Saltクライアントでminion設定ファイルを開きます。 設定ファイルは次の場所にあります。

```
/etc/salt/minion
```

または

```
/etc/salt/minion.d/NAME.conf
```

2. In the file add or edit the FQDN of the Uyuni Server or Proxy, and the activation key if any. Also add the other configuration parameters listed below.

マスタ: SERVER.EXAMPLE.COM

```
grains:
  susemanager:
    activation_key: "<Activation_Key_Name>"

  server_id_use_crc: adler32
  enable_legacy_startup_events: False
  enable_fqdns_grains: False
```

3. salt-minionサービスを再起動します。

```
systemctl restart salt-minion
```

4. Uyuniサーバで、新しいクライアントキーを受け入れます。<client>をクライアントの名前に置き換えます。

```
salt-key -a '<client>'
```

Salt minion設定ファイルの詳細については、<https://docs.saltstack.com/en/latest/ref/configuration/minion.html>を参照してください。

## 4.2. SUSEクライアントの登録

You can register SUSE Linux Enterprise clients to your Uyuni Server.

The method and details varies depending on the operating system of the client.

始める前に、クライアントでUyuniサーバと日時が正しく同期していることを確認してください。

アクティベーションキーを作成済みである必要があります。 アクティベーションキーの作成の詳細については、**Client-configuration > Activation-keys**を参照してください。



Uyuniサーバをこのサーバ自体に登録しないでください。 Uyuniサーバは個別に管理するか、別のUyuniサーバを使用して管理する必要があります。 複数のサーバを使用する方法の詳細については、**Specialized-guides > Large-deployments**を参照してください。

### 4.2.1. SUSE Linux Enterpriseクライアントの登録

This section contains information about registering clients running SUSE Linux Enterprise operating systems.

以下を含むすべてのSUSE Linux Enterprise製品を準備する際には、この章の手順を使用してください。

- SUSE Linux Enterprise Server for SAP
- SUSE Linux Enterprise Desktop
- SUSE Linux Enterprise
- SUSE Linux Enterprise Real Time

これらの手順は、古いSUSE Linux Enterpriseバージョンおよびサービスパックにも使用できます。

#### 4.2.1.1. ソフトウェアチャンネルの追加



次のセクションでは、x86\_64アーキテクチャに基づく説明が多いです。 必要に応じて他のアーキテクチャに置き換えてください。

SUSE Linux EnterpriseクライアントをUyuniサーバに登録する前に、必要なソフトウェアチャンネルを追加して同期する必要があります。

このプロシージャで必要な製品は次のとおりです。

表 18. SLE製品 - WebUI

OS Version	Product Name
SUSE Linux Enterprise Server 15 SP5	SUSE Linux Enterprise Server 15 SP5 x86_64
SUSE Linux Enterprise Server 15 SP4	SUSE Linux Enterprise Server 15 SP4 x86_64

OS Version	Product Name
SUSE Linux Enterprise Server 15 SP3	SUSE Linux Enterprise Server 15 SP3 x86_64
SUSE Linux Enterprise Server 15 SP2	SUSE Linux Enterprise Server 15 SP2 x86_64
SUSE Linux Enterprise Server 15 SP1	SUSE Linux Enterprise Server 15 SP1 x86_64
SUSE Linux Enterprise Server 12 SP5	SUSE Linux Enterprise Server 12 SP5 x86_64

プロシージャ: ソフトウェアチャンネルの追加

1. UyuniのWeb UIで、**管理 > セットアップウィザード**、製品に移動します。
2. 検索バーを使用してクライアントのオペレーティングシステムおよびアーキテクチャに適切な製品を探し、適切な製品にチェックを付けます。こうすることによって、すべての必須チャンネルに自動的にチェックが付きます。また、`include recommended`トグルがオンになっている場合、すべての推奨チャンネルにもチェックが付きます。矢印をクリックして関連製品の一覧を表示し、必要な追加製品にチェックが付いていることを確認します。
3. **[+ 製品の追加]**をクリックし、製品の同期が完了するまで待機します。

または、コマンドプロンプトでチャンネルを追加できます。このプロシージャで必要なチャンネルは次のとおりです。

表 19. SLE製品 - CLI

OS Version	Base Channel
SUSE Linux Enterprise Server 15 SP5	sle-product-sles15-sp5-pool-x86_64
SUSE Linux Enterprise Server 15 SP4	sle-product-sles15-sp4-pool-x86_64
SUSE Linux Enterprise Server 15 SP3	sle-product-sles15-sp3-pool-x86_64
SUSE Linux Enterprise Server 15 SP2	sle-product-sles15-sp2-pool-x86_64
SUSE Linux Enterprise Server 15 SP1	sle-product-sles15-sp1-pool-x86_64
SUSE Linux Enterprise Server 12 SP5	sle-product-sles15-sp5-pool-x86_64

古い製品のチャンネル名を見つけるには、Uyuniサーバのコマンドプロンプトで `root` になり、`mgr-sync` コマンドを使用します:

```
mgr-sync list --help
```

次に、関心のある引数を指定します。たとえば、`channels`を指定します:

```
mgr-sync list channels [-c]
```

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

1. Uyuni サーバのコマンドプロンプトで `root` になり、`mgr-sync` コマンドを特定のチャンネルに対して実行します:

```
mgr-sync add channel <channel_label_1>
mgr-sync add channel <channel_label_2>
mgr-sync add channel <channel_label_n>
```

- 同期は自動的に開始されます。チャンネルを手動で同期する場合、次のコマンドを使用します。

```
mgr-sync sync --with-children <channel_name>
```

- 続行前に、同期が完了していることを確認してください。

クライアントツールを追加するには、コマンドプロンプトからこれらのチャンネルを追加します。

表 20. SUSE Linux Enterprise チャンネル - CLI

OS Version	Client Channel
SUSE Linux Enterprise Server 15 SP5	sles15-sp5-uyuni-client
SUSE Linux Enterprise Server 15 SP4	sles15-sp4-uyuni-client
SUSE Linux Enterprise Server 15 SP3	sles15-sp3-uyuni-client
SUSE Linux Enterprise Server 15 SP2	sles15-sp2-uyuni-client
SUSE Linux Enterprise Server 15 SP1	sles15-sp1-uyuni-client
SUSE Linux Enterprise Server 12 SP5	sles12-sp5-uyuni-client

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

- Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、spacewalk-common-channels コマンドを特定のチャンネルに対して実行します:

```
spacewalk-common-channels \
<base_channel_label> \
<child_channel_label_1> \
<child_channel_label_2> \
... <child_channel_label_n>
```

- 自動同期がオフになっている場合は、チャンネルを同期します。

```
spacewalk-repo-sync -p <base_channel_label>
```

- 続行前に、同期が完了していることを確認してください。

### 4.2.1.2. 同期ステータスの確認

プロシージャ: Web UIから同期の進捗状況を確認する

1. UyuniのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。
2. [同期] タブに移動し、[同期] をクリックし、[同期] をクリックします。

プロシージャ: コマンドプロンプトから同期の進捗状況を確認する

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、tailコマンドを使用して同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

2. それぞれの子チャンネルは、同期の進捗中にそれぞれのログを生成します。同期が完了したことを確認するには、ベースチャンネルと子チャンネルのログファイルをすべて確認する必要があります。



SUSE Linux Enterpriseチャンネルは非常に大きいことがあります。同期に数時間かかる場合があります。

### 4.2.1.3. GPGキーの管理

クライアントではGPGキーを使用して、ソフトウェアパッケージをインストールする前にパッケージ認証の確認が行われます。信頼されているソフトウェアのみクライアントにインストールできます。



クライアントのセキュリティにとってGPGキーを信頼することは重要です。必要かつ信頼できるキーを決定するのは管理者のタスクです。GPGキーが信頼されていない場合、ソフトウェアチャンネルは使用できないため、クライアントにチャンネルを割り当てるかどうかは、キーを信頼するかどうかによって決まります。

GPGキーの詳細については、**Client-configuration** > **Gpg-keys**を参照してください。



SUSE Linux Enterprise Server 15とSUSE Linux Enterprise Server 12クライアントの両方で同じGPGキーを使用します。正しいキーはsle12-gpg-pubkey-39db7c82.keyと呼ばれます。

### 4.2.1.4. クライアントの登録

クライアントを登録するには、ブートストラップリポジトリが必要です。デフォルトでは、ブートストラップリポジトリは自動的に作成され、すべての同期製品に対して毎日再生成されます。次のコマンドを使用して、コマンドプロンプトからブートストラップリポジトリを手動で作成できます。

```
mgr-create-bootstrap-repo
```

クライアントの登録については、[Client-configuration > Registration-overview](#)を参照してください。

## 4.2.2. SLE Microクライアントの登録

This section contains information about registering clients running SLE Micro operating systems 5.1, 5.2, 5.3, 5.4, and 5.5 on x86-64, arm64, and IBM Z (s390x) architectures.

SLE Microは、エッジコンピューティング向けに構築された、極めて信頼性が高く軽量なオペレーティングシステムです。SUSE Linux Enterpriseのエンタープライズレベルの強化されたセキュリティおよびコンプライアンスコンポーネントを活用し、最新の不变の開発者向けOSプラットフォームと統合します。

SLE Microはトランザクション更新を使用します。トランザクション更新はアトミックであり(すべての更新はすべての更新が成功した場合にのみ適用されます)、ロールバックをサポートします。システムが再起動されるまで変更はアクティブ化されないため、実行中のシステムには影響しません。この情報は、**システム** > **詳細** > **概要**サブタブに表示されます。

トランザクション更新と再起動の詳細については、<https://documentation.suse.com/sles/html/SLES-all/cha-transactional-updates.html>を参照してください。

### 4.2.2.1. ソフトウェアチャンネルの追加

SLE MicroクライアントをUyuniサーバに登録する前に、必要なソフトウェアチャンネルを追加して同期する必要があります。



次のセクションでは、x86\_64アーキテクチャに基づく説明が多いです。必要に応じて他のアーキテクチャに置き換えてください。

このプロシージャで必要な製品は次のとおりです。

表 21. SLE Micro製品 - WebUI

OSバージョン	製品名
SLE Micro 5.5 x86-64	SUSE Linux Enterprise Micro 5.5 x86_64
SLE Micro 5.5 arm64	SUSE Linux Enterprise Micro 5.5 aarch64
SLE Micro 5.5 s390x	SUSE Linux Enterprise Micro 5.5 s390x
SLE Micro 5.4 x86-64	SUSE Linux Enterprise Micro 5.4 x86_64
SLE Micro 5.4 arm64	SUSE Linux Enterprise Micro 5.4 aarch64
SLE Micro 5.4 s390x	SUSE Linux Enterprise Micro 5.4 s390x
SLE Micro 5.3 x86-64	SUSE Linux Enterprise Micro 5.3 x86_64
SLE Micro 5.3 arm64	SUSE Linux Enterprise Micro 5.3 aarch64
SLE Micro 5.3 s390x	SUSE Linux Enterprise Micro 5.3 s390x
SLE Micro 5.2 x86-64	SUSE Linux Enterprise Micro 5.2 x86_64
SLE Micro 5.2 arm64	SUSE Linux Enterprise Micro 5.2 aarch64

OSバージョン	製品名
SLE Micro 5.2 s390x	SUSE Linux Enterprise Micro 5.2 s390x
SLE Micro 5.1 x86-64	SUSE Linux Enterprise Micro 5.1 x86_64
SLE Micro 5.1 arm64	SUSE Linux Enterprise Micro 5.1 aarch64
SLE Micro 5.1 s390x	SUSE Linux Enterprise Micro 5.1 s390x

プロシージャ: ソフトウェアチャンネルの追加

1. UyuniのWeb UIで、**管理** › **セットアップウィザード** › **製品**に移動します。
2. 検索バーを使用してクライアントのオペレーティングシステムおよびアーキテクチャに適切な製品を探し、適切な製品にチェックを付けます。こうすることによって、すべての必須チャンネルに自動的にチェックが付きます。また、`include recommended`トグルがオンになっている場合、すべての推奨チャンネルにもチェックが付きます。矢印をクリックして関連製品の一覧を表示し、必要な追加製品にチェックが付いていることを確認します。
3. **[+製品の追加]**をクリックし、製品の同期が完了するまで待機します。

または、コマンドプロンプトでチャンネルを追加できます。このプロシージャで必要なチャンネルは次のとおりです。

表 22. SLE Micro製品 - CLI

OS Version	Base Channel	Updates Channel
SLE Micro 5.5 x86-64	sle-micro-5.5-pool-x86_64	sle-micro-5.5-updates-x86_64
SLE Micro 5.5 arm64	sle-micro-5.5-pool-arm64	sle-micro-5.5-updates-arm64
SLE Micro 5.5 IBM Z (s390x)	sle-micro-5.5-pool-s390x	sle-micro-5.5-updates-s390x
SLE Micro 5.4 x86-64	sle-micro-5.4-pool-x86_64	sle-micro-5.4-updates-x86_64
SLE Micro 5.4 arm64	sle-micro-5.4-pool-arm64	sle-micro-5.4-updates-arm64
SLE Micro 5.4 IBM Z (s390x)	sle-micro-5.4-pool-s390x	sle-micro-5.4-updates-s390x
SLE Micro 5.3 x86-64	sle-micro-5.3-pool-x86_64	sle-micro-5.3-updates-x86_64
SLE Micro 5.3 arm64	sle-micro-5.3-pool-arm64	sle-micro-5.3-updates-arm64
SLE Micro 5.3 IBM Z (s390x)	sle-micro-5.3-pool-s390x	sle-micro-5.3-updates-s390x
SLE Micro 5.2 x86-64	suse-microos-5.2-pool-x86_64	suse-microos-5.2-updates-x86_64
SLE Micro 5.2 arm64	suse-microos-5.2-pool-aarch64	suse-microos-5.2-updates-aarch64
SLE Micro 5.2 IBM Z (s390x)	suse-microos-5.2-pool-s390x	suse-microos-5.2-updates-s390x
SLE Micro 5.1 x86-64	suse-microos-5.1-pool-x86_64	suse-microos-5.1-updates-x86_64
SLE Micro 5.1 arm64	suse-microos-5.1-pool-aarch64	suse-microos-5.1-updates-aarch64
SLE Micro 5.1 IBM Z (s390x)	suse-microos-5.1-pool-s390x	suse-microos-5.1-updates-s390x

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

1. Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、 `mgr-sync` コマンドを特定のチャンネルに対して実行します:

```
mgr-sync add channel <channel_label_1>
mgr-sync add channel <channel_label_2>
mgr-sync add channel <channel_label_n>
```

2. 同期は自動的に開始されます。チャンネルを手動で同期する場合、次のコマンドを使用します。

```
mgr-sync sync --with-children <channel_name>
```

3. 続行前に、同期が完了していることを確認してください。

クライアントツールを追加するには、コマンドプロンプトからこれらのチャンネルを追加します。

表 23. SLE Microチャンネル - CLI

OS Version	Client Channel
SLE Micro 5.4	sle-micro-5.4-uyuni-client
SLE Micro 5.3	suse-micro-5.3-uyuni-client
SLE Micro 5.2	suse-microos-5.2-uyuni-client
SLE Micro 5.1	sle-microos-5.1-uyuni-client

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

1. Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、 `spacewalk-common-channels` コマンドを特定のチャンネルに対して実行します:

```
spacewalk-common-channels \
<base_channel_label> \
<child_channel_label_1> \
<child_channel_label_2> \
... <child_channel_label_n>
```

2. **自動同期**がオフになっている場合は、チャンネルを同期します。

```
spacewalk-repo-sync -p <base_channel_label>
```

3. 続行前に、同期が完了していることを確認してください。

### 4.2.2.2. 同期ステータスの確認

プロシージャ: Web UIから同期の進捗状況を確認する

1. UyuniのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。
2. [同期] タブに移動し、[同期] をクリックし、[同期] をクリックします。

プロシージャ: コマンドプロンプトから同期の進捗状況を確認する

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、tailコマンドを使用して同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

2. それぞれの子チャンネルは、同期の進捗中にそれぞれのログを生成します。同期が完了したことを確認するには、ベースチャンネルと子チャンネルのログファイルをすべて確認する必要があります。

### 4.2.2.3. クライアントの登録



SLE Micro} clients require a reboot after registering.

Following the bootstrapping process, automatic booting is disabled on SLE Micro clients. This change was implemented due to intermittent automatic reboots, which could occur before Salt could relay the results of applying the bootstrap salt state.

Although a reboot is automatically scheduled after registration is completed, it is respecting the default reboot manager maintenance window. This window may be several hours after the client is registered. It is advisable to manually reboot the client after the registration script finishes, to speed up the registration and to see the system appear in the system list.

クライアントを登録するには、ブートストラップリポジトリが必要です。デフォルトでは、ブートストラップリポジトリは自動的に作成され、すべての同期製品に対して毎日再生成されます。次のコマンドを使用して、コマンドプロンプトからブートストラップリポジトリを手動で作成できます。

```
mgr-create-bootstrap-repo
```

クライアントの登録については、**Client-configuration** > **Registration-overview**を参照してください。

SLE Microシステムでブートストラップスクリプトを使用する場合は、スクリプトの証明書セクションに次のコンテンツがあることを確認します。

```
ORG_CA_CERT=RHN-ORG-TRUSTED-SSL-CERT
ORG_CA_CERT_IS_RPM_YN=0
```

ブートストラップスクリプトを直接編集して設定を追加するか、次のパラメータを使用してブートストラップスクリプトを作成します。

```
mgr-bootstrap --script=bootstrap-sle-micro.sh \
--ssl-cert=/srv/www/htdocs/pub/RHN-ORG-TRUSTED-SSL-CERT
```

#### 4.2.2.4. SLE Microの再起動

SLE Microはトランザクションシステムです。トランザクション更新は通常、いくつかの再起動方法をサポートしています。Uyuniで管理されるシステムの再起動には、`systemd`を使用することをお勧めします。他の方法を使用すると、望ましくない動作が発生する可能性があります。

Uyuniでトランザクションシステムをブートストラップする場合、`systemd`が再起動方法(`REBOOT_METHOD`)として設定されます(システムがデフォルト設定の場合)。このような設定により、Uyuniが再起動アクションを制御でき、必要に応じて再起動をすぐに実行したり、Uyuniでスケジュールしたりできます。

##### 4.2.2.4.1. 背景情報

デフォルトでは、クライアントのインストール中の再起動方法は`auto`に設定されています。`auto`ブート方法では、サービスが実行されている場合、`rebootmgrd`を使用して、設定されたポリシーに従ってシステムを再起動します。ポリシーにより、すぐに再起動することも、メンテナンスウィンドウ中に再起動することもできます。詳細については、`rebootmgrd(8)`のマニュアルページを参照してください。それ以外の場合で`rebootmgrd`が実行されていない場合、Uyuniは`systemctl reboot`を呼び出します。



`systemd`とは異なる方法を使用すると、望ましくない動作が発生する可能性があります。

### 4.3. openSUSEクライアントの登録

You can register openSUSE and openSUSE Leap Micro clients to your Uyuni Server. The method and details varies depending on the operating system of the client.

始める前に、クライアントでUyuniサーバと日時が正しく同期していることを確認してください。

アクティベーションキーを作成済みである必要があります。アクティベーションキーの作成の詳細については、[Client-configuration > Activation-keys](#)を参照してください。



Uyuniサーバをこのサーバ自身に登録しないでください。Uyuniサーバは個別に管理するか、別のUyuniサーバを使用して管理する必要があります。複数のサーバを使用する方法の詳細については、[Specialized-guides > Large-deployments](#)を参照してください。

## 4.3.1. openSUSE Leapクライアントの登録

This section contains information about registering clients running openSUSE operating systems. Uyuni supports openSUSE Leap 15 clients using Salt.

ブートストラップは、リポジトリの設定やプロファイルの更新の実行など、openSUSEクライアントの起動および初期状態の実行のためにサポートされています。

### 4.3.1.1. ソフトウェアチャンネルの追加

openSUSEクライアントをUyuniサーバに登録する前に、必要なソフトウェアチャンネルを追加して同期する必要があります。

現在サポートされているアーキテクチャは、「x86\_64」と「aarch64」です。サポートされている製品およびアーキテクチャの完全な一覧については、[Client-configuration > Supported-features](#)を参照してください。



次のセクションでは、x86\_64アーキテクチャに基づく説明が多いです。必要に応じて他のアーキテクチャに置き換えてください。

たとえば、「x86\_64」アーキテクチャを使用する場合は、次の製品が必要です。

表 24. openSUSEチャンネル - CLI

OS Version	openSUSE Leap 15.5	openSUSE Leap 15.4
Base Channel	opensuse_leap15_5	opensuse_leap15_4
Client Channel	opensuse_leap15_5-uyuni-client	opensuse_leap15_4-uyuni-client
Updates Channel	opensuse_leap15_5-updates	opensuse_leap15_4-updates
Non-OSS Channel	opensuse_leap15_5-non-oss	opensuse_leap15_4-non-oss
Non-OSS Updates Channel	opensuse_leap15_5-non-oss-updates	opensuse_leap15_4-non-oss-updates
Backports Updates Channel	opensuse_leap15_5-backports-updates	opensuse_leap15_4-backports-updates
SLE Updates Channel	opensuse_leap15_5-sle-updates	opensuse_leap15_4-sle-updates

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

1. Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、`spacewalk-common-channels` コマンドを特定のチャンネルに対して実行します:

```
spacewalk-common-channels \
<base_channel_label> \
<child_channel_label_1> \
<child_channel_label_2> \
... <child_channel_label_n>
```

- 自動同期がオフになっている場合は、チャンネルを同期します。

```
spacewalk-repo-sync -p <base_channel_label>
```

- 続行前に、同期が完了していることを確認してください。

### 4.3.1.2. 同期ステータスの確認

プロシージャ: Web UIから同期の進捗状況を確認する

- UyuniのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。
- [...] タブに移動し、 [...] をクリックし、 [...] をクリックします。

プロシージャ: コマンドプロンプトから同期の進捗状況を確認する

- Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、tailコマンドを使用して同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

- それぞれの子チャンネルは、同期の進捗中にそれぞれのログを生成します。同期が完了したことを確認するには、ベースチャンネルと子チャンネルのログファイルをすべて確認する必要があります。



openSUSEチャンネルは非常に大きいことがあります。同期に数時間かかる場合があります。

### 4.3.1.3. GPGキーの管理

クライアントではGPGキーを使用して、ソフトウェアパッケージをインストールする前にパッケージ認証の確認が行われます。信頼されているソフトウェアのみクライアントにインストールできます。



クライアントのセキュリティにとってGPGキーを信頼することは重要です。必要かつ信頼できるキーを決定するのは管理者のタスクです。GPGキーが信頼されていない場合、ソフトウェアチャンネルは使用できないため、クライアントにチャンネルを割り当てるかどうかは、キーを信頼するかどうかによって決まります。

GPGキーの詳細については、**Client-configuration** > **Gpg-keys**を参照してください。

### 4.3.1.4. クライアントの登録

クライアントを登録するには、ブートストラップリポジトリが必要です。デフォルトでは、ブートストラップリポジトリは自動的に作成され、すべての同期製品に対して毎日再生成されます。次のコマンドを使用して、コマンドプロンプトからブートストラップリポジトリを手動で作成できます。

```
mgr-create-bootstrap-repo
```

クライアントの登録については、[Client-configuration > Registration-overview](#)を参照してください。

### 4.3.2. Registering openSUSE Leap Micro Clients

This section contains information about registering clients running openSUSE Leap Micro operating systems on x86-64 and aarch64 architectures.

The openSUSE Leap Micro is an ultra-reliable, lightweight operating system purpose built for edge computing. It leverages the enterprise hardened security and compliance components of SUSE Linux Enterprise and merges them with a modern, immutable, developer-friendly OS platform.

The openSUSE Leap Micro uses transactional updates. Transactional updates are atomic (all updates are applied only if all updates succeed) and support rollbacks. They do not affect the running system because no changes are activated until the system is rebooted. This information is displayed in the **Systems > Details > Overview** subtab.

トランザクション更新と再起動の詳細については、<https://documentation.suse.com/sles/html/SLES-all/cha-transactional-updates.html>を参照してください。

表 25. openSUSEチャンネル - CLI

OS Version	openSUSE Leap Micro 5.5	openSUSE Leap Micro 5.4	openSUSE Leap Micro 5.3
Base Channel	opensuse_micro5_5	opensuse_micro5_4	opensuse_micro5_3
Client Channel	opensuse_micro5_5-uyuni-client	opensuse_micro5_4-uyuni-client	opensuse_micro5_3-uyuni-client
SLE Updates Channel	opensuse_micro5_5-sle-updates	opensuse_micro5_4-sle-updates	opensuse_micro5_3-sle-updates

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

1. Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、 `spacewalk-common-channels` コマンドを特定のチャンネルに対して実行します:

```
spacewalk-common-channels \
<base_channel_label> \
<child_channel_label_1> \
<child_channel_label_2> \
... <child_channel_label_n>
```

2. **自動同期**がオフになっている場合は、チャンネルを同期します。

```
spacewalk-repo-sync -p <base_channel_label>
```

3. 続行前に、同期が完了していることを確認してください。

### 4.3.2.1. 同期ステータスの確認

プロシージャ: Web UIから同期の進捗状況を確認する

1. UyuniのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。
2. [-----] タブに移動し、[----] をクリックし、[-----] をクリックします。

プロシージャ: コマンドプロンプトから同期の進捗状況を確認する

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、tailコマンドを使用して同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

2. それぞれの子チャンネルは、同期の進捗中にそれぞれのログを生成します。同期が完了したことを確認するには、ベースチャンネルと子チャンネルのログファイルをすべて確認する必要があります。



openSUSE Leap Micro channels can be very large. Synchronization can sometimes take several hours.

### 4.3.2.2. クライアントの登録



openSUSE Leap Micro clients require reboot after registering.

Following the bootstrapping process, automatic booting is disabled on openSUSE Leap Micro. This change was implemented due to intermittent automatic reboots, which could occur before Salt could relay the results of applying the bootstrap salt state.

Reboot is automatically scheduled after registration is completed, but it is respecting the default reboot manager maintenance window. This window may be several hours after the client is registered. To speed up openSUSE Leap Micro registration, manually reboot the client after the registration script finishes.

クライアントを登録するには、ブートストラップリポジトリが必要です。デフォルトでは、ブートストラップリポジトリは自動的に作成され、すべての同期製品に対して毎日再生成されます。次のコマンドを使用して、コマンドプロンプトからブートストラップリポジトリを手動で作成できます。

```
mgr-create-bootstrap-repo
```

クライアントの登録については、[Client-configuration > Registration-overview](#)を参照してください。

## 4.4. Alibaba Cloud Linuxクライアントの登録

Alibaba Cloud LinuxクライアントをUyuniサーバに登録できます。そのメソッドおよび詳細は、クライアントのオペレーティングシステムによって異なります。

始める前に、クライアントでUyuniサーバと日時が正しく同期していることを確認してください。

アクティベーションキーを作成済みである必要もあります。アクティベーションキーの作成の詳細については、[Client-configuration > Activation-keys](#)を参照してください。

### 4.4.1. Alibaba Cloud Linuxクライアントの登録

This section contains information about registering clients running Alibaba Cloud Linux operating systems.



一部のAlibaba Cloud Linux 2インスタンスでは、正常に登録するために2回の試行が必要になります。

#### 4.4.1.1. ソフトウェアチャンネルの追加

Alibaba Cloud LinuxクライアントをUyuniサーバに登録する前に、必要なソフトウェアチャンネルを追加して同期する必要があります。



次のセクションでは、x86\_64アーキテクチャに基づく説明が多いです。必要に応じて他のアーキテクチャに置き換えてください。

このプロシージャで必要なチャンネルは次のとおりです。

表 26. Alibaba Cloud Linuxチャンネル - CLI

OSバージョン	コアチャンネル	更新チャンネル	クライアントチャンネル
Alibaba Cloud Linux 2	alibaba-2	alibaba-2-updates	alibaba-2-uyuni-client

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

1. Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、spacewalk-common-channels コマンドを特定のチャンネルに対して実行します:

```
spacewalk-common-channels \
<base_channel_label> \
<child_channel_label_1> \
<child_channel_label_2> \
... <child_channel_label_n>
```

2. 自動同期がオフになっている場合は、チャンネルを同期します。

```
spacewalk-repo-sync -p <base_channel_label>
```

3. 続行前に、同期が完了していることを確認してください。



spacewalk-common-channelsによって提供されるクライアントツールのチャンネルの提供元はUyuniです。SUSEではありません。

#### 4.4.1.2. 同期ステータスの確認

プロシージャ: Web UIから同期の進捗状況を確認する

1. UyuniのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。
2. [同期] タブに移動し、[同期] をクリックし、[同期] をクリックします。

プロシージャ: コマンドプロンプトから同期の進捗状況を確認する

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、tailコマンドを使用して同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

2. それぞれの子チャンネルは、同期の進捗中にそれぞれのログを生成します。同期が完了したことを確認するには、ベースチャンネルと子チャンネルのログファイルをすべて確認する必要があります。

#### 4.4.1.3. アクティベーションキーの作成

Alibaba Cloud Linuxチャンネルと関連付けられているアクティベーションキーを作成する必要があります。

アクティベーションキーの詳細については、**Client-configuration** > **Activation-keys**を参照してください。

#### 4.4.1.4. クライアントの登録

クライアントを登録するには、ブートストラップリポジトリが必要です。デフォルトでは、ブートストラップリポジトリは自動的に作成され、すべての同期製品に対して毎日再生成されます。次のコマンドを使用して、コマンドプロンプトからブートストラップリポジトリを手動で作成できます。

```
mgr-create-bootstrap-repo
```

クライアントの登録については、[Client-configuration > Registration-overview](#)を参照してください。

Some Alibaba Cloud Linux 2 instances will fail to register on the first try. This is due to a known bug in the Alibaba Cloud Linux 2 image.

「python-urlgrabber3」パッケージは、Python pipパッケージとRPMパッケージの両方で提供されており、最初の登録試行時に競合が発生する可能性があります。

インスタンスが影響を受けるいずれかのイメージバージョンに基づいている場合、クライアントは2回目の登録試行で正しく登録されます。

## 4.5. AlmaLinuxクライアントの登録

AlmaLinuxクライアントをUyuniサーバに登録できます。そのメソッドおよび詳細は、クライアントのオペレーティングシステムによって異なります。

始める前に、クライアントでUyuniサーバと日時が正しく同期していることを確認してください。

You must also have created an activation key.

- For more information about creating activation keys, see [Client-configuration > Activation-keys](#).
- For more information about migrating AlmaLinux to SUSE Liberty Linux, see [client-configuration:clients-sleses.pdf](#).

### 4.5.1. AlmaLinuxクライアントの登録

This section contains information about registering clients running AlmaLinux operating systems.



AWSで作成するとき、AlmaLinuxインスタンスには、/etc/machine-idで常に同じmachine-id IDが割り当てられます。インスタンスを作成した後に、必ずmachine-idを再生成してください。 詳細については、[Administration > Troubleshooting](#)を参照してください。

#### 4.5.1.1. ソフトウェアチャンネルの追加



AlmaLinuxクライアントのUyuniへの登録は、[http://www.yum.repolab.yandex.ru](#)ポリシーで[http://www.yum.repolab.yandex.ru](#)されるデフォルトのSELinux設定でテストされます。 SELinuxを無効にしてAlmaLinuxクライアントをUyuniに登録する必要があります。

AlmaLinuxクライアントをUyuniサーバに登録する前に、必要なソフトウェアチャンネルを追加して同期する必要があります。

現在サポートされているアーキテクチャは、「x86\_64」と「aarch64」です。バージョン9で

は、ppc64leとs390xも追加でサポートされます。 サポートされている製品およびアーキテクチャの完全な一覧については、[Client-configuration > Supported-features](#)を参照してください。



次のセクションでは、x86\_64アーキテクチャに基づく説明が多いです。 必要に応じて他のアーキテクチャに置き換えてください。

このプロシージャで必要なチャンネルは次のとおりです。

表 27. AlmaLinux チャンネル - CLI

OSバージョン	ベースチャンネル	クライアントチャンネル	AppStreamチャンネル
AlmaLinux 9	almalinux9	almalinux9-uyuni-client	almalinux9-appstream
AlmaLinux 8	almalinux8	almalinux8-uyuni-client	almalinux8-appstream

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

1. Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、spacewalk-common-channels コマンドを特定のチャンネルに対して実行します。このとき、正しいアーキテクチャを指定してください:

```
spacewalk-common-channels \
-a <architecture> \
<base_channel_name> \
<child_channel_name_1> \
<child_channel_name_2> \
... <child_channel_name_n>
```

2. **自動同期**がオフになっている場合は、チャンネルを同期します。

```
spacewalk-repo-sync -p <base_channel_label>-<architecture>
```

3. 続行前に、同期が完了していることを確認してください。



spacewalk-common-channelsによって提供されるクライアントツールのチャンネルの提供元はUyuniです。SUSEではありません。



AlmaLinux 9およびAlmaLinux 8クライアントでは、ベースチャンネルとAppStreamチャンネルの両方を追加します。両方のチャンネルのパッケージが必要です。両方のチャンネルを追加しないと、パッケージ不足のためブートストラップリポジトリを作成できません。

モジュラーチャンネルを使用している場合は、AlmaLinux 8クライアントでPython 3.6モジュールストリームを有効にする必要があります。 Python 3.6を提供しない場合、spacecmdパッケージのインストールは失敗します。



上流のチャンネルとUyuniチャンネルの間のAppStreamチャンネルで利用できるパッケージ数に不一致が発生する場合があります。また、同時に別の場所で追加したチャンネルを比較すると、数値が異なる場合もあります。AlmaLinuxでリポジトリを管理する方法が原因です。AlmaLinuxでは新しいバージョンがリリースされると古いバージョンのパッケージが削除されますが、Uyuniでは経過年数に関係なくすべてのバージョンが保持されます。



AppStreamリポジトリにはモジュールパッケージが用意されています。UyuniのWeb UIに正しくないパッケージ情報が表示されます。Web UIまたはAPIを使用してモジュールリポジトリから直接インストールまたはアップグレードするようなパッケージ操作は実行できません。

Alternatively, you can use Salt states to manage modular packages, or use the `dnf` command on the client. For more information about CLM, see [Administration > Content-lifecycle](#).

#### 4.5.1.2. 同期ステータスの確認

プロシージャ: Web UIから同期の進捗状況を確認する

1. UyuniのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。
2. [同期] タブに移動し、[同期] をクリックし、[同期] をクリックします。

プロシージャ: コマンドプロンプトから同期の進捗状況を確認する

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、`tail`コマンドを使用して同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

2. それぞれの子チャンネルは、同期の進捗中にそれぞれのログを生成します。同期が完了したことを確認するには、ベースチャンネルと子チャンネルのログファイルをすべて確認する必要があります。

#### 4.5.1.3. アクティベーションキーの作成

AlmaLinuxチャンネルと関連付けられているアクティベーションキーを作成する必要があります。

アクティベーションキーの詳細については、[Client-configuration > Activation-keys](#)を参照してください。

#### 4.5.1.4. GPGキーの管理

クライアントではGPGキーを使用して、ソフトウェアパッケージをインストールする前にパッケージ認証の確認が行われます。信頼されているソフトウェアのみクライアントにインストールできます。



Trusting a GPG key is important for security on clients. It is the task of the administrator to decide which keys are needed and can be trusted. Because a software channel cannot be used when the GPG key is not trusted, the decision of assigning a channel to a client depends on the decision of trusting the key.

GPGキーの詳細については、[Client-configuration › Gpg-keys](#)を参照してください。

#### 4.5.1.5. クライアントの登録

クライアントを登録するには、ブートストラップリポジトリが必要です。デフォルトでは、ブートストラップリポジトリは自動的に作成され、すべての同期製品に対して毎日再生成されます。次のコマンドを使用して、コマンドプロンプトからブートストラップリポジトリを作成できます。

```
mgr-create-bootstrap-repo
```

クライアントの登録については、[Client-configuration › Registration-overview](#)を参照してください。

#### 4.5.1.6. エラータの管理

AlmaLinuxクライアントを更新するとき、パッケージには更新に関するメタデータが含まれています。

### 4.6. Amazon Linuxクライアントの登録

Amazon LinuxクライアントをUyuniサーバに登録できます。そのメソッドおよび詳細は、クライアントのオペレーティングシステムによって異なります。

始める前に、クライアントでUyuniサーバと日時が正しく同期していることを確認してください。

アクティベーションキーを作成済みである必要があります。アクティベーションキーの作成の詳細については、[Client-configuration › Activation-keys](#)を参照してください。

#### 4.6.1. Amazon Linuxクライアントの登録

This section contains information about registering clients running Amazon Linux operating systems.



When created at AWS, Amazon Linux 2 instances always have the same machine-id id at /etc/machine-id. If you are creating Amazon Linux 2 instances, make sure you regenerate the machine-id after the instances are created. For more information, see [Administration › Troubleshooting](#).

Amazon Linux 2023 is not affected by this.

### 4.6.1.1. ソフトウェアチャンネルの追加

Amazon LinuxクライアントをUyuniサーバに登録する前に、必要なソフトウェアチャンネルを追加して同期する必要があります。

現在サポートされているアーキテクチャは、「x86\_64」と「aarch64」です。サポートされている製品およびアーキテクチャの完全な一覧については、[Client-configuration > Supported-features](#)を参照してください。



次のセクションでは、x86\_64アーキテクチャに基づく説明が多いです。必要に応じて他のアーキテクチャに置き換えてください。

このプロシージャで必要なチャンネルは次のとおりです。

表 28. Amazon Linux Channels - CLI

OS Version	Base Channel	Client Channel
Amazon Linux 2023	amazonlinux2023	amazonlinux2023-uyuni-client
Amazon Linux 2	amazonlinux2-core	amazonlinux2-uyuni-client



For Amazon Linux 2, make sure you also add and synchronize amazonlinux2-extra-docker channel if you plan to use Docker at your Amazon Linux instances.



For Amazon Linux 2023, make sure you also add and synchronize amazonlinux2023-kernel-livepatch channel if you plan to use Kernel Live patches at your Amazon Linux instances.

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

1. Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、spacewalk-common-channels コマンドを特定のチャンネルに対して実行します:

```
spacewalk-common-channels \
<base_channel_label> \
<child_channel_label_1> \
<child_channel_label_2> \
... <child_channel_label_n>
```

2. **自動同期**がオフになっている場合は、チャンネルを同期します。

```
spacewalk-repo-sync -p <base_channel_label>
```

3. 続行前に、同期が完了していることを確認してください。



spacewalk-common-channelsによって提供されるクライアントツールのチャンネルの提供元はUyuniです。SUSEではありません。

### 4.6.1.2. 同期ステータスの確認

プロシージャ: Web UIから同期の進捗状況を確認する

1. UyuniのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。
2. [同期] タブに移動し、[同期] をクリックし、[同期] をクリックします。

プロシージャ: コマンドプロンプトから同期の進捗状況を確認する

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、tailコマンドを使用して同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

2. それぞれの子チャンネルは、同期の進捗中にそれぞれのログを生成します。同期が完了したことを確認するには、ベースチャンネルと子チャンネルのログファイルをすべて確認する必要があります。

### 4.6.1.3. アクティベーションキーの作成

Amazon Linuxチャンネルと関連付けられているアクティベーションキーを作成する必要があります。

アクティベーションキーの詳細については、**Client-configuration** > **Activation-keys**を参照してください。

### 4.6.1.4. GPGキーの管理

クライアントではGPGキーを使用して、ソフトウェアパッケージをインストールする前にパッケージ認証の確認が行われます。信頼されているソフトウェアのみクライアントにインストールできます。



クライアントのセキュリティにとってGPGキーを信頼することは重要です。必要かつ信頼できるキーを決定するのは管理者のタスクです。GPGキーが信頼されていない場合、ソフトウェアチャンネルは使用できないため、クライアントにチャンネルを割り当てるかどうかは、キーを信頼するかどうかによって決まります。

GPGキーの詳細については、**Client-configuration** > **Gpg-keys**を参照してください。

### 4.6.1.5. クライアントの登録

クライアントを登録するには、ブートストラップリポジトリが必要です。デフォルトでは、ブートストラップリポジトリは自動的に作成され、すべての同期製品に対して毎日再生成されます。次のコマンドを使用して、コマンドプロンプトからブートストラップリポジトリを手動で作成できます。

```
mgr-create-bootstrap-repo
```

クライアントの登録については、[Client-configuration › Registration-overview](#)を参照してください。

## 4.7. CentOSクライアントの登録

CentOSクライアントをUyuniサーバに登録できます。そのメソッドおよび詳細は、クライアントのオペレーティングシステムによって異なります。

始める前に、クライアントでUyuniサーバと日時が正しく同期していることを確認してください。

You must also have created an activation key.

- For more information about creating activation keys, see [Client-configuration › Activation-keys](#).
- For more information about migrating CentOS to SUSE Liberty Linux, see [client-configuration:clients-sleses.pdf](#).

### 4.7.1. CentOSクライアントの登録

This section contains information about registering clients running CentOS operating systems.



You are responsible for arranging access to CentOS base media repositories and CentOS installation media, as well as connecting Uyuni Server to the CentOS content delivery network.



CentOSクライアントのUyuniへの登録は、[CentOS SELinux Policy](#)で制御されるデフォルトのSELinux設定でテストされます。SELinuxを無効にしてCentOSクライアントをUyuniに登録する必要があります。

#### 4.7.1.1. ソフトウェアチャンネルの追加

CentOSクライアントをUyuniサーバに登録する前に、必要なソフトウェアチャンネルを追加して同期する必要があります。

現在サポートされているアーキテクチャは、「x86\_64」と「aarch64」です。サポートされている製品およびアーキテクチャの完全な一覧については、[Client-configuration › Supported-features](#)を参照してください。



次のセクションでは、x86\_64アーキテクチャに基づく説明が多いです。必要に応じて他のアーキテクチャに置き換えてください。

このプロシージャで必要なチャンネルは次のとおりです。

表 29. CentOSチャンネル - CLI

OSバージョン	ベースチャンネル	クライアントチャンネル	更新/Appstreamチャンネル
CentOS 7	centos7	centos7-uyuni-client	centos7-updates

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

- Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、 `spacewalk-common-channels` コマンドを特定のチャンネルに対して実行します。このとき、正しいアーキテクチャを指定してください:

```
spacewalk-common-channels \
-a <architecture> \
<base_channel_name> \
<child_channel_name_1> \
<child_channel_name_2> \
... <child_channel_name_n>
```

- 自動同期がオフになっている場合は、チャンネルを同期します。

```
spacewalk-repo-sync -p <base_channel_label>-<architecture>
```

- 続行前に、同期が完了していることを確認してください。



spacewalk-common-channelsによって提供されるクライアントツールのチャンネルの提供元はUyuniです。SUSEではありません。

モジュラーチャンネルを使用している場合は、クライアントでPython3.6モジュールストリームを有効にする必要があります。 Python 3.6を提供しない場合、spacecmd/パッケージのインストールは失敗します。



上流のチャンネルとUyuniチャンネルの間のAppStreamチャンネルで利用できるパッケージ数に不一致が発生する場合があります。 また、同時に別の場所で追加したチャンネルを比較すると、数値が異なる場合もあります。 CentOSでリポジトリを管理する方法が原因です。 CentOSでは新しいバージョンがリリースされると古いバージョンのパッケージが削除されますが、Uyuniでは経過年数に関係なくすべてのバージョンが保持されます。



AppStreamリポジトリにはモジュールパッケージが用意されています。 Uyuni のWeb UIに正しくないパッケージ情報が表示されます。 Web UIまたはAPIを使用してモジュールリポジトリから直接インストールまたはアップグレードするようなパッケージ操作は実行できません。

Alternatively, you can use Salt states to manage modular packages, or use the `dnf` command on the client. For more information about CLM, see [Administration > Content-lifecycle](#).

### 4.7.1.2. 同期ステータスの確認

プロシージャ: Web UIから同期の進捗状況を確認する

1. UyuniのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。
2. [同期] タブに移動し、[同期] をクリックし、[同期] をクリックします。

プロシージャ: コマンドプロンプトから同期の進捗状況を確認する

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、tailコマンドを使用して同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

2. それぞれの子チャンネルは、同期の進捗中にそれぞれのログを生成します。同期が完了したことを確認するには、ベースチャンネルと子チャンネルのログファイルをすべて確認する必要があります。

### 4.7.1.3. アクティベーションキーの作成

CentOSチャンネルと関連付けられているアクティベーションキーを作成する必要があります。

アクティベーションキーの詳細については、**Client-configuration** > **Activation-keys**を参照してください。

### 4.7.1.4. GPGキーの管理

クライアントではGPGキーを使用して、ソフトウェアパッケージをインストールする前にパッケージ認証の確認が行われます。信頼されているソフトウェアのみクライアントにインストールできます。



クライアントのセキュリティにとってGPGキーを信頼することは重要です。必要かつ信頼できるキーを決定するのは管理者のタスクです。GPGキーが信頼されていない場合、ソフトウェアチャンネルは使用できないため、クライアントにチャンネルを割り当てるかどうかは、キーを信頼するかどうかによって決まります。

GPGキーの詳細については、**Client-configuration** > **Gpg-keys**を参照してください。

### 4.7.1.5. クライアントの登録

クライアントを登録するには、ブートストラップリポジトリが必要です。デフォルトでは、ブートストラップリポジトリは自動的に作成され、すべての同期製品に対して毎日再生成されます。次のコマンドを使用して、コマンドプロンプトからブートストラップリポジトリを手動で作成できます。

```
mgr-create-bootstrap-repo
```

クライアントの登録については、**Client-configuration** > **Registration-overview**を参照してください。

### 4.7.1.6. エラータの管理

CentOSクライアントを更新するとき、パッケージには更新に関するメタデータは含まれていません。 サードパーティのエラータサービスを使用してこの情報を取得できます。



CEFSの作成者は、パッチまたはエラータを、利便性向上を目指して努力ベースで提供していますが、これが正確であることや最新であることを保証していません。つまり、パッチ日が正しくない場合があります。また、発行されたデータが1カ月以上遅れて示されたことが少なくとも1回ありました。 このような場合の情報については、<https://github.com/stevemeier/cefs/issues/28#issuecomment-656579382>および<https://github.com/stevemeier/cefs/issues/28#issuecomment-656573607>を参照してください。

パッチデータに問題または遅れがあると、信頼できないパッチ情報がUyuniサーバにインポートされる場合があります。その結果、レポート、監査、CVEの更新、またはその他のパッチ関連の情報も誤りになります。セキュリティ関連の要件や証明書の条件に応じて、パッチデータを独立して確認する方法や、異なるオペレーティングシステムを選択する方法など、このサービスを使用する方法の代替方法を検討してください。

プロシージャ: エラータサービスのインストール

1. Uyuniサーバでコマンドプロンプトからrootとしてsle-module-development-toolsモジュールを追加します。

```
SUSEConnect --product sle-module-development-tools/15.2/x86_64
```

2. エラータサービスの依存関係をインストールします。

```
zypper in perl-Text-Unidecode
```

3. /etc/rhn/rhn.confで次の行を追加または編集します。

```
java.allow_adding_patches_via_api = centos7-x86_64-updates,centos7-x86_64,centos7-x86_64-extras
```

4. Tomcatを再起動します。

```
systemctl restart tomcat
```

5. エラータスクリプト用のファイルを作成します。

```
touch /usr/local/bin/cent-errata.sh
```

6. 新しいファイルを編集してこのスクリプトを含め、必要に応じてリポジトリの詳細を編集します。このスクリプトは、外部のエラータサービスからエラータの詳細をフェッチして展開し、詳細を発行します。

```
#!/bin/bash
mkdir -p /usr/local/centos
cd /usr/local/centos
rm *.xml
wget -c http://cefs.steve-meier.de/errata.latest.xml
wget -c https://www.redhat.com/security/data/oval/v2/RHEL7/rhel-
7.oval.xml.bz2
bzip2 -d rhel-7.oval.xml.bz2
wget -c http://cefs.steve-meier.de/errata-import.tar
tar xvf errata-import.tar
chmod +x /usr/local/centos/errata-import.pl
export SPACEWALK_USER='<adminname>' ; export
SPACEWALK_PASS='<password>'
/usr/local/centos/errata-import.pl --server '<servername>' \
--errata /usr/local/centos/errata.latest.xml \
--include-channels=centos7-x86_64-updates,centos7-x86_64,centos7-
-x86_64-extras \
--publish --rhsa-oval /usr/local/centos/rhel-7.oval.xml
```

7. スクリプトを毎日実行するようcronジョブを設定します。

```
ln -s /usr/local/bin/cent-errata.sh /etc/cron.daily
```

このツールの詳細については、<https://cefs.steve-meier.de/>を参照してください。

## 4.8. Debianクライアントの登録

DebianクライアントをUyuniサーバに登録できます。そのメソッドおよび詳細は、クライアントのオペレーティングシステムによって異なります。

始める前に、クライアントでUyuniサーバと日時が正しく同期していることを確認してください。

アクティベーションキーを作成済みである必要があります。アクティベーションキーの作成の詳細については、**Client-configuration > Activation-keys**を参照してください。

## 4.8.1. Debianクライアントの登録

This section contains information about registering clients running Debian operating systems.

ブートストラップは、初期状態の実行およびプロファイルの更新のためにDebianクライアントで使用できます。

### 4.8.1.1. 登録の準備

DebianクライアントをUyuniサーバに登録するには、その前に準備が必要です。

- DNSが正しく設定されていることを確認し、クライアントのエントリを提供します。 または、適切なエントリを使用して、Uyuniサーバとクライアントの両方で/etc/hostsファイルを設定できます。
- クライアントは、登録する前にUyuniサーバと日時が同期されている必要があります。

### 4.8.1.2. ソフトウェアチャンネルの追加

DebianクライアントをUyuniサーバに登録する前に、必要なソフトウェアチャンネルを追加して同期する必要があります。



次のセクションでは、x86\_64アーキテクチャに基づく説明が多いです。 必要に応じて他のアーキテクチャに置き換えてください。

このプロシージャで必要なチャンネルは次のとおりです。

表 30. Debianチャンネル - CLI

OS Version	Base Channel	Client Channel	Updates Channel	Security Channel
Debian 12	debian-12-pool-amd64-uyuni	debian-12-amd64-uyuni-client	debian-12-amd64-main-updates-uyuni	debian-12-amd64-main-security-uyuni
Debian 11	debian-11-pool-amd64-uyuni	debian-11-amd64-uyuni-client	debian-11-amd64-main-updates-uyuni	debian-11-amd64-main-security-uyuni
Debian 10	debian-10-pool-amd64-uyuni	debian-10-amd64-uyuni-client	debian-10-amd64-main-updates-uyuni	debian-10-amd64-main-security-uyuni

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

1. Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、spacewalk-common-channels コマンドを特定のチャンネルに対して実行します:

```
spacewalk-common-channels \
<base_channel_label> \
<child_channel_label_1> \
<child_channel_label_2> \
... <child_channel_label_n>
```

2. 自動同期がオフになっている場合は、チャンネルを同期します。

```
spacewalk-repo-sync -p <base_channel_label>
```

3. 続行前に、同期が完了していることを確認してください。

#### 4.8.1.3. 同期ステータスの確認

プロシージャ: Web UIから同期の進捗状況を確認する

1. UyuniのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。
2. [→→→→] タブに移動し、[→→→] をクリックし、[→→→→] をクリックします。

プロシージャ: コマンドプロンプトから同期の進捗状況を確認する

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、tailコマンドを使用して同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

2. それぞれの子チャンネルは、同期の進捗中にそれぞれのログを生成します。同期が完了したことを確認するには、ベースチャンネルと子チャンネルのログファイルをすべて確認する必要があります。



Debianチャンネルは非常に大きいことがあります。同期に数時間かかる場合があります。

#### 4.8.1.4. GPGキーの管理

クライアントではGPGキーを使用して、ソフトウェアパッケージをインストールする前にパッケージ認証の確認が行われます。信頼されているソフトウェアのみクライアントにインストールできます。



クライアントのセキュリティにとってGPGキーを信頼することは重要です。必要かつ信頼できるキーを決定するのは管理者のタスクです。GPGキーが信頼されていない場合、ソフトウェアチャンネルは使用できないため、クライアントにチャンネルを割り当てるかどうかは、キーを信頼するかどうかによって決まります。

GPGキーの詳細については、[Client-configuration > Gpg-keys](#)を参照してください。



Debianクライアントをインストールするには、複数のGPGキーが必要な場合があります。

サードパーティのDebianリポジトリを同期する場合は、適切なGPGキーをサーバにインポートする必要があります。GPGキーがない場合、同期は失敗します。

Debianリポジトリの場合、メタデータのみが署名されます。したがって、ソフトウェアチャンネルのGPGキーをインポートする必要はありません。パッケージはUyuniによって再署名されません。

UyuniサーバにすでにインポートされているGPGキーを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
sudo gpg --homedir /var/lib/spacewalk/gpgdir --list-keys
```

新しいGPGキーをインポートするには、`--import`パラメータを使用します。

```
sudo gpg --homedir /var/lib/spacewalk/gpgdir --import <filename>.gpg
```

#### 4.8.1.5. rootアクセス

DebianのrootユーザはデフォルトでSSHアクセスが無効になっています。

標準ユーザを使用してオンボードできるようにするには、`sudoers`ファイルを編集する必要があります。

プロシージャ: rootユーザーアクセスの許可

1. クライアントで、`sudoers`ファイルを編集します。

```
sudo visudo
```

この行を`sudoers`ファイルの末尾に追加してsudoアクセス権をユーザに付与します。Web UIでクライアントをブートストラップしているユーザの名前で`<user>`を置き換えます。

```
<user>  ALL=NOPASSWD: /usr/bin/python, /usr/bin/python2,  
/usr/bin/python3, /var/tmp/venv-salt-minion/bin/python
```



このプロシージャによりrootアクセス権が付与されます。クライアントの登録に必要なパスワードは不要です。クライアントは正常にインストールされると、root特権で実行されるため、アクセス権は不要です。クライアントを正しくインストールした後、`sudoers`ファイルからこの行を削除することをお勧めします。

### 4.8.1.6. クライアントの登録

クライアントを登録するには、ブートストラップリポジトリが必要です。 デフォルトでは、ブートストラップリポジトリは自動的に作成され、すべての同期製品に対して毎日再生成されます。 次のコマンドを使用して、コマンドプロンプトからブートストラップリポジトリを手動で作成できます。

```
mgr-create-bootstrap-repo
```

クライアントの登録については、[Client-configuration > Registration-overview](#)を参照してください。

## 4.9. OpenEuler Client Registration

You can register openEuler clients to your Uyuni Server. The method and details varies depending on the operating system of the client.

始める前に、クライアントでUyuniサーバと日時が正しく同期していることを確認してください。

アクティベーションキーを作成済みである必要もあります。 アクティベーションキーの作成の詳細については、[Client-configuration > Activation-keys](#)を参照してください。

### 4.9.1. Registering openEuler Clients

This section contains information about registering clients running openEuler operating systems.



When created at AWS, openEuler instances always have the same `machine-id` at `/etc/machine-id`. Make sure you regenerate the `machine-id` after the instance is created. For more information, see [Administration > Troubleshooting](#).

#### 4.9.1.1. ソフトウェアチャンネルの追加

Before you register openEuler clients to your Uyuni Server, you need to add the required software channels, and synchronize them.

現在サポートされているアーキテクチャは、「x86\_64」と「aarch64」です。 サポートされている製品およびアーキテクチャの完全な一覧については、[Client-configuration > Supported-features](#)を参照してください。



次のセクションでは、x86\_64アーキテクチャに基づく説明が多いです。 必要に応じて他のアーキテクチャに置き換えてください。

このプロシージャで必要なチャンネルは次のとおりです。

表 31. openEuler Channels - CLI

OS Version	Core Channel	Client Channel	Update Channel	EPOL Channel	Everything Channel
openEuler 22.03	openeuler2203	openeuler2203-uyuni-client	openeuler2203-update	openeuler2203-epol	openeuler2203-everything

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

1. Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、 `spacewalk-common-channels` コマンドを特定のチャンネルに対して実行します:

```
spacewalk-common-channels \
<base_channel_label> \
<child_channel_label_1> \
<child_channel_label_2> \
... <child_channel_label_n>
```

2. **自動同期**がオフになっている場合は、チャンネルを同期します。

```
spacewalk-repo-sync -p <base_channel_label>
```

3. 続行前に、同期が完了していることを確認してください。



`spacewalk-common-channels`によって提供されるクライアントツールのチャンネルの提供元はUyuniです。SUSEではありません。

#### 4.9.1.2. 同期ステータスの確認

プロシージャ: Web UIから同期の進捗状況を確認する

1. UyuniのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。
2. [同期] タブに移動し、[同期] をクリックし、[同期] をクリックします。

プロシージャ: コマンドプロンプトから同期の進捗状況を確認する

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、`tail`コマンドを使用して同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

2. それぞれの子チャンネルは、同期の進捗中にそれぞれのログを生成します。同期が完了したことを確認するには、ベースチャンネルと子チャンネルのログファイルをすべて確認する必要があります。

### 4.9.1.3. アクティベーションキーの作成

You need to create an activation key that is associated with your openEuler channels.

アクティベーションキーの詳細については、[Client-configuration > Activation-keys](#)を参照してください。

### 4.9.1.4. クライアントでGPGキーを信頼する

#### 4.9.1.5. クライアントでGPGキーを信頼する

オペレーティング システムは、独自のGPGキーを直接信頼するか、少なくとも最小限のシステムでインストールされて出荷されます。 ただし、別のGPGキーで署名されたサードパーティのパッケージは手動で処理する必要があります。 クライアントは、GPGキーを信頼していないなくても正常にブートストラップできます。 ただし、キーが信頼されるまで、新しいクライアントツールパッケージをインストールしたり、更新したりできません。

Clients now use GPG key information entered for a software channel to manage the trusted keys. When a software channel with GPG key information is assigned to a client, the key is trusted when the channel is refreshed or the first package is installed from this channel.

ソフトウェアチャンネルページのGPGキーのURLには、「空白」で区切られた複数のキーのURLを含めることができます。 ファイルURLの場合は、ソフトウェアチャンネルを使用する前に、GPGキーファイルをクライアントに配備する必要があります。

The GPG keys for the Client Tools Channels of Red Hat based clients are deployed on the client into `/etc/pki/rpm-gpg/` and can be referenced with file URLs.

Only in case a software channel is assigned to the client they will be imported and trusted by the system.



Debianベースのシステムはメタデータのみに署名するため、单一チャンネルに追加のキーを指定する必要はありません。 [Administration > Repo-metadata](#) の「独自のGPGキーを使用する」で説明されているように、ユーザが独自のGPGキーを設定してメタデータに署名すると、そのキーの配備と信頼が自動的に実行されます。

#### 4.9.1.5.1. ユーザ定義のGPGキー

Users can define custom GPG keys to be deployed to a client.

いくつかのpillarデータを提供し、SaltファイルシステムにGPGキーファイルを提供することで、自動的にクライアントに配備されます。

これらのキーは、RPMベースのオペレーティングシステムでは`/etc/pki/rpm-gpg/`に、Debianシステムでは`/usr/share/keyrings/`に配備されます。

キーを配備するクライアントのpillarキー`custom_gpgkeys`を定義し、キーファイルの名前を一覧にします。

```
cat /srv/pillar/mypillar.sls
custom_gpgkeys:
  - my_first_gpg.key
  - my_second_gpgkey.gpg
```

さらに、Saltファイルシステムでは、`gpg`という名前のディレクトリを作成し、`custom_gpgkeys` pillarデータで指定された名前のGPGキーファイルを保存します。

```
ls -la /srv/salt/gpg/
/srv/salt/gpg/my_first_gpg.key
/srv/salt/gpg/my_second_gpgkey.gpg
```

The keys are deployed to the client at `/etc/pki/rpm-gpg/my_first_gpg.key` and `/etc/pki/rpm-gpg/my_second_gpgkey.gpg`.

最後のステップでは、ソフトウェアチャンネルのGPGキーのURLフィールドにURLを追加します。 ソフトウェア → 管理 → チャンネルに移動し、変更するチャンネルを選択します。 [GPGキーURL] に値`file:///etc/pki/rpm-gpg/my_first_gpg.key`を追加します。

#### 4.9.1.5.2. ブートストラップスクリプトのGPGキー

プロシージャ: ブートストラップスクリプトを使用してクライアントでGPGキーを信頼する

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、`/srv/www/htdocs/pub/`ディレクトリの内容を確認します。 このディレクトリには、使用できるすべての公開鍵が含まれています。 登録クライアントに割り当てるチャンネルに適用するキーをメモします。
2. 関連するブートストラップスクリプトを開き、`ORG_GPG_KEY=`パラメータを見つけて、必要なキーを追加します。 次に例を示します。

```
uyuni-gpg-pubkey-0d20833e.key
```

以前保存したキーを削除する必要はありません。



クライアントのセキュリティにとってGPGキーを信頼することは重要です。 必要かつ信頼できるキーを決定するのは管理者のタスクです。 GPGキーが信頼されていない場合、ソフトウェアチャンネルをクライアントに割り当てるることはできません。

#### 4.9.1.6. クライアントの登録

openEuler clients are registered in the same way as all other clients. For more information, see **Client-configuration > Registration-overview**.

## 4.10. Oracleクライアントの登録

Oracle LinuxクライアントをUyuniサーバに登録できます。そのメソッドおよび詳細は、クライアントのオペレーティングシステムによって異なります。

始める前に、クライアントでUyuniサーバと日時が正しく同期していることを確認してください。

You must also have created an activation key.

- For more information about creating activation keys, see [Client-configuration > Activation-keys](#).
- For more information about migrating Oracle Linux to SUSE Liberty Linux, see [client-configuration:clients-sleses.pdf](#).

### 4.10.1. Oracle Linuxクライアントの登録

This section contains information about registering clients running Oracle Linux operating systems.



Unbreakable Linux Network (ULN)リポジトリとUyuniを直接同期することは現在サポートされていません。ULNのOracleローカルディストリビューションを使用する必要があります。ローカルULNミラーの設定の詳細については、<https://docs.oracle.com/en/operating-systems/oracle-linux/software-management/sfw-mgmt-UseSoftwareDistributionMirrors.html#local-uln-mirror>で提供されているOracleのドキュメントを参照してください。

#### 4.10.1.1. ソフトウェアチャンネルの追加

Oracle LinuxクライアントをUyuniサーバに登録する前に、必要なソフトウェアチャンネルを追加して同期する必要があります。

現在サポートされているアーキテクチャは、「x86\_64」と「aarch64」です。サポートされている製品およびアーキテクチャの完全な一覧については、[Client-configuration > Supported-features](#)を参照してください。



次のセクションでは、x86\_64アーキテクチャに基づく説明が多いです。必要に応じて他のアーキテクチャに置き換えてください。

このプロシージャで必要なチャンネルは次のとおりです。

表 32. Oracleチャンネル - CLI

OSバージョン	ベースチャンネル	クライアントチャンネル	更新チャンネル
Oracle Linux 9	oraclelinux9	oraclelinux9-uyuni-client	oraclelinux9-appstream
Oracle Linux 8	oraclelinux8	oraclelinux8-uyuni-client	oraclelinux8-appstream

OSバージョン	ベースチャンネル	クライアントチャンネル	更新チャンネル
Oracle Linux 7	oraclelinux7	oraclelinux7-uyuni-client	-

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

1. Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、 `spacewalk-common-channels` コマンドを特定のチャンネルに対して実行します:

```
spacewalk-common-channels \
<base_channel_label> \
<child_channel_label_1> \
<child_channel_label_2> \
... <child_channel_label_n>
```

2. **自動同期**がオフになっている場合は、チャンネルを同期します。

```
spacewalk-repo-sync -p <base_channel_label>
```

3. 続行前に、同期が完了していることを確認してください。



`spacewalk-common-channels`によって提供されるクライアントツールのチャンネルの提供元はUyuniです。SUSEではありません。



Oracle Linux 9およびOracle Linux 8クライアントでは、ベースチャンネルとAppStreamチャンネルの両方を追加します。両方のチャンネルのパッケージが必要です。両方のチャンネルを追加しないと、パッケージ不足のためブートストラップリポジトリを作成できません。

モジューラーチャンネルを使用している場合は、クライアントでPython3.6モジュールストリームを有効にする必要があります。Python 3.6を提供しない場合、`spacecmd`パッケージのインストールは失敗します。



AppStreamリポジトリにはモジュールパッケージが用意されています。Uyuni のWeb UIに正しくないパッケージ情報が表示されます。Web UIまたはAPIを使用してモジュールリポジトリから直接インストールまたはアップグレードするようなパッケージ操作は実行できません。

Alternatively, you can use Salt states to manage modular packages, or use the `dnf` command on the client. For more information about CLM, see [Administration > Content-lifecycle](#).

### 4.10.1.2. 同期ステータスの確認

プロシージャ: Web UIから同期の進捗状況を確認する

1. UyuniのWeb UIで、**ソフトウェア** › **管理** › **チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。
2. [同期] タブに移動し、[同期] をクリックし、[同期] をクリックします。

プロシージャ: コマンドプロンプトから同期の進捗状況を確認する

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、tailコマンドを使用して同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

2. それぞれの子チャンネルは、同期の進捗中にそれぞれのログを生成します。同期が完了したことを確認するには、ベースチャンネルと子チャンネルのログファイルをすべて確認する必要があります。

### 4.10.1.3. アクティベーションキーの作成

Oracle Linuxチャンネルと関連付けられているアクティベーションキーを作成する必要があります。

アクティベーションキーの詳細については、**Client-configuration** › **Activation-keys**を参照してください。

### 4.10.1.4. GPGキーの管理

クライアントではGPGキーを使用して、ソフトウェアパッケージをインストールする前にパッケージ認証の確認が行われます。信頼されているソフトウェアのみクライアントにインストールできます。



クライアントのセキュリティにとってGPGキーを信頼することは重要です。必要かつ信頼できるキーを決定するのは管理者のタスクです。GPGキーが信頼されていない場合、ソフトウェアチャンネルは使用できないため、クライアントにチャンネルを割り当てるかどうかは、キーを信頼するかどうかによって決まります。

GPGキーの詳細については、**Client-configuration** › **Gpg-keys**を参照してください。

Oracle Linux 9およびOracle Linux 8クライアントの場合、以下を使用します

```
ol8-gpg-pubkey-82562EA9AD986DA3.key
```



Oracle Linux 7クライアントの場合、以下を使用します

```
ol67-gpg-pubkey-72F97B74EC551F0A3.key
```

### 4.10.1.5. クライアントの登録

クライアントを登録するには、ブートストラップリポジトリが必要です。 デフォルトでは、ブートストラップリポジトリは自動的に作成され、すべての同期製品に対して毎日再生成されます。 次のコマンドを使用して、コマンドプロンプトからブートストラップリポジトリを手動で作成できます。

```
mgr-create-bootstrap-repo
```

クライアントの登録については、[Client-configuration > Registration-overview](#)を参照してください。

## 4.11. Raspberry Pi OS Client Registration

You can register Raspberry Pi OS clients to your Uyuni Server. The method and details depend on the operating system of the client.

始める前に、クライアントでUyuniサーバと日時が正しく同期していることを確認してください。

アクティベーションキーを作成済みである必要もあります。 アクティベーションキーの作成の詳細については、[Client-configuration > Activation-keys](#)を参照してください。

### 4.11.1. Registering Raspberry Pi OS Clients

This section contains information about registering clients running Raspberry Pi OS operating systems.

Bootstrapping can be used with Raspberry Pi OS clients for performing initial state runs, and for profile updates.

#### 4.11.1.1. 登録の準備

Some preparation is required before you can register Raspberry Pi OS clients to the Uyuni Server:

- DNSが正しく設定されていることを確認し、クライアントのエントリを提供します。 または、適切なエントリを使用して、Uyuniサーバとクライアントの両方で/etc/hostsファイルを設定できます。
- クライアントは、登録する前にUyuniサーバと日時が同期されている必要があります。

#### 4.11.1.2. ソフトウェアチャンネルの追加

Before you register Raspberry Pi OS clients to your Uyuni Server, you need to add the required software channels, and synchronize them.

The architectures currently supported are: arm64 and armhf. For full list of supported products and architectures, see [Client-configuration > Supported-features](#).

このプロシージャで必要なチャンネルは次のとおりです。

表 33. Raspberry Pi OS Channels - CLI

Channel description	arm64	armhf
Base Channel	raspberrypios-12-pool-arm64-uyuni	raspberrypios-12-pool-armhf-uyuni
Client Channel	raspberrypios-12-arm64-uyuni-client	raspberrypios-12-armhf-uyuni-client
Updates Channel	raspberrypios-12-arm64-main-updates-uyuni	-
Contributions Channel	raspberrypios-12-arm64-contrib-uyuni	raspberrypios-12-armhf-contrib-uyuni
Non Free Channel	raspberrypios-12-arm64-non-free-uyuni	raspberrypios-12-armhf-non-free-uyuni
Non Free Firmware Channel	raspberrypios-12-arm64-non-free-firmware-uyuni	-
Raspberry Channel	raspberrypios-12-arm64-raspberry-uyuni	raspberrypios-12-armhf-raspberry-uyuni
Contribution Updates	raspberrypios-12-arm64-contrib-updates-uyuni	-
Non Free Updates	raspberrypios-12-arm64-non-free-updates-uyuni	-
Non Free Firmware Updates	raspberrypios-12-arm64-non-free-firmware-updates-uyuni	-
Security Main Channel	raspberrypios-12-arm64-main-security-uyuni	-
Security Contribution Channel	raspberrypios-12-arm64-contrib-security-uyuni	-
Security Non Free Channel	raspberrypios-12-arm64-non-free-security-uyuni	-
Security Non Free Firmware Channel	raspberrypios-12-arm64-non-free-firmware-security-uyuni	-
RPI Channel	-	raspberrypios-12-armhf-rpi-uyuni

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

1. Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、 spacewalk-common-channels コマンドを特定のチャンネルに対して実行します:

```
spacewalk-common-channels \
<base_channel_label> \
<child_channel_label_1> \
<child_channel_label_2> \
... <child_channel_label_n>
```

2. 自動同期がオフになっている場合は、チャンネルを同期します。

```
spacewalk-repo-sync -p <base_channel_label>
```

3. 続行前に、同期が完了していることを確認してください。



spacewalk-common-channelsによって提供されるクライアントツールのチャンネルの提供元はUyuniです。SUSEではありません。



You need all the new channels fully synchronized before bootstrapping any Raspberry Pi OS client.

#### 4.11.1.3. 同期ステータスの確認

プロシージャ: Web UIから同期の進捗状況を確認する

1. UyuniのWeb UIで、**ソフトウェア** › **管理** › **チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。
2. [-----] タブに移動し、[-----] をクリックし、[-----] をクリックします。

プロシージャ: コマンドプロンプトから同期の進捗状況を確認する

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、tailコマンドを使用して同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

2. それぞれの子チャンネルは、同期の進捗中にそれぞれのログを生成します。同期が完了したことを確認するには、ベースチャンネルと子チャンネルのログファイルをすべて確認する必要があります。



Raspberry Pi OS channels can be very large. Synchronization can sometimes take several hours.

#### 4.11.1.4. アクティベーションキーの作成

You need to create an activation key that is associated with your Raspberry Pi OS channels.

アクティベーションキーの詳細については、**Client-configuration** › **Activation-keys**を参照してください。

#### 4.11.1.5. GPGキーの管理

クライアントではGPGキーを使用して、ソフトウェアパッケージをインストールする前にパッケージ認証の確認が行われます。信頼されているソフトウェアのみクライアントにインストールできます。



クライアントのセキュリティにとってGPGキーを信頼することは重要です。必要かつ信頼できるキーを決定するのは管理者のタスクです。GPGキーが信頼されていない場合、ソフトウェアチャンネルは使用できないため、クライアントにチャンネルを割り当てるかどうかは、キーを信頼するかどうかによって決まります。

GPGキーの詳細については、[Client-configuration > Gpg-keys](#)を参照してください。



Raspberry Pi OS clients can require multiple GPG keys to be installed.

When synchronizing third-party Raspberry Pi OS repositories, you will need to import the appropriate GPG key on the server. If the GPG key is missing, synchronization will fail.

For Raspberry Pi OS repositories, only the metadata is signed. Therefore importing a GPG key for the software channel is not needed. Packages will not be re-signed by Uyuni.

UyuniサーバにすでにインポートされているGPGキーを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
sudo gpg --homedir /var/lib/spacewalk/gpgdir --list-keys
```

新しいGPGキーをインポートするには、`--import`パラメータを使用します。

```
sudo gpg --homedir /var/lib/spacewalk/gpgdir --import <filename>.gpg
```

#### 4.11.1.6. rootアクセス

The root user on Raspberry Pi OS is disabled by default for SSH access.

標準ユーザを使用してオンボードできるようにするには、`sudoers`ファイルを編集する必要があります。

プロシージャ: rootユーザーアクセスの許可

1. クライアントで、`sudoers`ファイルを編集します。

```
sudo visudo
```

この行を`sudoers`ファイルの末尾に追加してsudoアクセス権をユーザに付与します。Web UIでクライアントをブートストラップしているユーザの名前で`<user>`を置き換えます。

```
<user>  ALL=NOPASSWD: /usr/bin/python, /usr/bin/python2,
/usr/bin/python3, /var/tmp/venv-salt-minion/bin/python
```



このプロシージャによりrootアクセス権が付与されます。クライアントの登録に必要なパスワードは不要です。 クライアントは正常にインストールされると、root特権で実行されるため、アクセス権は不要です。 クライアントを正しくインストールした後、sudoersファイルからこの行を削除することをお勧めします。

#### 4.11.1.7. クライアントの登録

クライアントを登録するには、ブートストラップリポジトリが必要です。 デフォルトでは、ブートストラップリポジトリは自動的に作成され、すべての同期製品に対して毎日再生成されます。 次のコマンドを使用して、コマンドプロンプトからブートストラップリポジトリを作成できます。

```
mgr-create-bootstrap-repo
```

クライアントの登録については、[Client-configuration > Registration-overview](#)を参照してください。

### 4.12. Red Hatクライアントの登録

Red Hatコンテンツデリバリネットワーク(CDN)またはRed Hat更新インフラストラクチャ(RHUI)を使用してRed Hat Enterprise LinuxクライアントをUyuniサーバに登録できます。 そのメソッドおよび詳細は、クライアントのオペレーティングシステムによって異なります。

始める前に、クライアントでUyuniサーバと日時が正しく同期していることを確認してください。

You must also have created an activation key.

- For more information about creating activation keys, see [Client-configuration > Activation-keys](#).
- For more information about migrating Red Hat Enterprise Linux to SUSE Liberty Linux, see [client-configuration:clients-sleses.pdf](#).

#### 4.12.1. CDNでRed Hat Enterprise Linuxクライアントを登録する

This section contains information about using the Red Hat content delivery network (CDN) to register clients running Red Hat Enterprise Linux operating systems.

代わりにRed Hat更新インフラストラクチャ(RHUI)を使用する方法については、[Client-configuration > Clients-rh-rhui](#)を参照してください。



You are responsible for arranging access to Red Hat base media repositories and RHEL installation media, as well as connecting Uyuni Server to the Red Hat content delivery network. You must obtain support from Red Hat for all your RHEL systems. If you do not do this, you might be violating your terms with Red Hat.

### 4.12.1.1. エンタイトルメントと証明書のインポート

Red Hatクライアントには、Red Hat認証局(CA)、エンタイトルメント証明書、およびエンタイトルメントキーが必要です。

エンタイトルメント証明書には、有効期限が埋め込まれていて、この期限はサポートサブスクリプションの期間と一致しています。中断を回避するには、サポートサブスクリプション期間の終わりのたびにこのプロセスを繰り返す必要があります。

Red Hatには、サブスクリプション割り当てを管理するためのサブスクリプションマネージャツールが用意されています。このツールはローカルに実行され、インストール済みの製品およびサブスクリプションを追跡します。クライアントは、サブスクリプションマネージャで登録して証明書を取得する必要があります。

Red Hatクライアントは、URLを使用してリポジトリを複製します。URLは、Red Hatクライアントを登録した場所に応じて変わります。

Red Hatクライアントは次の3種類の方法で登録できます。

- redhat.comにあるRed Hatコンテンツデリバリネットワーク( CDN)
- Red Hatサテライトサーバ
- クラウドのRed Hat更新インフラストラクチャ(RHUI)

このガイドでは、Red Hat CDNに登録されるクライアントについて説明します。リポジトリコンテンツの認可済みサブスクリプションを使用して、1つ以上のシステムがCDNに登録されている必要があります。

代わりにRed Hat更新インフラストラクチャ(RHUI)を使用する方法については、[Client-configuration > Clients-rh-rhui](#)を参照してください。



クライアントシステムのサテライト証明書では、サテライトサーバおよびサブスクリプションが必要です。サテライト証明書を使用するクライアントはUyuniサーバではサポートされていません。



エンタイトルメント証明書には、有効期限が埋め込まれていて、この期限はサポートサブスクリプションの期間と一致しています。中断を回避するには、サポートサブスクリプション期間の終わりのたびにこのプロセスを繰り返す必要があります。

Red Hatには、サブスクリプション割り当てを管理するためのサブスクリプションマネージャツールが用意されています。このツールはクライアントシステムでローカルに実行され、インストール済みの製品およびサブスクリプションを追跡します。サブスクリプションマネージャを使用してredhat.comを登録し、このプロシージャに従って証明書を取得します。

プロシージャ: クライアントをサブスクリプションマネージャに登録する

1. クライアントシステムのコマンドプロンプトで、サブスクリプションマネージャツールを使用して登録します。

```
subscription-manager register
```

プロンプトが表示されたら、Red Hatポータルのユーザ名とパスワードを入力します。

2. コマンドを実行します。

```
subscription-manager activate
```

3. Uyuniサーバがアクセスできる場所にエンタイトルメント証明書とキーをクライアントシステムからコピーします。

```
cp /etc/pki/entitlement/ <example>/entitlement/
```



エンタイトルメント証明書とキーの両方ともファイル拡張子は.pemです。  
キーにはファイル名にもkeyが含まれています。

4. Red Hat CA証明書ファイルをクライアントシステムから、エンタイトルメント証明書およびキーと同じWebの場所にコピーします。

```
cp /etc/rhsm/ca/redhat-uep.pem <example>/entitlement
```

Red Hatクライアントでリポジトリを管理するには、CAおよびエンタイトルメント証明書をUyuniサーバにインポートする必要があります。この操作を実行するには、インポートプロシージャを3回実行して、3つのエントリを作成する必要があります。エンタイトルメント証明書、エンタイトルメントキーおよびRed Hat証明書にそれぞれ1つずつです。

プロシージャ: 証明書をサーバにインポートする

1. UyuniサーバのWeb UIで、**システム**、**自動インストール**、**GPGキーとSSLキー**に移動します。
2. [格納|され|て|いる|キー|また|は|証明|書の|作成]をクリックして、エンタイトルメント証明メタを設定します。
  - [-->] フィールドにEntitlement-Cert-dateと入力します。
  - [-----] フィールドで、SSLを選択します。
  - [-----] フィールドで、エンタイトルメント証明書を保存した場所をブラウズし、.pem証明書ファイルを選択します。
3. [キーの作成]をクリックします。
4. [格納|され|て|いる|キー|また|は|証明|書の|作成]をクリックして、エンタイトルメントキーータを設定します。
  - [-->] フィールドにEntitlement-key-dateと入力します。

- [-----] フィールドで、SSLを選択します。
- [-----] フィールドで、エンタイトルメントキーを保存した場所をブラウズし、.pemキーファイルを選択します。

5. [キーの作成] をクリックします。
6. [格納されたているキーまたは証明書] Red Hat証明書用を次のパスを設定します。
  - [-----] フィールドにredhat-uepと入力します。
  - [-----] フィールドで、SSLを選択します。
  - [-----] フィールドで、Red Hat証明書を保存した場所をブラウズし、証明書ファイルを選択します。
7. [キーの作成] をクリックします。

#### 4.12.1.2. ソフトウェアチャンネルの追加

Red HatクライアントをUyuniサーバに登録する前に、必要なソフトウェアチャンネルを追加して同期する必要があります。



次のセクションでは、x86\_64アーキテクチャに基づく説明が多いです。必要に応じて他のアーキテクチャに置き換えてください。

このプロシージャで必要なチャンネルは次のとおりです。

表 34. Red Hatチャンネル - CLI

OS Version	Base Channel	Client Channel	Tools Channel
Red Hat 9	rhel9-pool-uyuni	-	rhel9-uyuni-client
Red Hat 8	rhel8-pool-uyuni	-	rhel8-uyuni-client
Red Hat 7	rhel7-pool-uyuni	-	rhel7-uyuni-client

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

1. Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、spacewalk-common-channels コマンドを特定のチャンネルに対して実行します。このとき、正しいアーキテクチャを指定してください:

```
spacewalk-common-channels \
-a <architecture> \
<base_channel_name> \
<child_channel_name_1> \
<child_channel_name_2> \
... <child_channel_name_n>
```

2. 自動同期がオフになっている場合は、チャンネルを同期します。

```
spacewalk-repo-sync -p <base_channel_label>-<architecture>
```

3. 続行前に、同期が完了していることを確認してください。



spacewalk-common-channelsによって提供されるクライアントツールのチャンネルの提供元はUyuniです。SUSEではありません。



AppStreamリポジトリにはモジュールパッケージが用意されています。UyuniのWeb UIに正しくないパッケージ情報が表示されます。Web UIまたはAPIを使用してモジュールリポジトリから直接インストールまたはアップグレードするようなパッケージ操作は実行できません。

Alternatively, you can use Salt states to manage modular packages, or use the `dnf` command on the client. For more information about CLM, see [Administration > Content-lifecycle](#).

#### 4.12.1.3. カスタムリポジトリおよびチャンネルの準備

To mirror the software from the Red Hat CDN, you need to create custom channels and repositories in Uyuni that are linked to the CDN by a URL. You must have entitlements to these products in your Red Hat Portal for this to work correctly. You can use the subscription manager tool to get the URLs of the repositories you want to mirror:

```
subscription-manager repos
```

これらのリポジトリURLを使用して、カスタムリポジトリを作成できます。クライアントを管理するために必要なコンテンツのみミラーリングできます。



Red Hatポータルに正しいエンタイトルメントがある場合、Red Hatリポジトリのカスタムバージョンのみ作成できます。

このプロシージャに必要な詳細は次のとおりです。

表 35. Red Hatカスタムリポジトリ設定

オプション	設定
リポジトリURL	Red Hat CDNによって提供されるコンテンツURL
署名済みメタデータがあるかどうか	すべてのRed Hatエンタイトルメントリポジトリのチェックを外します
SSL CA証明書	<code>redhat-uep</code>
SSLクライアント証明書	<code>Entitlement-Cert-date</code>
SSLクライアントキー	<code>Entitlement-Key-date</code>

### プロシージャ: カスタムリポジトリの作成

1. UyuniサーバのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**リポジトリ**に移動します。
2. **[リポジトリの作成]**をクリックし、リポジトリに適切なパラメータを設定します。
3. **[リポジトリの作成]**をクリックします。
4. 作成する必要があるすべてのリポジトリで繰り返します。

このプロシージャで必要なチャンネルは次のとおりです。

表 36. Red Hatカスタムチャンネル

OS Version	Base Channel
Red Hat 9	rhel9-pool-uyuni
Red Hat 8	rhel8-pool-uyuni
Red Hat 7	rhel7-pool-uyuni

### プロシージャ: カスタムチャンネルの作成

1. UyuniサーバのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動します。
2. **[チャンネルの作成]**をクリックし、チャンネルに適切なパラメータを設定します。
3. **[-----]** フィールドで、適切なベースチャンネルを選択します。
4. **[チャンネルの作成]**をクリックします。
5. 作成する必要があるすべてのチャンネルで繰り返します。 各カスタムリポジトリに1つのカスタムチャンネルが必要です。

該当するすべてのチャンネルとリポジトリを作成したことを確認できます。そのためには、**ソフトウェア**、**チャンネル一覧**、**すべて**に移動します。



Red Hat 8クライアントでは、ベースチャンネルとAppStreamチャンネルの両方を追加します。 両方のチャンネルのパッケージが必要です。 両方のチャンネルを追加しないと、パッケージ不足のためブートストラップリポジトリを作成できません。

モジュラーチャンネルを使用している場合は、クライアントでPython3.6モジュールストリームを有効にする必要があります。 Python 3.6を提供しない場合、spacecmdパッケージのインストールは失敗します。

すべてのチャンネルを作成済みの場合、これらのチャンネルを、作成したリポジトリと関連付けできます。

### プロシージャ: チャンネルのリポジトリとの関連付け

1. UyuniサーバのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動し、関連付けるチャンネルをクリックします。
2. **[-----]** タブに移動し、このチャンネルと関連付けるリポジトリにチェックを付けます。
3. **[リポジトリの更新]**をクリックし、チャンネルとリポジトリを関連付けます。

4. 関連付ける必要があるすべてのチャンネルとすべてのリポジトリを繰り返します。
5. オプション: [同期] タブに移動し、このリポジトリの同期の繰り返しスケジュールを設定します。
6. [今すぐ同期] をクリックし、すぐに同期を開始します。

#### 4.12.1.4. 同期ステータスの確認

プロシージャ: Web UIから同期の進捗状況を確認する

1. UyuniのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。
2. [同期] タブに移動し、[同期] をクリックし、[同期] をクリックします。

プロシージャ: コマンドプロンプトから同期の進捗状況を確認する

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、tailコマンドを使用して同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

2. それぞれの子チャンネルは、同期の進捗中にそれぞれのログを生成します。同期が完了したことを確認するには、ベースチャンネルと子チャンネルのログファイルをすべて確認する必要があります。



Red Hat Enterprise Linuxチャンネルは非常に大きいことがあります。同期に数時間かかる場合があります。

プロシージャ: オプション: Salt状態を作成して設定ファイルを展開する

1. UyuniサーバのWeb UIで、**設定**、**チャンネル**に移動します。
2. [状態チャレンジの作成] をクリックします。
  - [同期] フィールドにsubscription-manager: disable yum pluginsと入力します。
  - [同期] フィールドにsubscription-manager-disable-yum-pluginsと入力します。
  - [同期] フィールドにsubscription-manager: disable yum pluginsと入力します。
  - [SLS同期] フィールドは空白のままにします。
3. [設定チャレンジの作成] をクリックします
4. [設定ファイルの作成] をクリックします
  - [同期] フィールドに/etc/yum/pluginconf.d/subscription-manager.confと入力します。
  - [同期] フィールドに次のように入力します。

```
[main]
enabled=0
```

5. 「[設定] [ファイル] の [作成]」をクリックします。
6. 「[Salt-----]」フィールドの値をメモします。
7. 設定チャンネルの名前をクリックします。
8. 「['init.sls' -----]」をクリックします。
  - 「-----」フィールドに次のように入力します。

```
configure_subscription-manager-disable-yum-plugins:
cmd.run:
  - name: subscription-manager config
--rhsm.auto_enable_yum_plugins=0
  - watch:
    - file: /etc/yum/pluginconf.d/subscription-manager.conf
file.managed:
  - name: /etc/yum/pluginconf.d/subscription-manager.conf
  - source: salt:///etc/yum/pluginconf.d/subscription-
manager.conf
```

9. 「[設定] [ファイル] の [更新]」をクリックします。



Salt-----のプロシージャはオプションです。

プロシージャ: Red Hat Enterprise Linuxクライアントのシステムグループの作成

1. UyuniサーバのWeb UIで、**システム** › **システムグループ**に移動します。
2. 「[グループ] の [作成]」をクリックします。
  - 「-----」フィールドにrhel-systemsと入力します。
  - 「-----」フィールドにAll RHEL systemsと入力します。
3. 「[グループ] の [作成]」をクリックします。
4. 「-----」タブをクリックします。
5. 「-----」タブをクリックします。
6. 検索ボックスにsubscription-manager: disable yum pluginsと入力します。
7. 「[検索]」をクリックして状態を表示します。
8. Assign列で状態のチェックボックスをクリックします。
9. 「[変更点] の [保存]」をクリックします。

10. [確認]をクリックします。

RHELシステムをUyuniに追加済みの場合、これらを新しいシステムグループに割り当て、highstateを適用します。

プロシージャ: システムグループをアクティベーションキーに追加する

RHELシステムで使用したアクティベーションキーを変更して、上記で作成したシステムグループに含めます。

1. UyuniサーバのWeb UIで、**システム › アクティベーションキー**に移動します。
2. RHELシステムで使用されるそれぞれのアクティベーションキーをクリックします。
3. [-----] タブ、[----] サブタブに移動します。
4. [Select rhel-systems] (RHELシステムを選択) にチェックを付けます。
5. [選択されたグループに参加]をクリックします。

#### 4.12.1.5. GPGキーの管理

クライアントではGPGキーを使用して、ソフトウェアパッケージをインストールする前にパッケージ認証の確認が行われます。信頼されているソフトウェアのみクライアントにインストールできます。



クライアントのセキュリティにとってGPGキーを信頼することは重要です。必要かつ信頼できるキーを決定するのは管理者のタスクです。GPGキーが信頼されていない場合、ソフトウェアチャンネルは使用できないため、クライアントにチャンネルを割り当てるかどうかは、キーを信頼するかどうかによって決まります。

GPGキーの詳細については、**Client-configuration › Gpg-keys**を参照してください。



Red Hatカスタムチャンネルの場合、[GPG-----] フィールドを確認する場合は、[GPG-----URL] フィールドに値を入力する必要があります。Red Hat minionのディレクトリ/etc/pki/rpm-gpgに保存されているGPGキーのファイルURLを使用できます。

例: file:///etc/pki/rpm-gpg/RPM-GPG-KEY-redhat-release

Red Hat製品署名キーの完全なリストについては、<https://access.redhat.com/security/team/key>を参照してください。

#### 4.12.1.6. クライアントの登録

クライアントを登録するには、ブートストラップリポジトリが必要です。デフォルトでは、ブートストラップリポジトリは自動的に作成され、すべての同期製品に対して毎日再生成されます。次のコマンドを使用して、コマンドプロンプトからブートストラップリポジトリを作成できます。

```
mgr-create-bootstrap-repo
```

クライアントの登録については、[Client-configuration > Registration-overview](#)を参照してください。

## 4.12.2. Registering Red Hat Enterprise Linux clients with RHUI

i

This section contains information about using Red Hat update infrastructure (RHUI) to register clients running Red Hat Enterprise Linux operating systems.

If you are running clients in a public cloud, such as Amazon EC2, use this method.

RHUIをRed Hatコンテンツデリバリネットワーク(CDN)と組み合わせて使用して、Red Hat Enterprise Linuxサブスクリプションを管理できます。Red Hat CDNの使用については、[Client-configuration > Clients-rh-cdn](#)を参照してください。



UyuniサーバのRed Hat更新インフラストラクチャへの接続はユーザが行います。このRHUI証明書を使用して更新したすべてのクライアントは、正しくライセンス供与されている必要があります。クラウドプロバイダに確認し、詳細については、Red Hatのサービス条項を確認してください。



RHUIで登録されたRed Hat Enterprise Linuxクライアントの電源がオフになっている場合、Red Hatが証明書を無効と宣言する場合があります。この場合、クライアントの電源を再度オンにするか、新しいRHUI証明書を取得する必要があります。

### 4.12.2.1. Import entitlements and certificates

In the past it was required to import the certificates and entitlement data manual into Uyuni Server. This task has been automated by using the same mechanism as for SUSE PAYG instances. For more information, see [Installation-and-upgrade > Connect-payg](#).

このガイドでは、Red Hat更新インフラストラクチャ(RHUI)に登録されるクライアントについて説明します。リポジトリコンテンツの認可済みサブスクリプションを使用して、1つ以上のシステムがRHUIに登録されている必要があります。

代わりにRed Hatコンテンツデリバリネットワーク(CDN)を使用する方法については、[Client-configuration > Clients-rh-cdn](#)を参照してください。



クライアントシステムのサテライト証明書では、サテライトサーバおよびサブスクリプションが必要です。サテライト証明書を使用するクライアントはUyuniサーバではサポートされていません。



PAYG接続は、最新の認証データを取得するために、定期的にクライアントをチェックします。クライアントが実行され続け、定期的に更新されることが重要です。これが行われない場合、リポジトリの同期はある時点での認証エラーにより失敗します。



接続する前に、Red Hat 7インスタンスを更新してください。



Red Hat 9インスタンスを接続するには、暗号ポリシーLEGACYで設定する必要があります。sudo update-crypto-policies --set LEGACYを実行して、それに応じて設定します。

### 4.12.2.2. Red Hat更新インフラストラクチャへの接続

プロシージャ: 新しいRed Hatインスタンスの接続

- UyuniのWeb UIで、**管理セットアップウィザードPAYG**に移動し、**[PAYG] の [追加]** をクリックします。
- ページセクション **[PAYG→→→→→→→→→→]** から始めます。
- [→→→]** フィールドに、説明を追加します。
- ページセクション **[SSH→→→→→→→→→→]** に移動します。
- [→→→→→]** フィールドに、Uyuniから接続するインスタンスのDNSまたはIPアドレスを入力します。
- [SSH→→→→→]** フィールドに、ポート番号を入力するか、デフォルト値22を使用します。
- [→→→→→]** フィールドに、クラウドで指定されているユーザ名を入力します。
- [→→→→→→→→]** フィールドに、パスワードを入力します。
- [SSH→→→→→]** フィールドに、インスタンスキーを入力します。
- [SSH→→→→→→→→→→→→→→→→]** フィールドに、キーパスフレーズを入力します。



認証キーは常にPEM形式である必要があります。

インスタンスに直接接続していないが、SSH要塞を介して接続している場合は、[プロシージャ: SSH要塞接続データの追加](#)に進みます。

それ以外の場合は、[プロシージャ: Red Hat接続の終了](#)に進みます。

プロシージャ: SSH要塞接続データの追加

- ページセクション **[→→→SSH→→→→→→→→]** に移動します。
- [→→→→→]** フィールドに、要塞のホスト名を入力します。
- [SSH→→→→→]** フィールドに、要塞のポート番号を入力します。
- [→→→→→]** フィールドに、要塞のユーザ名を入力します。
- [→→→→→→→→]** フィールドに、要塞のパスワードを入力します。

6. [SSH] フィールドに、要塞キーを入力します。
7. [SSH] フィールドに、要塞キーのパスフレーズを入力します。

プロシージャ: Red Hat接続の終了でセットアップを完了します。

プロシージャ: Red Hat接続の終了

1. 新しいRed Hat接続データの追加を完了するには、[作成] をクリックします。
2. PAYG接続データの [...] ページに戻ります。 更新された接続ステータスは、 [...] という名前の上部セクションに表示されます。
3. 接続ステータスは、 [...] > [...] > Pay-as-you-go] 画面にも表示されます。
4. インスタンスの認証データが正しい場合、 [...] 列に「 [...] 」と表示されます。



いずれかの時点で無効なデータが入力された場合、新しく作成されたインスタンスは [[ guimenu ] > [...] > [...] > PAYG] に表示され、 [...] 列にエラーメッセージが表示されます。

サーバで認証データが利用可能になるとすぐに、接続されているインスタンスで利用可能なすべてのリポジトリにリポジトリが追加されました。リポジトリは、 [...] > [...] > [...] で確認できます。



A Red Hat connection will create custom repositories which are owned by organization 1 by default. If a different organization should own the autogenerated repositories, configure java.rhui\_default\_org\_id in /etc/rhn/rhn.conf.

これはリポジトリを定義して更新するだけです。管理対象クライアントにリポジトリを使用する場合は、ソフトウェアチャンネルを指定して、リポジトリを接続する必要があります。

### 4.12.2.3. Add software channels

Red HatクライアントをUyuniサーバに登録する前に、必要なソフトウェアチャンネルを追加して同期する必要があります。



次のセクションでは、x86\_64アーキテクチャに基づく説明が多いです。必要に応じて他のアーキテクチャに置き換えてください。

このプロシージャで必要なチャンネルは次のとおりです。

表 37. Red Hatチャンネル - CLI

OS Version	Base Channel	Client Channel	Tools Channel
Red Hat 7	rhel7-pool-uyuni	-	rhel7-uyuni-client

OS Version	Base Channel	Client Channel	Tools Channel
Red Hat 8	rhel8-pool-uyuni	-	rhel8-uyuni-client
Red Hat 9	rhel9-pool-uyuni	-	rhel9-uyuni-client

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

1. Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、 `spacewalk-common-channels` コマンドを特定のチャンネルに対して実行します。このとき、正しいアーキテクチャを指定してください:

```
spacewalk-common-channels \
-a <architecture> \
<base_channel_name> \
<child_channel_name_1> \
<child_channel_name_2> \
... <child_channel_name_n>
```

2. **自動同期**がオフになっている場合は、チャンネルを同期します。

```
spacewalk-repo-sync -p <base_channel_label>-<architecture>
```

3. 続行前に、同期が完了していることを確認してください。



spacewalk-common-channelsによって提供されるクライアントツールのチャンネルの提供元はUyuniです。SUSEではありません。



AppStreamリポジトリにはモジュールパッケージが用意されています。Uyuni のWeb UIに正しくないパッケージ情報が表示されます。Web UIまたはAPIを使用してモジュールリポジトリから直接インストールまたはアップグレードするようなパッケージ操作は実行できません。

Alternatively, you can use Salt states to manage modular packages, or use the `dnf` command on the client. For more information about CLM, see [Administration > Content-lifecycle](#).

#### 4.12.2.4. Prepare custom channels

RHUIからソフトウェアをミラーリングするには、自動生成リポジトリにリンクされたカスタムチャンネルをUyuniに作成する必要があります。

このプロシージャで必要なチャンネルは次のとおりです。

表 38. Red Hatカスタムチャンネル

OS Version	Base Channel
Red Hat 7	rhel7-pool-uyuni
Red Hat 8	rhel8-pool-uyuni
Red Hat 9	rhel9-pool-uyuni

プロシージャ: カスタムチャンネルの作成

1. UyuniサーバのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動します。
2. [チャンネルの作成]をクリックし、チャンネルに適切なパラメータを設定します。
3. [ベースチャンネル] フィールドで、適切なベースチャンネルを選択します。
4. [チャンネルの作成]をクリックします。
5. 作成する必要があるすべてのチャンネルで繰り返します。 各カスタムリポジトリに1つのカスタムチャンネルが必要です。

該当するすべてのチャンネルとリポジトリを作成したことを確認できます。そのためには、**ソフトウェア**、**チャンネル一覧**、**すべて**に移動します。



Red Hat 8クライアントでは、ベースチャンネルとAppStreamチャンネルの両方を追加します。両方のチャンネルのパッケージが必要です。両方のチャンネルを追加しないと、パッケージ不足のためブートストラップリポジトリを作成できません。

すべてのチャンネルを作成済みの場合、これらのチャンネルを、作成したリポジトリと関連付けできます。

プロシージャ: チャンネルのリポジトリとの関連付け

1. UyuniサーバのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動し、関連付けるチャンネルをクリックします。
2. [リポジトリ] タブに移動し、このチャンネルと関連付けるリポジトリにチェックを付けます。
3. [リポジトリの更新]をクリックし、チャンネルとリポジトリを関連付けます。
4. 関連付ける必要があるすべてのチャンネルとすべてのリポジトリを繰り返します。
5. オプション: [同期] タブに移動し、このリポジトリの同期の繰り返しスケジュールを設定します。
6. [今すぐ同期]をクリックし、すぐに同期を開始します。

#### 4.12.2.5. Check synchronization status

プロシージャ: Web UIから同期の進捗状況を確認する

1. UyuniのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。
2. [同期] タブに移動し、[同期] をクリックし、[同期] をクリックします。

プロシージャ: コマンドプロンプトから同期の進捗状況を確認する

- Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、tailコマンドを使用して同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

- それぞれの子チャンネルは、同期の進捗中にそれぞれのログを生成します。同期が完了したことを確認するには、ベースチャンネルと子チャンネルのログファイルをすべて確認する必要があります。



Red Hat Enterprise Linuxチャンネルは非常に大きいことがあります。同期に数時間かかる場合があります。

#### 4.12.2.6. Manage GPG keys

クライアントではGPGキーを使用して、ソフトウェアパッケージをインストールする前にパッケージ認証の確認が行われます。信頼されているソフトウェアのみクライアントにインストールできます。



クライアントのセキュリティにとってGPGキーを信頼することは重要です。必要かつ信頼できるキーを決定するのは管理者のタスクです。GPGキーが信頼されていない場合、ソフトウェアチャンネルは使用できないため、クライアントにチャンネルを割り当てるかどうかは、キーを信頼するかどうかによって決まります。

GPGキーの詳細については、[Client-configuration > Gpg-keys](#)を参照してください。

#### 4.12.2.7. クライアントの登録

クライアントを登録するには、ブートストラップリポジトリが必要です。デフォルトでは、ブートストラップリポジトリは自動的に作成され、すべての同期製品に対して毎日再生成されます。次のコマンドを使用して、コマンドプロンプトからブートストラップリポジトリを手動で作成できます。

```
mgr-create-bootstrap-repo
```

クライアントの登録については、[Client-configuration > Registration-overview](#)を参照してください。

### 4.13. Rocky Linuxクライアントの登録

Rocky LinuxクライアントをUyuniサーバに登録できます。そのメソッドおよび詳細は、クライアントのオペレーティングシステムによって異なります。

始める前に、クライアントでUyuniサーバと日時が正しく同期していることを確認してください。

You must also have created an activation key.

- For more information about creating activation keys, see [Client-configuration > Activation-keys](#).

- For more information about migrating Rocky Linux to SUSE Liberty Linux, see [client-configuration:clients-sleses.pdf](#).

## 4.13.1. Rocky Linuxクライアントの登録

This section contains information about registering clients running Rocky Linux operating systems.



Rocky LinuxクライアントのUyuniへの登録は、デフォルトのSELinux設定でテストされます。Rocky LinuxクライアントをUyuniに登録するために、SELinuxを無効にする必要はありません。

### 4.13.1.1. ソフトウェアチャンネルの追加

Rocky LinuxクライアントをUyuniサーバに登録する前に、必要なソフトウェアチャンネルを追加して同期する必要があります。

現在サポートされているアーキテクチャは、「x86\_64」と「aarch64」です。バージョン9では、ppc64leとs390xも追加でサポートされます。サポートされている製品およびアーキテクチャの完全な一覧については、[Client-configuration > Supported-features](#)を参照してください。



次のセクションでは、x86\_64アーキテクチャに基づく説明が多いです。必要に応じて他のアーキテクチャに置き換えてください。

このプロシージャで必要なチャンネルは次のとおりです。

表 39. Rocky Linuxチャンネル - CLI

OSバージョン	ベースチャンネル	クライアントチャンネル	AppStreamチャンネル
Rocky Linux 9	rockylinux9	rockylinux9-uyuni-client	rockylinux9-appstream
Rocky Linux 8	rockylinux8	rockylinux8-uyuni-client	rockylinux8-appstream

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

- Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、spacewalk-common-channels コマンドを特定のチャンネルに対して実行します。このとき、正しいアーキテクチャを指定してください:

```
spacewalk-common-channels \
-a <architecture> \
<base_channel_name> \
<child_channel_name_1> \
<child_channel_name_2> \
... <child_channel_name_n>
```

- 自動同期がオフになっている場合は、チャンネルを同期します。

```
spacewalk-repo-sync -p <base_channel_label>-<architecture>
```

3. 続行前に、同期が完了していることを確認してください。



spacewalk-common-channelsによって提供されるクライアントツールのチャンネルの提供元はUyuniです。SUSEではありません。



Rocky Linux 8およびRocky Linux 9クライアントでは、ベースチャンネルとAppStreamチャンネルの両方を追加します。両方のチャンネルのパッケージが必要です。両方のチャンネルを追加しないと、パッケージ不足のためブートストラップリポジトリを作成できません。



上流のチャンネルとUyuniチャンネルの間のAppStreamチャンネルで利用できるパッケージ数に不一致が発生する場合があります。また、同時に別の場所で追加したチャンネルを比較すると、数値が異なる場合もあります。Rocky Linuxでリポジトリを管理する方法が原因です。Rocky Linuxでは新しいバージョンがリリースされると古いバージョンのパッケージが削除されますが、Uyuniでは経過年数に関係なくすべてのバージョンが保持されます。

If you are using modular channels with Rocky Linux 8, you must enable the Python 3.6 module stream on the client. If you do not provide Python 3.6, the installation of the spacecmd package will fail.



AppStreamリポジトリにはモジュールパッケージが用意されています。UyuniのWeb UIに正しくないパッケージ情報が表示されます。Web UIまたはAPIを使用してモジュールリポジトリから直接インストールまたはアップグレードするようなパッケージ操作は実行できません。

Alternatively, you can use Salt states to manage modular packages, or use the dnf command on the client. For more information about CLM, see [Administration > Content-lifecycle](#).

### 4.13.1.2. 同期ステータスの確認

プロシージャ: Web UIから同期の進捗状況を確認する

1. UyuniのWeb UIで、**ソフトウェア** > **管理** > **チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。
2. [同期] タブに移動し、[同期] をクリックし、[同期] をクリックします。

プロシージャ: コマンドプロンプトから同期の進捗状況を確認する

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、tailコマンドを使用して同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

2. それぞれの子チャンネルは、同期の進捗中にそれぞれのログを生成します。同期が完了したことを確認するには、ベースチャンネルと子チャンネルのログファイルをすべて確認する必要があります。

#### 4.13.1.3. アクティベーションキーの作成

Rocky Linuxチャンネルと関連付けられているアクティベーションキーを作成する必要があります。

アクティベーションキーの詳細については、[Client-configuration › Activation-keys](#)を参照してください。

#### 4.13.1.4. GPGキーの管理

クライアントではGPGキーを使用して、ソフトウェアパッケージをインストールする前にパッケージ認証の確認が行われます。信頼されているソフトウェアのみクライアントにインストールできます。



クライアントのセキュリティにとってGPGキーを信頼することは重要です。必要かつ信頼できるキーを決定するのは管理者のタスクです。GPGキーが信頼されていない場合、ソフトウェアチャンネルをクライアントに割り当てることはできません。

GPGキーの詳細については、[Client-configuration › Gpg-keys](#)を参照してください。

#### 4.13.1.5. クライアントの登録

クライアントを登録するには、ブートストラップリポジトリが必要です。デフォルトでは、ブートストラップリポジトリは自動的に作成され、すべての同期製品に対して毎日再生成されます。次のコマンドを使用して、コマンドプロンプトからブートストラップリポジトリを手動で作成できます。

```
mgr-create-bootstrap-repo
```

クライアントの登録については、[Client-configuration › Registration-overview](#)を参照してください。

#### 4.13.1.6. エラータの管理

Rocky Linuxクライアントを更新するとき、パッケージには更新に関するメタデータが含まれています。

### 4.14. Ubuntuクライアントの登録

UbuntuクライアントをUyuniサーバに登録できます。そのメソッドおよび詳細は、クライアントのオペレーティングシステムによって異なります。

始める前に、クライアントでUyuniサーバと日時が正しく同期していることを確認してください。

アクティベーションキーを作成済みである必要があります。 アクティベーションキーの作成の詳細については、[Client-configuration › Activation-keys](#)を参照してください。

## 4.14.1. Ubuntu 20.04および22.04 クライアントの登録

This section contains information about registering clients running Ubuntu 20.04 LTS and 22.04 LTS operating systems.

ブートストラップは、リポジトリの設定やプロファイルの更新の実行など、Ubuntuクライアントの起動および初期状態の実行のためにサポートされています。 ただし、Ubuntuのrootユーザはデフォルトで無効になっているため、ブートストラップを使用するには、Pythonのsudo特権がある既存ユーザが必要です。



Canonicalは、Uyuniを保証またはサポートしていません。

### 4.14.1.1. ソフトウェアチャンネルの追加

UbuntuクライアントをUyuniサーバに登録する前に、必要なソフトウェアチャンネルを追加して同期する必要があります。



次のセクションでは、x86\_64アーキテクチャに基づく説明が多いです。 必要に応じて他のアーキテクチャに置き換えてください。

このプロシージャで必要なチャンネルは次のとおりです。

表 40. Ubuntuチャンネル - CLI

OS Version	Base Channel	Main Channel	Updates Channel	Security Channel	Client Channel
Ubuntu 22.04	ubuntu-2204-pool-amd64-uyuni	ubuntu-2204-amd64-main-uyuni	ubuntu-2204-amd64-main-updates-uyuni	ubuntu-2204-amd64-main-security-uyuni	ubuntu-2204-amd64-uyuni-client
Ubuntu 20.04	ubuntu-2004-pool-amd64-uyuni	ubuntu-2004-amd64-main-uyuni	ubuntu-2004-amd64-main-updates-uyuni	ubuntu-2004-amd64-main-security-uyuni	ubuntu-2004-amd64-uyuni-client

Version 20.04 also requires the Universe channels:

表 41. Ubuntu 20.04 Universe Channels - CLI

Ubuntu 20.04	
Universe Channel	ubuntu-2004-amd64-universe-uyuni
Universe Updates Channel	ubuntu-2004-amd64-universe-updates-uyuni
Universe Security Updates Channel	ubuntu-2004-amd64-universe-security-uyuni
Universe Backports Channel	ubuntu-2004-amd64-universe-backports-uyuni

手順: コマンドプロンプトからのソフトウェアチャンネルの追加

- Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、 spacewalk-common-channels コマンドを特定のチャンネルに対して実行します:

```
spacewalk-common-channels \
<base_channel_label> \
<child_channel_label_1> \
<child_channel_label_2> \
... <child_channel_label_n>
```

- 自動同期がオフになっている場合は、チャンネルを同期します。

```
spacewalk-repo-sync -p <base_channel_label>
```

- 続行前に、同期が完了していることを確認してください。



Ubuntuクライアントをブートストラップする前に、新しいチャンネルはすべて完全に同期されている必要があります。

#### 4.14.1.2. 同期ステータスの確認

プロシージャ: Web UIから同期の進捗状況を確認する

- UyuniのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動し、リポジトリに関連付けられているチャンネルをクリックします。
- [...] タブに移動し、 [...] をクリックし、 [...] をクリックします。

プロシージャ: コマンドプロンプトから同期の進捗状況を確認する

- Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとして、tailコマンドを使用して同期ログファイルを確認します。

```
tail -f /var/log/rhn/reposync/<channel-label>.log
```

- それぞれの子チャンネルは、同期の進捗中にそれぞれのログを生成します。同期が完了したことを確認するには、ベースチャンネルと子チャンネルのログファイルをすべて確認する必要があります。



Ubuntuチャンネルは非常に大きいことがあります。同期に数時間かかる場合があります。

#### 4.14.1.3. GPGキーの管理

クライアントではGPGキーを使用して、ソフトウェアパッケージをインストールする前にパッケージ認証の確認が行われます。信頼されているソフトウェアのみクライアントにインストールできます。



クライアントのセキュリティにとってGPGキーを信頼することは重要です。必要かつ信頼できるキーを決定するのは管理者のタスクです。GPGキーが信頼されていない場合、ソフトウェアチャンネルは使用できないため、クライアントにチャンネルを割り当てるかどうかは、キーを信頼するかどうかによって決まります。

GPGキーの詳細については、[Client-configuration › Gpg-keys](#)を参照してください。

#### 4.14.1.4. rootアクセス

UbuntuのrootユーザはデフォルトでSSHアクセスが無効になっています。

標準ユーザを使用してオンボードできるようにするには、`sudoers`ファイルを編集する必要があります。



この問題は、自己インストールされたバージョンのUbuntuで発生します。インストール時にデフォルトのユーザが管理特権を付与されている場合、`sudo`を使用して特権エスカレーションを実行するにはパスワードが必要です。クラウドインスタンスでは、`cloud-init`が`/etc/sudoers.d`の下にファイルを自動的に作成し、パスワードを必要とせずに`sudo`を介して特権エスカレーションを付与するため、この問題は発生しません。

プロシージャ: rootユーザーアクセスの許可

1. クライアントで、`sudoers`ファイルを編集します。

```
sudo visudo
```

この行を`sudoers`ファイルの末尾に追加して`sudo`アクセス権をユーザに付与します。Web UIでクライアントをブートストラップしているユーザの名前で`<user>`を置き換えます。

```
<user>  ALL=NOPASSWD: /usr/bin/python, /usr/bin/python2,
/usr/bin/python3, /var/tmp/venv-salt-minion/bin/python
```



このプロシージャによりrootアクセス権が付与されます。クライアントの登録に必要なパスワードは不要です。クライアントは正常にインストールされると、root特権で実行されるため、アクセス権は不要です。クライアントを正しくインストールした後、`sudoers`ファイルからこの行を削除することをお勧めします。

#### 4.14.1.5. クライアントの登録

クライアントを登録するには、ブートストラップリポジトリが必要です。デフォルトでは、ブートストラップリポジトリは自動的に作成され、すべての同期製品に対して毎日再生成されます。次のコマンドを使用して、コマンドプロンプトからブートストラップリポジトリを手動で作成できます。

```
mgr-create-bootstrap-repo
```

クライアントの登録については、[Client-configuration > Registration-overview](#)を参照してください。

## 4.15. クライアントをプロキシに登録する

Proxy servers can act as a broker and package cache for clients. Registering clients to a proxy is similar to registering them directly to the Uyuni Server, with a few key differences.

These sections contain information on registering clients to a proxy using the Web UI, commands on the command line, or a bootstrap script. There are also procedures how you can move clients from one Uyuni Proxy to another one or to the Uyuni Server.

Within the Web UI, proxy pages show information about clients. You can see a list of clients that are connected to a proxy by clicking the name of the proxy in **Systems > System List > Proxy**, then select the **Proxy** subtab of the **Details** tab.

A list of chained proxies for a client can be seen by clicking the name of the client in **Systems > All**, then select the **Connection** subtab of the **Details** tab.

### 4.15.1. プロキシ間でのクライアントの移動

登録プロセスを繰り返すことなく、SaltおよびSaltSSHプッシュクライアントをプロキシ間で移動することができます。



チェーンされたプロキシを移動することはできません。 チェーンされたプロキシを移動する代わりに、新しいプロキシを作成し、クライアントを移動して、古いプロキシを削除します。

手順: プロキシ間でSaltまたはSaltSSHプッシュクライアントを移動する

1. UyuniのWeb UIで、プロキシ間で移動するクライアントの **[-----]** ページに移動します。
2. **[-----]** タブに移動します。次に **[-----]** リンクをたどって、ドロップダウンメニューを表示します。
3. **[-----]** ドロップダウンメニューから、クライアントの移動先のプロキシを選択し、**[[[プロキシの変更]]]** をクリックします。

手順: SSMで複数のSaltまたはSalt SSHプッシュクライアントをプロキシ間で移動する

1. UyuniのWeb UIで、**システム > システム一覧**に移動し、移動するそれぞれのクライアントを確認します。クライアントがシステムセットマネージャに追加されます。
2. **システム > システムセットマネージャ**に移動し、**[その他 > プロキシ]** タブに移動します。
3. **[-----]** ドロップダウンメニューから、クライアントの移動先のプロキシを選択し、**[[[プロキシの変更]]]** をクリックします。

`system.changeProxy` API呼び出しでも同じ機能を利用できます。

## 4.15.1.1. 背景情報

この機能の効果は、通常のSaltクライアントとSalt SSHプッシュクライアントで異なります。

### 4.15.1.1.1. 通常のSaltクライアント

この機能は、Salt状態アクションをスケジュールします。これにより、`susemanager.conf` Saltクライアント設定ファイルの`master:`設定が新しいプロキシを指すように変更されます。次に、この機能はSaltクライアントを再起動します。



`susemanager.conf` ファイルを手動で編集して`master:`を変更しても同じ効果があり、この方法もサポートされています。

When the client restarts and reconnects via the new proxy, the server updates the proxy path in the database and schedules another action for refreshing the channel URLs.

### 4.15.1.1.2. Salt SSHプッシュクライアント

この機能はデータベース内のプロキシパスをただちに更新し、チャンネルURLを更新するための新しいアクションがスケジュールされます。

## 4.15.2. プロキシからサーバへのクライアントの移動

Saltクライアントをプロキシからサーバに移動する場合は、プロキシリストから→→→を選択します。

## 4.15.3. Web UIを使用してクライアントをプロキシに登録する

You can register Salt clients to the Uyuni Proxy using the Web UI.

A bootstrap repository is needed for non-SLE clients in general and for SLE clients before version 15. A bootstrap repository offers packages for installing Salt on clients and for registering Salt clients.

For information about creating a bootstrap repository, see [Client-configuration > Bootstrap-repository](#).

プロシージャ: Web UIを使用してクライアントをプロキシに登録する

1. UyuniのWeb UIで、**システム**、**ブートストラップ**に移動します。
2. [IPアドレス] フィールドに、ブートストラップするクライアントの完全修飾ドメイン名(FQDN)を入力します。
3. [SSH IPアドレス] フィールドに、クライアントを接続してブートストラップするために使用するSSHポート番号を入力します。デフォルトでは、SSHポートは22です。
4. [ユーザ名] フィールドに、クライアントにログインするユーザ名を入力します。デフォルトでは、ユーザ名はrootです。

5. [Authentication Method] (認証メソッド) フィールドで、クライアントのブートストラップに使用する認証メソッドを選択します。
  - パスワード認証の場合、[パスワード] フィールドに、パスワードを入力してクライアントにログインします。
  - SSH秘密鍵認証の場合、秘密鍵と関連パスフレーズを入力します。ブートストラッププロセスの実行が完了するまでの間のみ、この鍵は保存されます。
6. [ソフトウェアチャンネル] フィールドで、クライアントのブートストラップに使用するソフトウェアチャンネルに関連付けられているアクティベーションキーを選択します。
7. [プロキシサーバ] フィールドで、登録先にするプロキシサーバを選択します。
8. デフォルトでは、[Disable SSH Strict Key Host Checking] (SSH厳格キーホストの確認を無効にする) チェックボックスにチェックが付いています。このチェックボックスにチェックが付いていると、ブートストラッププロセスは、手動認証なしでSSHホストキーを自動的に受け入れます。
9. オプション: [Manage System Completely via SSH] (SSHでシステムを完全に管理する) チェックボックスにチェックを付けます。このオプションにチェックを付けると、サーバへの接続にSSHを使用するようにクライアントは設定され、その他の接続方法は設定されません。
10. **「(ブ)」(ト)ス(ト)ラ(ッ)フ** をクリックして、登録を開始します。

ブートストラッププロセスが完了したら、クライアントは [システム・システム一覧] にリストされます。

#### 4.15.3.1. Register on the Command Line

Instead of the Web UI, you can use the command line to register a client to a proxy. This procedure requires that you have installed the Salt package on the client before registration. For SLE 12 based clients, you also must have activated the Advanced Systems Management module.

プロシージャ: コマンドラインを使用してクライアントをプロキシに登録する

1. 次の場所にあるクライアント設定ファイルを選択します。

```
/etc/salt/minion
```

または

```
/etc/salt/minion.d/NAME.conf
```

これはminionファイルと呼ばれることもあります。

2. プロキシFQDNを `NAME` としてクライアント設定ファイルに追加します。

```
master: PROXY123.EXAMPLE.COM
```

3. salt-minionサービスを再起動します。

```
systemctl restart salt-minion
```

4. サーバで、新しいクライアントキーを受け入れます。<client>をクライアントの名前に置き換えます。

```
salt-key -a '<client>'
```

#### 4.15.4. Registering with a Bootstrap Script

You can register clients through the Uyuni Proxy with a bootstrap script. This is done almost the same way as registering clients directly with the Uyuni Server. The difference is that you create the bootstrap script on the Uyuni Proxy with a command line tool. The bootstrap script then deploys all necessary information to the clients. The bootstrap script requires some parameters such as activation keys or GPG keys. These parameters depend on your specific setup.

プロシージャ: ブートストラップスクリプトを使用してクライアントをプロキシに登録する

1. Web UIを使用してUyuniサーバにクライアントアクティベーションキーを作成します。 詳細については、[Client-configuration > Activation-keys](#)を参照してください。
2. プロキシで、mgr-bootstrapコマンドラインツールをrootとして実行します。 If needed, use the additional command line switches to tune your bootstrap script.

使用できるオプションを表示するには、コマンドラインにmgr-bootstrap --helpと入力します。

```
mgr-bootstrap --activation-keys=key-string
```

3. オプション: 結果として得られたブートストラップスクリプトを編集します。
4. クライアントで直接ブートストラップスクリプトを実行するか、またはsshを使用してプロキシからブートストラップスクリプトを実行します。 <bootstrap>をブートストラップスクリプトの名前に置き換え、<client.example.com>をクライアントのホスト名に置き換えます。

```
cat <bootstrap> | ssh root@<client.example.com> /bin/bash
```

#### 4.16. パブリッククラウドでのクライアントの登録

Uyuniサーバを設定すると、クライアントの登録を開始できます。

## 4.16.1. 製品の追加とリポジトリの同期

クライアントに対応する製品をすでに追加し、リポジトリをUyuniに同期していることを確認してください。これは、クライアントの登録に使用されるブートストラップリポジトリを作成するために必要です。

詳細については、[installation-and-upgrade:pubcloud-setup.pdf](#)を参照してください。

## 4.16.2. オンデマンドイメージの準備

SUSEによって提供されるオンデマンドイメージから起動するインスタンスは自動的に登録され、更新されたインフラストラクチャおよびSUSE Linux Enterpriseモジュールはアクティブ化されます。 Uyuniクライアントとしてオンデマンドイメージを使用するには、使用を始める前にこの自動化を無効にする必要があります。

プロシージャ: オンデマンドイメージの準備

1. オンデマンドインスタンスにログインします。
2. コマンドプロンプトでrootとして、登録データとリポジトリを削除します。

```
registercloudguest --clean
```

3. cloud-regionsrv-clientパッケージを削除します。

```
zypper rm cloud-regionsrv-client
```

4. 使用しているクラウドプロバイダ固有の追加パッケージを削除します。

- Amazon EC2:

```
zypper rm regionServiceClientConfigEC2 regionServiceCertsEC2
```

- Google Compute Engine:

```
zypper rm cloud-regionsrv-client-plugin-gce
regionServiceClientConfigGCE regionServiceCertsGCE
```

- Microsoft Azure:

```
zypper rm regionServiceClientConfigAzure
regionServiceCertsAzure
```

UyuniをSUSE Customer Centerに登録する手順については、[Installation-and-upgrade > Server-setup](#) を参照してください。

### 4.16.3. クライアントの登録

UyuniのWeb UIで、**システム** > **ブートストラップ**に移動し、[マシン名]、[SSHマシン名]、[マシン名]、および [マシン名] の各フィールドに入力します。[マシン名] フィールドで安定版FQDNを使用していることを確認してください。別の有効期間が短いFQDNをパブリッククラウドで使用している場合、Uyuniではホストを検索できません。

パブリッククラウドのイメージでは通常、ユーザ名とパスワードでSSHにログインできません。証明書でのみSSHにログインできます。Web UIからブートストラップを使用する場合、ユーザ名とSSHキーによるSSHへのログインを有効にする必要があります。この操作を実行するには、**システム** > **ブートストラップ**に移動し、認証メソッドを変更します。

クラウドプロバイダがMicrosoft Azureの場合、ユーザ名とパスワードでログインできます。この操作を実行するには、AzureUserがrootとしてパスワードなしでコマンドを実行できる必要があります。この操作を実行するには、/etc/sudoers.d/waagentファイルを開き、次の行を追加または編集します。

```
AzureUser ALL=(ALL) NOPASSWD: ALL
```



AzureUserがrootとしてパスワードなしでコマンドを実行できると、セキュリティ上のリスクが生じます。この方法の使用はテストのみにしてください。運用システムでは実行しないでください。

ブートストラッププロセスが正常に完了したら、クライアントは [システム > システム一覧] にリストされます。

- If you want more control over the process or have to register many clients, create a bootstrap script. For more information, see [Client-configuration > Registration-bootstrap](#).
- Saltクライアントで、さらに詳細にプロセスを制御するには、コマンド行でsingleコマンドを実行すると便利です。詳細については、[Client-configuration > Registration-cli](#)を参照してください。
- パブリッククラウドイメージ(AWS AMIなど)から起動されたクライアントを登録する場合、追加の設定をして、相互に上書きしないようにする必要があります。複製を登録する方法の詳細については、[Administration > Troubleshooting](#)を参照してください。

### 4.16.4. アクティベーションキー

Activation keys are used to ensure that your clients have the correct software entitlements, are connecting to the appropriate channels, and are subscribed to the relevant groups. Each activation key is bound to an organization, which you can set when you create the key.

アクティベーションキーの詳細については、[Client-configuration > Activation-keys](#)を参照してください。

## 4.16.5. Terraformによって作成されたクライアントの自動登録

Terraformによって作成された新しいクライアントはUyuniに自動的に登録できます。次の2つの登録方法があります。

- cloud-initベースの登録
- リモート実行プロビジョナーベースの登録

### 4.16.5.1. cloud-initベースのクライアント登録

新しく作成された仮想マシンを自動的に登録するには、cloud-initを活用して登録することをお勧めします。このソリューションでは、ホストへのSSH接続を設定する必要がありません。また、クライアントの作成に使用するツールに関係なく使用することができます。

ユーザは、マシンをUyuniに自動的に登録するために、Terraformを使用してイメージを展開するときにユーザデータのセットを渡すことができます。`user_data`はブートストラップ時にマシンを初めて起動したときのみ1回だけ実行されます。

cloud-initを使用してクライアントを登録する前にユーザは以下を設定する必要があります。

- ブートストラップスクリプト: 詳細については、[Client-configuration > Registration-bootstrap](#)を参照してください。
- アクティベーションキー: 詳細については、[Client-configuration > Activation-keys](#)を参照してください。

次のコマンドを実行すると、ブートストラップスクリプトがダウンロードされ、新しいマシン作成時にそのマシンが登録されます。これをcloud-init設定に追加する必要があります。

```
curl -s http://hub-server.tf.local/pub/bootstrap/bootstrap-default.sh |  
bash -s
```



**user\_data**が更新されてプロビジョニングが変更されると必ず、Terraformはそのマシンを破棄してから新しいIPなどを使用して再作成します。

AWSでのcloud-initに関する詳細については、[https://registry.terraform.io/providers/hashicorp/template/latest/docs/data-sources/cloudinit\\_config](https://registry.terraform.io/providers/hashicorp/template/latest/docs/data-sources/cloudinit_config)を参照してください。

cloud-initの例については、[https://registry.terraform.io/providers/hashicorp/cloudinit/latest/docs/data-sources/cloudinit\\_config#example-usage](https://registry.terraform.io/providers/hashicorp/cloudinit/latest/docs/data-sources/cloudinit_config#example-usage)を参照してください。

### 4.16.5.2. remote-execプロビジョナーベースの登録

新しく作成した仮想マシンの自動登録の2番目のソリューションではTerraformのremote-execプロビジョナーを使用します。

remote-execプロビジョナーは新しく作成されたマシンとやり取りします。これは、SSH接続を開き、そのマシンでコマンドを実行できます。



リモート実行プロビジョナーを使用してクライアントを登録するとき、ユーザは、Terraformを実行しているマシンが、新しい仮想マシン作成後にそのマシンにアクセスできることを確認する必要があります。

他の要件は、[\[cloud-initベースのクライアントの登録\]](#)と同じです。

- ・ ブートストラップスクリプト: 詳細については、[Client-configuration › Registration-bootstrap](#)を参照してください。
- ・ アクティベーションキー: 詳細については、[Client-configuration › Activation-keys](#)を参照してください。

次のコマンドを実行すると、ブートストラップスクリプトがダウンロードされ、新しいマシン作成時にそのマシンが登録されます。これは、実行するリモートコマンドとして定義する必要があります。

```
curl -s http://hub-server.tf.local/pub/bootstrap/bootstrap-default.sh |  
bash -s
```

remote-execプロビジョナーの詳細については、<https://www.terraform.io/docs/provisioners/remote-exec.html>を参照してください。

# Chapter 5. クライアントのアップグレード

クライアントは、基盤となるオペレーティングシステムのバージョン設定システムを使用し、定期的なアップグレードが必要です。

For SCC registered clients using SUSE operating systems, you can perform upgrades within the Uyuni Web UI. For supported SUSE Linux Enterprise 15 upgrade paths, see <https://documentation.suse.com/sles/15-SP4/html/SLES-all/cha-upgrade-paths.html>

SLE 12を実行しているクライアントをSLE 15にアップグレードするには、アップグレードは自動化されていますが、アップグレードを始める前に準備手順を実行する必要があります。 詳細については、**Client-configuration** › **Client-upgrades-major**を参照してください。

コンテンツライフサイクルマネージャを使用してクライアントのアップグレードを自動化することもできます。 詳細については、**Client-configuration** › **Client-upgrades-lifecycle**を参照してください。

For more information about product migration such as service pack upgrades, openSUSE Leap minor version upgrades, or openSUSE Leap to SUSE Linux Enterprise migrations, see **Client-configuration** › **Client-upgrades-product-migration**.

登録を取り消したopenSUSE Leapクライアントのアップグレードの詳細については、**Client-configuration** › **Client-upgrades-uyuni**を参照してください。

## 5.1. Client - Major version upgrade

クライアントには、インストールされているオペレーティングシステムで利用できる最新のサービスパック(SP)があり、最新の更新がすべて適用されている必要があります。 システムが最新でありすべての更新が正しくインストールされていることを開始前に確認してください。

アップグレードは、YaSTおよびAutoYaSTによって制御されます。Zypperは使用しません。

### 5.1.1. Prepare to migrate

クライアントをSLE 12からSLE 15 に移行する前に、次の作業を行う必要があります。

#### Procedure

1. インストールメディアの準備
2. 自動インストールのディストリビューションの作成
3. アクティベーションキーの作成
4. AutoYaSTプロファイルのアップロード

Procedure: Preparing installation media (for example, SLE 15 SP2)

1. Uyuniサーバで、SLE 15 SP2インストールメディア用にローカルディレクトリを作成します。

```
mkdir -p /srv/images/sle15sp2
```

2. インストールソースでISOイメージをダウンロードし、ISOイメージをサーバにマウントします。

```
mount -o loop DVD1.iso /mnt/
```

3. マウントしたISOからローカルファイルシステムにすべてコピーします。

```
cp -r /mnt/* /srv/images/sle15sp2
```

4. コピーが完了したら、ISOイメージをアンマウントします。

```
umount /mnt
```



このイメージはUnified Installerであり、複数の自動インストールのディストリビューション用に使用できます。

Procedure: Creating an autoinstallable distribution

1. UyuniのWeb UIで、**システム自動インストールストリビューション**に移動し、**ディストリビューションの作成**をクリックします。
2. [ディストリビューション名] セクションで、次のパラメータを使用します。
  - [ディストリビューション名] セクションに、ディストリビューションの固有の名前を入力します。半角の英字、数字、ハイフン、ピリオド、および下線のみを使用し、5文字以上にします。たとえば、sles15sp2-x86\_64です。
  - [インストールソース] フィールドに、インストールソースへの絶対パスを入力します。たとえば、/srv/images/sle15sp2です。
  - [SLE-Product-SLES15-SP2-Pool for x86\_64] フィールドで、SLE-Product-SLES15-SP2-Pool for x86\_64を選択します。
  - [SUSE Linux Enterprise 15] フィールドで、[SUSE Linux Enterprise 15] を選択します。
  - [インストールオプション] フィールドに、インストールでブート時にカーネルに渡すオプションを入力します。  
install=パラメータおよびself\_update=0  
pt.options=self\_updateパラメータはデフォルトで追加されます。
  - インストールしたシステムを初めてブートするときにカーネルに渡すオプションを[インストールオプション]セクションに入力します。
3. **ディストリビューションの作成**をクリックして

古いSLE 12ベースチャンネルから新しいSLE 15チャンネルに切り替えるには、アクティベーションキーが必要です。

要です。

プロシージャ: アクティベーションキーの作成

1. UyuniサーバのWeb UIで、**システム** › **アクティベーションキー**に移動し、[...]をクリックします。
2. キーの説明を入力します。
3. キーを入力するか空白のままにし、自動キーを生成します。
4. オプション: 使用量を制限する場合、[...]テキストフィールドに値を入力します。
5. SLE-Product-SLES15-SP2-Pool for x86\_64ベースチャンネルを選択します。
6. オプション: [...]を選択します。For more information, see <https://documentation.suse.com/sles/15-SP4/html/SLES-all/article-modules.html>.
7. 「[アクティベーションキーの作成]」をクリックします。
8. [...]タブをクリックし、必要なチャンネルを選択します。
9. 「[キーの一更新]」をクリックします。

## 5.1.2. 自動インストールプロファイルの作成

自動インストールプロファイルには、システムをインストールするために必要なインストールデータおよび設定データがすべて含まれています。インストール完了後に実行するスクリプトを含めることもできます。手始めに使用できるスクリプトのサンプルは、<https://github.com/SUSE/manager-build-profiles/tree/master/AutoYaST>を参照してください。

For valid AutoYaST upgrade settings, see <https://doc.opensuse.org/projects/autoyast/#CreateProfile-upgrade>.

Procedure: Creating an autoinstallation profile

1. UyuniのWeb UIで、**システム** › **自動インストール** › **プロファイル**に移動し、自動インストールプロファイルのスクリプトをアップロードします。

手始めに使用できるスクリプトのサンプルは、

<https://github.com/SUSE/manager-build-profiles/tree/master/AutoYaST>を参照してください。

2. [...] フィールドにautoupgrade=1と入力します。

Y2DEBUG=1オプションを含めることもできます。デバッグ設定は不要ですが、問題が発生したときの調査に役立ちます。



Azureクラウドで実行されているクライアントは、  
 [...]にtextmode=1 console=ttyS0を追加する  
必要があります。

3. 自動インストールプロファイルを貼り付けるか、またはファイルアップロードフィールドを使用します。

4. [作成] をクリックして保存します。
5. アップロードしたプロファイルで変数を設定する必要がある場合、**システム**、**自動インストール**、**プロファイル**に移動し、編集するプロファイルを選択し、[...] タブに移動します。

次のフォーマットを使用して必要な変数を指定します。

```
<key>=<value>
```

### 5.1.3. 移行

自動インストールプロファイルで参照するチャンネルがすべて使用可能で完全に同期していることを開始前に確認してください。

/var/log/rhn/reposync/<channel-label>.logでミラーリングの進捗状況を監視できます。

プロシージャ: 移行

1. UyuniサーバのWeb UIで、[...] に移動し、アップグレードするクライアントを選択します。
2. [...] タブに移動し、アップロードした自動インストールプロファイルを選択します。
3. [自動インストールをスキップしてカスケードする] チェックボックスにマークして、[次へ] ボタンをクリックします。ファイルがダウンロードされ、ブートローダのエントリが変更され、再起動され、アップグレードが開始されます。

クライアントは、Uyuniサーバと次に同期するときに、再インストールジョブを受け取ります。再インストールジョブは、新しいカーネルパッケージおよびinitrdパッケージをフェッチします。また、新しいカーネルパッケージおよびinitrdパッケージへのポインタを含む新しい/boot/grub/menu.lst (GRUB Legacy)または/boot/grub2/grub.cfg (GRUB 2)を書き込みます。

クライアントが次にブートするとき、grubを使用して、新しいカーネルとそのinitrdをブートします。PXEブートはこのプロセス中に使用されません。

ジョブがフェッチされた約3分後に、クライアントは再起動するためにシャットダウンします。



For clients, use the spacewalk/minion\_script snippet to register the client again after migration has completed.

## 5.2. コンテンツライフサイクルマネージャを使用したアップグレード

管理するSUSE Linux Enterprise Serverクライアントが多数ある場合、コンテンツライフサイクルマネージャを使用してインプレースアップグレードを自動化できます。

## 5.2.1. アップグレードの準備

クライアントをアップグレードするには、その前に次の準備を行う必要があります。

- ・ コンテンツライフサイクルプロジェクトの作成
- ・ アクティベーションキーの作成
- ・ 自動インストールのディストリビューションの作成
- ・ 自動インストールプロファイルの作成

プロシージャ: コンテンツライフサイクルプロジェクトの作成

1. ディストリビューション用のコンテンツライフサイクルプロジェクトを作成します。

詳細については、**Administration > Content-lifecycle**を参照してください。

2. プロジェクトの名前は、短いがわかりやすい名前にします。
3. ディストリビューションに必要なソースチャンネルモジュールをすべて含めます。
4. 必要に応じてフィルタを追加し、1つ以上の環境を設定します。

プロシージャ: アクティベーションキーの作成

1. ディストリビューション用のアクティベーションキーを作成します。

詳細については、**Client-configuration > Activation-keys**を参照してください。

2. フィルタされたプロジェクトチャンネルのすべてがアクティベーションキーに含まれていることを確認します。

プロシージャ: 自動インストール可能なディストリビューションの作成

1. 移行するベースチャンネルごとに自動インストールのディストリビューションを作成します。

詳細については、**Client-configuration > Autoinst-distributions**を参照してください。

2. コンテンツライフサイクルプロジェクトの名前を表すディストリビューションラベルを付けます。
3. [――――――――――――――] フィールドで、使用しているSLESのバージョンを選択します。

プロシージャ: 自動インストールプロファイルの作成

1. アップグレードするディストリビューションおよびサービスパックごとに自動インストールプロファイルを作成します。

詳細については、**Client-configuration > Autoinst-profiles**を参照してください。

2. プロファイルで変数を使用して、異なるライフサイクル環境を区別できます。

自動インストールプロファイルのサンプルについては、<https://github.com/SUSE/manager-build-profiles/tree/master/AutoYaST>を参照してください。

インプレースアップグレードを自動化するための自動インストールプロファイルでこれらの次の変数を使用します。

リスト 1. 例: 自動インストールプロファイルで使用する変数

```
registration_key=1-15sp1-demo-test
org=1
channel_prefix=15sp1-demo-test
distro_label=15sp1-demo-test
```

リスト 2. 例: 自動インストールプロファイルで使用するエントリ

```
<listentry>
    <ask_on_error config:type="boolean">true</ask_on_error>

    <media_url>https://$redhat_management_server/ks/dist/child/$channel_prefix-sle-module-web-scripting15-sp1-pool-x86_64/$distro_label</media_url>
        <name>$channel_prefix SLE-Module-Web-Scripting15-SP1 Pool for x86_64
    </name>
        <product>Web Scripting Module 15 SP1 x86_64 Pool</product>
    </listentry>
```

## 5.2.2. アップグレード

サーバをアップグレードする準備ができたら、クライアントをプロビジョニングできます。

プロシージャ: クライアントのプロビジョニング

1. UyuniのWeb UIで、**システム** > **システム一覧**に移動し、プロビジョニングするクライアントを選択してシステムセットマネージャに追加します。
2. **システム** > **システムセットマネージャ** > **概要**に移動し、[-----] タブをクリックします。
3. 使用する自動インストールプロファイルを選択します。

For clients that are able to use PXE, the migration is automated as soon as you have provisioned them. For all other clients, you can use Cobbler to perform the upgrade.

Procedure: Using Cobbler to Upgrade Clients

1. コマンドプロンプトで、rootとして、利用できるCobblerプロファイルを確認します。

```
cobbler profile list
```

2. 選択したプロファイルおよびディストリビューションでISOファイルを構築します。

```
cobbler buildiso --iso=/tmp/SLE_15-sp1.iso --profiles=SLE_15
-sp1:1:Example --distro=SLE_15-sp1
```

CD-ROMを使用したクライアントのプロビジョニングの詳細については、[Client-configuration > Autoinst-cdrom](#)を参照してください。

## 5.3. 製品移行

製品を移行すると、SLEベースのクライアントシステムをサービスパック(SP)レベルから最新版にアップグレードできます。たとえば、SUSE Linux Enterprise Server 15 SP1をSUSE Linux Enterprise Server 15 SP2に移行できます。

製品の移行は、同じメジャーバージョン内でアップグレードするためのものです。SUSE Linux Enterprise Server 12からSUSE Linux Enterprise Server 15への移行には、製品の移行は使用できません。メジャーアップグレードの詳細については、[Client-configuration > Client-upgrades-major](#)を参照してください。

openSUSE Leapを新しいマイナーバージョンまたは対応するSUSE Linux Enterprise Server SPレベルに移行することもできます。次に例を示します。

- openSUSE Leap 15.1 to 15.2
- openSUSE Leap 15.1 to SUSE Linux Enterprise Server 15 SP1
- openSUSE Leap 15.5からSUSE Linux Enterprise Server 15 SP5

SUSE Linux Enterprise Server 12以降では、SUSE Customer Centerがサービスパックを提供している場合、SUSEはサービスパックのスキップをサポートしています。たとえば、SUSE Linux Enterprise Server 15からSP2にアップグレードできます。SP1はインストールされません。

For supported SUSE Linux Enterprise Server upgrade paths, see <https://documentation.suse.com/sles/15-SP4/html/SLES-all/cha-upgrade-paths.html#sec-upgrade-paths-supported>.



移行中、Uyuniは、インストール前に必要なライセンス(EULA)を自動的に受け入れます。

### 5.3.1. 単一システムの移行

製品の移行を開始する前に:

- 保留中の更新やパッチがないことを確認してください。クライアントシステムの詳細、概要ページの [...] を確認し、提供されているすべての更新またはパッチをインストールします。クライアントシステムが最新でない場合、製品移行が失敗する可能性があります。
- ターゲット製品のすべてのチャンネルが完全に同期されていることを確認してください。Web UIで同期ステータスを確認するには、管理 > セットアップウィザード > 製品ページに移動します。
- 万一に備えて、作業システムのバックアップを用意してください。製品の移行にはロールバック機能

はありません。移行プロセージャが始まると、ロールバックできません。

プロセージャ: 単一システムの移行の実行

1. システム・概要ページからクライアントを選択します。
2. クライアントのシステム詳細ページから、ソフトウェア・製品移行タブに移動します。
3. ターゲットの移行パスを選択し、[チャンネルの選択] をクリックします。
4. [ベースチャンネル] - [ベースチャンネル] ページから、正しいベースチャンネルを選択し、[ベースチャンネル] および追加の [ベースチャンネル] を含めます。
5. オプション: [オプション] にチェックを付け、ベンダを変更したパッケージをインストールできるようにします。チェックを付けると、移行の開始前に詳細を示す通知が表示されます。



openSUSE LeapをSUSE Linux Enterprise Serverに移行するには、[オプション] オプションにチェックを付ける必要があります。

6. チャンネルを正しく設定したら [移行のスケジュール] をクリックします。

### 5.3.2. 製品の大量移行

多数のクライアントを次のSPバージョンに移行する場合、Uyuni APIコールを使用できます。

spacecmdコマンドラインツールは、system\_scheduleproductmigrationサブコマンドを提供します。このコマンドを使用して、多数のクライアントの次のマイナーバージョンへの移行をスケジュールできます。

#### 5.3.2.1. 製品の大量移行の実行



製品の大量移行操作は危険です。プロセスは徹底的にテストする必要があります。少なくとも、最初に予行演習を行ってください。

システムを意図せずにアップグレードしないように注意してください。

手順: 製品の大量移行の実行

1. 実行可能な移行ターゲットをリストし、移行するシステムIDをメモします。

```
spacecmd api -- system.listMigrationTargets -A 1000010001
```

2. それぞれのシステムIDに対して、listMigrationTargetを呼び出し、目的の製品が使用可能であることを確認します。

- システムIDに使用可能なターゲットがある場合は、system.scheduleProductMigrationを呼び出します。

- 目的のターゲットを使用できない場合、そのシステムをスキップします。

3. 次のテンプレートを環境に合わせます。

```
target = '[....]'
basechannel = 'channel-label'
system_ids = [1, 2, 3]

session = auth.login(user, pass)
for system in system_ids
    if system.listMigrationTargets(session, system).ident == target
        system.scheduleProductMigration(session, system, target,
basechannel, [], False, <now>)
    else
        print "Cannot migrate to requested target -- skipping system"
    endif
endfor
```

### 5.3.2.2. 例: SLES 15 SP2からSLES 15 SP3

この例では、大量移行を容易にするためにグループが一時的に作成されます。

プロシージャ: 製品の大量移行グループの作成

- UyuniのWeb UIで、**システム**、**システムグループ**に移動し、**[グループの作成]**をクリックします。
- グループに`mpm-target-sles15sp3`という名前を付けます。
  - 同じベースチャンネルにサブスクライブしているシステムのみを、作成したグループに追加する必要があります。この例では、`SLE-Product-SLES15-SP2-Pool for x86_64`にサブスクライブされているシステムのみをグループに追加する必要があります。

グループへのクライアントの追加の詳細については、[Client-configuration Systemgroups.pdf](#)を参照してください。

プロシージャ: グループへのシステムの追加

- 次のコマンドを実行して、グループ内のすべてのシステムのターゲットを取得します。

```
spacecmd -- system_listmigrationtargets group:mpm-target-sles15sp3
```

- コマンドは「ID」の文字列を出力します。

- すべてのシステムについて報告されるターゲットのみを選択してください。
- 文字列は、他のコマンドのMIGRATIONTARGETの識別子です。

spacecmdサブコマンドsystem\_scheduleproductmigrationとsystem\_listmigrationtargetsは、グループの一部であるすべてのシステムをループしています。



If there are 100 systems in the group, you will see 100 actions scheduled.

グループ内のすべてのシステムは同じ移行ターゲットをサポートする必要があります。

#### プロシージャ: 大量移行コマンドの実行

1. system\_scheduleproductmigrationコマンドの構文は次のとおりです。

```
spacecmd -- system_scheduleproductmigration <SYSTEM>
<BASE_CHANNEL_LABEL> \
<MIGRATION_TARGET> [options]
```

2. この例では、グループmpm-target-sles15sp3内のすべてのシステムをSLES 12 SP2からSLES 15 SPにアップグレードするには、コマンドラインで次のように入力します。

```
spacecmd -- system_scheduleproductmigration group:mpm-target-
sles15sp3 \
sle-product-sles15-sp3-pool-x86_64 "[190,203,195,1242]" -d
```

#### 5.3.2.2.1. 必須の構文の説明

system\_scheduleproductmigrationの構文の使用方法とオプションを表示するには、次のコマンドを実行します。

```
spacecmd system_scheduleproductmigration help
```

##### <SYSTEM>

この例では、作成したグループを使用して、そのグループからすべてのシステムを選択します。

```
group:mpm-target-sles15sp3
```

##### <BASE\_CHANNEL\_LABEL>

これは、ターゲットベースチャンネルのラベルです。この場合、システムはSLES 15 SP3にアップグレードされており、ラベルはsle-product-sles15-sp3-pool-x86\_64です。

現在ミラーリングされているすべてのベースチャンネルのリストを表示するには、次のコマンドを実行します。

```
spacecmd softwarechannel_listbasechannels.
```

現在のベースチャンネルで使用可能なターゲットでない限り、チャンネルにアップグレードできないことに注意してください。

#### <MIGRATION\_TARGET>

グループgroup:mpm-target-sles15sp3内のシステムのこの値を特定するには、次のコマンドを実行します。

```
spacecmd -- system_listmigrationtargets group:mpm-target-sles15sp3
```

MIGRATION\_TARGETパラメータは、次の形式で渡す必要があります。角括弧の副次作用を防ぐために、シェルの引用符が必要であることに注意してください。

```
"[190,203,195,1242]"
```

#### オプション

- -s START\_TIME
- -d 予行演習モード(実際には処理を行わない) (実際の移行の前に予行演習を行うことを推奨)
- -c (子チャンネル) (カンマ区切りで子チャンネルのラベルを指定する。空白は使用しないこと)

この場合、-dオプションが含まれています。このオプションは予行演習が成功した後に削除できます。

成功した場合、スケジュールされたシステムごとのコマンド出力は次のようになります。

```
Scheduling Product migration for system mpm-sles152-1
Scheduled action ID: 66
```

You can also track the action, in this case the dry run, in the Web UI for a given system in the group. From the system details page of the client, navigate to **Events > History**. If there are any failures during the dry run, the system should be investigated.

If all is well, the -d option can be removed from the command to run the real migration. After the migration is complete, you can reboot the system from the Uyuni Web UI.

## 5.4. Uyuniクライアントのアップグレード

このセクションでは、例としてopenSUSE Leapを使用します。

### 5.4.1. アップグレードの準備

プロシージャ: クライアントのアップグレードの準備

- Uyuni サーバのコマンドプロンプトで root になり、 spacewalk-common-channels コマンドを特定のチャンネルに対して実行します。

```
spacewalk-common-channels \
opensuse_leap15_4\
opensuse_leap15_4-non-oss \
opensuse_leap15_4-non-oss-updates \
opensuse_leap15_4-updates \
opensuse_leap15_4-uyuni-client
```

- spacewalk-repo-syncを使用して、すべてのチャンネルを完全に同期します。 リポジトリのURLが定義済みの場合、[installation-and-upgrade:proxy-uyuni.pdf](#)で続行します。
- UyuniサーバのWeb UIで、**ソフトウェア**、**管理**、**チャンネル**に移動し、Uyuni Client Tools for openSUSE Leap 15.4 (x86\_64)チャンネル名をクリックします。
- 右上隅の**[リポジトリの管理]**をクリックします。
- [リポジトリ] タブをクリックし、[External - Uyuni Client Tools for openSUSE Leap 15.3 (x86\_64)] を選択します。
- [Update Repositories]** (リポジトリの更新) をクリックします。
- リポジトリ、同期サブタブに移動し、**[今すぐ同期]**をクリックします。
- openSUSE Leap 15.4 (x86\_64)およびExternal - openSUSE Leap 15.3 (x86\_64)で同じ操作をします。

openSUSE Leap 15.4 (x86\_64)を展開し、パッケージが入力されているすべての子チャンネルを表示します。

### 5.4.2. アップグレード

クライアントをアップグレードするには、ソフトウェアリポジトリを置き換え、ソフトウェアを更新し、最後にクライアントを再起動します。

プロシージャ: クライアントのアップグレード

- UyuniサーバのWeb UIで、**[システム]** に移動し、クライアントの名前をクリックします。
- ソフトウェア**、**ソフトウェアチャンネル**をクリックし、一覧にリストされているopenSUSE Leap 15.5チャンネルをベースチャンネルとして選択します。

3. [――――――――――――] ペインで、15.5子チャンネルを選択します。
4. [次へ]、[――――――――――――――――]、[確認]をクリックします。
5. ソフトウェア、パッケージ、アップグレードをクリックし、クライアントで更新するパッケージをすべて選択してから、[パッケージのアップグレード]をクリックし、詳細を確認し、[確認]をクリックして更新を終了します。
6. クライアントを再起動します。

多数のクライアントを更新する必要がある場合、Uyuniサーバでこのコマンドシーケンスのアクションチェーンを作成できます。アクションチェーンを使用して、複数のクライアントで同時に更新を実行できます。

# Chapter 6. クライアントの削除

If you need to remove a client from your Uyuni Server, you can use the Web UI to delete it. You can also remove a client from the command line.

## 6.1. Web UIでクライアントを削除する

プロシージャ: クライアントの削除

1. UyuniのWeb UIで、**システム** › **システム一覧**に移動し、削除するクライアントを選択します。
2. **[システムの削除]**をクリックします。
3. 詳細を確認し、**[プロファイルの削除]**をクリックして確認します。
4. Saltクライアントの場合、Uyuniは、追加の設定をクリーンアップしようとします。 クライアントに接続できない場合、削除をキャンセルするオプションや、設定ファイルをクリーンアップせずにクライアントを削除するオプションがあります。

システムセットマネージャを使用して複数のクライアントを削除することもできます。 システムセットマネージャの詳細については、[Client-configuration](#) › [System-set-manager](#)を参照してください。



Cleaning up a Salt client only disables Salt and stops the service if possible. It does not uninstall the package.

## 6.2. コマンドラインでSaltクライアントを削除する(APIコールを使用)

プロシージャ: サーバからのクライアントの削除

1. FQDN (完全修飾ドメイン名)を持つクライアントを削除します。

```
spacecmd system_delete FQDN
```

spacecmd system\_deleteはSaltキーも削除します。

system\_deleteは以下のオプションを提供します。

```
usage: system_delete [options] <SYSTEMS>

options:
  -c TYPE - Possible values:
    * 'FAIL_ON_CLEANUP_ERR' - fail in case of cleanup error,
    * 'NO_CLEANUP' - do not cleanup, just delete,
    * 'FORCE_DELETE' - try cleanup first but delete server
anyway
      in case of error
```

## 6.3. コマンドラインからのクライアントの削除

### 6.3.1. Saltクライアント

このプロセスはUyuniクライアントのみを対象としています。Uyuniサーバ自体では実行しないでください。



Red Hat Enterprise Linux、Debian、またはクローンを実行しているクライアントでは、次のプロシージャを実行しないでください。`zypper`の代わりに、`yum`、`dnf`、`apt`のような同等のパッケージヤコマンドを使用します。

プロシージャ: SLES 12および15 Saltクライアントの削除

1. salt-minionサービスを停止します。

```
systemctl stop salt-minion
```

2. リポジトリと設定ファイルを削除します。

```
rm /etc/zypp/repos.d/susemanager\channels.repo
rm -r /etc/sysconfig/rhn/
rm -r /etc/salt/
```

3. クライアントパッケージを削除します。

```
zypper rm salt salt-minion python*-salt sle-manager-tools-release
```

プロシージャ: Salt Bundleクライアント - 手動登録のクリーンアップ

1. 登録解除するには、次のコマンドを実行します。

```
systemctl stop venv-salt-minion
zypper rm -y venv-salt-minion
rm /etc/zypp/repos.d/susemanager\channels.repo /etc/venv-salt-
minion/*
rm -r /etc/venv-salt-minion/*
```

Salt Bundleについては、[Client-configuration › Contact-methods-saltbundle](#)を参照してください。

このプロセスはUyuniクライアントのみを対象としています。Uyuniサーバ自体では実行しないでください。

# Chapter 7. クライアントの操作

In addition to registering, upgrading, installing software, or deleting clients other operations can be performed. Uyuni clients can be managed individually or as a set of clients. A set of clients can grouped with System Set Manager for a one time action or permanently with System Groups. For advanced client configuratin options general Configuration Management is available. You can obtain Custom System Information, power on or off, and reboot clients using the Uyuni Web UI.

The following sections contain detailed descriptions for each of these operations.

## 7.1. パッケージ管理

クライアントは、パッケージを使用してソフトウェアをインストール、アンインストール、およびアップグレードします。

クライアントでパッケージを管理するには、[...]に移動し、管理するクライアントをクリックし、**システム** > **ソフトウェア** > **パッケージ**サブタブに移動します。このセクションで使用できるオプションは、選択したクライアントのタイプ、および現在のチャンネルのサブスクリプションによって異なります。



パッケージをインストールまたはアップグレードするとき、ライセンスまたはEULAは自動的に受け入れられます。

ほとんどのパッケージ管理アクションは、アクションチェーンに追加できます。アクションチェーンの詳細については、**Reference** > **Schedule**を参照してください。

### 7.1.1. パッケージの検証

クライアントにインストールしたパッケージがインストール元のデータベースの現在の状態と一致していることを確認できます。インストールしたパッケージのメタデータが、ファイルのチェックサム、ファイルサイズ、パーミッション、オーナー、グループ、タイプなど、データベースの情報と比較されます。

プロシージャ: インストールしたパッケージの検証

1. UyuniのWeb UIで、[...]に移動し、パッケージをインストールしたクライアントをクリックし、**システム** > **ソフトウェア** > **パッケージ** > **検証**サブタブに移動します。
2. 検証するパッケージを選択し、**[選択したパッケージの検証]**をクリックします。
3. 検証を完了したら、**システム** > **イベント** > **履歴**に移動し、結果を表示します。

### 7.1.2. パッケージの比較

保存されているプロファイルでクライアントにインストールされたパッケージを比較できます。または別のクライアントにインストールされたパッケージと比較できます。比較を実行するとき、選択したクライアントを一致するように変更できます。

パッケージをプロファイルと比較するには、プロファイルを保存済みである必要があります。プロファイルは、現在インストールされているクライアントのパッケージから作成されます。プロファイルを作成したら

使用して、同じインストール済みパッケージで別のクライアントをインストールできます。

プロシージャ: 保存されているプロファイルの作成

1. UyuniのWeb UIで、[...]に移動し、プロファイルのベースになっているクライアントをクリックし、システム、ソフトウェア、パッケージ、プロファイルサブタブに移動します。
2. [システムプロファイルの作成]をクリックします。
3. プロファイルの名前と説明を入力し、[プロファイルの作成]をクリックします。

プロシージャ: クライアントパッケージの比較

1. UyuniのWeb UIで、[...]に移動し、比較するクライアントをクリックし、システム、ソフトウェア、パッケージ、プロファイルサブタブに移動します。保存されているプロファイルを比較するには、プロファイルを選択し、[比較]をクリックします。
2. 別のクライアントと比較するには、クライアント名を選択し、[比較]をクリックし、2つのクライアントの差異一覧を表示します。
3. 選択したクライアントにインストールするパッケージを確認し、削除するパッケージのチェックを外し、[パッケージを同期]をクリックします。

## 7.2. パッチ管理

組織内でカスタムパッチを使用してクライアントを管理できます。この方法では、カスタムチャンネルのパッケージのパッチ警告の発行、パッチインストールのスケジュール、組織間のパッチの管理を実行できます。

### 7.2.1. パッチの作成

カスタムパッチを使用するには、パッチを作成し、これにパッケージを追加し、1つまたは複数のチャンネルに追加する必要があります。

プロシージャ: カスタムパッチの作成

1. UyuniのWeb UIで、パッチ、パッチの管理に移動し、[パッチの作成]をクリックします。
2. [...]セクションで、次の詳細を使用します。
  - [...]フィールドにパッチの短い説明を入力します。
  - [...]フィールドにパッチのラベルを入力します。組織の命名規則を使用して、パッチの管理を簡単にすることをお勧めします。
  - [...]フィールドにパッチのリリース番号を入力します。たとえば、このパッチの最初のバージョンの場合、1を使用します。
  - [...]フィールドで、使用するパッチのタイプを選択します。たとえば、エラーを修正するパッチには [...]を選択します。
  - [...]のアドバイザリタイプを選択した場合、使用するセキュリティレベルを [...]フィールドで選択します。
  - [...]フィールドに、パッチが参照する製品の名前を入力します。

- オプション: [Author] (作成者) フィールドにパッチの作成者の名前を入力します。
- [~~~~~]、[~~~~]、[~~~~~] の各フィールドにパッチに関する追加情報に入力します。

3. オプション: [~~~~] セクションで、次の詳細を使用して関連するバグの情報を指定します。

- [ID] フィールドにバグ番号を入力します。
- [~~~~] フィールドにバグの短い説明を入力します。
- [Bugzilla URL] フィールドにバグのアドレスを入力します。
- [~~~~~] フィールドにバグに関するキーワードを入力します。複数のキーワードの間ではカンマを使用してください。
- [~~~~~]、[~~~~] の各フィールドにバグに関する追加情報を入力します。
- 新しいパッチを追加するチャンネルを1つまたは複数選択します。

4. **[パッチの作成]** をクリックします。

既存のパッチを複製してパッチを作成することもできます。複製では、パッケージの関連づけが保持され、パッチの発行が簡素化されます。

プロシージャ: パッチの複製

1. UyuniのWeb UIで、**パッチ**、**パッチの複製**に移動します。
2. [~~~~~] フィールドで、複製するパッチのソフトウェアチャンネルを選択します。
3. 複製する1つまたは複数のパッチを選択し、**[パッチの複製]** をクリックします。
4. 複製したパッチを追加するチャンネルを1つまたは複数選択します。
5. 詳細を確認し、複製を開始します。

パッチを作成したら、そのパッチにパッケージを割り当てることができます。

プロシージャ: パッチにパッケージを割り当てる

1. UyuniのWeb UIで、**パッチ**、**パッチの管理**に移動し、パッチのアドバイザリ名をクリックしてパッチの詳細を表示します。
2. **パッケージ**、**追加**タブに移動します。
3. [~~~~~] フィールドで、パッチに割り当てるパッケージが含まれているソフトウェアチャンネルを選択し、**[パッケージの表示]** をクリックします。[All packages] (管理しているすべてのパッケージ) を選択して、すべてのチャンネルで使用できるパッケージを表示できます。
4. 含めるパッケージを確認し、**[パッケージの追加]** をクリックします。
5. パッケージの詳細を確認し、**[確認]** をクリックしてパッチに適用します。
6. **パッケージ**、**一覧表示/削除**タブに移動し、パッケージが正しく割り当てられていることを確認します。

パッケージをパッチに割り当てるとき、パッチキャッシュが更新され、変更が反映されます。キャッシュの更新には数分かかる場合があります。

既存のパッチの詳細を変更する必要がある場合、[パッチ] ページから実行できます。

プロシージャ: 既存のパッチ警告の編集および削除

1. UyuniのWeb UIで、**パッチ**タブに移動します。
2. パッチのアドバイザリ名をクリックし、パッチの詳細を表示します。
3. 必要に応じて変更し、**[パッチの更新]** をクリックします。
4. パッチを削除するには、[パッチ] ページでパッチを選択し、**[パッチの削除]** をクリックします。パッチの削除には、数分かかる場合があります。

## 7.2.2. クライアントへのパッチの適用

パッチの用意ができたら、クライアントに適用できます。その際、単独または他のパッチと一緒に適用できます。

パッチ内の各パッケージは、1つまたは複数のチャンネルの一部です。クライアントがチャンネルにサブスクライブされていない場合、更新はインストールされません。

対象の更新より新しいバージョンのパッケージがクライアントにすでにインストールされている場合、その更新はインストールされません。古いバージョンのパッケージがクライアントにインストールされている場合、そのパッケージはアップグレードされます。

プロシージャ: 適用可能なすべてのパッチを適用する

1. UyuniのWeb UIで、**システム**、**概要**に移動し、更新するクライアントを選択します。
2. **ソフトウェア**、**パッチ**タブに移動します。
3. **[すべてを選択]** をクリックして適用可能なすべてのパッチを選択します。
4. **[パッチの適用]** をクリックしてクライアントを更新します。

管理者特権でサインインしている場合、クライアントに対してより大規模なパッチアップグレードも実行できます。

プロシージャ: 1つのパッチを複数のクライアントに適用する

1. UyuniのWeb UIで、**パッチ**、**パッチリスト**に移動します。
2. 適用するパッチを見つけ、そのパッチの番号列で番号をクリックします。
3. パッチの適用先にするクライアントを選択し、**[パッチの適用]** をクリックします。
4. クライアントの一覧を確認し、更新を実行します。

プロシージャ: 複数のパッチを複数のクライアントに適用する

1. UyuniのWeb UIで、**システム**、**概要**に移動し、更新するクライアントにチェックを付け、**システムセットマネージャ**に追加します。
2. **システム**、**システムセットマネージャ**に移動し、[タブ] タブに移動します。
3. クライアントに適用するパッチを選択し、**[パッチの適用]** をクリックします。

4. 更新する日時をスケジュールし、[]をクリックします。
5. 更新の進捗を確認するには、**スケジュール**、**待機中の動作**に移動します。



スケジュールされたパッケージ更新は、各クライアントで設定された接続メソッドを使用してインストールされます。 詳細については、**Client-configuration** > **Contact-methods-intro**を参照してください。

## 7.3. システムのロック

システムのロックは、クライアントでアクションが発生しないようにするために使用されます。 たとえば、システムのロックは、クライアントの更新または再起動が行われないようにします。 これは、運用ソフトウェアを実行しているクライアントに対して、または不注意による変更が行われないようにするために役立ちます。 アクションを実行する準備ができたときにシステムのロックを無効にできます。

### 7.3.1. Saltクライアントのシステムのロック

Saltクライアントがロックされている場合、または停止モードになっている場合、アクションをスケジュールできず、Salt実行コマンドが無効になり、黄色のバナーが [-----] ページに表示されます。 このモードでは、Web UIまたはAPIを使用してロックされているクライアントのアクションをスケジュールできますが、アクションは失敗します。



ロックメカニズムはSalt SSHクライアントでは使用できません。

プロシージャ: Saltクライアントのシステムのロック

1. UyuniのWeb UIで、ロックするクライアントの [-----] ページに移動します。
2. [--] タブに移動し、システムのロックの式にチェックを付け、[]をクリックします。
3. 式 > **System Lock** (システムのロック) タブに移動し、[Lock system] (システムのロック) にチェックを付け、[]をクリックします。このページでは、クライアントがロックされているときに特定のSaltモジュールを有効にすることもできます。
4. 変更した場合、highstateを適用する必要がある場合があります。 この場合、Web UIのバナーで通知されます。 システムのロック式を削除するまで、クライアントはロックされたままです。

Saltの停止モードの詳細については、<https://docs.saltstack.com/en/latest/topics/blackout/index.html>を参照してください。

### 7.3.2. パッケージのロック

Package locking can be used on several clients, but different feature sets are available. You must differentiate between SUSE Linux Enterprise and openSUSE (zypp-based) versus Red Hat Enterprise Linux or Debian clients.

#### 7.3.2.1. Zyppベースのシステムでのパッケージのロック

パッケージのロックを使用して、ソフトウェアパッケージの未認可インストールや未認可アップグレードを

防止します。 パッケージがロックされている場合、インストールできないことを示す南京錠のアイコンが表示されます。 ロックされているパッケージをインストールしようとすると、イベントログにエラーとしてレポートされます。

ロックされているパッケージは、インストール、アップグレード、または削除できません。UyuniのWeb UIを使用しても、パッケージマネージャを使用してクライアントマシンで直接操作しても同様です。 ロックされているパッケージは、依存関係のあるパッケージも間接的にロックします。

プロシージャ: パッケージのロックの使用

1. 管理対象システムでソフトウェア › パッケージ › ロックタブに移動し、使用できるパッケージの一覧を表示します。
2. ロックするパッケージを選択し、[Request Lock] (ロックのリクエスト) をクリックします。 ロックをアクティブ化する日時を選択します。 デフォルトでは、できるだけ早くロックをアクティブ化します。 ロックはすぐにはアクティブにできないことに注意してください。
3. パッケージのロックを外すには、ロック解除するパッケージを選択し、[Request Unlock] (ロック解除のリクエスト) をクリックします。 ロックをアクティブ化する場合と同様に、日時を選択します。

### 7.3.2.2. Red Hat Enterprise LinuxやDebianのようなシステムでのパッケージのロック



一部のRed Hat Enterprise LinuxやDebianのようなシステムでは、Saltクライアントでパッケージのロックを使用できます。

Red Hat Enterprise LinuxやDebianのようなシステムでは、パッケージのロックは、ソフトウェアパッケージの未認可アップグレードや削除を防止するためにのみ使用されます。 パッケージがロックされている場合、変更できないことを示す南京錠のアイコンが表示されます。 ロックされているパッケージを変更しようとすると、イベントログにエラーとしてレポートされます。

ロックされているパッケージは、アップグレードまたは削除できません。UyuniのWeb UIを使用しても、パッケージマネージャを使用してクライアントマシンで直接操作しても同様です。 ロックされているパッケージは、依存関係のあるパッケージも間接的にロックします。

プロシージャ: パッケージのロックの使用

1. Red Hat Enterprise Linux 7システムでは、yum-plugin-versionlockパッケージをrootとしてインストールします。 Red Hat Enterprise Linux 8システムでは、python3-dnf-plugin-versionlockパッケージをrootとしてインストールします。 Debianシステムでは、aptツールにロック機能が含まれています。
2. 管理対象システムでソフトウェア › パッケージ › ロックタブに移動し、使用できるパッケージの一覧を表示します。
3. ロックするパッケージを選択し、[Request Lock] (ロックのリクエスト) をクリックします。 ロックをアクティブ化する日時を選択します。 デフォルトでは、できるだけ早くロックをアクティブ化します。 ロックはすぐにはアクティブにできないことに注意してください。
4. パッケージのロックを外すには、ロック解除するパッケージを選択し、[Request Unlock] (ロック解除のリクエスト) をクリックします。 ロックをアクティブ化する場合と同様に、日時を選択します。

## 7.4. 設定管理

クライアントそれぞれを手動で設定するのではなく、設定ファイルおよびチャンネルを使用してクライアントの設定を管理できます。

設定パラメータは、スクリプト化され、設定ファイルに保存されます。 UyuniのWeb UIを使用して設定ファイルを直接書き込むことができます。 または、別の場所にあるファイルをアップロードまたはリンクできます。

Configuration files can be centrally managed. Centrally managed configuration files are provided by global configuration channels and can be applied to any client subscribed to the Uyuni Server.

設定チャンネルは、設定ファイルの編成に使用されます。 クライアントを設定チャンネルにサブスクライブして、必要に応じて設定ファイルを展開できます。

設定ファイルはバージョン管理されるため、設定を追加し、クライアントで設定をテストし、必要に応じて前のリビジョンにロールバックできます。 設定チャンネルを作成したら、さまざまな設定ファイル間の比較や同じ設定ファイルの異なるリビジョン間の比較も実行できます。

Centrally managed configuration files are provided by global configuration channels.

This table shows the supported features, where:

- ✓: この機能はSUSEでサポートされています。
- ✗: この機能はSUSEではサポートされていません。
- ?: この機能は検討中であり、後日使用できる場合と、使用できない場合があります。

表 42. 設定管理でサポートされる機能

Feature	Status
Global Configuration Channels	✓
Deploying Files	✓
Comparing Files	?
Locally Managed Files	✓ (with Salt features)
Sandbox Files	✗
Applying the Highstate	✓
File Import from a Client	✗
Jinja Templating	✓
Configuration Macros	✓ (with Salt features: grains, pillar data, etc.)

### 7.4.1. 設定チャンネルの作成

### 7.4.1.1. Central Configuration Channel

新しいセントラル設定チャンネルを作成するには:

プロシージャ: セントラル設定チャンネルの作成

1. UyuniのWeb UIで、**設定** > **チャンネル**に移動し、**[設定] [チャンネル] の [作成]**をクリックします。
2. チャンネルの名前を入力します。
3. チャンネルのラベルを入力します。 このフィールドには、半角の英字、数字、ハイフン(-)、および下線(\_)のみを含める必要があります。
4. 他のチャンネルから区別できるようにチャンネルの説明を入力します。
5. **[設定] [チャンネル] の [作成]**をクリックして新しいチャンネルを作成します。

### 7.4.1.2. Salt State Channel

You can also use a configuration channel to manage Salt states on Salt clients:

Procedure: Creating a Salt State Channel

1. UyuniのWeb UIで、**設定** > **チャンネル**に移動し、**[状態] [チャンネル] の [作成]**をクリックします。
2. チャンネルの名前を入力します。
3. チャンネルのラベルを入力します。 このフィールドには、半角の英字、数字、ハイフン(-)、および下線(\_)のみを含める必要があります。
4. 他のチャンネルから区別できるようにチャンネルの説明を入力します。
5. init.slsファイルの `[SLS-----]` を入力します。
6. **[設定] [チャンネル] の [作成]**をクリックして新しいチャンネルを作成します。

### 7.4.2. 設定ファイル、ディレクトリ、またはシンボリックリンクの追加

設定チャンネルを作成済みの場合、設定ファイル、ディレクトリ、またはシンボリックlink:を追加できます。

プロシージャ: 設定ファイル、ディレクトリ、またはシンボリックリンクの追加

1. UyuniのWeb UIで、**設定** > **チャンネル**に移動し、設定ファイルに追加する設定チャンネルの名前をクリックし、**ファイルの追加** > **ファイルの作成**サブタブに移動します。
2. `[-----]` フィールドで、テキストファイル、ディレクトリ、またはシンボリックリンクを作成するかどうかを選択します。
3. `[-----/-----]` フィールドで、ファイルを展開する場所への絶対パスを入力します。
4. シンボリックリンクを作成している場合、`[-----/-----/-----/-----/-----]` フィールドにターゲットのファイルおよびパスを入力します。
5. `[-----]` フィールドおよび `[-----/-----/-----/-----]` にファイルの `[-----]` および `[-----]` を入力します。
6. クライアントでSELinuxが有効になっている場合、`[SELinux contexts]` (SELinuxコンテキスト

) を設定して、必要なファイル属性(ユーザ、ロール、ファイルタイプなど)を有効にできます。

7. 設定ファイルにマクロが含まれている場合、マクロの先頭および末尾をマークする記号を入力します。
8. [-----] テキストボックスで設定ファイルの内容を入力し、スクリプトドロップダウンボックスを使用して、適切なスクリプト言語を選択します。
9. [設定ファイルの作成] をクリックします。

### 7.4.3. クライアントを設定チャンネルにサブスクライブする

個々のクライアントを設定チャンネルにサブスクライブできます。そのためには、**システム**、**システム一覧**に移動し、サブスクライブするクライアントを選択し、[...] タブに移動します。複数のクライアントを設定チャンネルにサブスクライブするには、システムセットマネージャ(SSM)を使用できます。

プロシージャ: 複数のクライアントを設定チャンネルにサブスクライブする

1. UyuniのWeb UIで、**システム**、**システム一覧**に移動し、操作するクライアントを選択します。
2. **システム**、**システムセットマネージャ**に移動し、**設定**、**チャンネルにサブスクライブ**サブタブに移動し、使用できる設定チャンネルの一覧を表示します。
3. オプション: [-----] 列で番号をクリックして、設定チャンネルに現在サブスクライブされているクライアントを表示します。
4. サブスクライブ先の設定チャンネルを確認し、[続行] をクリックします。
5. 上下矢印を使用して設定チャンネルをランクします。設定の競合が設定チャンネルで発生した場合、一覧の上の方にあるチャンネルが優先されます。
6. 選択したクライアントにチャンネルを適用 [最も低い順位でサブスクライブ] をクリックして、現在サブスクライブしているチャンネルより低い優先度で新しいチャンネルを追加 [最も高い順位でサブスクライブ] をクリックして、現在サブスクライブしているチャンネルより高い優先度で新しい [既存のサブクリフションを置換] をクリックして、既存のチャンネルを削除し、新しいチャンネルに置き換えます。
7. [サブスクリーフションの適用] をクリックします。



新しい設定チャンネルの優先度が既存のチャンネルと競合する場合、重複チャンネルが削除され、新しい優先度に応じて置き換えられます。クライアントの設定優先度をアクションで順序変更する場合、Web UIでは続行する前に変更を確認する必要があります。

### 7.4.4. 設定ファイルの比較

システムセットマネージャ(SSM)を使用して、Uyuniサーバに保存されている設定ファイルを使用してクライアントに展開された設定ファイルを比較することもできます。

プロシージャ: 設定ファイルの比較

1. UyuniのWeb UIで、**システム**、**システム一覧**に移動して、比較する設定ファイルにサブスクライブされているクライアントを選択します。

2. システム › システムセットマネージャに移動し、設定 › ファイルの比較サブタブに移動し、使用できる設定チャンネルの一覧を表示します。
3. オプション: [――――――] 列で番号をクリックして、設定ファイルに現在サブスクライブされているクライアントを表示します。
4. 比較する設定ファイルを確認し、[ファイルの比較をスケジュール]をクリックします。

#### 7.4.5. SaltクライアントでのJinjaテンプレート

Jinjaテンプレートは、Saltクライアントで可能です。 Jinjaはピラーまたはグレインからの変数を提供します。 これらは、設定ファイルまたはSalt状態で使用できます。

詳細については、次の例の<https://docs.saltproject.io/salt/user-guide/en/latest/topics/jinja.html>を参照してください。

```
% if grains.os_family == 'RedHat' %}
  set dns_cfg = '/etc/named.conf'
% elif grains.os_family == 'Debian' %
  set dns_cfg = '/etc/bind/named.conf'
% else %
  set dns_cfg = '/etc/named.conf'
% endif %
dns_conf:
  file.managed:
    - name: {{ dns_cfg }}
    - source: salt://dns/files/named.conf
```

## 7.5. 電源管理

UyuniのWeb UIを使用して、電源オン、電源オフ、およびクライアントの再起動を実行できます。

この機能は、IPMIまたはRedfishプロトコルを使用し、Cobblerプロファイルを使用して管理されます。選択したクライアントには、これらのプロトコルのいずれかをサポートしている電源管理コントローラがある必要があります。

Redfishの場合、クライアントとUyuniサーバの間に有効なSSL接続を確立できることを確認してください。 Redfish管理コントローラのSSLサーバ証明書を署名するために使用される認証局を信頼している必要があります。 CA証明書は.pemフォーマットで、Uyuniサーバの/etc/pki/trust/anchors/に保存される必要があります。 証明書を保存したら、update-ca-certificateを実行します。

プロシージャ: 電源管理を有効にする

1. UyuniのWeb UIで、システム › システム一覧に移動し、管理するクライアントを選択し、プロビジョニング › 電源管理タブに移動します。
2. [――――――] フィールドで、使用する電源管理プロトコルを選択します。

3. 電源管理サーバの詳細を入力し、適切なボタンをクリックしてアクションを実行し、をクリックし、アクションを実行せずに詳細を保存します。

電源管理アクションを複数のクライアントに同時に適用できます。そのためには、クライアントをシステムセットマネージャに追加します。システムセットマネージャの使用法の詳細については、[Client-configuration > System-set-manager](#)を参照してください。

### 7.5.1. Power Management and Cobbler

The first time you use a power management feature, a Cobbler system record is automatically created, if one does not yet exist for the client. These automatically created system records are not bootable from the network, and include a reference to a dummy system image. This is needed because Cobbler does not currently support system records without profiles or images.

Cobbler power management uses fence-agent tools to support protocols other than IPMI. Only IPMI and Redfish protocols are supported by Uyuni. You can configure your client to use other protocols by adding the fence-agent names as a comma-separated list to the `java.power_management.types` configuration parameter in the `rhn.conf` configuration files.

## 7.6. カスタムシステム情報

クライアントに関してカスタマイズしたシステム情報を含めることができます。システム情報は「キー:値」ペアで定義され、クライアントに割り当てることができます。たとえば、特定のプロセッサに対して「キー:値」ペアを定義してから、そのプロセッサがインストールされているすべてのクライアントにそのキーを割り当てることができます。カスタムシステム情報は分類され、UyuniのWeb UIを使用して検索できます。

始める前に、カスタム情報を保存できるキーを作成する必要があります。

プロシージャ: カスタムシステム情報のキーの作成

1. UyuniのWeb UIで、**システム > カスタムシステム情報**に移動し、をクリックします。
2. [キー] フィールドにキーの名前を追加します。スペースは使用しません。例: `intel-x86_64-quadcore`。
3. [値] フィールドに必要な追加情報を入力します。
4. 必要な各キーで操作を繰り返します。

The information is available via Salt pillar. You can retrieve this information with a command such as:

```
salt $minionid pillar.get custom_info:key1
```

このコマンドは、次のような出力になります。

```
$minionid:
  val1
```

カスタムシステム情報キーを作成するとき、キーをクライアントに適用できます。

プロセージャ: カスタム情報キーをクライアントに適用する

1. UyuniのWeb UIで、 [→→→→→] に移動し、カスタム情報を適用するクライアントをクリックし、  
詳細 › カスタム情報タブに移動します。
2. [↓|値|の|作|成] をクリックします。
3. 適用する値を見つけ、キーラベルをクリックします。
4. [→] フィールドに追加情報を入力します。
5. [↓|キ|一|の|更|新] をクリックしてカスタム情報をクライアントに適用します。

設定管理の詳細については、Client-configuration › Configuration-managementを参照してください。

## 7.7. システムセットマネージャ

システムセットマネージャ(SSM)は、同時に複数のクライアントでアクションを実行するために使用します。 SSMで一時的なクライアントセットが作成されます。これは、多数のクライアントに適用する必要がある1回限定アクションに便利です。 より永続的なセットが必要な場合、代わりにシステムグループの使用を検討してください。 システムグループの詳細については、Client-configuration › System-groupsを参照してください。

SSMで使用できるアクションを次の表に示します。この表のアイコンの意味は次のとおりです。

- ✓: このアクションはこのクライアントタイプ用にSSMで使用できます。
- ✗: このアクションはこのクライアントタイプ用にSSMで使用できません。
- ?: このアクションはこのクライアントタイプ用に検討中であり、後日サポートされる場合と、サポートされない場合があります。

表 43. 使用可能なSSMアクション

List systems	✓
Install patches	✓
Schedule patch updates	✓
Upgrade packages	✓
Install packages	✓
Remove packages	✓
Verify packages	✗
Create groups	✓
Manage groups	✓
Channel memberships	✓
Channel subscriptions	✗
Deploy/diff channels	✗

List systems	✓
Autoinstall clients	✗
Tag for snapshot	✗
Remote commands	✗
Power management	✗
Update system preferences	✓
Update hardware profiles	✓
Update package profiles	✓
Set/remove custom values	✓
Reboot clients	✓
Migrate clients to another organization	✓
Delete clients	✓

SSMのクライアントの選択は複数の方法で実行できます。

- システム、システム一覧に移動し、操作するクライアントにチェックを付けます。
  - システムシステムグループに移動し、操作するシステムグループで **[SSMで使用]** をクリックします。
- システムグループ**に移動し、操作するグループにチェックを付け、**[グループでの作業]** をクリックします。

操作するクライアントを選択したら、**システム**、**システムセットマネージャ**に移動し、上部のメニューバーにある **[――――――――――――――――――――]** アイコンをクリックします。



SSMの詳細は、UyuniのWeb UIで別の部分にある詳細と若干異なる場合があります。SSMでは、使用できるすべての更新が表示されます。そのため、最新バージョンではないかもしれないパッケージをアップグレードされる場合があります。

### 7.7.1. SSMでベースチャンネルを変更する

SSMを使用して、複数のクライアントのベースチャンネルを同時に変更できます。



ベースチャンネルを大幅に変更すると、影響を受けるクライアントで使用できるパッケージおよびパッチが変更されます。注意して使用してください。

プロシージャ: SSMを使用して複数のクライアントのベースチャンネルを変更する

- UyuniのWeb UIで、**システム**、**システム一覧**に移動し、操作するクライアントにチェックを付け、**システム**、**システムセットマネージャ**に移動します。
- [――――――――――]** サブタブに移動します。

3. リストで現在のベースチャンネルを見つけ、[ベースチャンネル] 列に表示されている数字が正しいことを確認します。この列の数字をクリックして、変更するクライアントの詳細を表示できます。
4. [ベースチャンネル] フィールドで新しいベースチャンネルを選択し、[次へ] をクリックします。
5. 子チャンネルそれぞれで、[ベースチャンネル]、[ベースチャンネル]、または [ベースチャンネル] を選択し、[次へ] をクリックします。
6. 変更内容を確認し、いつ変更するかを選択します。
7. [確認] をクリックして、変更をスケジュールします。

## 7.8. システムグループ

システムグループを使用して、多数のクライアントの管理を簡単にできます。 グループは、更新、設定チャンネル、Saltの状態、または方式の適用など、一括アクションをクライアントで実行するために使用できます。

使用している環境で動作する方法でクライアントをグループに編成できます。 たとえば、オペレーティングシステムがインストールされているクライアント、クライアントがある物理的な場所、または処理しているワークロードの種類を編成できます。 クライアントは、任意の数のグループに属することができるため、さまざまな方法でグループを定義できます。

When you have clients organized into groups, you can perform updates on all clients in one or more groups, or on intersections between groups. For example, you can define one group for all clients with web server software, and another group for all SLES clients. You can then perform updates on all clients with web server software, or use the intersection between the groups, and update all SLES clients with web server software.

### 7.8.1. グループの作成

グループを使用してクライアントを編成する前にグループを作成する必要があります。

プロシージャ: 新しいシステムグループの作成

1. UyuniのWeb UIで、システム、システムグループに移動します。
2. [グループの作成] をクリックします。
3. 新しいグループの名前と説明を指定します。
4. [グループの作成] をクリックしてグループを保存します。
5. 必要な各グループで操作を繰り返します。

### 7.8.2. グループにクライアントを追加する

個々のクライアントをグループに追加したり、複数のクライアントを同時に追加できます。

プロシージャ: 1つのクライアントのグループへの追加

1. UyuniのWeb UIで、システム、システム一覧に移動し、追加するクライアントの名前をクリックします。

2. グループ › 参加タブに移動します。
3. 参加するグループを確認し、[選択したグループに参加]をクリックします。

プロシージャ: 複数のクライアントのグループへの追加

1. UyuniのWeb UIで、システム › システム一覧に移動し、クライアントを追加するグループの名前をクリックします。
2. [→] タブに移動します。
3. 追加するクライアントを確認して、[システムの追加]をクリックします。

プロシージャ: SSMで複数のクライアントをグループに追加する

1. UyuniのWeb UIで、システム › システム一覧に移動し、追加するそれぞれのクライアントを確認します。クライアントがシステムセットマネージャに追加されます。
2. システム › システムセットマネージャに移動し、[→] タブに移動します。
3. 参加するグループを見つけ、[→] にチェックを付けます。
4. [メンバーの一変更]をクリックします。
5. [確認]をクリックして、選択したグループにクライアントを追加します。

システムセットマネージャの詳細については、Client-configuration › System-set-managerを参照してください。

グループに属しているクライアントを確認できます。そのためには、システム › システムグループに移動し、グループの名前をクリックし、[→] タブに移動します。または、システムグループをグラフィカル表示できます。そのためには、システム › 可視化 › システムのグループ化に移動します。

### 7.8.3. グループの操作

When you have your clients arranged into groups, you can use your groups to manage updates.

UyuniのWeb UIで、システム › システムグループに移動します。グループ内のいずれかのクライアントに適用できる更新がある場合、リストにアイコンが表示されます。グループ内のいずれかのクライアントで更新ステータスの確認が無効になっている場合、リストには疑問符アイコンが表示されます。アイコンをクリックすると、適用できる更新に関する詳細情報が表示され、クライアントに適用されます。

同時に複数のグループを操作する機能があります。選択したすべてのグループを選択し、[選択したすべてのクライアントを操作する]をクリックし、すべての選択グループですべてのクライアントを選択します。

Alternatively, you can work on intersections of groups. Select two or more groups, and click [Work with intersection] to select only those clients that exist in all the selected groups. For example, you might have one group for all clients with web server software, and another group for all SLES clients. The intersection of these groups would be all SLES clients with web server software.

## 7.9. システムの種類

クライアントは、システムの種類で分類されます。各クライアントは、両方のベースシステムの種類を備えることができ、アドオンシステムの種類が割り当てられます。

Base system type is Salt for all clients.

アドオンシステムの種類には、仮想ホストとして動作するクライアントでは――――――――――――、ビルドホストとして動作するクライアントでは――――――――――――――――――が含まれます。

アドオンシステムの種類は調整できます。そのためには、**システム**、**システム一覧**、**システムの種類**に移動します。

アドオンシステムの種類を変更するクライアントにチェックを付け、

[――――――――――――――――――] を選択し、[エントリーメントの追加] または [エントリートル除] をクリックします。

# Chapter 8. オペレーティングシステムのインストール

一般に、すでに動作しているクライアントを登録します。 Uyuniに登録する直前にコンピュータに手動でインストールするか、環境にUyuniを追加する前にインストールされた既存のシステムを使用できます。

または、Uyuniを使用して、1回の手順でオペレーティングシステムをインストールしてUyuniに登録することもできます。 この方法では一部または全部が自動化されているため、インストーラの質問に答える時間を節約することができます。 これは、特にインストールと登録が必要な多くのクライアントがある場合に役立ちます。

Uyuniからオペレーティングシステムをインストールするには次のような複数の方法があります。

- ・ 登録済みのクライアントでインプレースインストールを行う
- ・ PXEブートを使用してネットワークを通じてインストールする
- ・ インストール用CD-ROMまたはUSBメモリを作成し、そのメディアでコンピュータをブートする
- ・ Uyuni for Retailソリューションの一部としてインストールする

インプレースでの再インストール方法は、以前のオペレーティングシステムがクライアントにすでにインストールされており、クライアントがUyuniにすでに登録されていることを前提としています。

インプレースインストール方法については、[Client-configuration > Autoinst-reinstall](#)を参照してください。

ネットワークブートによるインストール方法は、フォーマットされていないコンピュータで動作します。 ただし、これは次のような特定のネットワーク構成のみで実行できます。

- ・ Uyuniサーバまたはそのプロキシのいずれかが、インストール対象のコンピュータと同じローカルネットワーク上にあるか、経路にあるすべてのルータを中継できるDHCPリレーに対応している。
- ・ 新しいDHCPサーバをセットアップするか、既存のDHCPサーバを設定することができる。
- ・ インストール対象のクライアントがPXEブートに対応しており、PXEブートを実行するように設定することができる。

ネットワークブート方法については、[Client-configuration > Autoinst-pxeboot](#)を参照してください。

リムーバブルメディアを使用する方法では、このようなネットワーク上の制約を受けません。 しかし、この方法はコンピュータがCD-ROMまたはUSBメモリを読み取ることができ、各メディアからブートできることを前提としています。 また、クライアントコンピュータに対する物理的なアクセスも必要です。

リムーバブルメディアを使用する方法については、[Client-configuration > Autoinst-cdrom](#)を参照してください。

Uyuni for Retailアプローチについては、[Retail > Retail-overview](#)を参照してください。



UbuntuクライアントとDebianクライアントの自動インストールはサポートされていません。これらのオペレーティングシステムは、手動でインストールする必要があります。

The autoinstallation features of Uyuni are based on a software named Cobbler. For more information about Cobbler, see <https://cobbler.readthedocs.io>.



SUSEは、Uyuni Web UIまたはUyuni APIで使用できるCobblerの機能のみをサポートしています。Cobblerがサポートする唯一のコマンドラインコマンドはbuildisoです。ここにはサポートされている機能のみが記載されています。

## 8.1. 登録済みシステムを再インストールする

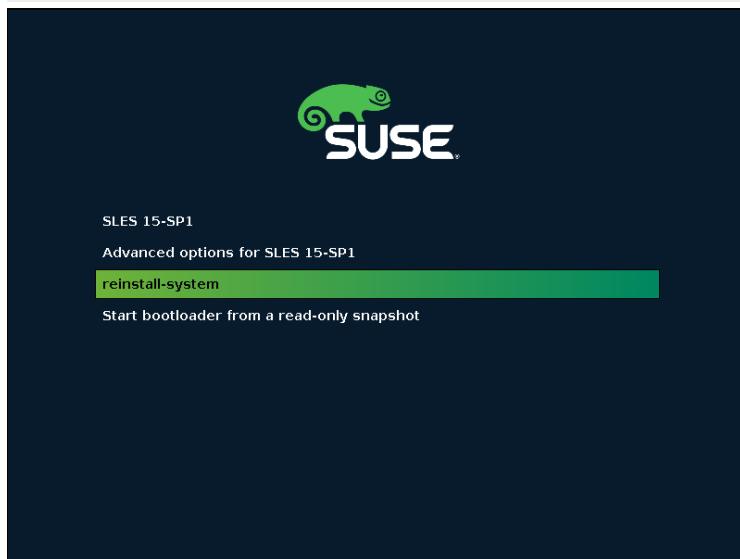
インプレースでの再インストールは、ローカルクライアントシステムから開始します。したがって、クライアントがネットワークを通じてPXEブートを実行できる必要はありません。

登録済みのクライアントをインプレースで再インストールするには、自動インストールのディストリビューションと自動インストールプロファイルを定義する必要があります。 詳細については、**Client-configuration** › **Autoinst-distributions**と**Client-configuration** › **Autoinst-profiles**を参照してください。

自動インストールプロファイルと自動インストールのディストリビューションを定義したら、再インストールを実行できます。

手順: 登録済みのクライアントを再インストールする

1. Uyuni Web UIで、**システム** › **システム一覧**に移動し、再インストールするクライアントを選択し、**プロビジョニング** › **自動インストール** › **スケジュール**サブタブに移動します。
2. 作成した自動インストールプロファイルを選択し、必要に応じてプロキシを選択して、**[自動インストールをスケジュールしてから終了する]**をクリックします。
3. **プロビジョニング** › **自動インストール** › **セッション**の状態に移動するか、クライアント上で直接、インストールの進行状況を監視できます。クライアントが再起動したら、[ブート]メニューで**[-----]**という新しいオプションを選択します。

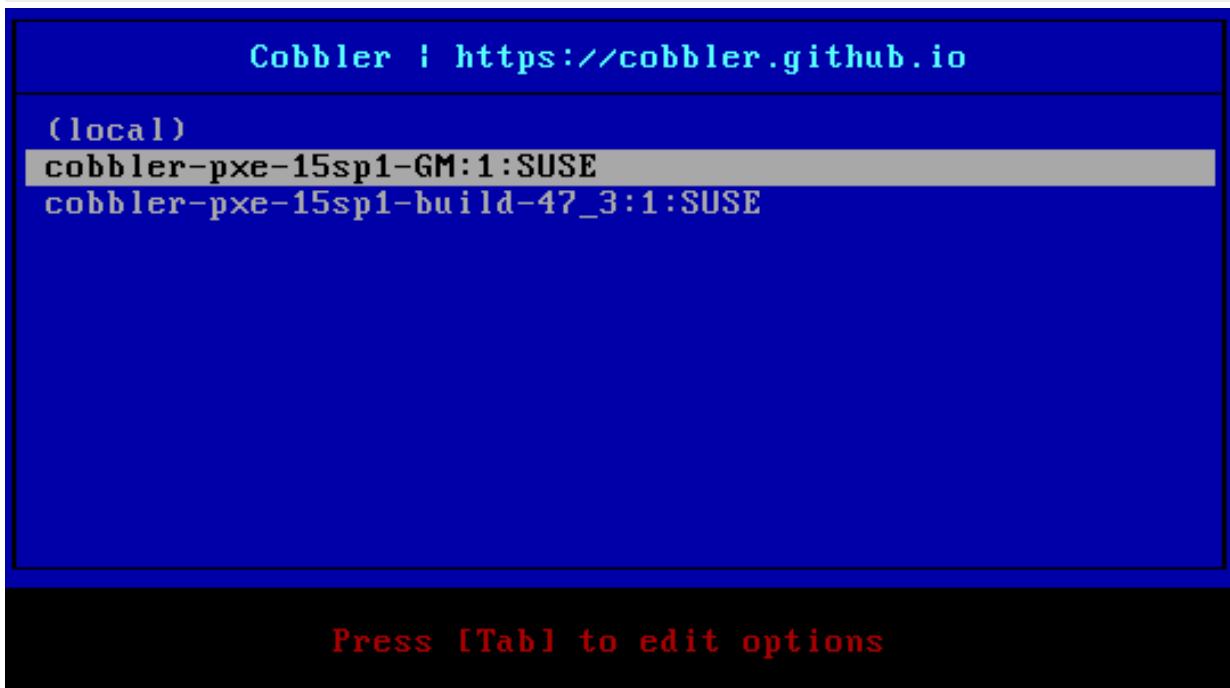


その後、インストールはHTTPプロトコルを通じて進められます。

## 8.2. ネットワークを通じてインストールする(PXEブート)

ネットワークブートによるインストール中に、次の処理が実行されます。

1. クライアントがPXEモードでブートされます。
2. DHCPサーバが、IPアドレスとマスク、インストールサーバのアドレス、サーバ上のブートローダファイルの名前をクライアントに提供します。
3. クライアントは、インストールサーバからTFTPプロトコルを通じてブートローダファイルをダウンロードし、実行します。
4. クライアントは、インストールに使用できるプロファイルをメニューから選択するか、いずれかのプロファイルで自動インストールを開始します。
5. クライアントは、TFTPプロトコルを通じて、そのプロファイルと一致するディストリビューション用のカーネルと初期RAMディスクをダウンロードします。
6. インストールカーネルは、インストールプログラム、KickstartまたはAutoYaSTを起動します。それ以降、カーネルは、HTTPプロトコルを通じてサーバで提供されるリソースを使用します。
7. ディストリビューションは、KickstartまたはAutoYaSTプロファイルに従って自動的にインストールされます。
8. The profile calls a code snippet that registers the client to the Uyuni Server.



インストールサーバは、Uyuniサーバまたはそのプロキシのいずれかにすることができます。プロキシからインストールするには、事前にサーバとプロキシの間でTFTPツリーを同期させる必要があります。

DHCPサーバは、ホスト名、ルータのアドレス、ドメインネームサーバのアドレスなど、その他の構成情報をクライアントに提供することもあります。この情報の一部は、インストールサーバをドメイン名で指定した場合など、自動インストールのために必要になることがあります。

[PXEブート]メニューで、最初の選択肢は[...]です。これを選択すると、ブートプロセスはローカルディスクドライブから続行されます。特定の時間内にプロファイルが選択されなかった場合は、このオプションが自動的に選択されます。これは、プロファイルを選択する人間のオペレータがない場合に、自動インストールが開始されないようにするための安全対策です。

または、手動での操作なしで、いずれかのプロファイルからインストールを自動的に開始することもできます。これは「無人プロビジョニング」と呼ばれます。

「ベアメタル」機能は、PXEブートに基づく無人プロビジョニングの一種です。このシナリオでは、ブートローダファイルはUyuniサーバでクライアントを登録するだけで、インストールは開始しません。インプレースでの再インストールを後で実行することができます。

#### 手順: PXEブートによるインストール

1. DHCPサーバを準備します。[DHCPサーバを準備する](#)を参照してください。
2. 自動インストールのディストリビューションを準備します。[Client-configuration > Autoinstall-distributions](#)を参照してください。
3. 自動インストールプロファイルを準備します。[Client-configuration > Autoinst-profiles](#)を参照してください。
4. クライアントを再起動し、インストールするプロファイルを選択します。

その他の一部の手順はオプションです。プロキシをインストールサーバとして使用するには、[プロキシを使](#)

用してTFTPツリーを同期するを参照してください。無人プロビジョニングについては、Client-configuration › Autoinst-unattendedを参照してください。

## 8.2.1. DHCPサーバを準備する

PXEブートプロセスは、DHCPを使用して、TFTPサーバを検索します。Uyuniサーバまたはそのプロキシは、TFTPサーバとして機能させることができます。

このためには、ネットワークのDHCPサーバへの管理アクセス権が必要です。TFTPブートサーバとしてインストールサーバをポイントするようにDHCP設定ファイルを編集します。

例: ISC DHCPサーバを設定する

1. DHCPサーバでrootとして/etc/dhcpd.confファイルを開きます。
2. クライアントに対する宣言を次のように変更します。

```
host myclient { (...)  
    next-server 192.168.2.1;  
    filename "pxelinux.0"; }
```

1. ファイルを保存し、dhcpdサービスを再起動します。

この例では、192.168.2.1でPXEクライアントmyclientをインストールサーバに指定し、pxelinux.0ブートローダファイルの取得を指示しています。

DHCPサーバがUyuniに登録されている場合は、その代わりにDHCPd式を使用して設定することもできます。

例: DHCPd式を使用したISC DHCPサーバの設定

1. システム › システム一覧に移動し、変更するクライアントを選択し、[→] タブに移動してDHCPd式を有効にします。
2. 式の [Dhcpd] タブに移動し、[hostname] フィールドに、インストールサーバのホスト名またはIPアドレスを入力します。
3. [Filename EFI] (ファイル名EFI) フィールドで、grub/shim.efdと入力し、EFI PXEのサポートを有効にします。
4. [filename] フィールドで、pxelinux.0と入力し、従来のBIOSのサポートを有効にします。
5. **[Save Formula]** (式の保存) をクリックして設定を保存します。
6. highstateを適用します。



セキュアブートを使用しない場合は、[Filename EFI] (ファイル名EFI) フィールドにgrub/shim.efdではなくgrub/grubx86.efiと入力します。



異なるアーキテクチャについては、表[異なるアーキテクチャ用のGRUB EFIバイナリ名](#)を参照してください。



Cobblerで管理されるDHCPの使用は、Uyuniではサポートされていません。

これですべてのホストにグローバルPXEサーバが設定されますが、ホストごとに設定することもできます。 DHCPd式の詳細については、[Specialized-guides](#) › [Salt](#)を参照してください。

## 8.2.2. プロキシを使用してTFTPツリーを同期する

Uyuniサーバ上のTFTPツリーはUyuniプロキシと同期させることができます。 同期するには、HTTPSポート443を開く必要があります。



プロキシを追加するたびに、ツリーの同期に時間がかかるようになります。

手順: サーバとプロキシ間のTFTPの同期

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、rootとしてsusemanager-tftpsyncパッケージをインストールします。

```
zypper install susemanager-tftpsync
```

1. Uyuniプロキシのコマンドプロンプトで、rootとしてsusemanager-tftpsync-recvパッケージをインストールします。

```
zypper install susemanager-tftpsync-recv
```

1. プロキシでrootとしてconfigure-tftpsync.shスクリプトを実行します。 スクリプトは、Uyuniサーバおよびプロキシのホスト名およびIPアドレス、プロキシのtftpbootディレクトリの場所の詳細についてインタラクティブに問い合わせます。 詳細については、configure-tftpsync.sh --helpコマンドを使用してください。
2. サーバでrootとしてconfigure-tftpsync.shスクリプトを実行します。

```
configure-tftpsync.sh proxy1.example.com proxy2.example.com
```

3. サーバでcobbler syncコマンドを実行して、プロキシにファイルをプッシュします。 プロキシが正しく設定されていないとこの操作は失敗します。

プロキシのリストを後で変更する場合、configure-tftpsync.shスクリプトを使用して編集できます。



設定済みのプロキシを再インストールしてすべてのファイルを再プッシュする場合、`cobbler sync`を呼び出す前に`/var/lib/cobbler/pxe_cache.json`でキャッシュファイルを削除する必要があります。

### 8.2.3. 異なるアーキテクチャ用のGRUB EFIバイナリ名

表 44. 異なるアーキテクチャ用のGRUB EFIバイナリ名

アーキテクチャ	GRUB EFIバイナリ名
aarch64	grubaa64.efi
x86-64	grubx86.efi
ppc64le	grub.ppc64le

## 8.3. CD-ROMまたはUSBメモリを使用してインストールする

Uyuniにまだ登録されていないクライアントで、PXEを通じたネットワークブートを選択できない場合は、ブート可能なCD-ROMまたはUSBメモリを使用してシステムをインストールできます。

One option to prepare such a removable medium is to use Cobbler. For information about using Cobbler to prepare an ISO image, see [Build an ISO Image With Cobbler](#).

SUSEシステムでは、多くの場合、KIWIを使用してISOイメージを準備することが推奨されます。 詳細については、[KIWIでSUSE ISOイメージを構築する](#)を参照してください。

いずれの場合も、生成されたイメージをCD-ROMまたはUSBメモリに書き込みます。

### 8.3.1. Build an ISO Image With Cobbler

Cobbler can create ISO boot images that contain a set of distributions, kernels, and a menu that works in a similar way to a PXE installation.



Building ISOs with Cobbler is not supported on IBM Z.

In order to prepare an ISO image with Cobbler, you need to prepare a distribution and a profile, similar to using network boot over PXE. For information about creating a distribution, see [Client-configuration > Autoinst-distributions](#). For information about creating a profile, see [Client-configuration > Autoinst-profiles](#).

The Cobbler `buildiso` command takes parameters to define the name and output location of the boot ISO. Specifying the distribution with `--distro` is mandatory when running `buildiso` command.

```
cobbler buildiso --iso=/path/to/boot.iso --distro=<your-distro-label>
```



You must use distro and profile labels as listed by Cobbler, and not simply as shown in the UI.

Cobblerによって保存されているディストリビューションとプロファイルの名前を一覧表示するには、次のコマンドを実行します。

```
# cobbler distro list
# cobbler profile list
```

ブートISOには、すべてのプロファイルおよびシステムがデフォルトで含まれています。--profilesオプションと--systemsオプションで、使用するプロファイルおよびシステムを制限できます。次に例を示します。

```
cobbler buildiso --systems="system1 system2 system3" \
--profiles=<your-profile1-label> <your-profile2-label> <your-profile3-label> --distro=<your-distro-label>
```



ISOイメージをパブリックtmpディレクトリに書き込むことができない場合、/usr/lib/systemd/system/cobblerd.serviceでsystemd設定を確認してください。

### 8.3.2. KIWIでSUSE ISOイメージを構築する

KIWIはイメージ作成システムです。KIWIを使用して、SUSEシステムのインストール用にターゲットシステムで使用するブート可能なISOイメージを作成することができます。システムを再起動または電源オンするとき、このイメージからブートし、AutoYaST設定をUyuniから読み込み、AutoYaSTプロファイルに応じてSUSE Linux Enterprise Serverをインストールします。

ISOイメージを使用するには、システムをブートし、プロンプトにautoyastと入力します(AutoYaSTブートのラベルをautoyastのままにしていることを想定しています)。Enterキーを押してAutoYaSTのインストールを開始します。

KIWIの詳細については、<http://doc.opensuse.org/projects/kiwi/doc/>を参照してください。

### 8.3.3. Build a Red Hat ISO Image With Cobbler

詳細については、[client-configuration:autoinst-cdrom.pdf](#)を参照してください。

## 8.4. 自動インストールのディストリビューション

自動インストールプロセスでは、インストールを開始するために複数のファイルが必要です。必要なファイルには、Linuxカーネル、初期RAMディスク、およびインストールモードでオペレーティングシステムをブートするために必要なその他のファイルが含まれます。

DVDイメージから必要なファイルを抽出できます。 詳細については、[ISOイメージに基づくディストリビューション](#)を参照してください。

または、`tftpboot-installation`パッケージをインストールすることもできます。 詳細については、[RPMパッケージに基づくディストリビューション](#)を参照してください。

また、これらのファイルと同じオペレーティングシステムバージョン用に、Uyuniサーバでベースチャンネルを同期しておく必要があります。

ファイルの準備が整い、ベースチャンネルを同期したら、ディストリビューションを宣言する必要があります。この操作により、インストールファイルがベースチャンネルに関連付けられます。ディストリビューションは、1つ以上のインストールプロファイルによって参照されることがあります。 詳細については、[自動インストールのディストリビューションを宣言する](#)を参照してください。

## 8.4.1. ISOイメージに基づくディストリビューション

この方法では、クライアントにインストールするオペレーティングシステムのインストールメディアがあることを前提としています。 このメディアは通常DVD `.iso`イメージです。これには、Linuxカーネル、`initrd`ファイル、およびインストールモードでオペレーティングシステムをブートするために必要なその他のファイルが含まれています。

手順: インストールメディアからのファイルのインポート

1. インストールメディアをUyuniサーバにコピーします。 SUSEオペレーティングシステムの場合、<https://www.suse.com/download/>からインストールメディアをダウンロードできます。
2. ISOイメージをループマウントして、そのコンテンツをどこかにコピーします。

```
# mount -o loop,ro <image_name>.iso /mnt
# mkdir -p /srv/www/distributions
# cp -a /mnt /srv/www/distributions/<image_name>
# umount /mnt
```

ファイルパスをメモしておいてください。 このファイルパスは、ディストリビューションをUyuniに対して宣言するときに必要です。

## 8.4.2. RPMパッケージに基づくディストリビューション

この方法は、SUSEシステムで動作します。 インストールシステム用にあらかじめパッケージされたファイルを使用するため、インストールメディアからコンテンツをインポートするよりも簡単です。

手順: インストールパッケージからファイルを抽出する

1. Uyuniサーバに、名前が`tftpboot-installation`で始まるパッケージをインストールします。 このパッケージの正確な名前は、`zypper se tftpboot-installation`コマンドで確認できます。
2. `ls - d /usr/share/tftpboot-installation/*`コマンドで、インストールファイルの場所を確認します。 ファイルパスをメモしておいてください。 このファイルパスは、ディストリビューションをUyuniに対して宣言するときに必要になります。

この手順では、Uyuniサーバに搭載されているものと同じバージョンのオペレーティングシステムをインストールする準備をします。 クライアントに異なるオペレーティングシステムやバージョンをインストールする場合は、`tftpboot-installation-*`パッケージを、これが属するディストリビューションから手動で取得する必要があります。 Uyuniの [――――――――――――――] 入力ボックスで、名前が`tftpboot-installation`で始まるパッケージを検索し、そのパッケージの詳細を確認します。ここには、`/var/spacewalk/`以下のローカルパスが表示されます。

### 8.4.3. 自動インストールのディストリビューションを宣言する

自動インストールファイルを抽出した後の次の手順は、自動インストールのディストリビューションの宣言です。

手順: 自動インストールのディストリビューションの宣言

1. UyuniのWeb UIで、**システム**、**自動インストール**、**ディストリビューション**に移動します。
2. [――――――――――――――――――――――――] をクリックし、次のフィールドに入力します。
  - [――――――――――――――――――――――] フィールドに、自動インストール可能なディストリビューションを識別するための名前を入力します。
  - [――――――――――] フィールドに、Uyuniサーバに保存されているインストールメディアへのパスを入力します。
  - 対応する [――――――――――――] を選択します。 このチャンネルはインストールメディアと一致する必要があります。
  - [――――――――――――] を選択します。 これはインストールメディアと一致する必要があります。
  - オプション: このディストリビューションをブートするときに使用するカーネルオプションを指定します。 カーネルオプションを指定する方法は複数あります。 ここにはディストリビューションに当てはまるオプションのみを追加します。
3. [自動インストール可能なディストリビューションの作成] をクリックします。

準備したインストールファイルには、インストールする必要があるパッケージが含まれていない可能性があります。 必要なパッケージが含まれていない場合は、[――――――――――――] フィールドに`useonlinerepo=1`を追加します。

パッケージリポジトリには、署名されていないことがあるメタデータが含まれています。 メタデータが署名されていない場合は、[――――――――――――――] フィードに`insecure=1`を追加するか、**Client-configuration** › **Autoinst-ownpgpkey**の説明に従って独自のGPGキーを使用します。

これらの関連のオプションは、フルDVDの代わりに「オンラインインストーラ」ISOイメージを使用する場合や、`tftpboot-installation`パッケージを使用する場合などに必要です。

自動インストールのディストリビューションを管理するには、**システム**、**自動インストール**、**ディストリビューション**に移動します。

## 8.5. 自動インストールプロファイル

自動インストールプロファイルによって、オペレーティングシステムをインストールする方法が決定されます。たとえば、インストーラに渡す追加のカーネルパラメータを指定できます。

プロファイルの最も重要な部分は、「自動インストールファイル」です。インストールを手動で実行する場合、パーティション設定、ネットワーク情報、ユーザの詳細などの情報をインストーラに提供する必要があります。自動インストールファイルは、スクリプト形式でこの情報を提供する方法です。このタイプのファイルは、「回答ファイル」と呼ばれることもあります。

Uyuni内では、インストールするクライアントのオペレーティングシステムに応じて、2つの異なる種類のプロファイルを使用できます。

- SUSE Linux EnterpriseクライアントまたはopenSUSEクライアントの場合、AutoYaSTを使用します。
- Red Hat Enterprise Linuxクライアントの場合、Kickstartを使用します。

異なるオペレーティングシステムでクライアントをインストールする場合、AutoYaSTプロファイルとKickstartプロファイルの両方を使用できます。

- プロファイルを宣言する方法については、[プロファイルを宣言する](#)を参照してください。
- AutoYaSTプロファイルについては、[AutoYaSTプロファイル](#)を参照してください。
- Kickstartプロファイルについては、[Kickstartプロファイル](#)を参照してください。

プロファイルに含まれる自動インストールファイルには、変数とコードスニペットを格納できます。変数とコードスニペットについては、[テンプレートの構文](#)を参照してください。

### 8.5.1. プロファイルを宣言する

自動インストールファイルとディストリビューションの準備ができたら、プロファイルを作成して、Uyuniサーバで自動インストールを管理できます。プロファイルにより、選択したこのディストリビューションのインストール方法が決定されます。プロファイルを作成する1つの方法はAutoYaSTファイルまたはKickstartファイルをアップロードする方法です。または、Kickstartのみの場合、Web UIウィザードを使用できます。

手順: アップロードによる自動インストールプロファイルの作成

1. UyuniのWeb UIで、**システム**、**自動インストール**、**プロファイル**に移動します。
2. [「キ」ツ「ク」ス「タ」ー] [ト/AutoYaST] [フ] [ア] [イ] [ル] を [ア] [ッ] [フ] [ロ] [ー] [ド] をクリックします。
3. [~~~~~] フィールドにプロファイルの名前を入力します。スペースは使用しません。
4. [~~~~~] フィールドで、このプロファイルに使用する自動インストールのディストリビューションを選択します。
5. [~~~~~] フィールドで、このプロファイルに使用する仮想化の種類を選択します。または、このプロファイルを使用して新しい仮想マシンを作成しない場合には [~~~] を選択します。
6. 自動インストールファイルの内容を [~~~~~] フィールドにコピーするか、または [~~~~~] フィールドを使用してファイルを直接アップロードします。

ここに記載する詳細については、[AutoYaSTプロファイル](#)または[Kickstartプロファイル](#)を参照してください。

7. [作成]をクリックしてプロファイルを作成します。

プロシージャ: ウィザードでKickstartプロファイルを作成する

1. UyuniのWeb UIで、**システム**、**自動インストール**、**プロファイル**に移動します。
2. [キックスタートプロファイルを作成]をクリックします。
3. [名前] フィールドにプロファイルの名前を入力します。スペースは使用しません。
4. [ベースチャンネル] フィールドで、このプロファイルに使用するベースチャンネルを選択します。このフィールドは利用できるディストリビューションから入力されます。必要なベースチャンネルが利用できない場合、ディストリビューションを正しく作成したことを確認してください。
5. [仮想化] フィールドで、このプロファイルに使用する仮想化の種類を選択します。または、仮想化しない場合には [なし] を選択します。
6. [次へ]をクリックします。
7. [Uyuniサーバにインストールするインストールメディアへのパス] で、Uyuniサーバにインストールするインストールメディアへのパスを入力します。
8. [次へ]をクリックします。
9. クライアントのrootユーザのパスワードを入力します。
10. [完了]をクリックします。
11. 新しいプロファイルの詳細を確認し、必要に応じてカスタマイズします。

自動インストールプロファイルを作成している場合、

[最新ディストリビューション] にチェックを付けることができます。この設定では、指定ベースチャンネルに関連付けられた最新ディストリビューションをUyuniで自動選択できます。新しいディストリビューションを後で追加する場合、Uyuniは、最後に作成または変更されたディストリビューションを使用します。

ディストリビューションを変更すると、通常、プロファイルのブートローダおよびパーティションオプションを変更する必要があります。この操作を実行すると、カスタマイズが上書きされます。新しい設定または変更した設定を保存前に確認します。そのためには、[ディストリビューション] タブに移動します。

ディストリビューションとプロファイルのカーネルオプションは統合されます。

自動インストールプロファイルの詳細および設定を変更できます。そのためには、**システム**、**自動インストール**、**プロファイル**に移動し、編集するプロファイルの名前をクリックします。または、**システム**、**システム一覧**に移動し、プロビジョニングするクライアントを選択し、**プロビジョニング**、**自動インストールサブタブ**に移動します。

## 8.5.2. AutoYaSTプロファイル

AutoYaSTプロファイルは、プロファイルを識別するマーク、自動インストールのディストリビューションをポイントするマーク、さまざまなオプション、最も重要なAutoYaSTインストール

ファイルで構成されます。

AutoYaSTインストールファイルは、AutoYaSTインストーラに指示を与えるXMLファイルです。AutoYaSTでは、「制御ファイル」と呼ばれます。AutoYaSTインストールファイルの構文の詳細については、<https://doc.opensuse.org/projects/autoyast/#cha-configuration-installation-options>を参照してください。

SUSEには、独自のカスタムファイルの雛形として使用できるAutoYaSTインストールファイルのテンプレートが用意されています。このテンプレートは、<https://github.com/SUSE/manager-build-profiles>のAutoYastディレクトリにあります。各プロファイルを使用するにはその前に、一部の変数を設定する必要があります。スクリプトに含まれているREADMEファイルを確認して、必要な変数を判別してください。AutoYaSTスクリプトで変数を使用する方法の詳細については、[変数](#)を参照してください。

UyuniでインストールするためのAutoYaSTインストールファイルで、最も重要なセクションを次に示します。

- <add-on> allows to add child channels to the installation. For an example, see <https://doc.opensuse.org/projects/autoyast/#Software-Selections-additional>.
- <general>\$SNIPPET('spacewalk/sles\_no\_signature\_checks')</general>は、署名のチェックを無効にします。
- <software>によって、Unified Installerに製品を指定できます。
  - See <https://doc.opensuse.org/projects/autoyast/#CreateProfile-Software> with a "<software>" example
- <init-scripts config:type="list">\$SNIPPET('spacewalk/minion\_script')</init-scripts>は、クライアントをSaltクライアントとしてUyuniに登録できるようにします。

AutoYaSTの詳細については、<https://doc.opensuse.org/projects/autoyast/>を参照してください。

A more recent, Salt-based alternative to AutoYaST, is Yomi. For information about Yomi, see [Specialized-guides › Salt](#).

### 8.5.3. Kickstart profiles

Kickstartプロファイルには、多数の設定オプションがあります。プロファイルを作成するには、プロファイルをアップロードするか、専用のウィザードを使用します。

Kickstartプロファイルでは、ファイル保持一覧を使用できます。Kickstartで再インストールするクライアントにあるカスタム設定ファイルが多数ある場合、リストにしてこれらのファイルを保存し、そのリストをKickstartプロファイルに関連付けることができます。

Procedure: Creating a file preservation list

1. UyuniのWeb UIで、**自動システムファイル保持**に移動し、をクリックします。
2. 適切なラベルを入力し、保存するすべてのファイルおよびディレクトリへの絶対パスをリストします。

3. 「[一覧]の[作成]」をクリックします。
4. Kickstartプロファイルにファイル保持一覧を含めます。
5. システム、自動インストール、プロファイルに移動して編集するプロファイルを選択し、システムの詳細、ファイル保持サブタブに移動して、含めるファイル保持一覧を選択します。



ファイル保持一覧の合計サイズは1 MBに制限されています。 /dev/hda1  
や/dev/sda1などの特殊なデバイスは保持できません。 ファイル名とディレクトリ名のみ使用できます。正規表現のワイルドカードは使用できません。

Kickstartの詳細については、Red Hatのドキュメントを参照してください。

#### 8.5.4. Templates syntax

インストールファイルの一部は、インストール中に置き換えられます。変数は単一の値に置き換えられ、コードスニペットはテキストのセクション全体に置き換えられます。エスケープされた記号やセクションは置き換えられません。

A template engine called Cheetah allows Cobbler to do these replacements. This mechanism allows you to reinstall large numbers of systems, without having to manually create profiles for each of them.

自動インストールの変数やコードスニペットは、Uyuni Web UI内で作成できます。 プロファイル内の [→→→→] タブでは、置き換えの結果を確認できます。

- ・ 変数については、[変数](#)を参照してください。
- ・ コードスニペットについては、[コードスニペット](#)を参照してください。
- ・ エスケープ記号またはテキストブロックについては、[エスケープ](#)を参照してください。

##### 8.5.4.1. 変数

自動インストールの変数は、KickstartプロファイルおよびAutoYaSTプロファイルに値を代入するために使用できます。 変数を定義するには、プロファイルから [→→→] サブタブに移動し、テキストボックスでname=valueペアを作成します。

たとえば、クライアントのIPアドレスを格納する変数と、ゲートウェイのアドレスを格納する変数を作成できます。 次に、作成した変数は、同じプロファイルからインストールされるすべてのクライアントに対して定義できます。 このためには、 [→→→] テキストボックスに次の行を追加します。

```
ipaddr=192.168.0.28
gateway=192.168.0.1
```

変数を使用するには、プロファイルで値の前に\$記号を付けて値を代入します。 たとえば、Kickstartファイルの [→→→→] 部分は次のようにになります。

```
network --bootproto=static --device=eth0 --onboot=on --ip=$ipaddr \
--gateway=$gateway
```

\$ipaddrは192.168.0.28に解決され、\$gatewayは192.168.0.1に解決されます。

インストールファイルでは、変数は階層的に使用します。 システム変数はプロファイル変数より優先され、プロファイル変数はディストリビューション変数より優先されます。

### 8.5.4.2. Code snippets

Uyuniには、多数の定義済みコードスニペットが付属しています。 **システム**、**自動インストール**、**自動インストールスニペット**に移動し、既存のスニペットの一覧を表示します。

自動インストールファイルの\$SNIPPET()マクロに挿入してスニペットを使用します。 たとえば、Kickstartでは次のようにになります。

```
$SNIPPET('spacewalk/rhel_register_script')
```

または、AutoYaSTでは次のようにになります。

```
<init-scripts config:type="list">
  $SNIPPET('spacewalk/sles_register_script')
</init-scripts>
```

The macro is parsed by Cobbler and substituted with the contents of the snippet. You can also store your own code snippets to use in autoinstallation files later on. Click [\[Create Snippet\]](#) to create a new code snippet.

この例では、一般的なハードドライブのパーティション設定のKickstartスニペットが設定されます。

```
clearpart --all
part /boot --fstype ext3 --size=150 --asprimary
part / --fstype ext3 --size=40000 --asprimary
part swap --recommended

part pv.00 --size=1 --grow

volgroup vg00 pv.00
logvol /var --name=var vgname=vg00 --fstype ext3 --size=5000
```

たとえば、次のようにスニペットを使用します。

```
$SNIPPET('my_partition')
```

### 8.5.4.3. エスケープ

自動インストールファイルには、\$(example)のようなシェルスクリプト変数が含まれています。コンテンツはバックスラッシュ(円記号)でエスケープする必要があります\\$\$(example)。 \$記号をエスケープすると、テンプレートエンジンは記号を内部変数として評価しなくなります。

コードフラグメントやスクリプトなどのテキストブロックは、\#rawディレクティブおよび\#end rawディレクティブで囲むことによってエスケープできます。次に例を示します。

```
#raw
#!/bin/bash
for i in {0..2}; do
    echo "$i - Hello World!"
done
#end raw
```

#記号の後にスペースがある行はコメントとして扱われるため、評価されません。次に例を示します。

```
# start some section (this is a comment)
echo "Hello, world"
# end some section (this is a comment)
```

## 8.6. 無人プロビジョニング

「ベアメタル」機能を使用すると、汎用PXEブートイメージを使用して、ローカルネットワークに接続した直後に新しいコンピュータを登録することができます。次に、Uyuni Web UIに移動して、このコンピュータにプロファイルを割り当てます。次にクライアントをブートしたときに、そのプロファイルに従ってオペレーティングシステムがインストールされます。ベアメタルプロビジョニングについては、[ベアメタルプロビジョニング](#)を参照してください。

ベアメタル機能を使用たくない場合は、Uyuniでシステムを手動で宣言することもできます。Uyuni APIを使用すると、ベアメタル機能で収集されたかのように、システムに対するシステムレコードを作成することができます。APIを使用したシステムの宣言については、[システムレコードを手動で作成する](#)を参照してください。

### 8.6.1. ベアメタルプロビジョニング

ベアメタルプロビジョニングオプションを有効にしている場合、Uyuniネットワークに接続されているクライアントは、電源をオンにするとすぐに組織に自動追加されます。この処理が完了すると、クライアントはシャットダウンし、[――――――――] 一覧に表示され、インストールする準備ができます。

手順: ベアメタル機能を有効にする

1. UyuniのWeb UIで、**管理** › **マネージャ設定** › **ベアメタルシステム**に移動します。
2. **[この組織に対する追加の有効化]**をクリックします。

電源をオンにした新しいクライアントは、ベアメタル機能を有効にした管理者が所属している組織に追加されます。 このようなクライアントは「ブートストラップ」タイプであり、通常のクライアントにするためにプロビジョニングが必要です。

新しいクライアントを追加する組織を変更するには、ベアメタル機能を無効にし、新しい組織の管理者としてログインし、機能を再有効化します。 登録済みのシステムは別の組織に移行できます。 そのためには **[-->]** タブを使用します。

この方法で登録するクライアントでは、システムセットマネージャ(SSM)を使用できます。 ただし、オペレーティングシステムがまだインストールされていないため、このようなクライアントでは使用できないSSM機能があります。 これは、この方法で登録したシステムを含む混合セットにも当てはまります。 セットのすべてのクライアントがプロビジョニングされると、すべての機能をセットで使用できるようになります。 SSMの詳細については、**Client-configuration** › **System-set-manager**を参照してください。

手順: 「ブートストラップ」タイプのクライアントをプロビジョニングする

1. Uyuni Web UIで、**[-->]** に移動し、プロビジョニングするクライアントを選択し、**プロビジョニング** › **自動インストールタブ**に移動します。
2. Select the AutoYaST profile to use, and click **[Create PXE installation configuration]**. This option creates a system entry at Cobbler.
3. クライアントの電源をオンにします。

サーバは、TFTPを使用して新しいクライアントをプロビジョニングするため、プロビジョニングを正常に実行するには適切なポートおよびネットワークが正しく設定されている必要があります。

## 8.6.2. システムレコードを手動で作成する

APIコールを使用して、MACアドレスによって識別されるクライアントと自動インストールプロファイル間の関連付けを宣言できます。 次にシステムを再起動したときに、指定したプロファイルに基づいてインストールが開始されます。

手順: 手動で宣言したプロファイルからの再インストール

1. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、`system.createSystemRecord` APIコールを使用します。 この例では、`name`をクライアントの名前に、`<profile>`をプロファイルラベルに、`<iface>`を`eth0`などのクライアント上のインターフェース名に、`<hw_addr>`を`00:25:22:71:e7:c6`などのクライアントのハードウェアアドレスに置き換えます。

```
$ spacecmd api -- --args '[ "<name>", "<profile>", "", "", \
[ {"name": "<iface>", "mac": "<hw_addr>"} ]' \
system.createSystemRecord
```

2. クライアントの電源をオンにします。 ネットワークからブートすると、インストール用の正しいプロファイルが選択されます。

This command creates a system record at Cobbler. You may also specify additional parameters, like kernel options, the IP address of the client, and its domain name. For more information, see the API documentation for `createSystemRecord` call.

## 8.7. 独自のGPGキーを使用する

自動インストールのために使用しているリポジトリに署名されていないメタデータがある場合は、通常、自動インストールのディストリビューションのオプションとして `insecure=1` カーネルパラメータを使用し、AutoYaSTインストールファイルで `spacewalk/sles_no_signature_checks` コードスニペットを使用する必要があります。

より安全な代替方法は、独自のGPGキーを提供することです。



この操作は、SUSEクライアントにのみ適用されます。

手順: 独自のGPGキーを追加する

1. GPGキーを作成します。
2. このキーを使用して、パッケージのメタデータに署名します。
3. インストールメディアの初期RAMディスクにこのキーを追加します。
  - キーを作成し、そのキーを使用してメタデータに署名する方法については、[Administration > Repo-metadata](#) を参照してください。
  - ネットワークブートに使用するインストールメディアにキーを追加する方法については、[PXE ブート用の独自のGPGキー](#) を参照してください。
  - CD-ROMからのブートに使用するインストールメディアにキーを追加する方法については、[CD-ROM内の独自のGPGキー](#) を参照してください。



新しいGPGキーを使用してメタデータに署名した場合、オンボード済みのクライアントはこの新しいキーを認識しません。 クライアントを登録する前に、メタデータに署名することが理想的です。

リポジトリを使用するオンボード済みのクライアントの場合、修正方法は、そのクライアントでGPGキーのチェックを無効にすることです。

### 8.7.1. PXEブート用の独自のGPGキー

PXEブートプロセスで使用される初期RAMディスク(`initrd`)には、通常SUSEのGPGキーのみが格納されています。 パッケージをチェックするために使用できるように、このファイルに独自のキーを追加する必要があります。

手順: 初期RAMディスクにGPGキーを追加する

1. GPGキーを見つけるためにブートプロセス中に使用されるものと同じパスにディレクトリを作成します。

```
mkdir -p tftpboot/usr/lib/rpm/gnupg/keys
```

2. .ascサフィックスを付けてこのディレクトリにGPGキーをコピーします。

```
cp /srv/www/htdocs/pub/mgr-gpg-pub.key
tftpboot/usr/lib/rpm/gnupg/keys/mgr-gpg-pub.asc
```

3. 最上位のディレクトリ内で、コンテンツをパッケージ化し、インストールメディアファイルの一部であるinitrdに追加します。

```
cd tftpboot
find . | cpio -o -H newc | xz --check=crc32 -c >> /path/to/initrd
```

## 8.7.2. CD-ROM内の独自のGPGキー

mksusecdユーティリティでインストールイメージを修正できます。 このユーティリティは、Development Toolsモジュールに含まれています。

手順: インストールISOイメージにGPGキーを追加する

1. GPGキーを見つけるためにブートプロセス中に使用されるものと同じパスにディレクトリを作成します。

```
mkdir -p initrdroot/usr/lib/rpm/gnupg/keys
```

2. .ascサフィックスを付けてこのディレクトリにGPGキーをコピーします。

```
cp /srv/www/htdocs/pub/mgr-gpg-pub.key
initrdroot/usr/lib/rpm/gnupg/keys/mgr-gpg-pub.asc
```

3. mksusecdで既存のISOイメージを修正します。

```
mksusecd --create <new-image>.iso --initrd initrdroot/ <old-image>.iso
```

# Chapter 9. 仮想化

You can use Uyuni to manage virtualized clients. In this type of installation, a virtual host is installed on the Uyuni Server to manage any number of virtual guests. If you choose to, you can install several virtual hosts to manage groups of guests.

仮想化されたクライアントにある機能の範囲は、選択したサードパーティ仮想化プロバイダによって決まります。

XenおよびKVMのホストおよびゲストはUyuniで直接管理できます。 そうすると、AutoYaSTまたはKickstartを使用してホストおよびゲストを自動インストールし、Web UIでゲストを管理できます。

VMWare vSphere、Nutanix AHVなどのVMWareでは、Uyuniは、仮想ホストマネージャ(VHM)を設定し、VMを制御する必要があります。 そうするとホストおよびゲストを制御できますが、XenおよびKVMで可能な制御方法より限定されます。 Uyuniは、VMWare vSphereまたはNutanix AHVでVMを作成または編集できません。

他のサードパーティ仮想化プロバイダはUyuniでは直接サポートされていません。 ただし、プロバイダでVMのJSON設定ファイルをエクスポートできる場合、その設定ファイルをUyuniにアップロードし、VHMで管理できます。

VHMを使用して仮想化を管理する方法の詳細については、[Client-configuration > Vhm](#)を参照してください。

## 9.1. Manage Virtualized Hosts

Before you begin, ensure that the client you want to use as a virtualization host has the Virtualization Host system type assigned to it. Navigate to **Systems > Systems List** and click the name of the client to use as a virtualization host. If the Virtualization Host system type is not listed, initialize the virtualization host formula. For more information, see [client-configuration:virt-xenkvm.pdf](#).

クライアントに [-----] システムタイプがある場合、クライアントの [システムの詳細] ページで [-----] タブを使用できます。 [-----] タブでは、仮想ゲストを作成して管理し、ストレージプールおよび仮想ネットワークを管理できます。

## 9.2. 仮想ゲストの作成

UyuniのWeb UI内で仮想ゲストを仮想化ホストに追加できます。

プロシージャ: 仮想ゲストの作成

1. UyuniのWeb UIで、**システム > システム一覧**に移動し、仮想化ホストの名前をクリックし、[-----] タブに移動します。
2. [-----] セクションで、次の詳細を入力します。
  - [-----] サブタブで、**[Create Guest]** (ゲストの作成) をクリックします。
  - [-----] フィールドにゲストの名前を入力します。

- [-----] フィールドで、使用するハイパーバイザを選択します。
  - [-----] フィールドで、完全仮想化または部分的仮想化のいずれかを選択します。
  - [-----] フィールドに、ゲストディスクの最大サイズ制限(MB単位)を入力します。
  - [-----] フィールドで、ゲストのvCPUの数を入力します。
  - [-----] フィールドで、ゲストで使用するエミュレートCPUアーキテクチャを選択します。デフォルトでは、選択したアーキテクチャは仮想ホストと一致しています。
  - [-----] フィールドで、ゲストのインストールに使用する自動インストールツールを選択します。自動インストールを使用しない場合、このフィールドを空白のままにします。
3. [-----] セクションで、クライアントで使用する仮想ディスクの詳細を入力します。  
[-----URL] フィールドで、オペレーティングシステムのイメージへのパスを入力したことを確認してください。これを実行しないと、ゲストのディスクは空になります。
4. [-----] セクションで、クライアントで使用するネットワークインターフェースの詳細を入力します。[MAC-----] フィールドを空白のままにして、MACアドレスを生成します。
5. [-----] セクションで、クライアントで使用するグラフィックスドライバの詳細を入力します。
6. ゲストを作成する時間をスケジュールし、をクリックしてゲストを作成します。
7. 新しい仮想ゲストは、正常に作成されるとすぐに開始されます。

Uyuni Web UI内のペースメーカークラスタに仮想ゲストを追加することもできます。

プロシージャ: クラスタ管理対象仮想ゲストの作成

1. 次の追加項目を使用して、クラスタのノードの1つで-----プロシージャに従います。
  - -----フィールドがチェックされていることを確認します。
  - VM-----フィールドに、ゲスト構成が保存されるすべてのクラスタノードによって共有されるフォルダーへのパスを入力します。
  - すべてのディスクが、すべてのクラスタノードによって共有されるストレージプールに配置されていることを確認してください。

クラスタによって管理される仮想ゲストは、ライブマイグレーションできます。

## 9.3. XenおよびKVMを使用した仮想化

XenおよびKVMの仮想化クライアントはUyuniで直接管理できます。

To begin, you need to set up a virtual host on your Uyuni Server. You can then set up autoinstallation using AutoYaST or Kickstart for additional virtual hosts and for virtual guests.

This section also includes information about administering virtual guests after they have been installed.

## 9.3.1. ホストの設定

The way that you set up Xen or KVM on a VM host depends on operating system you want to use on its associated guests:

- For SUSE operating systems, see the SLES Virtualization Guide available from <https://documentation.suse.com/sles/15-SP4/html/SLES-all/book-virtualization.html>.
- Red Hat Enterprise Linuxオペレーティングシステムについては、使用バージョンに応じてRed Hatのドキュメントを参照してください。

-----式は、ホストの初期化を支援します。  
xenkvm.pdfを参照してください。

詳細については、[client-configuration:virt-xenkvm.pdf](#)

### 9.3.1.1. 背景情報

Uyuni uses libvirt to install and manage guests. You must have the libvirt-daemon package installed on your host. In most cases, the default settings are sufficient and you do not need to adjust them. However, if you want to access the VNC console on your guests as a non-root user, you need to perform some configuration changes. For more information about how to set up the VNC console, see the documentation for your operating system.

You need a bootstrap script on the Uyuni Server. The bootstrap script must include the activation key for your host. We also recommend that you include your GPG key for additional security. For more on creating a bootstrap script, see **Client-configuration > Registration-bootstrap**.

When the bootstrap script is ready, use it to register the host with the Uyuni Server. For more information about client registration, see **Client-configuration > Registration-overview**.

### 9.3.1.2. -----の初期化

-----式で、ホストを初期化します。

プロシージャ: -----の初期化

- UyuniのWeb UIで、ホストの [-----] ページに移動し、[-----] タブをクリックします。
- 式を選択し、[-----] をクリックします。
- サブタブをクリックします。
- 設定を確認して、[-----] をクリックします。
- 変更を有効にするには、Highstateを適用します。
- salt-minionサービスを再起動し、新しい設定を有効にします。

```
systemctl restart salt-minion
```

## 9.3.2. VMゲストの自動インストール

AutoYaSTまたはKickstartを使用して、XenおよびKVMのゲストを自動的にインストールして登録できます。

You need an activation key for the VM host you want to register the guests to, and for each guest. The activation key must have the provisioning and Virtualization Platform entitlements. For more information about creating activation keys, see [Client-configuration > Activation-keys](#).

If you want to automatically register the guests with Uyuni after installation, you need to create a bootstrap script. For more information about creating a bootstrap script, see [Client-configuration > Registration-bootstrap](#).

### 9.3.2.1. 自動インストール可能なディストリビューションの作成

Uyuniからクライアントを自動インストールできる自動インストール可能なディストリビューションをVMに作成する必要があります。ディストリビューションは、マウントされたローカルディレクトリやリモートディレクトリから使用できたり、ループマウントされたISOイメージで使用できます。

The configuration of the autoinstallable distribution differs depending on whether you are using a Red Hat Enterprise Linux or SUSE operating system on your guests. The packages for a Red Hat Enterprise Linux installation are fetched from the associated base channel. Packages for installing SUSE systems are fetched from the autoinstallable distribution. Therefore, for SUSE systems, the autoinstallable distribution must be a complete installation source.

表 45. 自動インストール可能なディストリビューションのパス

Operating System Type	Kernel Location	initrd Location
Red Hat Enterprise Linux	images/pxeboot/vmlinuz	images/pxeboot/initrd.img
SUSE	boot/<arch>/loader/initrd	boot/<arch>/loader/linux

すべてのケースで、ベースチャンネルが自動インストール可能なディストリビューションと一致していることを確認してください。

Before you begin, ensure you have a installation media available to your VM Host. It can be on a remote resource, a local directory, or a loop-mounted ISO image. Additionally, ensure that all files and directories are world-readable.

プロシージャ: 自動インストール可能なディストリビューションの作成

1. UyuniのWeb UIで、**システムインストールストリビューション**に移動し、**ディストリビューションの作成**をクリックします。
2. [ディストリビューション名] セクションで、次のパラメータを使用します。
  - [ディストリビューション名] セクションに、ディストリビューションの固有の名前を入力します。半角の英字、数字、ハイフン(-)、ピリオド(.)、および下線(\_)のみを使用し、5文字以上にしてください。
  - [インストールソース] フィールドに、インストールソースへの絶対パスを入力します。

- 〔――――――――――――――――――〕 フィールドで、インストールソースと一致するチャンネルを選択します。このチャンネルは、非SUSEインストール環境用のパッケージソースとして使用されます。
- 〔――――――――――――――――――〕 フィールドで、インストールソースと一致するオペレーティングシステムのバージョンを選択します。
- 〔――――――――――――――――――〕 フィールドに、インストールでブート時にカーネルに渡すオプションを入力します。  
install=/パラメータおよびself\_update=0  
pt.options=self\_updateパラメータはデフォルトで追加されます。
- インストールしたシステムを初めてブートするときにカーネルに渡すオプションを〔――――――――――――――――――〕 セクションに入力します。

### 3. [自動インストール可能なディストリビューションの作成] をクリックして

自動インストール可能なディストリビューションを作成するとき、これを編集できます。そのためには、**システム**、**自動インストール**、**ディストリビューション**に移動し、編集するディストリビューションを選択します。

#### 9.3.2.2. 自動インストールプロファイルの作成およびアップロード

自動インストールプロファイルには、システムをインストールするために必要なインストールデータおよび設定データがすべて含まれています。インストール完了後に実行するスクリプトを含めることもできます。

KickstartプロファイルはUyuniのWeb UIを使用して作成できます。そのためには、**システム**、**自動インストール**、**新しいキックスタート**、**トプロファイルを作成**をクリックし、プロンプトに従って操作します。

AutoYaSTまたはKickstartの自動インストールプロファイルを手動で作成することもできます。SUSEには、独自のカスタムファイルの雛形として使用できるAutoYaSTインストールファイルのテンプレートが用意されています。これは、<https://github.com/SUSE/manager-build-profiles>にあります。

AutoYaSTを使用してSLESをインストールする場合、次のスニペットも含める必要があります。

```
<products config:type="list">
  <listentry>SLES</listentry>
</products>
```

- AutoYaSTの詳細については、[client-configuration:autoinst-profiles.pdf](#)を参照してください。
- Kickstartについては、[client-configuration:autoinst-profiles.pdf](#)を参照するか、Red Hatのインストール関連ドキュメントを参照してください。

プロシージャ: 自動インストールプロファイルのアップロード

- UyuniのWeb UIで、**システム**、**自動インストール**、**プロファイル**に移動し、**新しくキックスタート**、**ト/Autoyast**、**ファイル**、**アップロード**をクリックします。
- 〔――――――――――――――――――〕 セクションで、次のパラメータを使用します。

- 〔フィールド〕 フィールドにプロファイルの一意の名前を入力します。半角の英字、数字、ハイフン(-)、ピリオド(.)、および下線(\_)のみを使用し、7文字以上にしてください。
- 〔フィールド〕 フィールドで、前に作成した自動インストール可能なディストリビューションを選択します。
- 〔フィールド〕 フィールドで、関連するゲストの種類を選択します(KVMなど)。ここでは、[Xen] を選択しないでください。
- オプション: 自動インストールプロファイルを手動で作成する場合、〔フィールド〕 フィールドに直接入力できます。ファイルを作成済みの場合、〔フィールド〕 フィールドを空白のままにします。
- 〔フィールド〕 フィールドで、[Choose File] (ファイルの選択) をクリックし、システムダイアログを使用して、アップロードするファイルを選択します。ファイルが正常にアップロードされると、ファイル名が〔フィールド〕 フィールドに表示されます。
- アップロードしたファイルの内容が〔フィールド〕 フィールドに表示されます。編集する必要がある場合、直接編集できます。

3. [作成] をクリックして変更を保存し、プロファイルを保存します。

自動インストールプロファイルを作成するとき、これを編集できます。そのためには、**システム** > **自動インストールプロファイル** に移動し、編集するプロファイルを選択します。[作成] をクリックして、必要な変更を行い、設定を保存します。



既存のKickstartプロファイルの〔フィールド〕 を変更する場合、ブートローダおよびパーティションのオプションも変更する場合があり、カスタム設定を上書きすることもあります。〔フィールド〕 タブを注意深く確認して、変更前にこれらの設定を確認してください。

### 9.3.2.3. ゲストを自動的に登録する

VMゲストを自動的にインストールするとき、Uyuniには登録されません。ゲストをインストールしてすぐに自動的に登録する場合、ブートストラップスクリプトを呼び出してゲストを登録する自動インストールプロファイルにセクションを追加できます。

このセクションでは、ブートストラップスクリプトを既存のAutoYaSTプロファイルに追加する手順について説明します。

ブートストラップスクリプトの作成の詳細については、**Client-configuration** > **Registration-bootstrap** を参照してください。Kickstartでこの作業を行う方法については、Red Hatのインストール関連ドキュメントを参照してください。

プロシージャ: ブートストラップスクリプトをAutoYaSTプロファイルに追加する

1. 登録するVMゲストのアクティベーションキーがブートストラップスクリプトに含まれていることを確認してください。これはホストの /srv/www/htdocs/pub/bootstrap\_vm\_guests.sh にあります。
2. UyuniのWeb UIで、**システム** > **自動インストール** > **プロファイル** に移動し、このスクリプトを関連付

けるAutoYaSTプロファイルを選択します。

3. [――――――――――――――] フィールドで、次のスニペットをファイルの末尾(</profile>タグの直前)に追加します。スニペットのIPアドレス例192.168.1.1を、使用中のUyuniサーバの正しいIPアドレスに置き換えてください。

```
<scripts>
<init-scripts config:type="list">
<script>
<interpreter>shell</interpreter>
<location>
  http://192.168.1.1/pub/bootstrap/bootstrap_vm_guests.sh
</location>
</script>
</init-scripts>
</scripts>
```

4. [更新] をクリックして変更を保存します。



AutoYaSTプロファイルに<scripts>セクションがすでに含まれている場合、2つ目のセクションを追加しないでください。既存の<scripts>セクション内にブートストラップスニペットを配置します。

#### 9.3.2.4. VMゲストの自動インストール

When you have everything set up, you can start to autoinstall your VM guests.



各VMホストが同時にインストールできるゲストは1つだけです。複数の自動インストールをスケジュールしている場合、前のインストールが完了する前に次のインストールが始まらないようにスケジュールしてください。ゲストのインストールが別のインストールの実行中に開始すると、実行中のインストールはキャンセルされます。

1. UyuniのWeb UIで、**システム** > **概要**に移動し、ゲストをインストールするVMホストを選択します。
2. Navigate to the **Virtualization** tab, and the **Provisioning** subtab.
3. 使用する自動インストールプロファイルを選択し、ゲストの一意の名前を指定します。
4. 該当する場合にはプロキシを選択し、スケジュールを入力します。
5. ゲストのハードウェアのプロファイルおよび設定オプションを変更するには、[高度なオプション]をクリックします。
6. [自動インストールをスケジュールしてから終了する]をクリックして完了します。

### 9.3.3. VMゲストの管理

UyuniのWeb UIを使用して、CPUやメモリの割り当て調整、シャットダウン、再起動のようなアクションなど、VMゲストを管理できます。

To do this, you need your Xen or KVM VM host registered to the Uyuni Server, and have the `libvirtd` service running on the host.

UyuniのWeb UIで、**システム** > **システム一覧**に移動し、管理するゲストのVMホストをクリックします。  
[...] タブに移動し、このホストに登録されているすべてのゲストを表示し、管理機能にアクセスします。

For more information about managing VM guests using the Web UI, see [Reference > Systems](#).

# Chapter 10. 仮想ホストマネージャ

仮想ホストマネージャ(VHM)は、さまざまなクライアントの種類から情報を収集するために使用します。

VHMを使用して、プライベートクラウドまたはパブリッククラウドのインスタンスを収集し仮想化グループに編成できます。このように編成された仮想化クライアントを使用して、Taskomaticは、クライアントのデータを収集し、UyuniのWeb UIに表示します。VHMを使用すると、仮想化されたクライアントでサブスクリプションマッチングを使用することもできます。

UyuniサーバにVHMを作成して使用し、使用可能なパブリッククラウドのインスタンスを評価できます。VHMを使用して、Kubernetesで作成したクラスタを管理することもできます。

- Amazon Web ServicesでVHMを使用する方法の詳細については、[Client-configuration > Vhm-aws](#)を参照してください。
- Microsoft AzureでVHMを使用する方法の詳細については、[Client-configuration > Vhm-azure](#)を参照してください。
- Google Compute EngineでVHMを使用する方法の詳細については、[Client-configuration > Vhm-gce](#)を参照してください。
- KubernetesでVHMを使用する方法の詳細については、[Client-configuration > Vhm-kubernetes](#)を参照してください。
- NutanixでVHMを使用する方法の詳細については、[Client-configuration > Vhm-nutanix](#)を参照してください。
- VMWare vSphereでVHMを使用する方法の詳細については、[Client-configuration > Vhm-vmware](#)を参照してください。
- その他のホストでVHMを使用する方法の詳細については、[Client-configuration > Vhm-file](#)を参照してください。

## 10.1. VHMおよびAmazon Web Services

仮想ホストマネージャ(VHM)を使用して、Amazon Web Services (AWS)からインスタンスを収集できます。

VHMを使用すると、Uyuniは、クラスタに関する情報を取得して報告できます。VHMの詳細については、[Client-configuration > Vhm](#)を参照してください。

### 10.1.1. Amazon EC2 VHMの作成

仮想ホストマネージャ(VHM)はUyuniサーバ上で動作します。

`virtual-host-gatherer-libcloud`パッケージをUyuniサーバにインストール済みであることを確認してください。

プロシージャ: Amazon EC2 VHMの作成

1. UyuniのWeb UIで、**システム** > **仮想ホストマネージャ**に移動します。

2. [作成]をクリックし、ドロップダウンメニューから [Amazon EC2] を選択します。
3. [Add an Amazon EC2 Virtual Host Manager] (Amazon EC2仮想ホストマネージャの追加) セクションで、次のパラメータを使用します。
  - [名前] フィールドにVHMのカスタム名を入力します。
  - [Access Key ID] (アクセスキーID) フィールドに、Amazonが提供するアクセスキーIDを入力します。
  - [Secret Access Key] (秘密アクセス鍵) フィールドに、Amazonインスタンスに関連付けられた秘密アクセス鍵を入力します。
  - [Region] (リージョン) フィールドに、使用するリージョンを入力します。
  - [Zone] (ゾーン) フィールドに、VMが存在するゾーンを入力します。これは、サブスクリプションマッチングを動作させるために必要です。リージョンおよびゾーンの設定の詳細については、[client-configuration:virtualization.pdf](#)を参照してください。
4. [作成]をクリックして変更を保存し、VHMを作成します。
5. [VMs] ページで、新しいVHMを選択します。
6. [VMs] ページで、[データの更新]をクリックし、新しいVHMを評価します。

評価されたオブジェクトおよびリソースを表示するには、**システム**、**システム一覧**、**仮想システム**に移動します。

Amazonパブリッククラウドで動作しているインスタンスは、UUIDをUyuniサーバに報告します。その際のフォーマットは、`xxxxxxxxxxxxxx`に17桁の16進数をつなげたものです。

```
I1234567890abcdef0
```

## 10.1.2. 仮想ホストマネージャのAWS許可

セキュリティ上の理由から、タスクを実行するために可能な限り最小限の権限を常に付与してください。AWSに接続するユーザに過度な許可を持つアクセスキーを使用することはお勧めしません。

SUSE ManagerがAWSから必要な情報を収集するには、VHMにEC2インスタンスとアドレスを記述する許可が必要です。これを許可する1つの方法は、このタスクに固有の新しいIAMユーザ(IDおよびアクセス管理)を作成し、次のようにポリシーを作成して、ユーザにアタッチすることです。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ec2:DescribeAddresses",
        "ec2:DescribeInstances"
      ],
      "Resource": "*"
    }
  ]
}
```

特定のリージョンへのアクセスを制限することで、許可をさらに制限できます。 詳細については、[https://docs.aws.amazon.com/AWSEC2/latest/UserGuide/ExamplePolicies\\_EC2.html#iam-example-read-only](https://docs.aws.amazon.com/AWSEC2/latest/UserGuide/ExamplePolicies_EC2.html#iam-example-read-only)を参照してください。

## 10.2. VHMとAzure

仮想ホストマネージャ(VHM)を使用して、Microsoft Azureからインスタンスを収集できます。

VHMを使用すると、Uyuniは、使用している仮想マシンに関する情報を取得して報告できます。 VHMの詳細については、**Client-configuration** › **Vhm**を参照してください。

### 10.2.1. 前提条件

作成したVHMは、Azure VMにアクセスするために、正しいパーミッションが割り当てられている必要があります。

サブスクリプション管理者としてAzureアカウントにログインし、Azureユーザアカウントとアプリケーションが正しいグループに属していることを確認してください。 アプリケーションが属しているグループによって、そのロールが決まり、パーミッションが決まります。

### 10.2.2. Azure VHMの作成

仮想ホストマネージャ(VHM)はUyuniサーバ上で動作します。

`virtual-host-gatherer-libcloud`パッケージをUyuniサーバにインストール済みであることを確認してください。

プロシージャ: Azure VHMの作成

1. UyuniのWeb UIで、**システム** › **仮想ホストマネージャ**に移動します。
2. **[作成]**をクリックし、ドロップダウンメニューから **[Azure]** を選択します。

3. [Add an Azure Virtual Host Manager] (Azure仮想ホストマネージャの追加) セクションで、次のパラメータを使用します。

- [Name] フィールドにVHMのカスタム名を入力します。
- [Subscription ID] (サブスクリプションID) フィールドに、Azure portal > Services > SubscriptionsページにあるサブスクリプションIDを入力します。
- [Application ID] (アプリケーションID) フィールドに、このアプリケーションを登録したときに収集したアプリケーションIDを入力します。
- [Tenant ID] (テナントID) フィールドに、このアプリケーションを登録したときに収集したAzureが提供するテナントIDを入力します。
- [Secret Key] (秘密鍵) フィールドに、Azureインスタンスに関連付けられた秘密鍵を入力します。
- [Zone] (ゾーン) フィールドに、VMが存在するゾーンを入力します。たとえば、西ヨーロッパの場合、westeuropeと入力します。これは、サブスクリプションマッチングを動作させるために必要です。

4. [作成] をクリックして変更を保存し、VHMを作成します。

5. [VMs] ページで、新しいVHMを選択します。

6. [VMs] ページで、[評価] をクリックし、新しいVHMを評価します。

評価されたオブジェクトおよびリソースを表示するには、システム > システム一覧、仮想システムに移動します。

### 10.2.3. パーミッションの割り当て

パーミッションが正しく設定されていない場合、virtual-host-gathererを実行すると次のようなエラーが発生する場合があります。

```
General error: (一般エラー:) [AuthorizationFailed] The client 'client_name' with object id 'object_ID' does not have authorization to perform action 'Microsoft.Compute/virtualMachines/read' over scope '/subscriptions/not-very-secret-subscription-id' or the scope is invalid.  
([AuthorizationFailed] オブジェクトID「object_ID」のクライアント「client_name」には、アクション「Microsoft.Compute/virtualMachines/read」をスコープ「/subscriptions/not-very-secret-subscription-id」を超えて実行する権限がありません。またはスコープが無効です。) If access was recently granted, please refresh your credentials. (アクセスが最近付与された場合は、資格情報を更新してください。)
```

正しい資格情報を判断するには、Uyuniサーバのプロンプトで次のコマンドを実行します。

```
virtual-host-gatherer -i input_azure.json -o out_azure.json -vvv
```

input\_azure.jsonファイルには次の情報が含まれています。

```
[
  {
    "id": "azure_vhm",
    "module": "Azure",
    "subscription_id": "subscription-id",
    "application_id": "application-id",
    "tenant_id": "tenant-id",
    "secret_key": "secret-key",
    "zone": "zone"
  }
]
```

## 10.2.4. Azure UUID

Azureパブリッククラウドで実行されているインスタンスは、このUUIDをUyuniサーバに報告できます。

```
13f56399-bd52-4150-9748-7190aae1ff21
```

## 10.3. VHMおよびGoogle Compute Engine

仮想ホストマネージャ(VHM)を使用して、Google Compute Engine (GCE)からインスタンスを収集できます。

VHMを使用すると、Uyuniは、使用している仮想マシンに関する情報を取得して報告できます。 VHMの詳細については、**Client-configuration > Vhm**を参照してください。

### 10.3.1. 前提条件

作成したVHMは、GCE VMにアクセスするために、正しいパーミッションが割り当てられている必要があります。

Googleクラウドプラットフォームのアカウントに管理者としてログインし、クラウドのIDおよびアクセス管理(IAM)ツールを使用して、サービスアカウントに適切なロールがあることを確認してください。

### 10.3.2. GCE VHMの作成

仮想ホストマネージャ(VHM)はUyuniサーバ上で動作します。

VHMを実行するには、Uyuniサーバでポート443がオープンになっていて、クライアントにアクセスする必要があります。

virtual-host-gatherer-libcloudパッケージをUyuniサーバにインストール済みであることを確認し

てください。

開始する前に、GCEパネルにログインし、証明書ファイルをダウンロードします。このファイルをUyuniサーバにローカルに格納し、パスをメモします。

プロシージャ: GCE VHMの作成

1. UyuniのWeb UIで、**システム**、**仮想ホストマネージャ**に移動します。
2. **[作成]**をクリックし、ドロップダウンメニューから [Google Compute Engine] を選択します。
3. [Add a Google Compute Engine Virtual Host Manager] (Google Compute Engineの仮想ホストマネージャの追加) セクションで、次のパラメータを使用します。
  - [名前] フィールドにVHMのカスタム名を入力します。
  - [Service Account Email] (サービスアカウントメール) フィールドに、サービスアカウントに関連付けられているメールアドレスを入力します。
  - [Cert Path] (証明書のパス) フィールドに、GCEパネルからダウンロードしたキーへのUyuniサーバのローカルパスを入力します。
  - [Project ID] フィールドに、GCEインスタンスで使用するプロジェクトIDを入力します。
  - [Zone] (ゾーン) フィールドに、VMが存在するゾーンを入力します。これは、サブスクリプションマッチングを動作させるために必要です。
4. **[作成]**をクリックして変更を保存し、VHMを作成します。
5. [**VM**] ページで、新しいVHMを選択します。
6. [**データの更新**] ページで、**[データの更新]**をクリックし、新しいVHMを評価します。

評価されたオブジェクトおよびリソースを表示するには、**システム**、**システム一覧**、**仮想システム**に移動します。

### 10.3.3. パーミッションの割り当て

パーミッションが正しく設定されていない場合、virtual-host-gathererを実行すると次のようなエラーが発生する場合があります。

```
ERROR: (エラー:) {'domain': 'global', 'reason': 'forbidden', 'message': "Required 'compute.zones.list' permission for 'projects/project-id'"}
ERROR: (エラー:) Could not connect to the Google Compute Engine Public Cloud using specified credentials. (指定した資格情報を使用してGoogle Compute Engineのパブリッククラウドに接続できませんでした。)
```

正しい資格情報を判断するには、Uyuniサーバのプロンプトで次のコマンドを実行します。

```
virtual-host-gatherer -i input_google.json -o out_google.json -vvv
```

input\_google.jsonファイルには次の情報が含まれています。

```
[  
  {  
    "id": "google_vhm",  
    "module": "GoogleCE",  
    "service_account_email": "mail@example.com",  
    "cert_path": "secret-key",  
    "project_id": "project-id",  
    "zone": "zone"  
  }  
]
```

### 10.3.4. GCE UUID

Googleパブリッククラウドで実行されているインスタンスは、このUUIDをUyuniサーバに報告できます。

152986662232938449

## 10.4. VHMとKubernetes

仮想ホストマネージャ(VHM)を使用して、Kubernetesクラスタを管理できます。

VHMを使用すると、Uyuniは、クラスタに関する情報を取得して報告できます。  
VHMの詳細については、[Client-configuration › Vhm](#)を参照してください。

KubernetesでUyuniを使用するには、Uyuniサーバがコンテナ管理用に設定されていて、必要なすべてのチャンネルがあり、登録されているコンテナビルドホストが利用できる必要があります。

次の要件もあります。

- ・ 1つ以上のKubernetesのクラスタをネットワーク上で使用できる。
- ・ virtual-host-gatherer-KubernetesパッケージがUyuniサーバにインストールされている。
- ・ Kubernetesバージョン1.5.0以上。
- ・ コンテナビルドホストにDockerバージョン1.12以上がある。

### 10.4.1. Kubernetes VHMの作成

Kubernetesクラスタは、UyuniにVHMとして登録されています。

Kubernetesクラスタを登録して認可するkubeconfigファイルが必要です。 Kubernetesのコマンドラインツールであるkubectlを使用してkubeconfigファイルを取得できます。 kubectl config view --flatten=trueは、VHMに必要に応じて証明書ファイルが埋め込まれた設定を提供します。

### プロシージャ: Kubernetes VHMの作成

1. UyuniのWeb UIで、**システム**、**仮想ホストマネージャ**に移動します。
2. [作成]をクリックし、[Kubernetes...]を選択します。
3. [Add a Kubernetes Virtual Host Manager] (Kubernetes仮想ホストマネージャの追加)セクションで、次のパラメータを使用します。
  - [名前] フィールドにVHMのカスタム名を入力します。
  - Kubernetesクラスタに必要データが含まれているkubeconfigファイルを選択します。
4. [名前] フィールドで、クラスタに適切なコンテキストを選択します。これはkubeconfigファイルで指定されています。
5. [作成]をクリックします。

### プロシージャ: クラスタのノードを表示する

1. UyuniのWeb UIで、**システム**、**仮想ホストマネージャ**に移動します。
2. Kubernetesクラスタを選択します。
3. [Schedule refresh data] (データの更新をスケジュールする)をクリックしてノードのデータを更新します。

ノードのデータの更新には数分かかる場合があります。 更新された情報を表示するには、ブラウザウィンドウを更新する必要があります。

接続および認証の問題はgatherer.logにログされます。



登録中にはノードのデータは更新されません。データを表示するにはデータを手動で更新する必要があります。

## 10.4.2. イメージランタイムデータの取得

UyuniのWeb UIでKubernetesイメージに関するランタイムデータを表示できます。そのためには、**イメージ**、**イメージリスト**に移動します。

イメージリストの表には、3つの列があります。

・ **名前:**

Uyuniによってビルトされたイメージをリビルトするたびに、または外部でビルトされたイメージをインポートするたびに増加するシーケンス番号。

・ **名前:**

登録されたクラスタの各イメージにおける実行中インスタンスの全般的な状態。

・ **名前:**

Uyuniで登録されているすべてのクラスタでこのイメージを実行しているインスタンスの数。 数値の横のポップアップアイコンをクリックして数値の内訳を表示できます。

[~~~~~] 列には、次の状態メッセージのいずれかが表示されます。

- ~~~~~SUSE Manager~~~~~:

実行中のすべてのインスタンスがUyuniによって追跡されているイメージの同じビルドを実行しています。

- ~~~~~:

インスタンスの一部が古いビルドのインスタンスを実行しています。 イメージを再展開する必要があるかもしれません。

- ~~~~~:

Uyuniに含まれているイメージデータとインスタンスイメージのチェックサムが一致していません。 イメージを再展開する必要があるかもしれません。

プロシージャ: イメージのビルド

- UyuniのWeb UIで、**イメージ**、**ストア**に移動します。
- [作成]**をクリックしてイメージストアを作成します。
- イメージ**、**プロファイル**に移動します。
- [作成]**をクリックしてイメージプロファイルを作成します。 You will need to use a Dockerfile that is suitable to deploy to Kubernetes.
- イメージ**、**ビルド**に移動して、新しいプロファイルでイメージをビルドします。
- イメージを登録済みのKubernetesクラスタのいずれかに展開します。 この操作はkubectlツールを使用して実行できます。

更新データは、**イメージ**、**イメージリスト**にあるイメージリストに表示されます。

プロシージャ: 以前展開したイメージのインポート

- UyuniのWeb UIで、**イメージ**、**イメージストア**に移動します。
- インポートするイメージを所有しているレジストリがない場合、追加します。
- イメージ**、**イメージリスト**に移動し、**[イ] [ン] [ボ] [ー] [ト]**をクリックします。
- 各フィールドに入力し、作成したイメージストアを選択し、**[イ] [ン] [ボ] [ー] [ト]**をクリックします。

インポートしたデータは、**イメージ**、**イメージリスト**にあるイメージリストに表示されます。

プロシージャ: 以前展開したイメージの再ビルト

- UyuniのWeb UIで、**イメージ**、**イメージリスト**に移動し、再ビルトするイメージが含まれている行を探し、**[詳細]**をクリックします。

2. [→] セクションに移動し、[再|ビ|ル|ド]をクリックし再びルドの完了には少し時間がかかります。

再ビルトが正常に完了すると、**イメージ** > **イメージリスト**のイメージリストでイメージのランタイム状態が更新されます。インスタンスが前のビルトのインスタンスを実行していることをこれは示しています。



再ビルトできるのは、元々Uyuniでビルトされたイメージのみです。インポートしたイメージは再ビルトできません。

プロシージャ: 追加のランタイムデータの取得

1. UyuniのWeb UIで、**イメージ** > **イメージリスト**に移動し、実行中のインスタンスが含まれている行を探し、[詳|細]をクリックします。
2. [→] タブに移動します。 [→] セクションには、[→] フィールドと[→] フィールドにデータがあります。
3. [→] タブに移動します。このセクションには、登録されているすべてのクラスタでこのイメージを実行しているKubernetesポッドに関する情報が含まれています。このセクションの情報を次に示します。
  - ポッドの名前。
  - ポッドがあるネームスペース。
  - 指定されているポッドのコンテナのランタイム状態。

### 10.4.3. パーミッションと証明書



Uyuniではkubeconfigファイルにすべての証明書データが埋め込まれている場合、このファイルのみ使用できます。

UyuniからのAPIコールは次のとおりです。

- GET /api/v1/pods
- GET /api/v1/nodes

Uyuniの最小推奨パーミッションは次のとおりです。

- すべてのノードをリストするClusterRole:

```
resources: ["nodes"]
verbs: ["list"]
```

- すべてのネームスペースのポッドをリストするClusterRole(ロールのバインドはネームスペースを制限してはいけません):

```
resources: ["pods"]
verbs: ["list"]
```

/podsが403の応答を返した場合、Uyuniはクラスタ全体を無視します。

RBAC認証の操作方法の詳細については、<https://kubernetes.io/docs/admin/authorization/rbac/>を参照してください。

## 10.5. Nutanixによる仮想化

UyuniではNutanix AHV仮想マシンを使用できます。そのためには、仮想ホストマネージャ(VHM)を設定します。まず、UyuniサーバでVHMを設定し、使用できるVMホストを評価する必要があります。

### 10.5.1. VHMの設定

仮想ホストマネージャ(VHM)はUyuniサーバ上で動作します。

virtual-host-gatherer-NutanixパッケージをUyuniサーバにインストール済みであることを確認してください。

VHMを実行するには、Uyuniサーバでポート9440がオープンになっていて、Nutanix Prism Element APIにアクセスする必要があります。

プロシージャ: Nutanix VHMの作成

1. UyuniのWeb UIで、**システム**、**仮想ホストマネージャ**に移動します。
2. **[作成]**をクリックし、**[Nutanix AHV]**を選択します。
3. **[Add a Nutanix AHV Virtual Host Manager]** (Nutanix AHV仮想ホストマネージャの追加) セクションで、次のパラメータを使用します。
  - **[名前]** フィールドにVHMのカスタム名を入力します。
  - **[完全修飾ドメイン名(FQDN)またはホストIPアドレス]** フィールドに、完全修飾ドメイン名(FQDN)またはホストIPアドレスを入力します。
  - **[Prism Element APIポート]** フィールドに、使用するPrism Element APIポートを入力します(9440など)。
  - **[VMホストユーザー名]** フィールドに、VMホストに関連付けられているユーザ名を入力します。
  - **[VMホストユーザー名]** フィールドに、VMホストユーザーに関連付けられているパスワードを入力します。
4. **[作成]**をクリックして変更を保存し、VHMを作成します。
5. **[新しいVHM]**ページで、新しいVHMを選択します。
6. **[評価]**ページで、**[データの更新]**をクリックし、新しいVHMを評価します。

評価されたオブジェクトおよびリソースを表示するには、**システム**、**システム一覧**、**仮想システム**に移動します。



Connecting to the Nutanix Prism API server from a browser using HTTPS can sometimes log an `invalid certificate` error. If this occurs, refreshing the data from the virtual host manager fails. A valid SSL certificate (not self-signed) is required on your Nutanix API server. If you are using a custom CA authority for your Nutanix SSL certificate, copy the custom CA certificate to `/etc/pki/trust/anchors` on the Uyuni Server.

Re-trust the certificate by running the `update-ca-certificates` command on the command line, and restart the spacewalk services.

VHMが作成されて設定されると、Taskomaticは、データ収集を自動的に実行します。データ収集を手動で実行する場合、**仮想ホストマネージャ**に移動し、適切なVHMを選択して**[データ]の[更新]**をクリックします。

APIを使用してVHMに接続して仮想ホストの情報をリクエストできる`virtual-host-gatherer`というツールがUyuniに付属しています。`virtual-host-gatherer`は、オプションモジュールの概念を維持していて、各モジュールが特定のVHMを有効にします。このツールは、Taskomaticによって毎晩自動的に呼び出されます。`virtual-host-gatherer`ツールのログファイルは`/var/log/rhn/gatherer.log`にあります。

## 10.6. VMWareによる仮想化

Uyuniでは、ESXiやvCenterなどのVMWare vSphere仮想マシンを使用できます。そのためには、仮想ホストマネージャ(VHM)を設定します。

まず、UyuniサーバでVHMを設定し、使用できるVMホストを評価する必要があります。次に、Taskomaticは、VMのAPIを使用してデータ収集を開始できます。

### 10.6.1. VHMの設定

仮想ホストマネージャ(VHM)はUyuniサーバ上で動作します。

VHMを実行するには、Uyuniサーバでポート443がオープンになっていて、VMWare APIにアクセスする必要があります。

VMWareホストは、アクセスロールとパーミッションを使用して、ホストおよびゲストへのアクセスを制御します。VHMで評価するVMWareのオブジェクトまたはリソースに少なくとも`read-only`パーミッションがあることを確認してください。任意のオブジェクトまたはリソースを除外する場合、除外対象に`no-access`というマークを付けます。

新しいホストをUyuniに追加している場合、ユーザおよびオブジェクトに割り当てられているロールおよびパーミッションをUyuniで評価する必要があるかどうかを検討する必要があります。

ユーザ、ロール、およびパーミッションの詳細については、VMWare vSphereのドキュメント(<https://docs.vmware.com/en/VMware-vSphere/index.html>)を参照してください。

プロシージャ: VMWare VHMの作成

1. UyuniのWeb UIで、**システム**、**仮想ホストマネージャ**に移動します。
2. [作成]をクリックし、[VMWare-based Virtual Host Manager]を選択します。
3. [Add a VMWare-based Virtual Host Manager] (VMWareベースの仮想ホストマネージャの追加)セクションで、次のパラメータを使用します。
  - [名前] フィールドにVHMのカスタム名を入力します。
  - [完全修飾ドメイン名(FQDN)またはホストIPアドレス] フィールドに、完全修飾ドメイン名(FQDN)またはホストIPアドレスを入力します。
  - [ESXi APIポート] フィールドに、使用するESXi APIポートを入力します(443など)。
  - [VMホストユーザー名] フィールドに、VMホストに関連付けられているユーザ名を入力します。
  - [VMホストユーザーのパスワード] フィールドに、VMホストユーザに関連付けられているパスワードを入力します。
4. [作成]をクリックして変更を保存し、VHMを作成します。
5. [新しいVHM]ページで、新しいVHMを選択します。
6. [データの更新]ページで、[データの更新]をクリックし、新しいVHMを評価します。

評価されたオブジェクトおよびリソースを表示するには、**システム**、**システム一覧**、**仮想システム**に移動します。



HTTPSを使用してブラウザからESXiサーバに接続すると、エラーがログされる場合があります。このエラーが発生すると、仮想ホストサーバからのデータの更新は失敗します。この問題を修正するには、ESXiサーバから証明書を抽出して/etc/pki/trust/anchorsにコピーします。証明書を再度信頼します。そのためには、コマンドラインでupdate-ca-certificatesコマンドを実行し、spacewalkサービスを再起動します。

VHMが作成されて設定されると、Taskomaticは、データ収集を自動的に実行します。データ収集を手動で実行する場合、**仮想ホストマネージャ**に移動し、適切なVHMを選択して[データの更新]をクリックします。

APIを使用してVHMに接続して仮想ホストの情報をリクエストできるvirtual-host-gathererというツールがUyuniに付属しています。virtual-host-gathererは、オプションモジュールの概念を維持していて、各モジュールが特定のVHMを有効にします。このツールは、Taskomaticによって毎晩自動的に呼び出されます。virtual-host-gathererツールのログファイルは/var/log/rhn/gatherer.logにあります。

## 10.6.2. VMWareでのSSLエラーのトラブルシューティング

VMWareのインストール環境を設定中にSSLエラーが発生した場合、VMWareからCA証明書をダウンロードし、Uyuniで信頼する必要があります。

プロシージャ: VMWare CA証明書を信頼する

1. VMWareインストール環境からCA証明書をダウンロードします。そのためには、vCenterのWeb UIにログインし、[Download trusted root CA certificates] (信頼できるルートCA証明書のダウンロー

ド) をクリックします。

2. ダウンロードしたCA証明書ファイルが.zipフォーマットの場合、アーカイブを抽出します。 証明書ファイルには拡張子として番号が含まれています。たとえば、certificate.0のようになります。
3. 証明書ファイルをUyuniサーバにコピーし、/etc/pki/trust/anchors/ディレクトリに保存します。
4. コピーした証明書のファイル名のサフィックスを.crtまたは.pemに変更します。
5. Uyuniサーバのコマンドプロンプトで、CA証明書のレコードを更新します。

```
update-ca-certificates
```

## 10.7. その他のサードパーティプロバイダを使用した仮想化

Xen、KVMまたはVMware以外のサードパーティ仮想化プロバイダを使用する場合、JSON設定ファイルをUyuniにインポートできます。

同様に、APIへの直接アクセスを提供しないVMWareインストール環境の場合、ファイルベースのVHMが基本的な管理機能を提供します。



このオプションは、virtual-host-gathererツールを使用して作成されたファイルをインポートするためのものです。手動で作成したファイル用には設計されていません。

プロセージャ: JSONファイルのエクスポートとインポート

1. VMネットワークでvirtual-host-gathererを実行してJSON設定ファイルをエクスポートします。
2. 生成されたファイルをUyuniサーバからアクセスできる場所に保存します。
3. UyuniのWeb UIで、**システム** > **仮想ホストマネージャ**に移動します。
4. [作成] をクリックし、[Add a file-based Virtual Host Manager] (ファイルベースの仮想ホストマネージャの追加) セクションで、次のパラメータを使用します。
  - [名前] フィールドにVHMのカスタム名を入力します。
  - [Url] フィールドに、エクスポートするJSON設定ファイルへのパスを入力します。
5. [作成] をクリックして変更を保存し、VHMを作成します。
6. [新しいVHM] ページで、新しいVHMを選択します。
7. [評価] ページで、[評価] をクリックし、新しいVHMを評価します。

リスト 3. 例: エクスポートするJSON設定ファイル

```
{
  "examplevhost": {
```

```

    "10.11.12.13": {
        "cpuArch": "x86_64",
        "cpuDescription": "AMD Opteron(tm) Processor 4386",
        "cpuMhz": 3092.212727,
        "cpuVendor": "amd",
        "hostIdentifier": "'vim.HostSystem:host-182'",
        "name": "11.11.12.13",
        "os": "VMware ESXi",
        "osVersion": "5.5.0",
        "ramMb": 65512,
        "totalCpuCores": 16,
        "totalCpuSockets": 2,
        "totalCpuThreads": 16,
        "type": "vmware",
        "vms": {
            "vCenter": "564d6d90-459c-2256-8f39-3cb2bd24b7b0"
        }
    },
    "10.11.12.14": {
        "cpuArch": "x86_64",
        "cpuDescription": "AMD Opteron(tm) Processor 4386",
        "cpuMhz": 3092.212639,
        "cpuVendor": "amd",
        "hostIdentifier": "'vim.HostSystem:host-183'",
        "name": "10.11.12.14",
        "os": "VMware ESXi",
        "osVersion": "5.5.0",
        "ramMb": 65512,
        "totalCpuCores": 16,
        "totalCpuSockets": 2,
        "totalCpuThreads": 16,
        "type": "vmware",
        "vms": {
            "49737e0a-c9e6-4ceb-aef8-6a9452f67cb5": "4230c60f-3f98-2a65-f7c3-600b26b79c22",
            "5a2e4e63-a957-426b-bfa8-4169302e4fdb": "42307b15-1618-0595-01f2-427ffccddd88e",
            "NSX-gateway": "4230d43e-aafe-38ba-5a9e-3cb67c03a16a",
            "NSX-l3gateway": "4230b00f-0b21-0e9d-dfde-6c7b06909d5f",
            "NSX-service": "4230e924-b714-198b-348b-25de01482fd9"
        }
    }
}

```

詳細については、Uyuniサーバのvirtual-host-gathererの関数リファレンスを参照してください。

```
man virtual-host-gatherer
```

このパッケージの README ファイルには、ハイパーテイプの「種類」などに関する背景情報が記載されています。

```
/usr/share/doc/packages/virtual-host-gatherer/README.md
```

この関数リファレンスおよび README ファイルには、設定ファイルのサンプルも含まれています。

# Chapter 11. GNU Free Documentation License

Copyright © 2000, 2001, 2002 Free Software Foundation, Inc. 51 Franklin St, Fifth Floor, Boston, MA 02110-1301 USA. Everyone is permitted to copy and distribute verbatim copies of this license document, but changing it is not allowed.

## 0. PREAMBLE

The purpose of this License is to make a manual, textbook, or other functional and useful document "free" in the sense of freedom: to assure everyone the effective freedom to copy and redistribute it, with or without modifying it, either commercially or noncommercially. Secondarily, this License preserves for the author and publisher a way to get credit for their work, while not being considered responsible for modifications made by others.

This License is a kind of "copyleft", which means that derivative works of the document must themselves be free in the same sense. It complements the GNU General Public License, which is a copyleft license designed for free software.

We have designed this License in order to use it for manuals for free software, because free software needs free documentation: a free program should come with manuals providing the same freedoms that the software does. But this License is not limited to software manuals; it can be used for any textual work, regardless of subject matter or whether it is published as a printed book. We recommend this License principally for works whose purpose is instruction or reference.

## 1. APPLICABILITY AND DEFINITIONS

This License applies to any manual or other work, in any medium, that contains a notice placed by the copyright holder saying it can be distributed under the terms of this License. Such a notice grants a world-wide, royalty-free license, unlimited in duration, to use that work under the conditions stated herein. The "Document", below, refers to any such manual or work. Any member of the public is a licensee, and is addressed as "you". You accept the license if you copy, modify or distribute the work in a way requiring permission under copyright law.

A "Modified Version" of the Document means any work containing the Document or a portion of it, either copied verbatim, or with modifications and/or translated into another language.

A "Secondary Section" is a named appendix or a front-matter section of the Document that deals exclusively with the relationship of the publishers or authors of the Document to the Document's overall subject (or to related matters) and contains nothing that could fall directly within that overall subject. (Thus, if the Document is in part a textbook of mathematics, a Secondary Section may not explain any mathematics.) The relationship could be a matter of historical connection with the subject or with related matters, or of legal, commercial, philosophical, ethical or political position regarding them.

The "Invariant Sections" are certain Secondary Sections whose titles are designated, as being those of Invariant Sections, in the notice that says that the Document is released under this License. If a section does not fit the above definition of Secondary then it is not allowed to be designated as Invariant. The Document may contain zero Invariant Sections. If the Document does not identify any Invariant Sections then there are none.

The "Cover Texts" are certain short passages of text that are listed, as Front-Cover Texts or Back-Cover Texts, in the notice that says that the Document is released under this License. A Front-Cover Text may be at most 5 words, and a Back-Cover Text may be at most 25 words.

A "Transparent" copy of the Document means a machine-readable copy, represented in a format whose specification is available to the general public, that is suitable for revising the document straightforwardly with generic text editors or (for images composed of pixels) generic paint programs or (for drawings) some widely available drawing editor, and that is suitable for input to text formatters or for automatic translation to a variety of formats suitable for input to text formatters. A copy made in an otherwise Transparent file format whose markup, or absence of markup, has been arranged to thwart or discourage subsequent modification by readers is not Transparent. An image format is not Transparent if used for any substantial amount of text. A copy that is not "Transparent" is called "Opaque".

Examples of suitable formats for Transparent copies include plain ASCII without markup, Texinfo input format, LaTeX input format, SGML or XML using a publicly available DTD, and standard-conforming simple HTML, PostScript or PDF designed for human modification. Examples of transparent image formats include PNG, XCF and JPG. Opaque formats include proprietary formats that can be read and edited only by proprietary word processors, SGML or XML for which the DTD and/or processing tools are not generally available, and the machine-generated HTML, PostScript or PDF produced by some word processors for output purposes only.

The "Title Page" means, for a printed book, the title page itself, plus such following pages as are needed to hold, legibly, the material this License requires to appear in the title page. For works in formats which do not have any title page as such, "Title Page" means the text near the most prominent appearance of the work's title, preceding the beginning of the body of the text.

A section "Entitled XYZ" means a named subunit of the Document whose title either is precisely XYZ or contains XYZ in parentheses following text that translates XYZ in another language. (Here XYZ stands for a specific section name mentioned below, such as "Acknowledgements", "Dedications", "Endorsements", or "History".) To "Preserve the Title" of such a section when you modify the Document means that it remains a section "Entitled XYZ" according to this definition.

The Document may include Warranty Disclaimers next to the notice which states that this License applies to the Document. These Warranty Disclaimers are considered to be included by reference in this License, but only as regards disclaiming warranties: any other implication that these Warranty Disclaimers may have is void and has no effect on the meaning of this License.

## 2. VERBATIM COPYING

You may copy and distribute the Document in any medium, either commercially or noncommercially, provided that this License, the copyright notices, and the license notice saying this License applies to the Document are reproduced in all copies, and that you add no other conditions whatsoever to those of this License. You may not use technical measures to obstruct or control the reading or further copying of the copies you make or distribute. However, you may accept compensation in exchange for copies. If you distribute a large enough number of copies you must also follow the conditions in section 3.

You may also lend copies, under the same conditions stated above, and you may publicly display copies.

## 3. COPYING IN QUANTITY

---

If you publish printed copies (or copies in media that commonly have printed covers) of the Document, numbering more than 100, and the Document's license notice requires Cover Texts, you must enclose the copies in covers that carry, clearly and legibly, all these Cover Texts: Front-Cover Texts on the front cover, and Back-Cover Texts on the back cover. Both covers must also clearly and legibly identify you as the publisher of these copies. The front cover must present the full title with all words of the title equally prominent and visible. You may add other material on the covers in addition. Copying with changes limited to the covers, as long as they preserve the title of the Document and satisfy these conditions, can be treated as verbatim copying in other respects.

If the required texts for either cover are too voluminous to fit legibly, you should put the first ones listed (as many as fit reasonably) on the actual cover, and continue the rest onto adjacent pages.

If you publish or distribute Opaque copies of the Document numbering more than 100, you must either include a machine-readable Transparent copy along with each Opaque copy, or state in or with each Opaque copy a computer-network location from which the general network-using public has access to download using public-standard network protocols a complete Transparent copy of the Document, free of added material. If you use the latter option, you must take reasonably prudent steps, when you begin distribution of Opaque copies in quantity, to ensure that this Transparent copy will remain thus accessible at the stated location until at least one year after the last time you distribute an Opaque copy (directly or through your agents or retailers) of that edition to the public.

It is requested, but not required, that you contact the authors of the Document well before redistributing any large number of copies, to give them a chance to provide you with an updated version of the Document.

## 4. MODIFICATIONS

You may copy and distribute a Modified Version of the Document under the conditions of sections 2 and 3 above, provided that you release the Modified Version under precisely this License, with the Modified Version filling the role of the Document, thus licensing distribution and modification of the Modified Version to whoever possesses a copy of it. In addition, you must do these things in the Modified Version:

- A. Use in the Title Page (and on the covers, if any) a title distinct from that of the Document, and from those of previous versions (which should, if there were any, be listed in the History section of the Document). You may use the same title as a previous version if the original publisher of that version gives permission.
- B. List on the Title Page, as authors, one or more persons or entities responsible for authorship of the modifications in the Modified Version, together with at least five of the principal authors of the Document (all of its principal authors, if it has fewer than five), unless they release you from this requirement.
- C. State on the Title page the name of the publisher of the Modified Version, as the publisher.
- D. Preserve all the copyright notices of the Document.
- E. Add an appropriate copyright notice for your modifications adjacent to the other copyright notices.
- F. Include, immediately after the copyright notices, a license notice giving the public permission to use the Modified Version under the terms of this License, in the form shown in the Addendum below.

- 
- G. Preserve in that license notice the full lists of Invariant Sections and required Cover Texts given in the Document's license notice.
  - H. Include an unaltered copy of this License.
    - I. Preserve the section Entitled "History", Preserve its Title, and add to it an item stating at least the title, year, new authors, and publisher of the Modified Version as given on the Title Page. If there is no section Entitled "History" in the Document, create one stating the title, year, authors, and publisher of the Document as given on its Title Page, then add an item describing the Modified Version as stated in the previous sentence.
    - J. Preserve the network location, if any, given in the Document for public access to a Transparent copy of the Document, and likewise the network locations given in the Document for previous versions it was based on. These may be placed in the "History" section. You may omit a network location for a work that was published at least four years before the Document itself, or if the original publisher of the version it refers to gives permission.
  - K. For any section Entitled "Acknowledgements" or "Dedications", Preserve the Title of the section, and preserve in the section all the substance and tone of each of the contributor acknowledgements and/or dedications given therein.
  - L. Preserve all the Invariant Sections of the Document, unaltered in their text and in their titles. Section numbers or the equivalent are not considered part of the section titles.
  - M. Delete any section Entitled "Endorsements". Such a section may not be included in the Modified Version.
  - N. Do not retitle any existing section to be Entitled "Endorsements" or to conflict in title with any Invariant Section.
  - O. Preserve any Warranty Disclaimers.

If the Modified Version includes new front-matter sections or appendices that qualify as Secondary Sections and contain no material copied from the Document, you may at your option designate some or all of these sections as invariant. To do this, add their titles to the list of Invariant Sections in the Modified Version's license notice. These titles must be distinct from any other section titles.

You may add a section Entitled "Endorsements", provided it contains nothing but endorsements of your Modified Version by various parties—for example, statements of peer review or that the text has been approved by an organization as the authoritative definition of a standard.

You may add a passage of up to five words as a Front-Cover Text, and a passage of up to 25 words as a Back-Cover Text, to the end of the list of Cover Texts in the Modified Version. Only one passage of Front-Cover Text and one of Back-Cover Text may be added by (or through arrangements made by) any one entity. If the Document already includes a cover text for the same cover, previously added by you or by arrangement made by the same entity you are acting on behalf of, you may not add another; but you may replace the old one, on explicit permission from the previous publisher that added the old one.

The author(s) and publisher(s) of the Document do not by this License give permission to use their names for publicity for or to assert or imply endorsement of any Modified Version.

## 5. COMBINING DOCUMENTS

You may combine the Document with other documents released under this License, under the terms defined in section 4 above for modified versions, provided that you include in the combination all of the

Invariant Sections of all of the original documents, unmodified, and list them all as Invariant Sections of your combined work in its license notice, and that you preserve all their Warranty Disclaimers.

The combined work need only contain one copy of this License, and multiple identical Invariant Sections may be replaced with a single copy. If there are multiple Invariant Sections with the same name but different contents, make the title of each such section unique by adding at the end of it, in parentheses, the name of the original author or publisher of that section if known, or else a unique number. Make the same adjustment to the section titles in the list of Invariant Sections in the license notice of the combined work.

In the combination, you must combine any sections Entitled "History" in the various original documents, forming one section Entitled "History"; likewise combine any sections Entitled "Acknowledgements", and any sections Entitled "Dedications". You must delete all sections Entitled "Endorsements".

## 6. COLLECTIONS OF DOCUMENTS

You may make a collection consisting of the Document and other documents released under this License, and replace the individual copies of this License in the various documents with a single copy that is included in the collection, provided that you follow the rules of this License for verbatim copying of each of the documents in all other respects.

You may extract a single document from such a collection, and distribute it individually under this License, provided you insert a copy of this License into the extracted document, and follow this License in all other respects regarding verbatim copying of that document.

## 7. AGGREGATION WITH INDEPENDENT WORKS

A compilation of the Document or its derivatives with other separate and independent documents or works, in or on a volume of a storage or distribution medium, is called an "aggregate" if the copyright resulting from the compilation is not used to limit the legal rights of the compilation's users beyond what the individual works permit. When the Document is included in an aggregate, this License does not apply to the other works in the aggregate which are not themselves derivative works of the Document.

If the Cover Text requirement of section 3 is applicable to these copies of the Document, then if the Document is less than one half of the entire aggregate, the Document's Cover Texts may be placed on covers that bracket the Document within the aggregate, or the electronic equivalent of covers if the Document is in electronic form. Otherwise they must appear on printed covers that bracket the whole aggregate.

## 8. TRANSLATION

Translation is considered a kind of modification, so you may distribute translations of the Document under the terms of section 4. Replacing Invariant Sections with translations requires special permission from their copyright holders, but you may include translations of some or all Invariant Sections in addition to the original versions of these Invariant Sections. You may include a translation of this License, and all the license notices in the Document, and any Warranty Disclaimers, provided that you also include the original English version of this License and the original versions of those notices and disclaimers. In case of a disagreement between the translation and the original version of this License or a notice or disclaimer, the original version will prevail.

If a section in the Document is Entitled "Acknowledgements", "Dedications", or "History", the requirement (section 4) to Preserve its Title (section 1) will typically require changing the actual title.

## 9. TERMINATION

You may not copy, modify, sublicense, or distribute the Document except as expressly provided for under this License. Any other attempt to copy, modify, sublicense or distribute the Document is void, and will automatically terminate your rights under this License. However, parties who have received copies, or rights, from you under this License will not have their licenses terminated so long as such parties remain in full compliance.

## 10. FUTURE REVISIONS OF THIS LICENSE

The Free Software Foundation may publish new, revised versions of the GNU Free Documentation License from time to time. Such new versions will be similar in spirit to the present version, but may differ in detail to address new problems or concerns. See <http://www.gnu.org/copyleft/>.

Each version of the License is given a distinguishing version number. If the Document specifies that a particular numbered version of this License "or any later version" applies to it, you have the option of following the terms and conditions either of that specified version or of any later version that has been published (not as a draft) by the Free Software Foundation. If the Document does not specify a version number of this License, you may choose any version ever published (not as a draft) by the Free Software Foundation.

## ADDENDUM: How to use this License for your documents

Copyright (c) YEAR YOUR NAME.

Permission is granted to copy, distribute and/or modify this document under the terms of the GNU Free Documentation License, Version 1.2 or any later version published by the Free Software Foundation; with no Invariant Sections, no Front-Cover Texts, and no Back-Cover Texts.

A copy of the license is included in the section entitled "GNU Free Documentation License".